

Oracle® Application Server 10g

アップグレード

10g (9.0.4) for Microsoft Windows

部品番号 : B13837-01

2004 年 4 月

Oracle Appllication Server 10g アップグレード , 10g (9.0.4) for Microsoft Windows

部品番号 : B13837-01

原本名 : Oracle Application Server 10g Upgrading to 10g (9.0.4), 10g (9.0.4) for Windows

原本部品番号 : B10435-01

原本著者 : Julia Pond

原本協力者 : John Bellemore, Jane Bielawa, Kamalendu Biswas, Chung Cheng, Will Chin, Eric Deslauriers, Saheli Dey, Bob Donat, Joe Garcia, Mark Gizejewski, Nick Greenhalgh, Elizabeth Hanks, Susan Highmoor, Clara Jaeckel, Maneesh Joshi, Mark Kennedy, Sam Lee, Shaun Lin, Jeremy Lizt, Peter Lubbers, Sunil Marya, Valarie Moore, Oscar Naim, Bill Norcott, Lei Oh, Shane Potter, Tony Quan, Pavi Sandhu, Charlie Shapiro, Jianping Shi, Cheryl Smith, Debbie Steiner, Jeff Tang, Parthiban Thilagar, Deepak Thomas, Olaf van der Geest, Satishkumar Venkatasamy, Manoj Verma, Richard Wang, David Ward, Liujin Yu

Copyright © 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	xiii
対象読者	xiv
このマニュアルの構成	xiv
関連ドキュメント	xv
表記規則	xv
 1 Oracle Application Server アップグレードの概要	
1.1 Oracle Application Server のアップグレード処理	1-2
1.1.1 分散環境のアップグレード	1-2
1.1.2 非分散環境のアップグレード	1-3
1.2 中間層のアップグレード処理	1-3
1.3 Infrastructure のアップグレード処理	1-4
1.4 OracleAS Upgrade Assistant のアップグレード・パス	1-6
1.5 OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パス	1-9
1.6 アップグレード後の Windows コンポーネント・サービスについての注意	1-9
 2 アップグレード計画	
2.1 Oracle Application Server の互換性	2-2
2.1.1 互換性ルール	2-2
2.1.2 Oracle Application Server 構成の例	2-2
2.1.2.1 1 つの中間層と 1 つの Infrastructure	2-2
2.1.2.2 複数の中間層と 1 つの Infrastructure	2-3
2.1.2.3 マルチプラットフォーム・インストーラ	2-3
2.1.3 構成間の遷移	2-4
2.2 アップグレード方針の決定	2-5

2.2.1	アップグレード処理の概要	2-6
2.2.1.1	アップグレード・タスク	2-6
2.2.1.2	Oracle Application Server Upgrade Assistant によってアップグレードされる 中間層コンポーネント	2-8
2.2.1.3	スクリプトによってアップグレードされる Infrastructure スキーマ	2-9
2.2.1.4	手動アップグレード・タスク	2-9
2.2.2	システム停止時間の計画	2-10
2.2.2.1	アップグレードに必要な時間	2-10
2.2.3	アップグレード時のシステムの可用性	2-12
2.2.4	バックアップの作成	2-14

3 中間層のアップグレード

3.1	アップグレードの準備:すべてのコンポーネントに共通の要件	3-3
3.1.1	Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層のインストールの要件	3-3
3.1.2	Oracle Application Server インスタンスの停止	3-4
3.1.3	Infrastructure を使用する中間層のアップグレードの準備	3-5
3.2	アップグレードの準備:特定コンポーネントの要件	3-5
3.2.1	Oracle Application Server Wireless 中間層のアップグレードの準備	3-5
3.2.2	オプション:大規模な OC4J のアップグレードに備える JVM メモリーの増加	3-6
3.3	スタンドアロン OC4J インスタンスのアップグレード	3-6
3.4	スタンドアロン OracleAS Web Cache インスタンスのアップグレード	3-7
3.5	OracleAS Upgrade Assistant の使用方法	3-9
3.5.1	OracleAS Upgrade Assistant のロギング動作の指定	3-9
3.5.2	Infrastructure の起動	3-11
3.5.3	OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行 (Graphical User Interface (GUI) バージョン)	3-11
3.5.4	OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行 (コマンドライン・バージョン)	3-18
3.6	エラーの解決	3-21
3.6.1	一般的エラーの解決	3-21
3.6.1.1	ソース Oracle ホームが OracleAS Upgrade Assistant で示されない	3-21
3.6.1.2	OPMN、OC4J または Oracle HTTP Server のアップグレード時に アップグレードが失敗する	3-21
3.6.1.3	OC4J 調査フェーズまたはその他のフェーズでアップグレードが失敗する	3-22
3.6.1.4	大規模な OC4J のアップグレード時にアップグレードが失敗する	3-22
3.6.2	ログ・ファイルの調査	3-22
3.6.2.1	調査失敗のリカバリ	3-22

3.6.2.2	アップグレード失敗のリカバリ	3-23
3.6.3	Oracle Application Server Containers for J2EE のアップグレードおよびデプロイの 失敗の原因	3-26
3.6.3.1	構成変更の要件	3-26
3.6.3.2	アプリケーションのデプロイおよび J2EE 準拠の要件	3-26
3.6.3.2.1	J2EE 準拠に対する EAR ファイルの検証	3-26
3.7	OracleAS Upgrade Assistant の再起動	3-28
3.8	アップグレードの完了	3-28
3.8.1	Oracle HTTP Server のアップグレードの完了	3-29
3.8.1.1	SSL 構成のアップグレード	3-29
3.8.1.2	実行する必要がある手動アップグレード・タスク	3-29
3.8.2	Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレードの完了	3-30
3.8.2.1	Oracle Application Server Authentication and Authorization サービス (JAZN) セキュリティ設定のアップグレード	3-31
3.8.2.2	JAZN ライブラリ・パス・エントリのアップグレード	3-31
3.8.2.3	インストーラによって作成された OC4J インスタンスのアップグレード	3-32
3.8.2.4	application.xml のエントリのアップグレード	3-32
3.8.2.5	jms.xml ファイルのアップグレード	3-32
3.8.2.6	下位互換性のための Compatibility Test Suite (CTS) 互換性フラグの使用	3-32
3.8.2.6.1	CTS 互換性と OJMS	3-33
3.8.2.6.2	CTS 互換性と JDBC	3-34
3.8.2.6.3	CTS 互換性と XML Parser for JAXP/XDK	3-35
3.8.2.7	Enterprise JavaBeans に関するアップグレードの考慮事項	3-35
3.8.2.8	OC4J Java Server Pages (JSP) コンテナに関するアップグレードの考慮事項	3-36
3.8.2.8.1	追加インポートの有効化	3-36
3.8.2.8.2	下位互換性のための追加 JSP フラグの設定	3-36
3.8.2.9	JDK 1.4 の問題: パッケージにないクラスをコールできない	3-37
3.8.2.10	サーブレットの API および動作の変更点	3-38
3.8.2.10.1	getRequestURI() に関する変更	3-38
3.8.2.10.2	ターゲットに転送されるサーブレットまたはターゲットをインクルードする サーブレットのフィルタ処理	3-39
3.8.3	OracleAS Web Cache クラスタのアップグレード	3-39
3.8.3.1	Web Cache クラスタのリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) への アップグレード	3-40
3.8.4	OracleAS Portal 中間層のアップグレードの完了	3-41
3.8.4.1	OracleAS Portal での Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルの有効化	3-41
3.8.4.2	アップグレード後のデータベース・アクセス記述子 (DAD) の場所の確認	3-42
3.8.4.3	Parallel Page Engine のアップグレード	3-42

3.8.4.3.1	cacheDir パラメータのリセット	3-43
3.8.4.4	Portal Development Kit Services for Java (JPKD) Web プロバイダの アップグレード	3-43
3.8.4.4.1	ユーザー作成のプロバイダ、ポートレット、プロバイダ・グループ	3-44
3.8.4.4.2	デプロイ・プロパティ	3-46
3.8.4.4.3	JNDI 環境変数	3-46
3.8.4.4.4	ファイルベースのポートレット・パーソナライズ・マネージャ	3-46
3.8.4.4.5	データベース・ベースのポートレット・パーソナライズ・マネージャ	3-47
3.8.4.4.6	oracle.http.configfile プロパティおよび cache.xml のアップグレード	3-47
3.8.4.4.7	プロバイダ UI セキュリティ設定のアップグレード	3-48
3.8.4.5	mod_plsql のアップグレードの完了	3-48
3.8.4.6	10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control による リリース 2 (9.0.2) の Portal リポジトリの監視の有効化	3-49
3.8.4.7	Portal Tools (OmniPortlet および Web クリッピング) プロバイダのリストア	3-50
3.8.4.7.1	Web クリッピング・プロバイダの設定のリストア	3-50
3.8.4.7.2	OmniPortlet プロバイダの設定のリストア	3-51
3.8.5	Oracle Application Server Discoverer Viewer のアップグレードの完了	3-52
3.8.5.1	End User Layer のアップグレード	3-52
3.8.5.2	スタイル・シートのアップグレード	3-52
3.8.5.3	tnsnames.ora ファイルのアップグレード	3-53
3.8.6	Oracle Application Server Reports Services のアップグレードの完了	3-54
3.8.6.1	Oracle Application Server Reports Services のデプロイを伴うユーザー定義の OC4J インスタンスのアップグレード	3-55
3.8.7	Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了	3-55
3.8.7.1	OracleAS Wireless 通知サービスのアップグレード・スクリプトの使用	3-55
3.8.7.2	Oracle Application Server Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層および 10g (9.0.4) 中間層を組み合わせた運用	3-57
3.8.7.3	複合モード環境のサイトレベル・ドライバの構成	3-58
3.8.8	Oracle Application Server Forms Services のアップグレードの完了	3-59
3.8.8.1	tnsnames.ora ファイルのアップグレード	3-59
3.8.8.2	Forms の *.fmx ファイルのアップグレード	3-60
3.8.8.3	Oracle Application Server Forms Services サブレットのユーザー定義の 別名のアップグレード	3-60
3.8.8.4	ユーザー定義 OC4J インスタンスにデプロイされた forms90app.ear の アップグレード	3-60
3.8.8.5	Oracle Application Server Forms Services Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory の構成の有効化	3-61
3.8.9	tnsnames.ora ファイルのアップグレード	3-61

3.8.9.1	新規エントリおよび変更されたエントリの 10g (9.0.4) の tnsnames.ora ファイルへの追加	3-61
3.8.9.2	Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の tnsnames.ora ファイルの 10g (9.0.4) インストールへのコピー	3-61
3.9	Oracle Application Server InterConnect のアップグレード	3-62
3.9.1	Hub コンポーネント、アダプタおよび Development Kit のインストールと アップグレード	3-62
3.9.2	メタデータのアップグレード	3-63
3.9.3	Management のアップグレード	3-63
3.9.4	Oracle Workflow のアップグレード	3-64
3.10	アップグレード後のポート値と portlist.ini ファイル	3-65
3.11	Application Server クラスタのアップグレード	3-65
3.12	アップグレードされた中間層インスタンスの起動	3-67
3.12.1	Web クリッピング・プロバイダ・テスト・ページへのアクセス (PDK 9.0.2.4.0 のみ)	3-67
3.12.2	OmniPortlet プロバイダ・テスト・ページへのアクセス (PDK 9.0.2.4.0 のみ)	3-68
3.12.3	OracleAS Portal プロバイダ情報の更新	3-68
3.12.4	イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダの更新	3-69
3.12.5	Oracle Call Interface のコンポーネント・エラーの解決	3-70
3.13	中間層のアップグレードの検証	3-70
3.13.1	中間層コンポーネントの動作の確認	3-70
3.13.2	重要な URL のチェック	3-70
3.14	アップグレード後のソース Oracle ホームに関する考慮事項	3-71
3.14.1	Windows コンポーネント・サービスの起動タイプの変更	3-71
3.14.2	ソース Oracle ホームの廃棄	3-72
3.14.2.1	アプリケーション・ファイルおよびログ・ファイルの保存	3-72
3.14.3	将来の言語のロードに備えたソース Oracle ホームの保持	3-72
3.14.4	ソース Oracle ホームの回復: 「Portal サービスの監視」 リンクのリセット	3-72

4 Metadata Repository のアップグレード

4.1	Metadata Repository のアップグレード処理について	4-2
4.2	Metadata Repository のアップグレードの準備	4-3
4.2.1	Metadata Repository をアップグレードする環境の設定	4-3
4.2.2	DBMS_IAS_UPGRADE パッケージのロード	4-4
4.2.3	Metadata Repository Container のアップグレード	4-4
4.2.3.1	新しいスキーマを作成する mrc.pl の実行	4-5

4.2.3.1.1	新しいスキーマ作成用 mrc.pl が正常に実行されたことの検証	4-6
4.2.3.2	Oracle Internet Directory のエントリを更新する mrc.pl の実行	4-7
4.2.3.2.1	Oracle Internet Directory 更新用の mrc.pl が正常に実行されたことの検証	4-8
4.2.3.3	新しいスキーマの作成と Oracle Internet Directory のエントリの更新を行う mrc.pl の実行	4-8
4.2.3.3.1	新しいスキーマ作成用および Oracle Internet Directory 更新用の mrc.pl が 正常に実行されたことの検証	4-9
4.2.3.4	エラーの解決	4-10
4.3	Metadata Repository のアップグレードの実行	4-10
4.4	Metadata Repository のアップグレード・スクリプトの実行	4-12
4.4.1	ProcessConnect スキーマのアップグレード・スクリプトの実行	4-12
4.4.1.1	アップグレード結果の検証	4-13
4.4.2	Oracle Application Server Certificate Authority スキーマの アップグレード・スクリプトの実行	4-14
4.4.2.1	アップグレード結果の検証	4-14
4.4.3	Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・スクリプトの実行	4-15
4.4.3.1	Oracle Ultra Search スキーマのアップグレードの準備	4-15
4.4.3.2	Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード	4-16
4.4.3.3	Oracle Ultra Search スキーマ・メタデータの構成	4-18
4.4.3.3.1	Java Runtime Environment (JRE) 1.4 のインストールと、JRE1.4 を 使用する Oracle Ultra Search の構成	4-18
4.4.3.3.2	スキーマ構成スクリプトの実行	4-19
4.4.3.4	アップグレード結果の検証	4-21
4.4.3.5	エラーの解決	4-21
4.4.4	Oracle Ultra Search のリリース 9.0.1 または 9.2 データベースからのアップグレード	4-22
4.4.5	Oracle Application Server Syndication Server のアップグレード・スクリプトの実行 ...	4-23
4.4.5.1	アップグレード結果の検証	4-23
4.4.6	Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ・スキーマの アップグレード・スクリプトの実行	4-24
4.4.6.1	アップグレード・シナリオ	4-24
4.4.6.1.1	リリース 2 (9.0.2) の wuru9020.sql を使用したアップグレード	4-24
4.4.6.1.2	UDDI 9.0.2.3 パッチが適用されたリリース 2 (9.0.2) の wuru9023.sql を 使用したアップグレード	4-24
4.4.6.2	UDDI スキーマのアップグレード	4-25
4.4.6.2.1	リリース 9.0.2.1 のアップグレードの追加手順	4-26
4.4.6.3	アップグレード結果の検証	4-26
4.4.6.4	エラーの解決	4-27
4.4.6.5	UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード後のタスク	4-27

4.4.6.6	UDDI レジストリ・スキーマのアップグレードの検証	4-27
4.4.7	Web クリップिंग・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行	4-27
4.4.7.1	アップグレード結果の検証	4-28
4.4.8	Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード	4-28
4.4.9	Oracle Workflow スキーマのアップグレード	4-28
4.5	OracleAS Portal リポジトリのアップグレード	4-30
4.5.1	Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード	4-30
4.5.2	バックアップの作成	4-30
4.5.3	OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パッチのダウンロード	4-31
4.5.4	Oracle Universal Installer を使用した、OracleAS Portal アップグレード・スクリプトの 中間層 Oracle ホームへのコピー	4-31
4.5.5	外部アプリケーション ID の再マッピングが必要かどうかの検討	4-33
4.5.6	OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・スクリプトの実行	4-34
4.5.7	ログ・ファイルの調査	4-38
4.5.8	OracleAS Portal リポジトリのアップグレードの完了	4-40
4.5.8.1	すべてのパッケージのコンパイル	4-41
4.5.8.2	Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成	4-41
4.5.8.2.1	ptlasst スクリプトで -type DIPUNREG を使用した場合のエラーの解決	4-46
4.5.8.2.2	ptlasst スクリプトで -type OID を使用した場合のエラーの解決	4-47
4.5.8.2.3	オプション : Oracle Internet Directory における OracleAS Portal プロビジョニング・プロファイルの作成	4-49
4.5.8.3	OracleAS Portal ファイル・システム・キャッシュのクリーンアップ	4-51
4.5.8.4	アップグレードされた Portal インスタンスを使用するすべての中間層の起動	4-52
4.5.8.5	Oracle Text (以前の InterMedia Text) 索引の再構築	4-52
4.5.8.6	Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 のアップグレードにおけるセッション格納参照の 有効化	4-52
4.5.8.7	OracleAS Portal の使用方法の変更点について	4-53
4.5.8.7.1	「ビルダー」 ページの再作成	4-53
4.5.8.7.2	カテゴリ・テンプレートおよびパースペクティブ・テンプレート	4-53
4.5.8.7.3	Portal コンテンツの検索時に使用される新しい日付書式	4-54
4.5.8.7.4	WebDAV クライアントの表示項目	4-54
4.5.8.7.5	サブページの表示項目	4-55
4.5.8.7.6	個人用ページへのリンク	4-55
4.5.8.7.7	パブリック・ユーザーへの View 権限の付与	4-55
4.5.8.7.8	SAMPLEPAGEGROUP ページ名	4-56
4.5.8.7.9	トランスポート・セット	4-56
4.5.8.7.10	プロバイダ・ナビゲータ	4-56

4.5.8.7.11	ポートレット・リポジトリのプレビュー・リンク	4-56
4.5.8.7.12	ヘルプ・システムの URL	4-57
4.5.8.7.13	デフォルトで有効なパラメータおよびイベント	4-57
4.5.8.7.14	アップグレード済モバイル・ページ表示のエラー	4-57
4.5.8.8	ポートレット・リポジトリの変更について	4-57
4.5.8.8.1	ポートレット・リポジトリの OracleAS Portal 10g (9.0.4) 形式への移行	4-59
4.5.8.9	OmniPortlet プロバイダおよび Web クリッピング・プロバイダの更新	4-60
4.5.9	アップグレードされた OracleAS Portal へのアクセス	4-61
4.6	カスタマ・データベースにおけるスキーマのアップグレード	4-61
4.6.1	Oracle Application Server Discoverer End User Layer スキーマのアップグレード	4-61
4.6.2	OracleAS Portal スキーマのアップグレード	4-62
4.7	UDDI アプリケーションの 10g (9.0.4) の機能のアクティブ化	4-62

5 Identity Management サービスのアップグレード

5.1	Identity Management のアップグレード	5-2
5.1.1	Identity Management 構成の概要	5-2
5.1.2	Identity Management のアップグレード処理について	5-4
5.1.2.1	Identity Management をアップグレードする前の準備手順	5-5
5.1.2.2	Identity Management のアップグレード処理	5-6
5.1.3	Identity Management のアップグレードでの Oracle Universal Installer の使用	5-7
5.1.3.1	非分散 Identity Management 構成のアップグレード	5-8
5.1.3.2	分散 Identity Management 構成のアップグレード	5-21
5.1.3.2.1	Oracle Internet Directory のアップグレードの実行	5-21
5.1.3.2.2	Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの実行	5-22
5.2	Oracle Internet Directory マルチマスター・レプリケーションのアップグレードの実行	5-38
5.2.1	1 つのレプリカでの Oracle Internet Directory のアップグレード	5-38
5.2.2	複数のレプリカでの Oracle Internet Directory の同時アップグレード	5-41
5.3	Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x の 10g (9.0.4) へのアップグレード	5-43
5.4	Infrastructure のアップグレード後のタスク	5-46
5.4.1	Oracle Internet Directory のアップグレードの完了	5-46
5.4.1.1	Identity Management コンポーネントの構成	5-46
5.4.1.2	グループのコンテナに対するアクセス・ポリシーの変更	5-46
5.4.1.3	レプリケーションの Wallet のパスワードの再設定	5-47
5.4.1.4	OracleAS Portal に必要なアップグレード後の手順	5-47
5.4.1.4.1	Portal 9.0.2.2.14 および 9.0.2.3 の場合のパッチの適用	5-47
5.4.1.4.2	Oracle Internet Directory サーバー用の OracleAS Portal インスタンスの再構成	5-47

5.4.1.4.3	Delegated Administration Services (DAS) の URL キャッシュの更新	5-48
5.4.1.5	推奨されるパフォーマンス拡張タスク	5-49
5.4.2	Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの完了	5-50
5.4.2.1	Oracle Application Server Single Sign-On 中間層の再構成	5-50
5.4.2.2	サード・パーティ認証の構成	5-50
5.4.2.3	カスタマイズされたページのアップグレードされたサーバーへのインストール	5-50
5.4.2.4	外部アプリケーション ID の変換	5-51
5.4.2.5	OracleAS Single Sign-On レプリケーションの設定	5-52
5.4.2.6	カスタマイズされた中間層の OracleAS Single Sign-On サーバーの アップグレード	5-52
5.4.2.7	Wireless Voice 認証のトラブルシューティング	5-52
5.4.2.8	言語の OracleAS Single Sign-On サーバーへのインストール	5-53
5.4.2.9	アップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーへの OracleAS Portal の再登録	5-53
5.4.2.10	アップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーへの mod_osso の再登録	5-54
5.4.2.11	Oracle9iAS Discoverer リリース 2 (9.0.2) とともに使用する アップグレードされた Identity Management 構成	5-54
5.4.3	Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了	5-54
5.4.3.1	Oracle Internet Directory の Wireless ユーザー・アカウントのアップグレード	5-54
5.4.3.2	Oracle Internet Directory での orclWirelessAccountNumber 属性に対する 一意性制約の追加	5-55
5.4.3.3	Infrastructure リポジトリでの Oracle Application Server Wireless の アップグレード・トリガーの無効化	5-56
5.4.3.4	Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) のすべての機能のアクティブ化	5-56
5.4.3.5	OracleAS Wireless に対するパスワード変更権限の割当て	5-57
5.4.3.6	HTTP アダプタを使用する Wireless サービスの場合の URL 問合せ パラメータの指定	5-57
5.5	リリース 2 (9.0.2) の Oracle ホームの廃棄	5-58
5.5.1	Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) およびソース Oracle ホームの削除	5-58
5.5.2	データファイル、制御ファイルおよびログ・ファイルの再配置	5-59
5.6	Identity Management のアップグレードの検証	5-59
5.6.1	utlrlp.sql ユーティリティの実行	5-59
5.6.2	無効なデータベース・オブジェクトのチェック	5-60
5.6.3	Oracle Application Server Single Sign-On の接続性のテスト	5-60

A コンポーネントのアップグレード処理リファレンス

A.1	中間層のアップグレード処理	A-2
A.1.1	Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) のアップグレード処理	A-3
A.1.1.1	Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) の アップグレード・アイテム	A-3
A.1.2	インスタンス構成データのアップグレード処理	A-4
A.1.2.1	インスタンス構成のアップグレード・アイテム	A-4
A.1.3	Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレード処理	A-4
A.1.3.1	OC4J のアップグレード・アイテム	A-5
A.1.4	Oracle HTTP Server のアップグレード処理	A-5
A.1.4.1	OHS のアップグレード・アイテム	A-7
A.1.5	Oracle Application Server Web Cache のアップグレード処理	A-8
A.1.5.1	Oracle Application Server Web Cache のアップグレード・アイテム	A-8
A.1.5.1.1	Wallet ファイルのアップグレード	A-8
A.1.6	mod_plsql のアップグレード処理	A-9
A.1.6.1	mod_plsql のアップグレード・アイテム	A-9
A.1.7	Oracle Enterprise Manager のアップグレード処理	A-10
A.1.7.1	Oracle Enterprise Manager のアップグレード・アイテム	A-10
A.1.8	Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリのアップグレード処理	A-10
A.1.8.1	Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリの アップグレード・アイテム	A-10
A.1.9	Oracle Ultra Search のアップグレード処理	A-11
A.1.9.1	Oracle Ultra Search のアップグレード・アイテム	A-11
A.1.10	OracleAS Portal 中間層のアップグレード処理	A-11
A.1.10.1	OracleAS Portal のアップグレード・アイテム	A-12
A.1.11	Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理	A-12
A.1.11.1	Oracle Application Server Wireless 中間層および Wireless スキーマの アップグレード	A-13
A.1.11.2	Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム (リスト A)	A-14
A.1.11.3	Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム (リスト B)	A-14
A.1.12	Oracle Application Server Forms Services のアップグレード処理	A-14
A.1.12.1	Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト A)	A-14
A.1.12.2	Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト B)	A-15
A.1.12.3	Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト C)	A-15

A.1.13	Oracle Application Server Discoverer のアップグレード処理	A-15
A.1.13.1	Oracle Application Server Discoverer のアップグレード・アイテム	A-15
A.1.14	Oracle Application Server Reports Services のアップグレード処理	A-16
A.1.14.1	Oracle Application Server Reports Services のアップグレード・アイテム	A-16
A.2	Infrastructure のアップグレード処理	A-17
A.2.1	Identity Management のアップグレード処理	A-17
A.2.2	Metadata Repository Container スキーマのアップグレード処理	A-18
A.2.3	ProcessConnect のアップグレード処理	A-19
A.2.4	Oracle Application Server Certificate Authority のアップグレード処理	A-19
A.2.5	Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理	A-19
A.2.5.1	Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・アイテム	A-20
A.2.6	OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理	A-20
A.2.6.1	OracleAS Portal スキーマのアップグレード・アイテム	A-21
A.2.7	Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理	A-21
A.2.7.1	Oracle Application Server Syndication Server スキーマの アップグレード・アイテム	A-22
A.2.8	Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマの アップグレード処理	A-22
A.2.8.1	Oracle Application Server Web Services スキーマのアップグレード・アイテム	A-23
A.2.9	Web クリップिंगのアップグレード処理	A-23
A.2.9.1	Web クリップिंग・スキーマのアップグレード・アイテム	A-23
A.2.10	Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード処理	A-23

B ファイル・リファレンス

索引

はじめに

ここでは、マニュアルの対象読者、構成、表記規則などについて説明します。また、Oracle の関連ドキュメントも紹介します。

対象読者

このマニュアルは、Oracle Application Server インスタンスのインストール、保守およびアップグレードを担当する Oracle Application Server システム管理者を対象としています。このマニュアルの読者は、次の項目についてよく理解していることを前提としています。

- Oracle Application Server システムの管理と構成
- アップグレードするシステムの構成と予期される動作

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章と付録から構成されています。

第1章「Oracle Application Server アップグレードの概要」

この章では、このマニュアルで使用される用語について説明し、中間層および Infrastructure の各インストール・タイプのアップグレード処理、有効なアップグレード・パスなどについて説明します。

第2章「アップグレード計画」

この章では、アップグレード計画のガイドラインについて説明します。Oracle Application Server のリリース間の互換性、アップグレード方針の立案、アップグレード・タスク、システム停止時間およびアップグレード時のシステムの可用性について取り上げます。

第3章「中間層のアップグレード」

この章では、Oracle Application Server Upgrade Assistant を起動および使用する方法、アップグレードを完了する手順について説明します。

第4章「Metadata Repository のアップグレード」

この章では、Metadata Repository をアップグレードする方法について説明します。Metadata Repository のアップグレードの準備方法、さらに各コンポーネント・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行方法についても説明します。

第5章「Identity Management サービスのアップグレード」

この章では、Identity Management サービス（Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory）をアップグレードする方法について説明します。

付録 A「コンポーネントのアップグレード処理リファレンス」

この付録では、OracleAS Upgrade Assistant によって実行される処理、および該当する場合はコンポーネント・スキーマについて説明します。また、各処理に関連するアップグレード・アイテム（ファイルまたはスキーマ）を一覧で示します。

付録 B 「ファイル・リファレンス」

この付録では、Oracle Application Server のアップグレードによって影響を受けるすべてのファイルを一覧で示します。また、Oracle ホームからファイルへのパスが記載されています。さらに、ファイルの処理が手動によるものか、あるいは OracleAS Upgrade Assistant により実行されるのかを示します。各ファイルについての簡単な説明も記載されています。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。これらのドキュメントには、アップグレードの実行時に役立つ情報が示されています。

- 『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』
- 『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』
- 『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
- 『Distributed Configuration Management リファレンス・ガイド』
- 『Oracle Application Server 10g リリース・ノート』
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』
- 『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』

表記規則

このマニュアルで使用される表記規則は、次のとおりです。

規則	意味
・ ・ ・	例内の垂直の省略記号は、例に直接関連しない情報が省略されていることを示します。
...	文またはコマンド内の水平の省略記号は、例に直接関連しない文またはコマンドの一部が省略されていることを示します。

規則	意味
固定幅フォント	ファイル名、パス名、コマンド名、コード、URL
固定幅フォントの 太字	ユーザーの入力
固定幅フォントの イタリック	テキストまたはコード内の変数
<source_MT_OH>	リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) 中間層の Oracle ホームへのフルパス
<destination_ MT_OH>	10g (9.0.4) 中間層の Oracle ホームへのフルパス
<source_Infra_ OH>	リリース 2 (9.0.2) Infrastructure の Oracle ホームへのフルパス
<destination_ Infra_OH>	10g (9.0.4) Infrastructure (Identity Management または Metadata Repository) の Oracle ホームへのフルパス
<repCA_CD>	Repository Configuration Assistant CD のルート・ディレクトリへのフルパス

Oracle Application Server アップグレードの概要

この章では、中間層および Infrastructure の各インストール・タイプを Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) (ソース Oracle ホームまたはソース・インスタンス) から Oracle Application Server 10g (9.0.4) (アップグレード先 Oracle ホームまたはアップグレード先インスタンス) にアップグレードする手順について説明します。中間層は、クライアント層からのリクエストを処理する Application Server インスタンスから構成され、データベースのデータに対してアクセスまたは変更を行ってリクエストを完了します。Infrastructure は、通常は別のコンピュータにインストールされ、中間層の 1 つ以上の Application Server インスタンスに対して一元的なセキュリティ、集中管理サービスおよびメタデータ・リポジトリを提供します。

この章の主な項は、次のとおりです。

1-2 ページの 1.1 項「[Oracle Application Server のアップグレード処理](#)」

1-3 ページの 1.2 項「[中間層のアップグレード処理](#)」

1-4 ページの 1.3 項「[Infrastructure のアップグレード処理](#)」

1-6 ページの 1.4 項「[OracleAS Upgrade Assistant のアップグレード・パス](#)」

1-9 ページの 1.5 項「[OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パス](#)」

1-9 ページの 1.6 項「[アップグレード後の Windows コンポーネント・サービスについての注意](#)」

1.1 Oracle Application Server のアップグレード処理

この項では、分散 Oracle Application Server 環境のアップグレード処理について説明します。分散環境では、複数の中間層が複数の Oracle ホームにわたって 1 つの Infrastructure にアクセスします。中間層および Infrastructure のそれぞれのアップグレード処理について、この章で詳細に説明します。

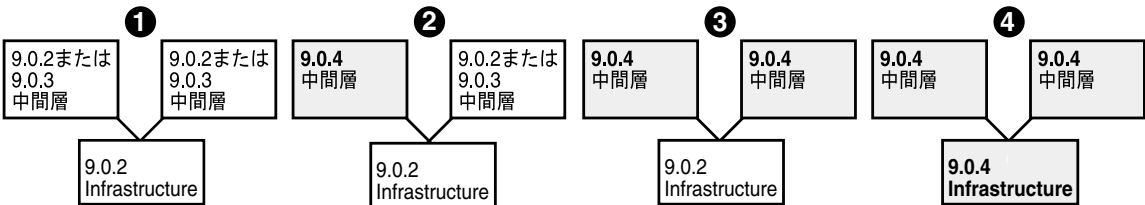
1.1.1 分散環境のアップグレード

分散 Oracle Application Server 環境は、1 つ以上の中間層と 1 つの Infrastructure から構成され、複数の Oracle ホームに分散されます。このような環境をアップグレードするには、各中間層をアップグレードし、その後 Infrastructure をアップグレードします。

注意： Infrastructure 自体は、Metadata Repository および Identity Management の 2 つから構成されます（正しいアップグレードの順序については、2-2 ページの 2.1 項「[Oracle Application Server の互換性](#)」を参照）。図 1-1 は、分散環境のアップグレード処理を示しますが、わかりやすくするために Infrastructure を単一ユニットで表しています。Identity Management および Metadata Repository のアップグレードは、どちらかを先に行うこともできますが、Metadata Repository のアップグレードより先に中間層のアップグレードを行う必要があります。

1. アップグレードの前に、中間層および Infrastructure がリリース 2（9.0.2）またはリリース 2（9.0.3）であることを確認します。
2. 1 つの中間層を 10g（9.0.4）にアップグレードし、そのままリリース 2（9.0.2）Infrastructure を使用します。
3. 残りの中間層を 10g（9.0.4）にアップグレードし、そのままリリース 2（9.0.2）Infrastructure を使用します。
4. リリース 2（9.0.2）Infrastructure を 10g（9.0.4）にアップグレードします。

図 1-1 分散 Oracle Application Server 環境のアップグレード



1.1.2 非分散環境のアップグレード

非分散 Oracle Application Server 環境（単一の Oracle ホームの環境）のアップグレードでは、中間層のアップグレードが必要です。

1.2 中間層のアップグレード処理

中間層のアップグレード処理を図 1-2 に示します。中間層のアップグレード手順は、次のとおりです。

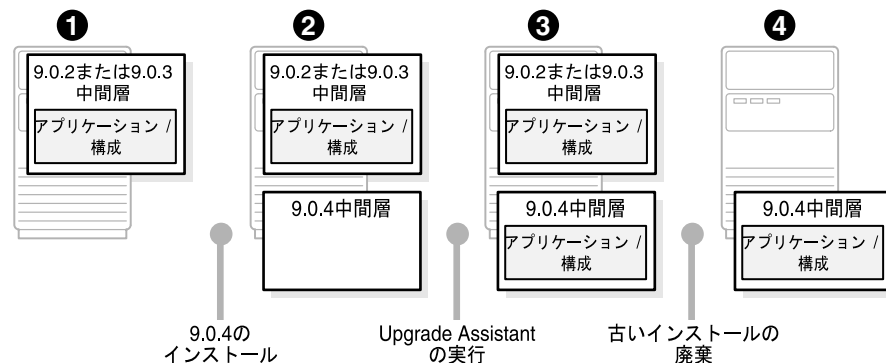
1. リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) 中間層が、アプリケーションおよび構成データを含むコンピュータにインストールされていることを確認します。
2. ソース・インストールと同じインストール・タイプの 10g (9.0.4) 中間層を、同じコンピュータ上の新規 Oracle ホームにインストールします。
3. Oracle Application Server とともにインストールされるツールである OracleAS Upgrade Assistant を実行します。これにより、中間層コンポーネントのほとんどのアップグレード・タスクが自動的に行われます。ソースの中間層インストールのアプリケーションおよび構成データが 10g (9.0.4) インストールにコピーされます。アップグレードを完了するために手動タスクが必要な構成もあります。

関連項目： 中間層のアップグレード手順については、第 3 章「[中間層のアップグレード](#)」を参照してください。

4. （オプション）ソース・インストールを廃棄します。

注意： 10g (9.0.4) 中間層インストールでは、一部のポート番号が、リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) 中間層と同じものが使用されます。両方の中間層を使用する場合、ポート競合を回避するためにどちらかの中間層のポート番号を割り当て直す必要があります。影響を受けるコンポーネントは、Oracle Enterprise Manager、Oracle HTTP Server および Oracle Application Server Web Cache です。

図 1-2 中間層のアップグレード



1.3 Infrastructure のアップグレード処理

Oracle Application Server Infrastructure は、1 つ以上の Application Server インスタンスに対して一元的なセキュリティと集中管理サービスおよびメタデータ・リポジトリを提供します。これは、Application Server インスタンスとは別の（通常は別のコンピュータの）Oracle ホームにインストールされます。

関連項目： Infrastructure のインストール・タイプについては、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

Infrastructure の構成要素は、次のとおりです。

- Identity Management — Oracle Application Server Single Sign-On、Oracle Internet Directory、Oracle Delegated Administration Services、Oracle Directory Integration and Provisioning、Oracle Application Server Certificate Authority
- Metadata Repository — 製品メタデータ・スキーマ（OracleAS Portal、Oracle Application Server Wireless などの中間層コンポーネントが使用）、Identity Management スキーマ（Identity Management コンポーネントが使用）、管理スキーマ（DCM などのコンポーネントが使用）

Oracle Application Server Infrastructure は、Identity Management（Oracle Internet Directory、Oracle Application Server Single Sign-On）および Metadata Repository（基礎となるデータベース内の複数のスキーマで構成）から構成されます。

Infrastructure のアップグレードには Oracle Application Server Upgrade Assistant を使用しません。

Infrastructure のアップグレードのフェーズは、次のとおりです。各フェーズで、その構成が動作可能です。Infrastructure は、手順 2 および 3 に示す混成状態で動作します。また、手順 3 と 4 は順番を逆に実行できます。

1. リリース 2 (9.0.2) の Oracle Application Server Infrastructure には、デフォルトでリリース 9.0.1.3 のデータベースが含まれます。
2. パッチを適用してデータベースをリリース 9.0.1.5 にアップグレードします。
3. Metadata Repository (Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On 用のスキーマ以外のスキーマ) を 10g (9.0.4) にアップグレードします。
4. Identity Management を 10g (9.0.4) にアップグレードします。

図 1-3 Infrastructure のアップグレード

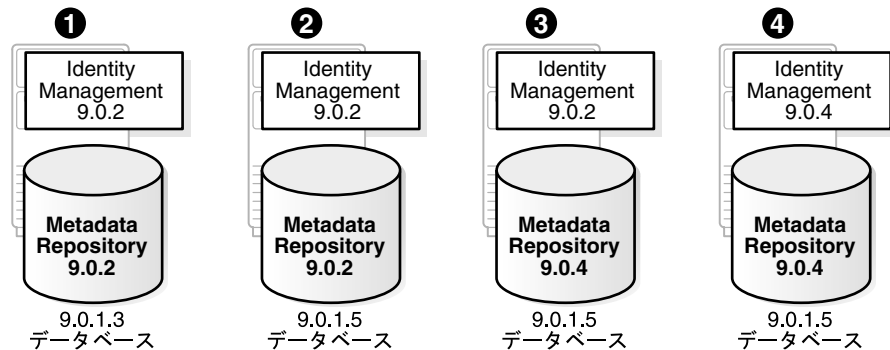
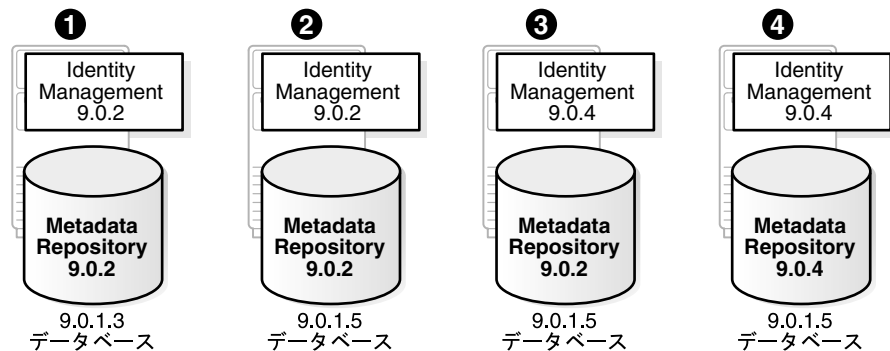


図 1-4 別の Infrastructure のアップグレード (手順 3 と 4 の順番が逆)



1.4 OracleAS Upgrade Assistant のアップグレード・パス

この項では、中間層のアップグレード・パスおよび要件について説明し、各インストール・タイプでアップグレードされるコンポーネントを示します。他のアップグレード・パスおよび例外のケースについても説明します。

中間層のアップグレード・パス

次のリリース同士では、OracleAS Upgrade Assistant を使用して、同じコンピュータの Oracle ホーム間で中間層をアップグレードできます。

- リリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4)
- リリース 2 (9.0.3) から 10g (9.0.4)

OracleAS Upgrade Assistant には、これ以外のリリースの Oracle ホームのオプションは表示されません。

10g (9.0.4) 中間層は、リリース 2 (9.0.2) 中間層と同じ Metadata Repository および Oracle Internet Directory に関連付ける必要があります。

OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされる中間層コンポーネント

OracleAS Upgrade Assistant は、各インストール・タイプの次のコンポーネントをアップグレードします。

表 1-1 OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるコンポーネント（処理順）

OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるコンポーネント	「J2EE and Web Cache」インストール・タイプ	「Portal and Wireless」インストール・タイプ	「Business Intelligence and Forms」インストール・タイプ
Oracle Process Management and Notification Server	○	○	○
Instance Configuration (iasschema.xml)	○	○	○
Oracle Application Server Containers for J2EE	○	○	○
Oracle HTTP Server	○	○	○
Oracle Application Server Web Cache	○	○	○
mod_plsql	○	○	○
Oracle Enterprise Manager (targets.xml)	○	○	○
Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ	-	○	○
Oracle Ultra Search	-	○	○

表 1-1 OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるコンポーネント（処理順）（続き）

OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるコンポーネント	「J2EE and Web Cache」インストール・タイプ	「Portal and Wireless」インストール・タイプ	「Business Intelligence and Forms」インストール・タイプ
Oracle Application Server Portal (中間層)	-	○	○
Oracle Application Server Wireless	-	○	○
Oracle Application Server Forms Services	-	-	○
Oracle Application Server Discoverer	-	-	○
Oracle Application Server Reports Services	-	-	○

ソースおよびアップグレード先のインストール・タイプの要件

OracleAS Upgrade Assistant は、同じインストール・タイプの Oracle Application Server インスタンス間でのみアップグレードを実行できます。たとえば、リリース 2 (9.0.2) の「J2EE and Web Cache」インストールの場合、10g (9.0.4) の「J2EE and Web Cache」にアップグレードします。

Unified Messaging は Oracle Application Server 10g (9.0.4) の一部ではないため、リリース 2 (9.0.2) の UNIX システムから「Unified Messaging」インストール・タイプをアップグレードする場合は特殊なケースとなります。「Unified Messaging」インストール・タイプをアップグレードすると、OracleAS Upgrade Assistant は、その構成を 10g (9.0.4) の「Business Intelligence and Forms」インストール・タイプに適用します。

「Unified Messaging」インストールのアップグレード・パスを判断する場合は、Oracle Collaboration Suite のドキュメントを確認してください。

他のアップグレード・パス

OracleAS Upgrade Assistant が対応しないアップグレード要件のアプリケーションまたは構成要素の場合、次に示す他のアップグレード・パスのいずれかを使用します。

- スタンドアロン・タイプの Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) インスタンス (Oracle Technology Network から ZIP 形式でダウンロードできる OC4J) にデプロイされているアプリケーションの場合、手動で再デプロイおよび再構成する必要があります。

注意： スタンドアロンの OC4J アプリケーションは、Oracle Application Server Oracle ホームに構成しません。スタンドアロン・アプリケーションは、10g (9.0.4) Oracle ホームの管理 OC4J インスタンスに再デプロイします。3-6 ページの [3.3 項「スタンドアロン OC4J インスタンスのアップグレード」](#) を参照してください。

- OracleAS Web Cache リリース 2 (9.0.2 または 9.0.3) のスタンドアロン・インスタンスを Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードするには、OracleAS Upgrade Assistant を起動する前に 3-7 ページの [3.4 項「スタンドアロン OracleAS Web Cache インスタンスのアップグレード」](#) に説明されている手順を実行してください。
- リリース 1 からリリース 2 にアップグレードするには、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の『Oracle9i Application Server R1.0.2.2.x から R9.0.2 への移行』の指示に従います。
- リリース 1 (1.0.2.2) から 10g (9.0.4) にアップグレードするには、最初にリリース 1 (1.0.2.2) をリリース 2 (9.0.2) にアップグレードし、次にリリース 2 (9.0.2) を 10g (9.0.4) にアップグレードする必要があります。
- Oracle Application Server Discoverer をリリース 1 (1.0.2.2) から 10g (9.0.4) にアップグレードするには、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリの『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』の指示に従います。
- JServ を使用するアプリケーションのアップグレードは、このマニュアルでは説明しません。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の『Oracle9i Application Server R1.0.2.2.x から R9.0.2 への移行』にある JServ から OC4J への移行の説明が、それらのアプリケーションを Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle Application Server Containers for J2EE サブレット環境に適合させる際に役立ちます。

中間層インストール・タイプの拡張

中間層のインストール・タイプは、より広範なものに拡張してより多くのコンポーネントを含めることができます。たとえば、「J2EE and Web Cache」中間層から「Portal and Wireless」中間層に拡張できます。

関連項目： 中間層インストールの拡張については、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

アップグレードとともに中間層を拡張する手順は、次のとおりです。

1. 既存の中間層をリリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) から 10g (9.0.4) にアップグレードします。
2. アップグレードした中間層を拡張します。

関連項目： 中間層インストールの拡張手順については、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

1.5 OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パス

Oracle9iAS Portal リポジトリは、リリース 9.0.2.0、9.0.2.2、9.0.2.3、9.0.2.6 のいずれからこのマニュアルの手順に従ってアップグレードできます。その他のリリースのアップグレード方法については、次の Portal Center のアップグレードのページを参照してください。

<http://portalcenter.oracle.com/upgrades>

1.6 アップグレード後の Windows コンポーネント・サービスについての注意

Oracle Application Server 10g (9.0.4) と以前のリリースの Oracle Application Server との主な違いは、10g (9.0.4) でサービスの数が大幅に削減されたことです。Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードした後のサービスはわずかです。

これは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) および (9.0.3) では、Oracle Process Management and Notification Server (OPMN) で管理されていなかったコンポーネントが Windows サービスとして実行されていたことが理由です。

たとえば、Infrastructure を使用している Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のシステムでは、次の Windows サービスが存在します。

- Oracle<902 Oracle Home>PagingServer
- Oracle<902 Oracle Home>WebCache
- Oracle<902 Oracle Home>WebCacheAdmin
- Oracle<902 Oracle Home>WebCacheMon
- Oracle<902 Oracle Home>InternetDirectory_iasdb

たとえば、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の Business Intelligence and Forms 構成では、次の Windows サービスが存在します。

- Oracle<902 Oracle Home>Discoverer
- Oracle<902 Oracle Home>WebCache
- Oracle<902 Oracle Home>WebCacheAdmin
- Oracle<902 Oracle Home>WebCacheMon

Oracle Application Server 10g (9.0.4) のシステムでは、コンポーネントが OPMN で管理され、次のサービスで制御されるため、前述の Windows サービスは存在しません。

- Oracle<904 Oracle Home>ProcessManager

また、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の Windows サービスの名前は、以前のリリースと新しいリリースでは異なります。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) および (9.0.3) では、サービスは次のとおりです。

- Oracle<902 Oracle Home>EMWebsite
- Oracle<902 Oracle Home>Agent

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、サービスは次のとおりです。

- Oracle<904 Oracle Home>ASControl

アップグレード計画

この章では、アップグレード計画のガイドラインについて説明します。この章の項は、次のとおりです。

2-2 ページの [2.1 項「Oracle Application Server の互換性」](#)

2-5 ページの [2.2 項「アップグレード方針の決定」](#)

2.1 Oracle Application Server の互換性

第 1 章で説明したように、分散 Oracle Application Server 構成は、1 つ以上の中間層と 1 つの Infrastructure から構成されます。Infrastructure は Identity Management と Metadata Repository から構成され、そのいずれもリリース 2 (9.0.2) または 10g (9.0.4) にできます。

アップグレード処理では、これらの構成要素間の互換性が規定されています。1-4 ページの 1.3 項「[Infrastructure のアップグレード処理](#)」に、サポートされているハイブリッド構成に関する説明があります。この構成において Infrastructure は、10g (9.0.4) およびリリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository 構成要素および Identity Management 構成要素と組み合わせられます。サポートされない構成要素同士の組合せがあることに注意してください。

この項では、主な互換性ルールを明らかにし、それに基づいてサポートされる構成およびサポートされない構成の例を示します。この項の内容および構成間の可能性のある遷移状態を理解することにより、Oracle Application Server のアップグレードを的確に計画できます。

2.1.1 互換性ルール

Oracle Application Server の互換性は、次のルールに基づきます。

- 10g (9.0.4) 中間層は、10g (9.0.4) の Metadata Repository と相互運用が可能
- 10g (9.0.4) 中間層は、10g (9.0.4) の Identity Management と相互運用が可能
- 10g (9.0.4) 中間層は、リリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository と相互運用が可能
- 10g (9.0.4) 中間層は、リリース 2 (9.0.2) の Identity Management と相互運用が可能
- すべてのリリースのルールはプラットフォームには依存しません。互換性の関係に影響することなく、2 つ以上のリリースの構成要素が複数オペレーティング・システムに存在できます。
- 10g (9.0.4) の Metadata Repository は、リリース 2 (9.0.2) およびリリース 2 (9.0.3) 中間層と相互運用できません。
- クラスタでは、同じリリースのインスタンスのみがホスティングされます。

2.1.2 Oracle Application Server 構成の例

この項では、互換性ルールに基づいて、サポートされる構成およびサポートされない構成の例を示します。

2.1.2.1 1 つの中間層と 1 つの Infrastructure

表 2-1 では、異なるリリースの中間層と Infrastructure 構成要素が組み合わされる構成をリストし、それぞれのサポート状況を示します。

表 2-1 1 つの中間層と 1 つの Infrastructure の互換性

構成	中間層のリリース	Metadata Repository ¹ のリリース	Identity Management ² のリリース	サポート
A	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2	9.0.2	○
B	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2	9.0.4	○
C	9.0.2 または 9.0.3	9.0.4	9.0.2	-
D	9.0.2 または 9.0.3	9.0.4	9.0.4	-
E	9.0.4	9.0.2	9.0.2	○
F	9.0.4	9.0.2	9.0.4	○
G	9.0.4	9.0.4	9.0.2	○
H	9.0.4	9.0.4	9.0.4	○

¹ Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On のスキーマを除きます。すなわち、Integration Platform、OracleAS Certificate and Authentication、Oracle Ultra Search、Oracle Application Server Syndication Server、Oracle Application Server Web Services、Oracle Application Server Portal、Oracle Application Server Wireless および Web クリップिंगのスキーマで構成されます。

² Identity Management は、Oracle Internet Directory と Oracle Application Server Single Sign-On のバイナリおよびスキーマで構成されます。

2.1.2.2 複数の中間層と 1 つの Infrastructure

複数の中間層と 1 つの Infrastructure の互換性は、1 つの中間層と 1 つの Infrastructure の場合に類似しています。10g (9.0.4) の Metadata Repository がリリース 2 (9.0.2) およびリリース 2 (9.0.3) 中間層と動作しないことが、互換性に関する決定的要因です。つまり、この構成における非互換性の問題の主な原因となります。

2.1.2.3 マルチプラットフォーム・インストール

ある構成要素のオペレーティング・システムは、他のプラットフォームの構成要素に対する互換性の関係に影響しません。いずれの分散構成も、様々なプラットフォーム上で稼働します。たとえば、Linux システム上の 10g (9.0.4) 中間層から、Windows システム上のリリース 2 (9.0.2) の Identity Management および Metadata Repository にアクセスできます。あるいは、Windows システム上の 10g (9.0.4) 中間層から、Solaris システム上の 10g (9.0.4) の Identity Management およびリリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository にアクセスできます。

2.1.3 構成間の遷移

この項では、アップグレード時における構成間の遷移を示します。図 2-1 は、その遷移を表しています。表 2-2、表 2-3 および表 2-4 は、リリースとアップグレードの実行順序を示します。

図 2-1 構成間のサポートされている遷移

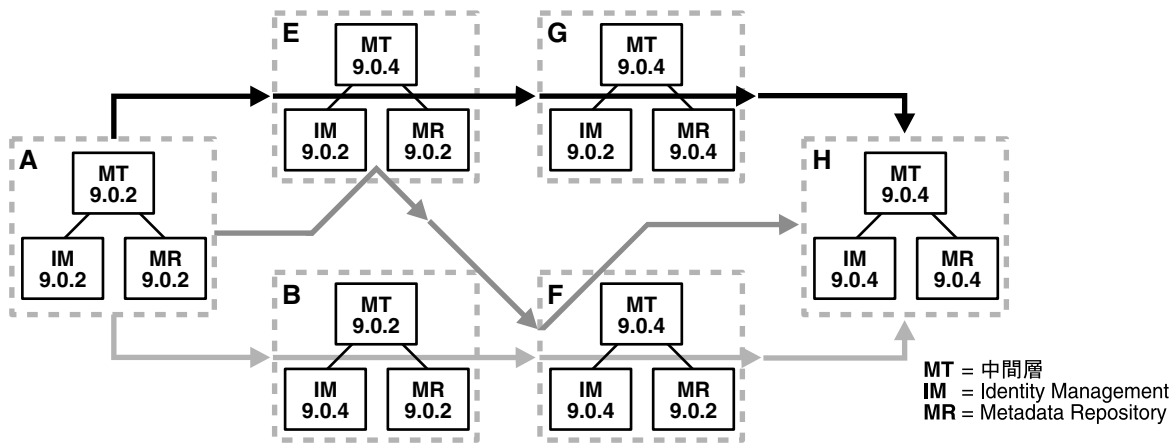


表 2-2 A からの E、G、H への遷移¹

構成	中間層のリリース	Metadata Repository のリリース	Identity Management のリリース
A	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2	9.0.2
E	9.0.4	9.0.2	9.0.2
G	9.0.4	9.0.4	9.0.2
H	9.0.4	9.0.4	9.0.4

¹ アップグレードは、中間層、Metadata Repository、Identity Management の順に実行します。

表 2-3 A からの E、F、H への遷移¹

構成	中間層のリリース	Identity Management のリリース	Metadata Repository のリリース
A	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2	9.0.2
E	9.0.4	9.0.2	9.0.2
F	9.0.4	9.0.4	9.0.2
H	9.0.4	9.0.4	9.0.4

¹ アップグレードは、中間層、Identity Management、Metadata Repository の順に実行します。

表 2-4 A からの B、F、H への遷移¹

構成	Identity Management のリリース	中間層のリリース	Metadata Repository のリリース
A	9.0.2	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2
B	9.0.4	9.0.2 または 9.0.3	9.0.2
F	9.0.4	9.0.4	9.0.2
H	9.0.4	9.0.4	9.0.4

¹ アップグレードは、Identity Management、中間層、Metadata Repository の順に実行します。

2.2 アップグレード方針の決定

この項では、Oracle Application Server のアップグレードを開始する際に役立つ情報を提供します。項目は、次のとおりです。

2-6 ページの [2.2.1 項「アップグレード処理の概要」](#)

2-10 ページの [2.2.2 項「システム停止時間の計画」](#)

2-12 ページの [2.2.3 項「アップグレード時のシステムの可用性」](#)

2-14 ページの [2.2.4 項「バックアップの作成」](#)

2.2.1 アップグレード処理の概要

この項では、アップグレード処理全体を説明し、さらに Upgrade Assistant またはスクリプトによって自動的に実行される部分および手動で実行する部分を明らかにします。項目は、次のとおりです。

- 2-6 ページの 2.2.1.1 項「アップグレード・タスク」
- 2-8 ページの 2.2.1.2 項「Oracle Application Server Upgrade Assistant によってアップグレードされる中間層コンポーネント」
- 2-9 ページの 2.2.1.3 項「スクリプトによってアップグレードされる Infrastructure スキーマ」
- 2-9 ページの 2.2.1.4 項「手動アップグレード・タスク」

2.2.1.1 アップグレード・タスク

表 2-5 「Oracle Application Server のアップグレード・タスク」は、アップグレード処理全体のタスク・リストです。構成によっては適用されない手順もあります。たとえば、手順 6 および手順 8 ～ 11 は、Infrastructure を使用しない構成には適用されません。

表 2-5 Oracle Application Server のアップグレード・タスク

手順	タスク	指示
1	Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層をインストールします。この中間層は、アップグレードするリリース 2 (9.0.2) 中間層と同じ Metadata Repository および Oracle Internet Directory を使用する必要があります。	『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』
2	ソース中間層インスタンスを停止します。	3-4 ページの 3.1.2 項「Oracle Application Server インスタンスの停止」
3	Infrastructure が実行されており、アクセス可能であることを確認します。	3-11 ページの 3.5.2 項「Infrastructure の起動」
4	OracleAS Upgrade Assistant を実行します。	3-9 ページの 3.5 項「OracleAS Upgrade Assistant の使用方法」
5	中間層のアップグレードの完了に必要な手動による手順を実行します。	3-28 ページの 3.8 項「アップグレードの完了」

表 2-5 Oracle Application Server のアップグレード・タスク（続き）

手順	タスク	指示
6	同じ Infrastructure に関連付けられている各中間層で、手順 1、2、3、4 および 5 を繰り返します。	『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』 3-4 ページの 3.1.2 項「Oracle Application Server インスタンスの停止」 3-11 ページの 3.5.2 項「Infrastructure の起動」 3-9 ページの 3.5 項「OracleAS Upgrade Assistant の使用方法」 3-28 ページの 3.8 項「アップグレードの完了」
7	パッチを適用してデータベースをリリース 9.0.1.5 にアップグレードします。	4-3 ページの 4.2 項「Metadata Repository のアップグレードの準備」
8	Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure をインストールまたはアップグレードします。	5-2 ページの 5.1 項「Identity Management のアップグレード」
9	スクリプトを実行して、Metadata Repository Container、Integration Platform、OracleAS Certificate and Authentication、Syndication Server、Web クリップング、Oracle Ultra Search および Oracle Application Server Web Services 用の Infrastructure データベース・スキーマをアップグレードします。	4-12 ページの 4.4 項「Metadata Repository のアップグレード・スクリプトの実行」
10	Portal リポジトリをアップグレードします。	4-30 ページの 4.5 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード」
11	Infrastructure のアップグレードで発生した Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory のアップグレードを完了するために、必要に応じて手動タスクを実行します。	5-46 ページの 5.4 項「Infrastructure のアップグレード後のタスク」
12	必要に応じてスクリプトを実行して、カスタマ・データベースのスキーマをアップグレードします。	4-61 ページの 4.6 項「カスタマ・データベースにおけるスキーマのアップグレード」
13	10g (9.0.4) Infrastructure の機能を受け入れるように中間層コンポーネントを変更します。	4-62 ページの 4.7 項「UDDI アプリケーションの 10g (9.0.4) の機能のアクティブ化」

2.2.1.2 Oracle Application Server Upgrade Assistant によってアップグレードされる中間層コンポーネント

OracleAS Upgrade Assistant は、次の中間層コンポーネントの構成をアップグレードします。

注意： Oracle9iAS Clickstream Intelligence は、10g (9.0.4) に含まれないため、そのアップグレードについてはこのマニュアルでは説明しません。

OracleAS Upgrade Assistant によって実行されるすべてのアップグレード処理は、[付録 A 「コンポーネントのアップグレード処理リファレンス」](#) の次の項で説明します。

- A-3 ページの [A.1.1 項「Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\) のアップグレード処理」](#)
- A-4 ページの [A.1.2 項「インスタンス構成データのアップグレード処理」](#)
- A-4 ページの [A.1.3 項「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\) のアップグレード処理」](#)
- A-5 ページの [A.1.4 項「Oracle HTTP Server のアップグレード処理」](#)
- A-8 ページの [A.1.5 項「Oracle Application Server Web Cache のアップグレード処理」](#)
- A-9 ページの [A.1.6 項「mod_plsql のアップグレード処理」](#)
- A-10 ページの [A.1.7 項「Oracle Enterprise Manager のアップグレード処理」](#)
- A-10 ページの [A.1.8 項「Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリのアップグレード処理」](#)
- A-11 ページの [A.1.9 項「Oracle Ultra Search のアップグレード処理」](#)
- A-11 ページの [A.1.10 項「OracleAS Portal 中間層のアップグレード処理」](#)
- A-12 ページの [A.1.11 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理」](#)
- A-14 ページの [A.1.12 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレード処理」](#)
- A-15 ページの [A.1.13 項「Oracle Application Server Discoverer のアップグレード処理」](#)
- A-16 ページの [A.1.14 項「Oracle Application Server Reports Services のアップグレード処理」](#)

2.2.1.3 スクリプトによってアップグレードされる Infrastructure スキーマ

一部のコンポーネントでは、製品メタデータおよびユーザー・データを含むスキーマが Infrastructure データベースにあります。このスキーマは、インストーラまたは Oracle Application Server Repository Creation Assistant CD で提供されるスクリプトによってアップグレードされます。これらのアップグレードに関連する処理は手動によるものもあります。

Repository Creation Assistant CD のスキーマ・アップグレード・スクリプトにより実行されるすべての処理は、付録 A「コンポーネントのアップグレード処理リファレンス」の次の項で説明します。

- A-17 ページの [A.2.1 項「Identity Management のアップグレード処理」](#)
- A-18 ページの [A.2.2 項「Metadata Repository Container スキーマのアップグレード処理」](#)
- A-19 ページの [A.2.3 項「ProcessConnect のアップグレード処理」](#)
- A-19 ページの [A.2.4 項「Oracle Application Server Certificate Authority のアップグレード処理」](#)
- A-19 ページの [A.2.5 項「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理」](#)
- A-20 ページの [A.2.6 項「OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理」](#)
- A-21 ページの [A.2.7 項「Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理」](#)
- A-22 ページの [A.2.8 項「Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード処理」](#)
- A-23 ページの [A.2.9 項「Web クリップिंगのアップグレード処理」](#)
- A-23 ページの [A.2.10 項「Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード処理」](#)

2.2.1.4 手動アップグレード・タスク

このマニュアルの次の項目で、手動タスクについて説明します。

中間層の手動アップグレード・タスク

3-29 ページの [3.8.1 項「Oracle HTTP Server のアップグレードの完了」](#)

3-30 ページの [3.8.2 項「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\) のアップグレードの完了」](#)

3-39 ページの [3.8.3 項「OracleAS Web Cache クラスタのアップグレード」](#)

3-41 ページの [3.8.4 項「OracleAS Portal 中間層のアップグレードの完了」](#)

3-52 ページの 3.8.5 項「Oracle Application Server Discoverer Viewer のアップグレードの完了」

3-54 ページの 3.8.6 項「Oracle Application Server Reports Services のアップグレードの完了」

3-55 ページの 3.8.7 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了」

3-59 ページの 3.8.8 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレードの完了」

3-61 ページの 3.8.9 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」

3-62 ページの 3.9 項「Oracle Application Server InterConnect のアップグレード」（このコンポーネントには、自動アップグレードはありません）

Infrastructure の手動アップグレード・タスク

4-40 ページの 4.5.8 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレードの完了」

5-46 ページの 5.4.1 項「Oracle Internet Directory のアップグレードの完了」

5-50 ページの 5.4.2 項「Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの完了」

5-54 ページの 5.4.3 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了」

2.2.2 システム停止時間の計画

この項では、Oracle Application Server のアップグレードの計画で明らかにしておきたい次の点に関する情報を提供します。

- アップグレードやトラブルシューティングに割り当てる時間の長さ
- 停止時間を発生しやすいシステムの部分
- 停止時間が発生する場合

2.2.2.1 アップグレードに必要な時間

停止時間を考慮する際は、アップグレードの準備作業およびアップグレード処理にかかる時間が重要となります。この項では、基本的な構成のアップグレードの予測時間を示します。この予測時間にはトラブルシューティングの時間は含まれておらず、エラーが発生しないアップグレードを想定しています。

表 2-6 中間層アップグレードの予測時間

操作	J2EE and Web Cache	Portal and Wireless	Business Intelligence and Forms
10g (9.0.4) 中間層のインストール: 10g (9.0.4) 中間層は、リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) 中間層と同じコンピュータにインストールする必要があります。	30 分	60 分 ¹	90 分 ¹
アップグレード前: ソースおよびアップグレード先のインスタンスを停止する必要があります。インスタンスのバックアップはオプションであるため、この予測時間には含まれていません。	20 分	20 分	20 分
OracleAS Upgrade Assistant の実行: 実行時間は、ソースの構成によって異なります。たとえば、デプロイされた J2EE アプリケーションの数およびサイズが時間に大きく影響します。この予測時間は、基本的な構成を想定しています。	20 分	30 分	40 分
アップグレード後: アップグレードされたインスタンスの起動および基本的な検証テストの実行が含まれます。	20 分	30 分	40 分
合計	1 時間 45 分	2 時間 35 分	3 時間 25 分

¹Oracle Application Server Wireless をリリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository に対して構成する最初の 10g (9.0.4) のインスタンスによって、そのリポジトリのスキーマがアップグレードされます。このため、この操作にかかる時間が非常に長くなる場合があります。Oracle Application Server Wireless が複数の中間層で実行されている場合、この操作を実行する前にそのすべての中間層で Oracle Application Server Wireless を停止する必要があります。詳細は、A-12 ページの付録 A.1.11 「Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理」を参照してください。

表 2-7 Infrastructure アップグレードの予測時間

操作	Metadata Repository	Identity Management	Infrastructure 全体 ¹
データベースのバックアップ: データベースのバックアップは、ユーザーが指定したプロシージャによって実行します。	1 時間	該当なし	該当なし
Oracle ホームのバックアップ: Infrastructure Oracle ホームをバックアップします。	該当なし	1 時間	1 時間
データベースのパッチ: Metadata Repository を含むデータベースがリリース 9.0.1.3 である場合、パッチを適用してリリース 9.0.1.5 にアップグレードする必要があります。	2 時間	2 時間	2 時間
Metadata Repository Container のアップグレード: Metadata Repository Container のアップグレード・スクリプトは、Repository Configuration Assistant CD-ROM から実行します。 ²	5 分	5 分	5 分

表 2-7 Infrastructure アップグレードの予測時間（続き）

操作	Metadata Repository	Identity Management	Infrastructure 全体 ¹
コンポーネント・スキーマおよび OracleAS Portal のアップグレード: Metadata Repository のコンポーネント・スキーマおよび OracleAS Portal をスクリプトによってアップグレードします。	2 時間	該当なし	3 時間
Metadata Repository Container のアップグレード後: アップグレードされたスキーマに依存する中間層コンポーネントを再起動します。	30 分	該当なし	30 分
Installer の準備: リリース 2 (9.0.2) Infrastructure ソフトウェアを適切な状態（インスタンスの停止、データベースの起動、データベース・リスナーの停止、Oracle Internet Directory の起動など）にします。	該当なし	20 分	20 分
インストール: Oracle Universal Installer をアップグレード・モードで実行して、10g (9.0.4) Infrastructure を新規 Oracle ホームにインストールし、インストール後のすべての構成ツールを実行します。	該当なし	45 分	45 分
Identity Management のアップグレード後: 必要に応じて、Oracle Application Server Single Sign-On DAD のアップグレードなどのアップグレード後のタスクを行います。	該当なし	1 時間	1 時間
合計	5 時間 35 分	5 時間 10 分	8 時間 40 分

¹ Metadata Repository および Identity Management のアップグレード時間は、共通タスクの実行が 1 回のみでよいため、各部分を個々にアップグレードする場合にかかる時間の合計より短くなります。

² この予測時間はすべてのスクリプトの実行に基づいていますが、Metadata Repository のすべてのコンポーネントをアップグレードする必要はありません。したがって、アップグレードするコンポーネントが少なければ、この操作の時間は短くなります。

2.2.3 アップグレード時のシステムの可用性

この項では、2 つの中間層インスタンスが 1 つの Infrastructure インスタンスを使用する場合のアップグレード処理に必要な手順の概要を説明します。このアップグレード処理は、高可用性を目的としています。図 2-2 に示すように、システム全体で停止時間が発生するのは手順 6 のみです（システムが Infrastructure に依存する場合）。

アップグレード処理時のシステムの状態は、次のように進行します。

1. リリース 2 (9.0.2) のシステムはフル稼働で、クライアントは 2 つの中間層を介して接続します。
2. 最初の間層層をアップグレードの準備のために停止します。クライアントは最初の間層層を介して接続できなくなりますが、2 番目の中間層を介して引き続き接続できます。

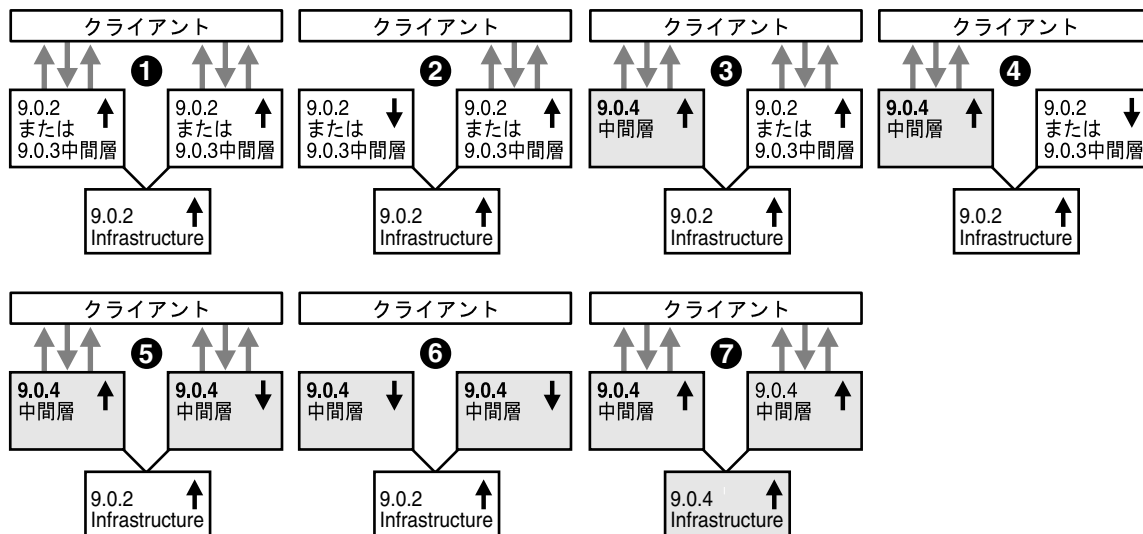
3. 最初の間層層を 10g (9.0.4) にアップグレードします。(1-3 ページの [1.2 項「中間層のアップグレード処理」](#)を参照してください。) これで、クライアントが 2 つの間層層を介して接続できるようになります。
4. 2 番目の間層層をアップグレードの準備のために停止します。クライアントは 2 番目の間層層を介して接続できなくなりますが、最初の間層層を介して引き続き接続できます。
5. 2 番目の間層層を 10g (9.0.4) にアップグレードします。これで、クライアントが 2 つの間層層を介して接続できるようになります。
6. Infrastructure をアップグレードの準備のために停止します。Infrastructure に依存するアプリケーションが使用できなくなります。
7. Infrastructure を 10g (9.0.4) にアップグレードします。(1-4 ページの [1.3 項「Infrastructure のアップグレード処理」](#)を参照してください。) これで、クライアントが完全にアップグレードされたシステムに接続できるようになります。

注意： わかりやすくするために図に示されている間層層は 2 つのみですが、実際にはもっと多くの間層層が存在する場合があります。使用されている間層層が多ければ、アップグレード時の停止時間によるシステム許容量の低下は抑えられます。間層層が 2 つの場合、1 つがアップグレードのために停止されるとシステム許容量は 50% 低下します。間層層が 4 つの場合、1 つがアップグレードのために停止されるとシステム許容量の低下は 25% のみです。

図の「クライアント」は、ロード・バランサを指す場合もあります。ユーザーは間層層の停止時間を意識する必要はありません。

Oracle Application Server Wireless を実行する間層層の場合、このアップグレード処理に例外があります。A-13 ページの付録 [A.1.11.1 「Oracle Application Server Wireless 中間層および Wireless スキーマのアップグレード」](#)を参照してください。

図 2-2 アップグレード時のシステムの可用性



2.2.4 バックアップの作成

アップグレード処理は、10g (9.0.4) インストールのみを変更します。ソース・インスタンスは常に変更されません。アップグレード前の状態（新規インストールの状態）にリストアできるように、10g (9.0.4) の Oracle ホームのバックアップを作成してください。アップグレードの結果がうまくいかなかった場合には、バックアップからリストアの方が、インスタンス全体を再インストールするよりも効率的な場合があります。次のバックアップは有用です。

- 特定コンポーネントのディレクトリ。B-7 ページの表 B-2「アップグレード・データを含むファイル（パス順）」を参照してください。
- Oracle ホーム全体。このバックアップには、Oracle Application Server Backup and Recovery ツールおよびドキュメントを使用できます。

関連項目： Backup and Recovery ツールの使用方法については、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』を参照してください。

中間層のアップグレード

この章では、Oracle Application Server インストールの中間層のアップグレード方法について説明します。正常にアップグレードするためにシステムを準備する方法、さらに Oracle Application Server Upgrade Assistant を起動および使用する方法について説明します。OracleAS Upgrade Assistant の処理の終了後に個々のコンポーネントで実行する必要がある手動タスクについても詳述します。OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされないコンポーネントやコンポーネント部分については、完全に手動で行うアップグレード手順が必要です。この手順はすべて、インストールの各中間層で実行します。

注意： アップグレード処理で変更されるのは、10g (9.0.4) の Oracle ホームのみです。そのため、ソース Oracle ホームを使用して元に戻すことができます。

関連項目： 中間層のアップグレード処理に関する全体的な概要は、1-3 ページの [1.2 項「中間層のアップグレード処理」](#) を参照してください。

この章の主な項は、次のとおりです。

3-3 ページの [3.1 項「アップグレードの準備：すべてのコンポーネントに共通の要件」](#)

3-5 ページの [3.2 項「アップグレードの準備：特定コンポーネントの要件」](#)

3-6 ページの [3.3 項「スタンドアロン OC4J インスタンスのアップグレード」](#)

3-7 ページの [3.4 項「スタンドアロン OracleAS Web Cache インスタンスのアップグレード」](#)

3-9 ページの [3.5 項「OracleAS Upgrade Assistant の使用方法」](#)

3-21 ページの [3.6 項「エラーの解決」](#)

3-28 ページの [3.7 項「OracleAS Upgrade Assistant の再起動」](#)

3-28 ページの [3.8 項「アップグレードの完了」](#)

3-62 ページの [3.9 項「Oracle Application Server InterConnect のアップグレード」](#)

-
- 3-65 ページの 3.10 項「アップグレード後のポート値と portlist.ini ファイル」
 - 3-65 ページの 3.11 項「Application Server クラスタのアップグレード」
 - 3-67 ページの 3.12 項「アップグレードされた中間層インスタンスの起動」
 - 3-71 ページの 3.14 項「アップグレード後のソース Oracle ホームに関する考慮事項」

3.1 アップグレードの準備：すべてのコンポーネントに共通の要件

この項では、アップグレードのために実行する必要がある 10g (9.0.4) 中間層インストールを準備する手順について説明します。

3-71 ページの [3.1.1 項「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) 中間層のインストールの要件」](#)

3-4 ページの [3.1.2 項「Oracle Application Server インスタンスの停止」](#)

3-5 ページの [3.1.3 項「Infrastructure を使用する中間層のアップグレードの準備」](#)

3.1.1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層のインストールの要件

Infrastructure を使用する中間層をアップグレードする場合、インストール前の要件があります。Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層のインストールの前に、要件が満たされていることを確認してください。要件を満たさない場合、10g (9.0.4) インストールはリリース 2 (9.0.2) Infrastructure では機能しません。特に、リリース 2 (9.0.2) Infrastructure を使用するには、リリース 2 (9.0.2) の Oracle Internet Directory のエントリを更新する必要があります。

関連項目： エントリの更新方法は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の「9.0.2 の Oracle Internet Directory のエントリの更新」を参照してください。

関連項目： 互換性の要件の詳細は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の第 3 章「以前のリリースとの互換性」を参照してください。

次の要件に従って、Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層をインストールします。

- Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層と同じコンピュータにある必要があります。
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層をインストールした同じオペレーティング・システム・ユーザーがインストールする必要があります。
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層とは別の Oracle ホームにある必要があります。
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層と同じインストール・タイプである必要があります。(例外として、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の「Unified Messaging」インストール・タイプをアップグレードするには、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の「Business Intelligence and Forms」インストール・タイプをインストールします。)

- Identity Management を使用する場合、Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層と同じ Identity Management を使用する必要があります。
- Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の中間層と同じ Metadata Repository を使用する必要があります。(Metadata Repository は常に Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) です。)
- ソースとアップグレード先の両方の Oracle ホームで構成されるコンポーネントのみがアップグレードされます。例外として、OracleAS Portal は、アップグレード先インスタンスで構成されている場合にアップグレードされます。ただし、OracleAS Upgrade Assistant を実行するまで、OracleAS Portal コンポーネントは Oracle Application Server 10g (9.0.4) インスタンスで完全に構成されないことに注意してください。つまり、中間層のアップグレード処理が完了するまで、Oracle9iAS Portal にはリリース 2 (9.0.2) 中間層によってのみアクセスする必要があります。

他のソフトウェアとの互換性および関連のインストール要件については、次のマニュアルを参照してください。

関連項目: 『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』

3.1.2 Oracle Application Server インスタンスの停止

次に示すコマンドによって、ソースおよびアップグレード先の Oracle ホームのすべてのプロセスを停止します。

- ソース Oracle ホーム
 1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を停止します。

```
<source_MT_OH>%bin%emctl stop
```
 2. OPMN およびそれによって管理されるプロセスを次のコマンドで停止します。

```
<source_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl stopall
```
 3. OracleAS Web Cache を次のコマンドで停止します。

```
<source_MT_OH>%bin%webcachectl stop
```
 4. ソース Oracle ホームで実行中のその他のすべてのプロセスを停止します。
- アップグレード先 Oracle ホーム
 1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を次のコマンドで停止します。

```
<destination_MT_OH>%bin%emctl stop iasconsole
```
 2. OPMN およびそれによって管理されるプロセスを次のコマンドで停止します。

```
<destination_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl stopall
```

3. アップグレード先中間層の Oracle ホームで実行中のその他のすべてのプロセスを停止します。

3.1.3 Infrastructure を使用する中間層のアップグレードの準備

Infrastructure を使用する中間層をアップグレードする前に、Infrastructure を起動してアクセス可能にする必要があります。Infrastructure が停止されている場合、特定のアップグレード処理に失敗します (Oracle Application Server Containers for J2EE、OracleAS Portal および Oracle Application Server Wireless)。

3.2 アップグレードの準備 : 特定コンポーネントの要件

この項では、中間層の特定コンポーネントに対して実行する必要があるアップグレード前の手順の概要を説明します。

3-5 ページの [3.2.1 項「Oracle Application Server Wireless 中間層のアップグレードの準備」](#)

3-6 ページの [3.2.2 項「オプション: 大規模な OC4J のアップグレードに備える JVM メモリーの増加」](#)

3.2.1 Oracle Application Server Wireless 中間層のアップグレードの準備

1 つ以上の Oracle Application Server Wireless 中間層をアップグレードする場合、OracleAS Upgrade Assistant を起動する前に次の手順を実行する必要があります。

関連項目 : A-13 ページの付録 [A.1.11.1 「Oracle Application Server Wireless 中間層および Wireless スキーマのアップグレード」](#) を参照してください。

1. Oracle Application Server Wireless を実行するように構成されている Oracle Collaboration Suit 中間層など、ファームのすべての Oracle Application Server Wireless 中間層を停止します。
2. リリース 2 (9.0.2) の Oracle Application Server Wireless 中間層のすべてを、パッチ適用により Oracle Application Server Wireless 9.0.2.8.0 以上としてください。パッチ・セットの番号は 2831134 です。

関連項目 : パッチを適用する手順については、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

3. Infrastructure で Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) スキーマのバックアップを作成します。このスキーマは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Wireless の中間層のインストール時にアップグレードされるので、バックアップが必要です。

関連項目 : バックアップを作成する手順については、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

3.2.2 オプション: 大規模な OC4J のアップグレードに備える JVM メモリーの増加

多数のアプリケーションまたは OC4J インスタンスをアップグレードする場合、OC4J アップグレードの抽出フェーズのためにメモリーを増やすと効果的です。アップグレード処理の抽出フェーズでは、新しい Java プロセスが開始されます（つまり新しい JVM が起動されます）。その最小および最大のメモリーを構成できます。これを行うには、`<destination_MT_OH>¥upgrade¥Oc4jPlugin.cfg` ファイルの JavaVM プロパティを構成します。

例 3-1 Oc4jPlugin.cfg ファイルの JavaVM プロパティ

```
<JavaVM>
  <JVMproperties property="Xms256m"/>
  <JVMproperties property="Xmx512m"/>
</JavaVM>
```

例 3-1 にはデフォルト値の最小 256MB および最大 512MB が示されていますが、複数の OC4J インスタンスおよび多数の大規模なアプリケーションをアップグレードするには、上限を 1024MB にすると効果的です。

3.3 スタンドアロン OC4J インスタンスのアップグレード

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) のスタンドアロン OC4J インスタンス（例：Oracle Technology Network から ZIP 形式でダウンロードできる OC4J で作成されたインスタンス）は、手動でアップグレードします。このようなインスタンスは、OracleAS Upgrade Assistant ではアップグレードできません。そのアプリケーションは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle ホームに再デプロイする必要があります。

1. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用して、10g (9.0.4) の Oracle ホームでアプリケーションをホスティングする OC4J インスタンスを作成します。
2. OC4J インスタンスをスタンドアロン・インスタンスに対する一意のシステム・プロパティまたは環境変数で構成します。
3. スタンドアロン・インスタンスにおける `java -jar` コマンドラインのすべてのコマンドライン引数の場所を特定します。Oracle Application Server では、Oracle Process Manager and Notification サブシステムが OC4J の起動および停止を担当します。
4. すべてのコマンドライン引数を `<destination_MT_OH>¥pmn¥conf¥opmn.xml` に移します。
5. スタンドアロン・インスタンスのプロパティ・ファイルで指定されているプロパティを `<destination_MT_OH>¥opmn¥conf¥opmn.xml` に移します。

6. リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) のスタンドアロン・アプリケーション (EAR ファイル) を Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle ホームに再デプロイします。

3.4 スタンドアロン OracleAS Web Cache インスタンスのアップグレード

OracleAS Web Cache リリース 2 (9.0.2 または 9.0.3) のスタンドアロン・インスタンスを Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードする場合、OracleAS Upgrade Assistant は使用しません。かわりに、この項で説明する手順を実行します。(スタンドアロン・インスタンスは、この製品のみを含んでいたキットからインストールされたインスタンスであり、Oracle Application Server インストールの一部としてはインストールされていません。)

注意： 以前の Oracle Application Server のインストールでインストールされた OracleAS Web Cache のインスタンスをアップグレードするには、Oracle Application Server の一部である Upgrade Assistant を使用してください。

OracleAS Web Cache Upgrade Tool (webcacheMigtool) を使用します。この Upgrade Tool は、次のファンクションを実行し、アップグレード処理を監査する方法を提供します。

- ソース Oracle ホームから webcache.xml ファイルのバックアップ・コピーが作成されます。バックアップ・ファイルの名前は webcache.xml.preUpgrade です。

Upgrade Tool を 2 回以上実行すると、元の設定が失われることに注意してください。これを回避するには、開始前に別のバックアップを作成します。

- Upgrade Tool を実行しているディレクトリ内のファイル wxupgrade.log に、アップグレードのすべてのアクティビティが記録されます。

OracleAS Web Cache をアップグレードするには、次の手順に従います。

1. webcachectl 実行可能ファイルを使用して、以前のスタンドアロン・バージョンの OracleAS Web Cache を停止します。

webcachectl 実行可能ファイルは、ORACLE_HOME¥bin ディレクトリにあります。

特定のバージョンの webcachectl 実行可能ファイルを使用する場合は、次のコマンドを入力して、OracleAS Web Cache を停止します。

```
%ORACLE_HOME%¥bin¥webcachectl stop
```

2. opmnctl コマンドを使用して、新しくインストールされたバージョンを停止します。

```
opmnctl stopproc ias-component=WebCache
```

3. ORACLE_HOME 環境変数を 10g (9.0.4) の Oracle ホームに設定します。
4. コマンド・プロンプトで、カレント・ディレクトリを次のディレクトリに変更します。

```
%ORACLE_HOME%\upgrade
```

5. 次のコマンドを実行します。(これは、単一行であることに注意してください。)

```
%ORACLE_HOME%\jdk\bin\java -classpath "lib\webcacheua.jar;lib\ua.jar;  
%ORACLE_HOME%\lib\xmlparserv2.jar;%ORACLE_HOME%\lib\dms.jar"  
oracle\ias\upgrade\config\webcache\WebcacheMigtool -s <source_OH> -d  
<destination_OH>
```

次の 2 つの引数を指定する必要があります。

- -s <source_OH>: リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) の Oracle ホームのフルパスを示します。
- -d <destination_OH>: 10g (9.0.4) の Oracle ホームのフルパスを示します。

このコマンドには、同一バージョンでのアップグレード、または異なるホスト間でのアップグレードを可能にするオプションの引数があります。これらの引数は、ソースのキャッシュがキャッシュ・クラスタの一部である場合にのみ必要です。この場合、構成ファイルには複数のキャッシュのエントリが含まれており、これらの引数を 1 つ以上使用して、ソース・キャッシュを指定する必要があります。

- -o <sourcefile_OH>: ソースの構成ファイルで特定のキャッシュの Oracle ホームを指定します。通常、この値は -s で指定した <source_OH> と同一です。ただし、同一のバージョンにアップグレードする場合（構成をテスト・キャッシュから本番のキャッシュに移行する場合など）は、このオプションを使用します。

移行する場合、ソースの構成ファイルおよび DTD ファイル（任意でエラー・ファイルと Wallet ファイル）を一時ディレクトリにコピーする必要があります。その後、一時ディレクトリを <source_OH> として使用し、このオプションを使用してソースの構成ファイルで使用されている Oracle ホームの値を指定して、Upgrade Tool を実行します。

- -h <sourcefile_HOSTNAME>: ソースの構成ファイルで特定のキャッシュのホスト名を指定します。通常、この値はローカル・ホストと同一です。ただし、ソースおよびアップグレード先のインストールが異なるホスト上にある場合は、-o および -h オプションの両方を使用する必要があります。

別のホストに移行する場合、ソースの構成ファイルおよび DTD ファイル（任意でエラー・ファイルと Wallet ファイル）を移行先のホストの一時ディレクトリにコピーする必要があります。その後、一時ディレクトリを <source_OH> として使用し、-o および -h オプションを使用して、Upgrade Tool を実行します。

6. 次のコマンドを使用して、アップグレードされた OracleAS Web Cache を再起動します。

```
opmnctl startproc ias-component=WebCache
```

このコマンドにより、管理サーバー・プロセス、キャッシュ・サーバー・プロセスおよび（使用可能な場合は）自動再起動プロセスが開始されます。

注意： ポート競合が発生するため、以前のバージョンの OracleAS Web Cache は起動しないでください。

3.5 OracleAS Upgrade Assistant の使用方法

この項では、OracleAS Upgrade Assistant に関して、アップグレードを実行するための Graphical User Interface (GUI) またはコマンドライン・バージョンの使用方法、およびロギング動作を指定するために構成可能なプロパティについて説明します。項目は、次のとおりです。

3-9 ページの [3.5.1 項「OracleAS Upgrade Assistant のロギング動作の指定」](#)

3-11 ページの [3.5.2 項「Infrastructure の起動」](#)

3-11 ページの [3.5.3 項「OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行 \(Graphical User Interface \(GUI\) バージョン\)」](#)

3-18 ページの [3.5.4 項「OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行 \(コマンドライン・バージョン\)」](#)

3.5.1 OracleAS Upgrade Assistant のロギング動作の指定

OracleAS Upgrade Assistant のロギング動作を構成するには、`<destination_MT_OH>%upgrade%iasua.properties` ファイルのプロパティを設定します。ロギング・プロパティおよびその用途は、次のとおりです。

- **log.level** — このプロパティを使用して、OracleAS Upgrade Assistant およびすべてのコンポーネント・プラグインのロギング・レベルを指定します。たとえば、`log.level=NOTIFICATION` は、OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるすべてのコンポーネントのロギング・レベルを「通知」に設定します。（デフォルト値は NOTIFICATION です。）
- **<plug-in name>.log.level** — このプロパティを使用して、特定のコンポーネント・プラグインのロギング・レベルを指定します。これは、特定コンポーネントのアップグレードで `log.level` プロパティを上書きするために使用します。たとえば、`OC4J.log.level=TRACE` は、OracleAS Upgrade Assistant のロギング・レベルが「通知」に設定されている場合でも、Oracle Application Server Containers for J2EE のアップグレードのロギング・レベルを「トレース」に設定します。（デフォルト値は NOTIFICATION です。）

- **log.append** — このプロパティを使用して、ログ・エントリを既存のログ・ファイルに追加するか、新規ログ・ファイルを作成するかを指定します。たとえば、log.append=TRUE は、ログ・エントリを既存のログ・ファイルに追加します。(デフォルト値は TRUE です。)

注意： プロパティ名は、大 / 小文字が区別されます。プロパティ値は、大 / 小文字が区別されません。

表 3-1 OracleAS Upgrade Assistant のロギング・プロパティ

プロパティ名	説明	有効な値
log.level	OracleAS Upgrade Assistant およびすべてのコンポーネント・プラグインのロギング・レベルの指定。	WARNING NOTIFICATION (デフォルト値) ERROR TRACE DEBUG OFF INTERNAL_ERROR
<plug-in name>.log.level	特定コンポーネント・プラグインのロギング・レベルの指定。 特定コンポーネントのアップグレードで log.level プロパティを上書きするために使用。 <plug-in name> に指定可能な値は、OPMN、InstanceConfig、OHS、OC4J、WebCache、modplsql、EM、UDDI、UltraSearch、Portal、Wireless、Forms、Discoverer および Reports。	WARNING NOTIFICATION (デフォルト値) ERROR TRACE DEBUG OFF INTERNAL_ERROR
log.append	ログ・エントリを既存のログ・ファイルに追加するか、新規ログ・ファイルを作成するかの指定。	TRUE (デフォルト値) FALSE

3.5.2 Infrastructure の起動

Infrastructure を使用している場合、OracleAS Upgrade Assistant が正常に動作するためには Infrastructure を起動する必要があります。

関連項目： Infrastructure を起動する手順は、『Oracle Application Server 10g 管理者ガイド』の第3章「Infrastructure の起動」を参照してください。

3.5.3 OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行（Graphical User Interface（GUI）バージョン）

この項では、アップグレードを実行するための OracleAS Upgrade Assistant の使用方法を手順を追って説明します。

1. 次のコマンドで OracleAS Upgrade Assistant を起動します。

```
<destination_MT_OH>%upgrade%iasua.bat
```

図 3-1 に示す「ようこそ」画面が表示されます。

2. 「次へ」をクリックします。

図 3-1 OracleAS Upgrade Assistant の「ようこそ」画面

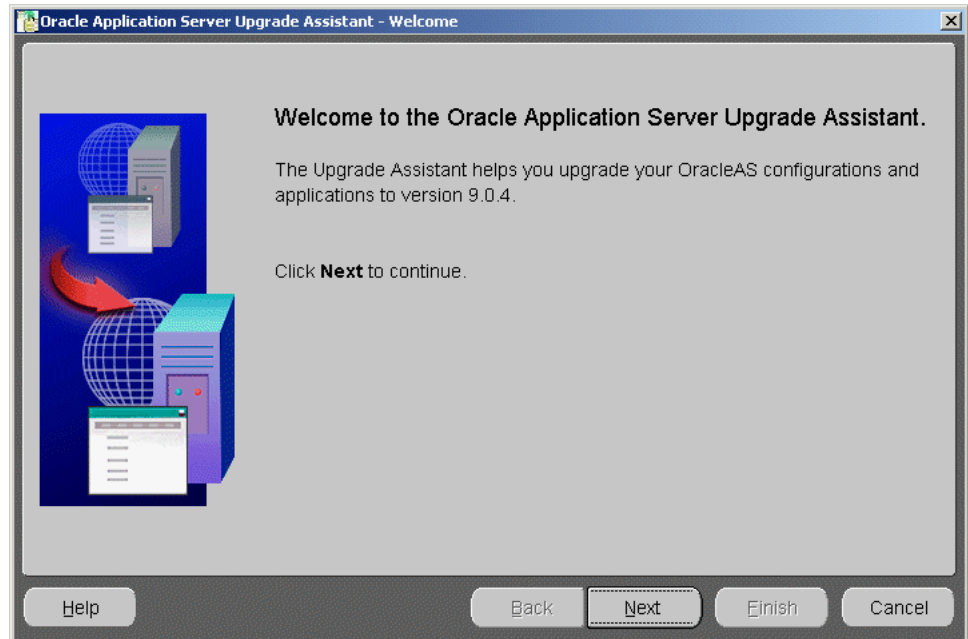


図 3-2 に示す「Oracle ホーム」画面が表示されます。ソース Oracle ホームのドロップダウン・リストに、現在のコンピュータ上の Oracle 製品のインベントリにあるリリース 2 (9.0.2) およびリリース 2 (9.0.3) の Oracle ホームの名前が示されます。アップグレード先 Oracle ホームは、OracleAS Upgrade Assistant が実行されている 10g (9.0.4) の Oracle ホームです。

3. ドロップダウン・リストからソース Oracle ホームを選択します。「次へ」をクリックします。

図 3-2 OracleAS Upgrade Assistant の「Oracle ホーム」画面

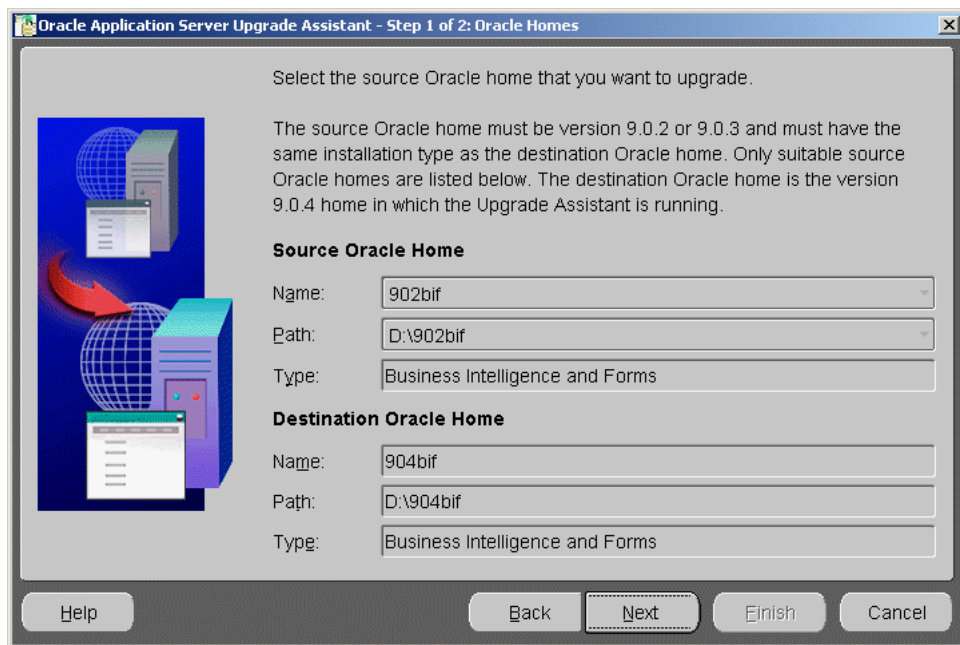
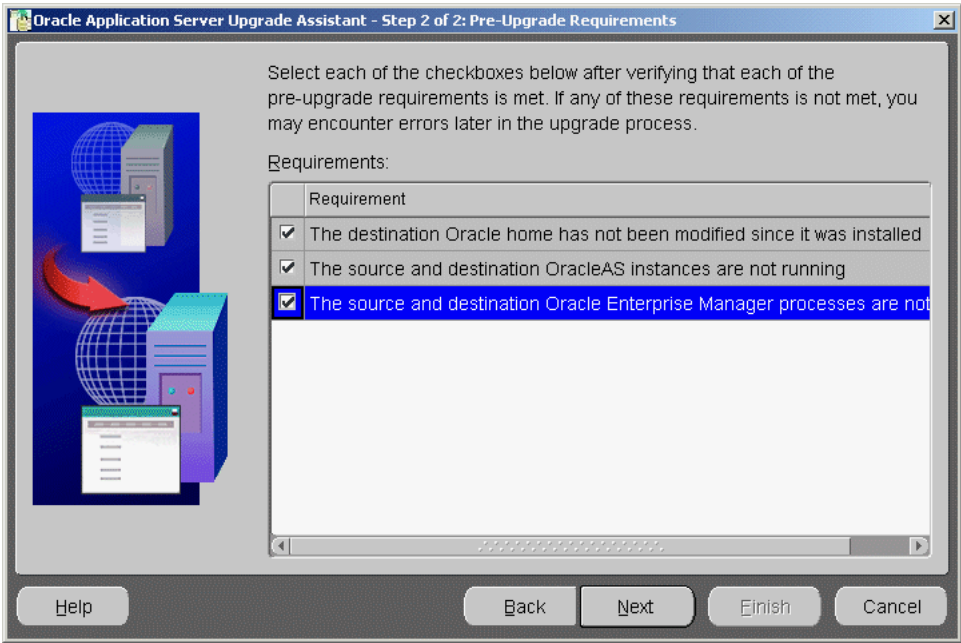


図 3-3 に示す「アップグレード前の要件」画面が表示されます。

4. すべての要件を満たしていることを確認し、それぞれのチェックボックスを選択します。
- すべてのチェックボックスが選択されている場合のみ、「次へ」ボタンがアクティブになります。

図 3-3 OracleAS Upgrade Assistant の「アップグレード前の要件」画面



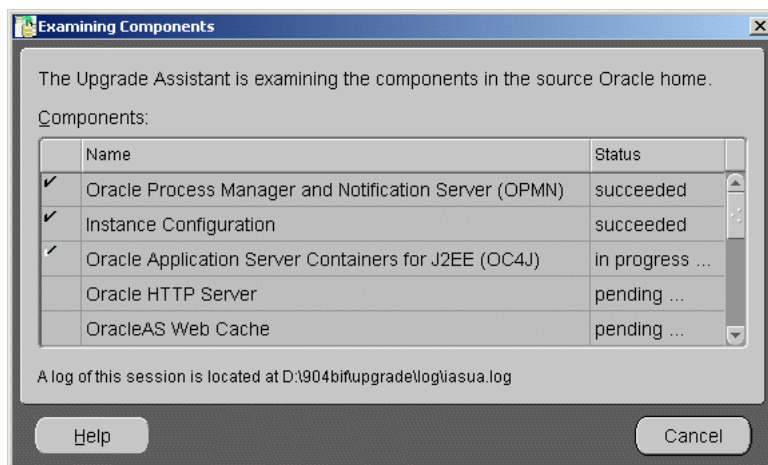
5. 「次へ」をクリックします。

図 3-4 に示す「コンポーネントの調査」ダイアログ・ボックスが表示されます。OracleAS Upgrade Assistant がソース Oracle ホームの各コンポーネントを調査し、アップグレードが必要かどうかを判断します。各コンポーネントの「ステータス」列に、次のいずれかが示されます。

表 3-2 OracleAS Upgrade Assistant コンポーネント調査ステータス

ステータス	意味
進行中	OracleAS Upgrade Assistant がコンポーネントのアップグレード・アイテムを調査しています。
保留中	OracleAS Upgrade Assistant が現在のコンポーネントの調査を終了したら調査されます。
成功	コンポーネントのすべてのアップグレード・アイテムがアップグレードで有効です。
失敗	不明またはアップグレード基準に満たないアップグレード・アイテムがコンポーネントにあります。OracleAS Upgrade Assistant はコンポーネントをアップグレードできません。

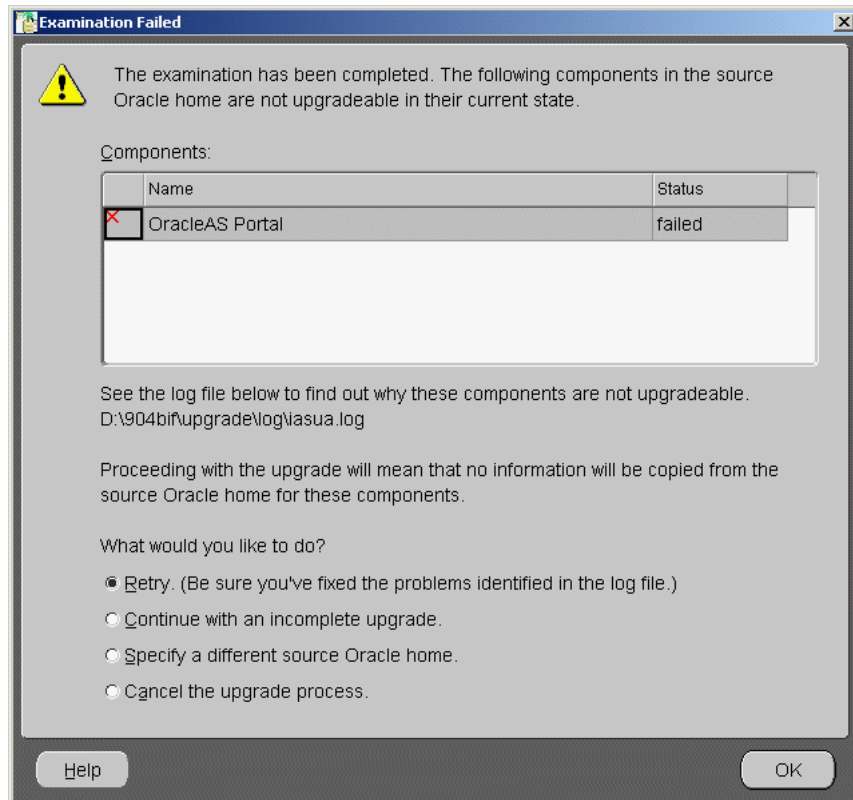
図 3-4 OracleAS Upgrade Assistant の「コンポーネントの調査」ダイアログ・ボックス



1 つ以上のコンポーネントが失敗した場合、図 3-5 に示す調査の失敗を警告するダイアログ・ボックスが表示されます。手順 6 に進みます。

すべてのコンポーネントが成功した場合、図 3-6 に示す「サマリー」画面が表示されます。手順 7 に進みます。

図 3-5 OracleAS Upgrade Assistant の調査の失敗を警告するダイアログ・ボックス



6. 次のいずれかを行います。

- 3-21 ページの 3.6 項「エラーの解決」の指示に従って、調査が失敗した原因をすべて解決します。その後「再試行」オプションを選択して、「OK」をクリックします。
- 「不完全なアップグレードのまま継続」オプションを選択して、「OK」をクリックします。
- 「別のソース Oracle ホームを指定してください」オプションを選択して「OK」をクリックし、手順 3 に戻ります。
- 「アップグレード処理を取り消してください」オプションを選択して、「OK」をクリックします。OracleAS Upgrade Assistant が停止します。

不完全なアップグレードのまま継続した場合、図 3-6 に示す「サマリー」画面が表示されます。

7. スクロールしてコンポーネントを表示し、プラス記号 (+) をクリックするとコンポーネントのアップグレード・アイテムが展開されます。コンポーネントを確認し、「終了」をクリックします。

注意：「サマリー」画面は、アップグレード処理を開始する前の最後の画面です。「終了」をクリックする前に、前の画面で選択した内容が正しいこと、およびリストされているアップグレード・アイテムのアップグレードの準備ができていないことを確認してください。詳細は、3-3 ページの [3.1 項「アップグレードの準備：すべてのコンポーネントに共通の要件」](#) を参照してください。

図 3-6 OracleAS Upgrade Assistant の「サマリー」画面

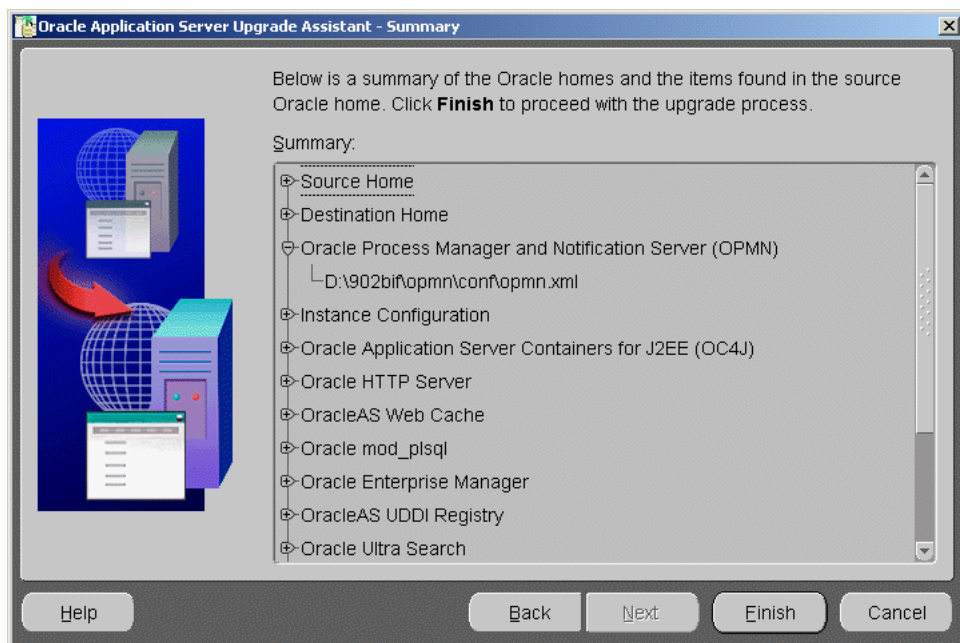
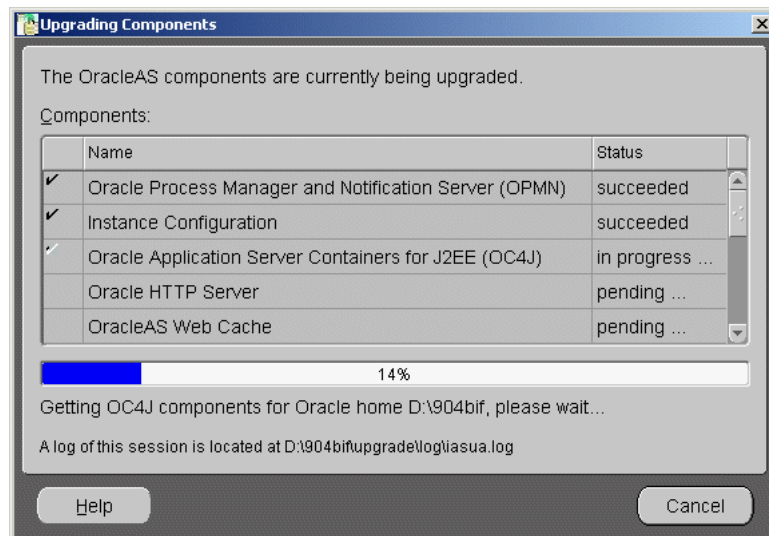


図 3-7 に示すアップグレード中の画面が表示されます。各コンポーネントの「ステータス」列に、次のいずれかが示されます。

表 3-3 OracleAS Upgrade Assistant のアップグレード・ステータス

ステータス	意味
進行中	OracleAS Upgrade Assistant がコンポーネントのアップグレード・アイテムをアップグレードしています。
保留中	OracleAS Upgrade Assistant が現在のコンポーネントのアップグレードを終了したらアップグレードされます。
成功	コンポーネントが正常にアップグレードされました。
失敗	OracleAS Upgrade Assistant はコンポーネントをアップグレードできませんでした。

図 3-7 OracleAS Upgrade Assistant のアップグレード中の画面



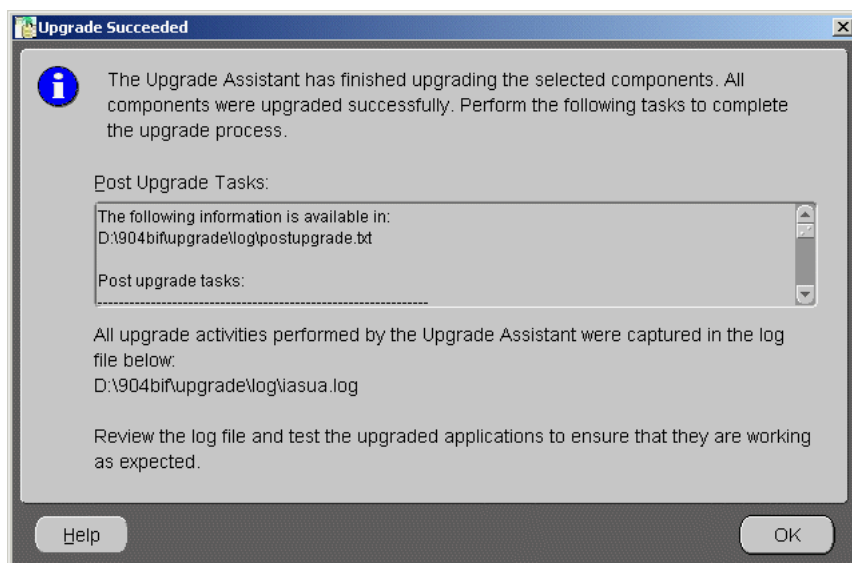
アップグレードが完了すると、「アップグレードに失敗しました」または「アップグレードに成功しました」画面（図 3-8）が表示されます。

8. 次のいずれかを行います。
 - 「OK」をクリックして「アップグレードに失敗しました」画面を閉じ、コンポーネントがアップグレードされなかった原因を解決します。OracleAS Upgrade Assistant を再起動します。

関連項目： エラーを解決する方法および OracleAS Upgrade Assistant を再起動する方法については、3-21 ページの 3.6 項「エラーの解決」および 3-28 ページの 3.7 項「OracleAS Upgrade Assistant の再起動」を参照してください。

- 「OK」をクリックして「アップグレードに成功しました」画面を閉じます。

図 3-8 OracleAS Upgrade Assistant の「アップグレードに成功しました」画面



「アップグレードに成功しました」画面に、アップグレード・ログ・ファイルの場所、および各種のコンポーネントで実行する必要があるアップグレード後のタスクが一覧で示されます。

3.5.4 OracleAS Upgrade Assistant によるアップグレードの実行（コマンドライン・バージョン）

この項では、アップグレードを実行するための OracleAS Upgrade Assistant コマンドライン・バージョンの起動および使用方法を説明します。

注意： OracleAS Upgrade Assistant によるコンポーネントの調査は、コマンドライン・バージョンと GUI バージョンで異なります。

コマンドライン・バージョンでコンポーネントの調査が失敗した場合、アップグレードは実行されません。

GUI バージョンでコンポーネントの調査が失敗した場合、再試行、不完全なアップグレードのまま継続、別の Oracle ホームの指定、アップグレードの取消しのいずれかを選択できます。

1. 次のコマンドで OracleAS Upgrade Assistant を起動します。

```
<destination_MT_OH>%upgrade%iasua.bat -sourcehome  
<source_MT_OH>
```

注意： OracleAS Upgrade Assistant のコマンドライン・バージョンを起動するには、引数 `-sourcehome` が必要です（この引数を付けずに `iasua.bat` を実行すると、GUI バージョンが起動されます）。コマンドライン・バージョンを起動する際に、次のオプションの引数も使用できます。

`-verbose`（アップグレード中に詳細情報を画面に出力します。）

`-noprompt`（アップグレード中のプロンプトおよびユーザー確認をオフにします。デフォルトでは、プロンプトおよびユーザー確認はオンです。）

アップグレード前のすべての要件を示すプロンプトが表示され、要件が満たされていることを確認するように要求されます。

Validating Oracle homes

Validating component plug-ins

Initializing component plug-ins

Pre-upgrade requirements:

The destination Oracle home has not been modified since it was installed

The source and destination OracleAS instances are not running

The source and destination Oracle Enterprise Manager processes are not running

Verify that each of the pre-upgrade requirements above have been met.

Have the pre-upgrade requirements been met? [No] Yes

2. リストされているすべての要件が満たされていることを確認します。次に、プロンプトで「はい」と答えるために [Y] キーを押して続行します。

次のようなメッセージが表示されます（メッセージは、Oracle ホームにあるコンポーネントによって異なります）。

Examining component "Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) "

Examining component "Instance Configuration"

Examining component "Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) "

Examining component "Oracle HTTP Server"

Examining component "OracleAS Web Cache"

Examining component "Oracle mod_plsql"

Examining component "Oracle Enterprise Manager"

Upgrading component "Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) "

Upgrading component "Instance Configuration"

Upgrading component "Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) "

Upgrading component "Oracle HTTP Server"

Upgrading component "OracleAS Web Cache"

Upgrading component "Oracle mod_plsql"

Upgrading component "Oracle Enterprise Manager"

The command completed successfully

3. 手順 2 の後にエラー・メッセージが表示されたら、3-21 ページの [3.6 項「エラーの解決」](#) の説明に従ってエラーを修正します。その後、Upgrade Assistant を再起動してアップグレード処理を再び実行します。

3.6 エラーの解決

アップグレード処理のいずれかの段階でエラーが発生した場合、その原因を解決してからアップグレードを再試行する必要があります。

3.6.1 一般的エラーの解決

特定の条件のもとでは、OracleAS Upgrade Assistant はアップグレードを実行できません。たとえば、複数のプロセスが複数の Oracle ホームで実行されている場合、Infrastructure サービスが使用不可の場合、大規模な OC4J アプリケーションのアップグレードに対してメモリーが不十分な場合にはアップグレードを実行できません。

この項では、それぞれの条件とその原因を明らかにし、解決方法を説明します。

3.6.1.1 ソース Oracle ホームが OracleAS Upgrade Assistant で示されない

OracleAS Upgrade Assistant の実行時に「Oracle ホーム」画面のドロップダウン・リストに表示されるべきソース Oracle ホームが表示されない場合の条件として、インストール・タイプが誤っている、複数の Oracle ホームが異なるコンピュータにある、Oracle ホームが Oracle 製品のインベントリで識別されないのいずれかが考えられます。それぞれの解決方法は、次のとおりです。

誤ったインストール・タイプ

ソース中間層インスタンスがアップグレード先中間層インスタンスのインストール・タイプと異なる場合、ソース Oracle ホームは表示されません。この場合、次のいずれかを実行します。

- 1-8 ページの「[中間層インストール・タイプの拡張](#)」の説明に従って、インストール・タイプを拡張します。
- アップグレード先中間層をソース中間層と同じインストール・タイプで再インストールします。

異なるコンピュータの複数の Oracle ホーム

ソース中間層インスタンスがアップグレード先中間層インスタンスと異なるコンピュータにインストールされている場合も、ソース中間層が選択肢として表示されません。この場合、アップグレード先中間層インスタンスを、アップグレードされるソース・インスタンスと同じコンピュータにインストールする必要があります。

3.6.1.2 OPMN、OC4J または Oracle HTTP Server のアップグレード時にアップグレードが失敗する

OPMN、OC4J または Oracle HTTP Server のアップグレード時にアップグレードが失敗する場合、原因としてソースおよびインストール先の両方のインスタンス、またはいずれかのインスタンスで OPMN がまだ実行されていることが考えられます。OracleAS Upgrade

Assistant を起動する前に、OPMN を停止する必要があります。3-4 ページの [3.1.2 項「Oracle Application Server インスタンスの停止」](#) の指示に従います。

3.6.1.3 OC4J 調査フェーズまたはその他のフェーズでアップグレードが失敗する

OC4J 調査フェーズまたはその他のフェーズでアップグレードが失敗する場合、原因として Infrastructure が使用不可であることが考えられます。OracleAS Upgrade Assistant は特定の操作で Infrastructure サービスを必要とするので、OracleAS Upgrade Assistant を起動する前に Infrastructure を起動する必要があります。3-11 ページの [3.5.2 項「Infrastructure の起動」](#) の指示に従います。

3.6.1.4 大規模な OC4J のアップグレード時にアップグレードが失敗する

多数の OC4J アプリケーションまたは大規模な OC4J アプリケーションのアップグレード時にアップグレードが失敗する場合、メモリー不足の可能性があります。このような場合のアップグレード操作には、メモリーを増やします。3-6 ページの [3.2.2 項「オプション: 大規模な OC4J のアップグレードに備える JVM メモリーの増加」](#) の指示に従います。

3.6.2 ログ・ファイルの調査

<destination_MT_OH>%upgrade%log%iasua.log ファイルおよび表 3-4 [「OracleAS Upgrade Assistant のエラー・メッセージ」](#) を調べると、調査およびアップグレードの失敗の原因を特定できます。

注意： OracleAS Upgrade Assistant ロギング機能は、デフォルトでエントリを追加するので、ファイルの最後の箇所のメッセージを探します。

<destination_MT_OH>%upgrade%iasua.properties で log.append=FALSE と設定すると、エントリは追加されずに上書きされます。

3.6.2.1 調査失敗のリカバリ

調査失敗の原因を特定する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Upgrade Assistant ダイアログまたはコマンドライン出力に表示された失敗したコンポーネントの名前をメモします。
2. <destination_MT_OH>%upgrade%log%iasua.log を開きます。
3. メッセージ Starting to examine component_name を探します。
4. メッセージ Starting... とメッセージ Finished examining component_name with status: Failure の間のメッセージ調べます。

3.6.2.2 アップグレード失敗のリカバリ

アップグレード失敗の原因を特定する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Upgrade Assistant ダイアログまたはコマンドライン出力に表示された失敗したコンポーネントの名前をメモします。
2. `<destination_MT_OH>%upgrade%log%iasua.log` を開きます。
3. メッセージ `Starting to upgrade component_name` を探します。
4. メッセージ `Starting...` とメッセージ `Finished upgrading component_name with status: Failure` の間のメッセージを調べます。

表 3-4 OracleAS Upgrade Assistant のエラー・メッセージ

コンポーネント	メッセージ	考えられる原因および解決方法
すべて	Unable to upgrade file <i>filename</i> .	ファイルがソース Oracle ホームにないか、ファイルをコピーするための十分な権限がありません。ソース Oracle ホームおよびアップグレード先 Oracle ホームのファイルに対する権限を調べ、必要に応じて調整します。
Instance Configuration	INVALID_XML_CONFIG_FILE	iasschema.xml ファイルが破損しています。破損していないファイルを用意します。
Instance Configuration	IOException	ソースまたはアップグレード先の Oracle ホームで、iasschema.xml ファイルにアクセスできません。両方の場所でこのファイルにアクセスできるようにします。
Oracle Application Server Containers for J2EE	J2eeDeploymentException	アプリケーション EAR ファイルが、100% J2EE 準拠ではありません。 validateEarFile ユーティリティを使用して非準拠の特性を識別し、修正します。このユーティリティの使用方法は、3-26 ページの 3.6.3.2.1 項「J2EE 準拠に対する EAR ファイルの検証」 を参照してください。
Oracle Application Server Forms Services	Save files operation failed.	コピー操作に失敗しました。一部のファイルが、 <code><source_MT_OH></code> (registry.dat および ftrace.cfg) からそのままコピーされています。そのファイルがすべて存在し、権限およびディスク領域がコピー操作に対して十分であることを確認します。
Oracle Application Server Forms Services	Invalid section in the <code><formsweb.cfg></code> <code><default.env></code> file.	<code><source_MT_OH></code> の指定されたファイルに無効なエントリがあります。そのファイルを調べ、エラーを検出して修正します。

表 3-4 OracleAS Upgrade Assistant のエラー・メッセージ（続き）

コンポーネント	メッセージ	考えられる原因および解決方法
Oracle Application Server Forms Services	Invalid or missing configuration file.	<source_MT_OH> に無効な構成ファイルがあります。そのファイルを調べ、エラーを検出して修正します。
Oracle Application Server Forms Services	Invalid or missing Forms configuration file <file name>.	Upgrade Assistant が、formsweb.cfg ファイルに指定されている構成ファイル（*htm および *env ファイル）、または oc4j_bi_forms.properties に指定されているユーザー定義の FormsServlet 構成ファイルを検出できません。エントリに指定されているファイルが有効であり、指定された場所に存在することを確認します。
Oracle Application Server Forms Services	Forms is not configured in the Source Oracle Home <version number>, Forms upgrade cannot proceed.	Forms Services がソースの Oracle Application Server 中間層インストールに構成されていない場合、Upgrade Assistant は Oracle Application Server Forms Services をアップグレードしません。Oracle Application Server Forms Services がソース Oracle ホームに構成されていなければアップグレードは必要ないので、このメッセージは無視します。
Oracle Application Server Forms Services	Forms is not configured in the Destination Oracle Home <version number>, Forms upgrade cannot proceed.	Forms Services がアップグレード先中間層インストールに構成されていない場合、Upgrade Assistant は Oracle Application Server Forms Services をアップグレードしません。アップグレード先 Oracle ホームで Oracle Application Server Forms Services を構成します。
Oracle HTTP Server (mod_plsql)	java.io.FileNotFoundException... Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf または java.io.FileNotFoundException... Apache¥modplsql¥conf¥cache.conf	ファイルが見つかりません。指定された場所にファイルを用意します。

表 3-4 OracleAS Upgrade Assistant のエラー・メッセージ（続き）

コンポーネント	メッセージ	考えられる原因および解決方法
Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ	<p>iAS/Upgrade/UddiPlugin Destination configuration file is not found at:</p> <p><i>path</i></p> <p>Look for backup at</p> <p><i>path</i></p> <p>Unable to upgrade file</p> <p>または</p> <p>iAS/Upgrade/UddiPlugin Destination configuration file is not found at:</p> <p><i>path</i></p> <p>and its backup is not found at</p> <p><i>path</i></p> <p>Upgrading cannot proceed</p>	<p>10g (9.0.4) の Oracle ホームに uddiserver.config ファイルまたは uddiserver.config.backup ファイルがありません。</p> <p>同梱の 10g (9.0.4) uddiserver.config のコピーを <destination_MT_OH>¥ds¥uddi¥ config¥に配置します。</p>
Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ	<p>iAS/Upgrade/UddiPlugin Missing URL prefix definition for UDDI.</p>	<p>uddiserver.config ファイルに、プロパティ oracle.uddi.server.db.urlPrefix の定義が含まれていません。</p> <p><destination_MT_OH>¥ds¥uddi¥config¥uddiserver.config ファイルの uddiserver.db.urlPrefix 値を定義します。</p>
Oracle Application Server Wireless	<p>Could not copy file.</p> <p>または</p> <p>Could not create directory.</p>	<p>ディスクが一杯であるか、ファイルをコピーするための十分な権限がありません。使用可能なディスク領域、およびディレクトリ <destination_MT_OH>¥wireless¥server¥classes に対するアクセス権を調べ、必要に応じて調整します。</p>

3.6.3 Oracle Application Server Containers for J2EE のアップグレードおよびデプロイの失敗の原因

この項では、Oracle Application Server Containers for J2EE のアップグレードの失敗の原因について説明します。

3.6.3.1 構成変更の要件

アップグレード後に構成が正しく実行されない場合、OC4J アプリケーション・ファイルに対する構成変更が Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control 以外の方法で行われた可能性があります。OracleAS Upgrade Assistant によって実行される OC4J アップグレードでは、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control によって行われた変更のみがアップグレードされます。手動で編集したファイルは管理対象の構成の範囲外になる場合があります、その編集内容がアップグレードで保持されない可能性があります。

Distributed Configuration Management の `dcmctl` ユーティリティを使用して構成変更を行う場合、そのコマンドの正しい使用方法についての指示および詳細な説明は『Distributed Configuration Management リファレンス・ガイド』を参照してください。

3.6.3.2 アプリケーションのデプロイおよび J2EE 準拠の要件

OC4J のデプロイでは J2EE 準拠ルールが規定されているため、J2EE に完全に準拠していないアプリケーションは OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされない場合があります。OracleAS Upgrade Assistant は、単にソース Oracle ホームのファイルを読み取ってアップグレード先 Oracle ホームにデプロイするだけであるため、デプロイが失敗した場合、アプリケーションが J2EE 準拠でない可能性があります。OracleAS Upgrade Assistant は、なんらかの原因でアプリケーションをデプロイできないと、

`<destination_MT_OH>%upgrade%log%iasua.log` に例外を記録します。明示的に J2EE 準拠の問題として示されない例外も、J2EE 準拠の問題が失敗の原因である場合があります。J2EE および EJB の仕様やアプリケーションに使用されている EJB 機能に関する知識は、デプロイの失敗の防止およびトラブルシューティングに役立ちます (10g (9.0.4) はリリース 2 (9.0.2) より後のバージョンの EJB 仕様をサポートします)。

J2EE アプリケーションの開発は標準化され移植可能ですが、XML 構成ファイルは異なります。OC4J アプリケーションをデプロイするには、複数の XML ファイルを構成する必要があります。たとえば、アプリケーションがデータベースを使用する場合は、`data-sources.xml` ファイルの `DataSource` オブジェクトを構成します。

3.6.3.2.1 J2EE 準拠に対する EAR ファイルの検証 `dcmctl` ユーティリティは、J2EE 準拠を検証するコマンドを提供します。1 つの入力 (EAR ファイルの名前) を受け取って、そのファイルの準拠していない特性をリストします。構文は次のとおりです。

```
<destination_MT_OH>%dcm%bin%dcmctl validateEarFile -f <full path and filename for ear file>
```

EAR ファイルのフルパスを指定する必要があります。

プロキシ・サーバーを使用してインターネットに接続する場合、検証ルーチンがたとえば Sun 社のサイトの DTD にアクセスできるようにプロキシ設定を構成します。これを行うには、プロキシのホスト名およびポートを指定する環境変数 ORACLE_DCM_JVM_ARGS を定義します。

1. 「システム変数」ダイアログ・ボックスに移動します。
2. 「変数名」に ORACLE_DCM_JVM_ARGS と入力します。
3. 「変数値」に -Dhttp.Proxyhost=www-proxy.hostname.com
-Dhttp.Proxyport=9999 と入力します。

hostname はホスト名で、9999 はポート番号です。

または、次のコマンドを発行して、変数を設定することもできます。

```
set ORACLE_DCM_JVM_ARGS=-Dhttp.Proxyhost=www-proxy.hostname.com
-Dhttp.Proxyport=9999
```

外部ネットワークへの接続にファイアウォールがない場合、このコマンドに -noproxy フラグを使用します。たとえば、次に示すとおりです。

```
<destination_MT_OH>%dcm%bin%dcmctl validateEarFile -f <full path and
filename for ear file> -noproxy
```

例 3-2 validateEarFile コマンドと J2EE 準拠アプリケーションの出力

```
dcmctl validateEarFile -v -f simple.ear
No J2EE XML/DTD validation errors were found
```

例 3-3 validateEarFile コマンドと J2EE 非準拠アプリケーションの出力

```
dcmctl validateEarFile -v -f petstore.ear
Warning: J2EE/DTD validation errors were found
ADMN-906001 {0} Base Exception:
oracle.ias.sysmgmt.deployment.j2ee.exception.J2eeDeploymentException:Cannot get xml
document by parsing /var/tmp/jar50152.tmp: Invalid element 'servlet' in content of
'web-app', expected elements '[servlet-mapping, session-config, mime-mapping,
welcome-file-list, error-page, taglib, resource-ref, security-constraint,
login-config, security-role, env-entry, ejb-ref]'.
```

アプリケーションはデプロイ可能でも、サーバーが予測不能または望ましくない動作になる可能性があるため、アップグレード前にすべてのアプリケーションが J2EE に全面的に準拠しているかどうかを確認することをお勧めします。たとえば、各アプリケーションで application.xml に一意のコンテキスト・ルートが定義されていることを確認します。

3.7 OracleAS Upgrade Assistant の再起動

Oracle ホームの処理の一部または全体を終了した OracleAS Upgrade Assistant は再起動できます。手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Upgrade Assistant の GUI バージョンを 3-11 ページの [3.5.3 項](#)の説明に従って起動するか、コマンドライン・バージョンを 3-18 ページの [3.5.4 項](#)の説明に従って起動します。

前のアップグレードの結果によって、OracleAS Upgrade Assistant が次のメッセージを表示します。

前のアップグレードが失敗だった場合のメッセージは、次のとおりです。

```
The OracleAS Upgrade Assistant has already processed this
destination Oracle home directory, it didn't complete
successfully.
```

前のアップグレードが成功だった場合のメッセージは、次のとおりです。

```
The OracleAS Upgrade Assistant has already successfully processed
this destination Oracle home directory.
```

2. ダイアログを閉じてアップグレードを続行します。

3.8 アップグレードの完了

この項では、OracleAS Upgrade Assistant による処理の終了後に、新たにアップグレードした 10g (9.0.4) インスタンスが機能するようにするために必要な手動タスクの実行方法について説明します。

この項では、次の項目について説明します。

3-29 ページの [3.8.1 項](#)「[Oracle HTTP Server のアップグレードの完了](#)」

3-30 ページの [3.8.2 項](#)「[Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\) のアップグレードの完了](#)」

3-39 ページの [3.8.3 項](#)「[OracleAS Web Cache クラスタのアップグレード](#)」

3-41 ページの [3.8.4 項](#)「[OracleAS Portal 中間層のアップグレードの完了](#)」

3-52 ページの [3.8.5 項](#)「[Oracle Application Server Discoverer Viewer のアップグレードの完了](#)」

3-54 ページの [3.8.6 項](#)「[Oracle Application Server Reports Services のアップグレードの完了](#)」

3-55 ページの [3.8.7 項](#)「[Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了](#)」

3-59 ページの [3.8.8 項](#)「[Oracle Application Server Forms Services のアップグレードの完了](#)」

3.8.1 Oracle HTTP Server のアップグレードの完了

この項では、Oracle HTTP Server のアップグレード後のタスクについて説明します。

3.8.1.1 SSL 構成のアップグレード

httpd.conf または httpd.conf に含まれるその他の構成ファイルでは、Listen または <VirtualHost> ディレクティブが <IfModule mod_ssl.c> コンテナの内部で定義されている場合、<IfModule mod_ssl.c> を <IfDefine SSL> で置き換えます。これらを変更しないと、Oracle Enterprise Manager Application Server Control のユーザー・インターフェースを使用して、Listen および <VirtualHost> ディレクティブを管理することはできません。

3.8.1.2 実行する必要がある手動アップグレード・タスク

OracleAS Upgrade Assistant は、Oracle HTTP Server の標準設定をアップグレードします。構成ファイルまたはドキュメントが、標準以外の場所にある場合、または標準以外の方法で参照される場合は、それを手動でアップグレードする必要があります。そのような場合、あるいは手動のアップグレードが必要となる他の場合について説明します。

- **mod_osso が構成されていた場合** : mod_osso が構成されていた場合、アップグレード後も osso.conf ファイルは Single Sign-On Server でリリース 2 (9.0.2) パートナ・エントリを使用します。Single Sign-On Server で 10g (9.0.4) パートナ・エントリが使用されていないので、アプリケーションがログアウトするとリンクが壊れて無効な URL になります。10g (9.0.4) パートナ・エントリは削除する必要があります。また、使用するエントリの名前がソース Oracle ホームを表すようになっているために適切でない場合は、名前を変更できます。
- **構成ファイルがデフォルト以外の場所にある場合** : httpd.conf、mod_oc4j.conf、mod_osso.conf および moddav.conf の各ファイルがデフォルトの場所でない場合、ソース Oracle ホームにあるファイルのカスタマイズ内容をアップグレード先 Oracle ホームのファイルに適用することによって、手動でこれらのファイルをアップグレードします。
- **Oracle HTTP Server 構成ファイルによって参照されるカスタム・ファイルおよびディレクトリがある場合** : OracleAS Upgrade Assistant がアップグレードするのは A-7 ページの [A.1.4.1 項「OHS のアップグレード・アイテム」](#) に示すアイテムのみなので、アップグレード後に存在しなくなる、Alias、mod_rewrite などのディレクティブや ErrorLog などのログ・ディレクティブによって参照されるファイルまたはディレクティブが存在している可能性があります。これらのアイテムをすべて手動でアップグレードして、ディレクティブが参照する所定の場所に存在するようにします。アップグレード後にこれらのファイルまたはディレクトリが見つからないと、Oracle HTTP Server は起動しません。エラーを特定するには、アップグレード後に Oracle HTTP Server を個別に起動し、<destination_MT_OH>¥Apache¥Apache¥logs¥error_log を調べてこれらのアイテムに関連するエラーを探します。

- **httpd.conf および mod_oc4j.conf の各ファイルに Dynamic Monitoring Service (DMS) 構成要素がある場合** : この構成要素は、dms.conf ファイルに再配置する必要があります。
- **Oracle Application Server Web Cache が最初のリスナーである場合** : OracleAS Web Cache が最初のリスナーとして構成されている場合、表 3-5 にリストされている Oracle HTTP Server ディレクティブの値が、対応する OracleAS Web Cache の要素の値と同じである必要があります。特に、Oracle HTTP Server の Port ディレクティブは、フロントエンドのロード・バランサまたはリバース・プロキシのポート番号を指定します。したがって、Oracle Application Server Web Cache を使用する場合、Oracle HTTP Server の Port ディレクティブは、OracleAS Web Cache がリスニングするポートの値になります。

表 3-5 Oracle HTTP Server と Oracle Application Server Web Cache の Port 設定

Oracle HTTP Server のディレクティブ	Oracle Application Server Web Cache の要素
VirtualHost	サイト定義
Listen	オリジナル・サーバー・ポート
VirtualHost、Listen	サイトからサーバーへのマッピング
Port	Listen

- **デフォルトの DocumentRoot ディレクトリの静的ドキュメントをアップグレードする場合** : OracleAS Upgrade Assistant は、DocumentRoot ディレクティブに指定される場所で、アップグレードする静的ドキュメント・ファイルおよびディレクトリを検出します。DocumentRoot ディレクティブは、静的ドキュメントおよび関連ディレクトリの場所を定義します。ベース・サーバーにはドキュメント・ルートの場所があり、各仮想ホストにもあります。OracleAS Upgrade Assistant は、これらのディレクトリ下のファイルをアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。デフォルトの DocumentRoot ディレクトリ `<source_MT_OH>%Apache%Apache%htdocs` に含まれているのは、インストーラによって配置されたデモ・プログラムおよびリリース・ノートであるため、OracleAS Upgrade Assistant はこのディレクトリをアップグレードしません。このディレクトリは、手動でアップグレードする必要があります。

3.8.2 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレードの完了

OracleAS Upgrade Assistant は、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレード・タスクの多くを実行します。ただし、OC4J の一部のコンポーネントでは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) を使用する前に、手動による調整が必要となる場合、または特性を認識しておく必要がある場合があります。

この項では、OC4J の一部のサブコンポーネントについてのアップグレードの考慮事項を説明します。Oracle JMS、Oracle JDBC、XML Parser for JAXP/XDK または Oracle JSP ページを使用する場合は、この項で説明する一部またはすべての項目を参照すると役立ちます。

3.8.2.1 Oracle Application Server Authentication and Authorization サービス (JAZN) セキュリティ設定のアップグレード

アップグレード時に、OC4J Upgrade Assistant によってアプリケーションが再デプロイされます。このため、アプリケーションの EAR ファイルにパッケージされている jazn-data.xml および jazn.xml ファイルへの変更は、自動的に移行されます。ただし、次の場合は手動の手順が必要ですが、これらは一般的ではありません。

- orion-application.xml では、アプリケーションで jazn-data.xml の場所を次のように指定できます。

```
<jazn provider="XML" location="/902oh/j2ee/jazn-data.xml">
```

jazn-data.xml がアプリケーションの EAR ファイルにパッケージされていない場合は、新しいインストール環境に手動でコピーする必要があります。これに応じて、ファイルの場所を更新する必要があります。

- orion-application.xml では、アプリケーションで次の構文を使用して jazn.xml を指定できます。

```
<jazn config="/foo/jazn.xml" />
```

jazn.xml がアプリケーションの EAR ファイルにパッケージされていない場合は、新しいインストール環境に手動でコピーする必要があります。これに応じて、ファイルの場所を更新する必要があります。

3.8.2.2 JAZN ライブラリ・パス・エントリのアップグレード

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、jazn.jar ファイルは jazn.jar と jazncore.jar の 2 つの JAR ファイルに分割されます。そのため、JAZN を使用し、動的コンパイル (JSP など) を必要とする OC4J アプリケーションのアップグレード後は、両方の JAR ファイルの名前を application.xml ファイルのライブラリ・パス・エントリに追加する必要があります。

次のように両方のエントリが application.xml ファイルに含まれていることを確認します。

```
<library path="904 J2EE HOME¥jazn.jar"/>
```

```
<library path="904 J2EE HOME¥jazncore.jar"/>
```

この場合、次のようになります。

```
<904 J2EE HOME> = <destination_MT_OH>¥j2ee¥home
```

3.8.2.3 インストーラによって作成された OC4J インスタンスのアップグレード

[opmn.xml](#) ファイルの OC4J インスタンスに対して行ったカスタマイズは、手動でアップグレードする必要があります。これには、インストーラによって作成されたインスタンスなどがあります（ホーム、OC4J_WIRELESS、OC4J_DEMOS、OC4J_PORTAL および OC4J_BI_FORMS）。OracleAS Upgrade Assistant は、ユーザーによって作成された OC4J インスタンスに対するカスタマイズをアップグレードします。

3.8.2.4 application.xml のエントリのアップグレード

ライブラリ・パス、Java オプション、OC4J オプションなどの [application.xml](#) ファイルのエントリをカスタマイズした場合、それを手動でアップグレードする必要があります。

3.8.2.5 jms.xml ファイルのアップグレード

[jms.xml](#) ファイルは、以前のリリースから自動的にアップグレードされません。ソース Oracle ホームの [jms.xml](#) ファイルに定義されているすべてのキュー、トピックおよびコネクション・ファクトリは、アップグレード先 Oracle ホームの [jms.xml](#) ファイルに追加する必要があります。

3.8.2.6 下位互換性のための Compatibility Test Suite (CTS) 互換性フラグの使用

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、デフォルトの OC4J は J2EE 1.3 仕様に準拠します。その結果、場合によっては以前の OC4J 実装で見られたのとは異なる動作が発生することがあります。下位互換性のために OC4J は CTS 準拠フラグをサポートしています。false に設定すると、次のコンポーネントにおいて以前の OC4J 動作に戻すことができます。

- Oracle JMS
- Oracle JDBC
- Oracle XML Parser for JAXP/XDK

OC4J の互換性動作は、フラグ `oracle.cts.useCtsFlags`（デフォルト値は true）によって決定されます。特定アプリケーションのアップグレードにおいていずれかの点で問題が発生する場合には、CTS 準拠を無効にして OC4J インスタンスを古い動作に戻すことができます。その場合、OC4J プロパティ・ファイルでフラグの値を false に設定し、プロパティ・ファイルの場所を OC4J に指定します。

たとえば、ファイル `<destination_MT_OH>%j2ee%home%config%oc4j.properties` でフラグを次のように設定します。

```
oracle.cts.useCtsFlags=false
```

次の例に示すように、`<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` ファイルの `<oc4j-option>` 要素によってプロパティ・ファイルの名前および場所を OC4J に指定します。

例 3-4 opmn.xml ファイルの oc4j-option 要素

```
<oc4j>
...
  <oc4j-option value="-p <destination_MT_OH>%j2ee%home%config%oc4j.properties"/>
...
</oc4j>
```

これは、次のようにスタンドアロン・モードで OC4J を起動するのと同じです（% はシステム・プロンプト）。

例 3-5 スタンドアロン・モードでの OC4J の起動

```
% java -jar oc4j.jar -p <destination_MT_OH>%j2ee%home%config%oc4j.properties
```

3.8.2.6.1 CTS 互換性と OJMS J2EE 1.3 に準拠する Oracle JMS (OJMS) の Oracle Application Server 10g (9.0.4) 実装では、一部の動作が Oracle9iAS リリース 1.0.2.2 の OJMS 動作と異なります。(Oracle9iAS リリース 9.0.2 および 9.0.3 には、このようなアップグレードの考慮事項はありません。) 相違点は、次のとおりです。

- **JMSExpiration—OJMS 10g (9.0.4) J2EE 1.3 準拠の実装では、デキューされたメッセージの JMSExpiration ヘッダー値は、メッセージがエンキューされたときの JMS タイムスタンプと TTL の合計です。この値は、1970 年 1 月 1 日午前 0 時から現在のグリニッジ標準時までをミリ秒単位で表します。メッセージが期限切れにならない場合の値は 0 です。**

OJMS 1.0.2.2 実装では、デキューされたメッセージの JMSExpiration ヘッダー値は、メッセージの期限切れまでの時間です（ミリ秒単位）。メッセージが期限切れにならない場合の値は -1 です。

- **JMSPriority—OJMS リリース 2 (9.0.4) 1.3 準拠の実装では、優先順位は 9 が最高、0 が最低、4 がデフォルトです。**

OJMS 1.0.2.2 の実装では、優先順位は `java.lang.Integer.MIN_VALUE` が最高、`Integer.MAX_VALUE` が最低、1 がデフォルトです。

- **永続サブスクリバ —OJMS 10g (9.0.4) J2EE 1.3 準拠の実装では、同じ名前の永続トピック・サブスクリバはいずれの環境でも許可されません。**

OJMS 1.0.2.2 の実装では、同じ名前の永続トピック・サブスクリバは、異なるトピックにサブスクライブされる場合に許可されます。

- **強い型指定の JMS セレクタ —OJMS 10g (9.0.4) 実装は、JMS 1.02b 仕様および J2EE 1.3 準拠の要件に従って、次の義務制限がある SQL92 構文の特定サブセットのみをセレクタ式構文に使用します。**
 - セレクタ式には強い型指定があり、算術比較の演算子とオペランドは同じ型である必要があります。文字列 "1" と整数 1 の変換のように、比較の目的での自動型変換は禁じられています。

- 文字列およびブール比較は、"="、"<" および ">" に制限されています。2 つの文字列は、完全に同じ順序で文字が並んでいる場合にのみ等価です。
- "!=" 演算子は許可されません。

OJMS 10.0.2.2 実装では、セレクト式構文はこのような制限や SQL92 構文の特定サブセットに従う必要はありません。

3.8.2.6.2 CTS 互換性と JDBC J2EE 1.3 に準拠する Oracle JDBC の Oracle Application Server 10g (9.0.4) 実装では、一部の動作が Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 以下の JDBC 動作と異なります。相違点は、次のとおりです。

- NUMBER 列の Java 型 —10g (9.0.4) では、結果セット (java.sql.ResultSet インスタンス) の getObject() メソッドは、NUMBER 列に対して正確な java.lang.Double 値を返します。または、NUMBER 列に対して不正確な java.math.BigDecimal 値を返します。

リリース 2 (9.0.2) 以下では、getObject() は NUMBER 列に対して BigDecimal 値を返します。

- NUMBER 列のメタデータ —10g (9.0.4) では、結果セット・メタデータ・オブジェクト (java.sql.ResultSetMetaData インスタンス) の getColumnTypeName() メソッドは、NUMBER 列に対して正確な "FLOAT" を返します。または、NUMBER 列に対して不正確な "NUMBER" を返します。getColumnType() メソッドは、NUMBER 列に対して正確な java.sql.Types.FLOAT を返します。または、NUMBER 列に対して不正確な Types.NUMBER を返します。

リリース 2 (9.0.2) 以下では、getColumnTypeName() は NUMBER 列に対して "NUMBER" を返し、getColumnType() は NUMBER 列に対して Types.NUMBER を返します。

- DATE および TIMESTAMP 列の Java 型 —10g (9.0.4) では、結果セットの getObject() メソッドは、DATE 列に対して java.sql.Date 値を返し、TIMESTAMP 列に対して java.sql.Timestamp 値を返します。

リリース 2 (9.0.2) 以下では、getObject() は DATE 列に対して java.sql.Timestamp 値を返します。(TIMESTAMP 列はサポートされていませんでした。)

- 不適正な SQL 文の例外 —10g (9.0.4) では、SQL 文オブジェクトの executeQuery() コールに SELECT 文以外 (INSERT、UPDATE 文など) が含まれる場合、JDBC ドライバが例外をスローするのが正常な動作です。同様に、executeUpdate() コールに SELECT 文が含まれる場合、ドライバは例外をスローします。(UPDATE、INSERT または DELETE 文が必要です。)

リリース 2 (9.0.2) 以下では、このような場合は例外になりません。

3.8.2.6.3 CTS 互換性と XML Parser for JAXP/XDK J2EE 1.3 に準拠する XML Parser for JAXP/XDK の Oracle Application Server 10g (9.0.4) 実装では、一部の動作が Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 以下の XML パーサーの動作と異なります。相違点は、次のとおりです。

- `getNamespaceURI()` の NULL 戻り値 —10g (9.0.4) では、要素または属性にネームスペースが定義されていない場合、`getNamespaceURI()` メソッドは 'null' を返します。
リリース 2 (9.0.2) 以下では、このような場合、`getNamespaceURI()` メソッドは '' を返します。
- `getLocalName()` の NULL 戻り値 —10g (9.0.4) では、要素または属性が `createElement()` または `createAttribute()` への DOM レベル 1 API コールを使用して作成された場合、`getLocalName()` メソッドは 'null' を返します。
リリース 2 (9.0.2) 以下では、このような場合、`getLocalName()` メソッドは '"Transfer interrupted"' を返します。
- `getPrefix()` の NULL 戻り値 —10g (9.0.4) では、要素または属性が `createElement()` または `createAttribute()` への DOM レベル 1 API コールを使用して作成された場合、`getPrefix()` メソッドは 'null' を返します。
リリース 2 (9.0.2) 以下では、このような場合、`getPrefix()` メソッドは '' を返します。

注意： `getNamespaceURI()`、`getLocalName()` および `getPrefix()` メソッドは前述のように変更され、`oracle.xml.parser.v2` パッケージの `XMLElement` および `XMLAttr` クラスに存在します。

- SAX 例外 —10g (9.0.4) では、登録済みのエラー・ハンドラがエラー条件で `SAXException` または `SAXParseException` をスローします。
リリース 2 (9.0.2) 以下では、エラー・ハンドラはエラー条件で `XMLParseException` をスローします。
- I/O 例外 —10g (9.0.4) では、I/O エラー条件の場合のように `IOException` がスローされます。
リリース 2 (9.0.2) 以下では、`IOException` は `XMLParseException` にラップされます。

3.8.2.7 Enterprise JavaBeans に関するアップグレードの考慮事項

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.3) 以上では、Oracle Application Server Containers for J2EE は、完全に J2EE 1.3 仕様に準拠して Enterprise JavaBeans (EJB) 2.0 仕様を実装しています。したがって、リリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4) にアップグレードする場合、コンテナ管理の永続性およびコンテナ管理の関係の領域で EJB 機能を使用するアプリケーションは変更が必要です。

関連項目： これらのアプリケーションの変更方法については、『Oracle Application Server Containers for J2EE Enterprise JavaBeans 開発者ガイド』の付録 C を参照してください。

3.8.2.8 OC4J Java Server Pages (JSP) コンテナに関するアップグレードの考慮事項

この項では、アップグレードによって影響を受ける JSP 設定について説明します。

3.8.2.8.1 追加インポートの有効化 Oracle9iAS リリース 2 (9.0.3) 以上では、OC4J JSP コンテナはデフォルトで、JSP 仕様に従って次にリストするパッケージを JSP ページにインポートします。page ディレクティブの import 設定は必要ありません。

```
javax.servlet.*
javax.servlet.http.*
javax.servlet.jsp.*

java.io.*
java.util.*
java.lang.reflect.*
java.beans.*
```

以前のリリースでは、次のパッケージもデフォルトでインポートされていました。

```
java.io.*
java.util.*
java.lang.reflect.*
java.beans.*
```

3.8.2.8.2 下位互換性のための追加 JSP フラグの設定 Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードして JSP ページを使用する場合は、次の主要な JSP 構成パラメータの適切な設定を使用します。

- check_page_scope
- forgive_dup_dir_attr

これらは、[global-web-application.xml](#) ファイルまたはアプリケーションの [orion-web.xml](#) ファイルで JSP フロントエンド・サーブレットの初期化パラメータとして設定します。次に例を示します。

例 3-6 10g (9.0.4) へのアップグレードのための JSP 構成パラメータ

```
<servlet>
  <servlet-name>jsp</servlet-name>
```

```

<servlet-class>oracle.jsp.runtimev2.JspServlet</servlet-class>
<init-param>
  <param-name>check_page_scope</param-name>
  <param-value>true</param-value>
</init-param>
...
</servlet>

```

JSP 構成パラメータの詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』を参照してください。

`check_page_scope` (ブール型、デフォルトは `false`) : このパラメータは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.3) で導入されました。OC4J 環境の場合、これを `true` に設定して、`JspScopeListener` ユーティリティによる Oracle 固有の `page` スコープ・チェックを有効化します。

このパラメータは、OC4J 以外の環境では関係ありません。JServ の場合、Oracle 固有の `page` スコープ・チェックは常に有効です。他の環境の場合、この Oracle 固有の実装は使用されないの、`JspScopeListener` ページ・スコープ機能の `checkPageScope` カスタム・タグを使用する必要があります。`JspScopeListener` の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JSP タグ・ライブラリおよびユーティリティ・リファレンス』を参照してください。

`forgive_dup_dir_attr` (ブール型、デフォルトは `false`) : このパラメータは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.3) で導入されました。これを `true` に設定して、OC4J などの JSP 1.2 環境において、単一の JSP 変換単位 (JSP ページと JSP ページが `include` ディレクティブによってインクルードしたもの) 内の同じディレクティブ属性に重複設定がある場合に変換エラーを回避します。

JSP 1.2 仕様では、`page` ディレクティブの `import` 属性を例外として、ディレクティブ属性が単一の JSP 変換単位内で複数回設定されていないことを JSP コンテナが確認する必要がありますと規定しています。

JSP 1.1 仕様では、このような制限は指定されていませんでした。OC4J は、下位互換性のために `forgive_dup_dir_attr` パラメータを提供しています。

3.8.2.9 JDK 1.4 の問題 : パッケージにないクラスをコールできない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) に同梱されている Sun 社の JDK 1.4 環境へ移行する場合の考慮事項の中で、サーブレットおよび JSP の開発者にとって特に重要な問題があります。

Sun 社は、「コンパイラは、名前のないネームスペースから型をインポートする `import` 文を拒否するようになりました」と説明しています。(セキュリティ問題および以前のバージョンの JDK での曖昧性に対応することを目的としています。) これは基本的にパッケージ内に存在しないクラス (クラスのメソッド) をコールできないことを意味します。コールしようとする、コンパイル時にすべて致命的エラーになります。

この問題は、特に JSP 開発者が JSP ページから JavaBeans をコールする場合に影響します。このような Bean は通常パッケージ外にあります（ただし、現在 JSP2.0 仕様では新規のコンパイラの要件を満たすために Bean はパッケージ内にある必要があります）。パッケージ外の JavaBeans をコールする場合、OC4J 9.0.3 / JDK 1.3.1 以下の環境で作成されて実行されていた JSP アプリケーションは、OC4J 9.0.4 / JDK 1.4 環境では動作しません。

アプリケーションを更新してすべての JavaBeans およびコールされるその他のクラスがパッケージに存在するようになるまでは、この問題を回避するために JDK 1.3.1 環境に戻すことができます。

注意：

javac -source コンパイラ・オプションは、JDK 1.3.1 コードを JDK 1.4 コンパイラでシームレスに処理するために使用しますが、パッケージにないクラスの問題には対応しません。

OC4J では、JDK 1.3.1 および JDK 1.4 コンパイラのみがサポートおよび動作保証されています。server.xml ファイルに <java-compiler> 要素を追加することによって他のコンパイラを指定できます。これによって、パッケージにないクラスの問題を回避できる可能性はありますが、Oracle では他のコンパイラを OC4J と使用することは保証およびサポートしていません。（また、Oracle9iAS 環境で直接 server.xml ファイルを更新しないでください。Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用してください。）

パッケージにないクラスの問題およびその他の JDK 1.4 互換性の問題の詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4/compatibility.html>

特に、「Incompatibilities Between Java 2 Platform, Standard Edition, v1.4.0 and v1.3」を参照してください。

3.8.2.10 サブレットの API および動作の変更点

Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードしてサブレットを使用する場合、サブレットの API および動作の次の変更点について注意してください。

- getRequestURI() に関する変更
- ターゲットに転送されるサブレットまたはターゲットをインクルードするサブレットのフィルタ処理に関する変更

3.8.2.10.1 getRequestURI() に関する変更 Oracle HTTP Server は、以前の Oracle9iAS リリースでは、リクエストを受け取ると常にその URI をデコードしてから OC4J に渡しました。したがって、getRequestURI()（リクエスト・オブジェクトのメソッド）の応答に基づいて計算を行うサブレットは、一度デコードされた値を暗黙的に受け取っていました。OC4J

9.0.4 実装では、Oracle HTTP Server は OC4J に対して変更されないバージョンの URI を送信するため、その値は `getRequestURI()` の戻り値として OC4J によって使用されます。

Oracle HTTP Server と OC4J の通信に `mod_rewrite` モジュールを `mod_oc4j` とともに使用する場合、`mod_oc4j` に送信される書き換えられた URI は OC4J に送信される URI と同じであり、`getRequestURI()` の戻り値では `mod_rewrite` のルールが適用されます。

`mod_rewrite` および `mod_oc4j` モジュールについては、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』を参照してください。`mod_rewrite` の詳細は、Apache Server のマニュアルにもあります。

3.8.2.10.2 ターゲットに転送されるサーブレットまたはターゲットをインクルードするサーブレットのフィルタ処理 以前の Oracle Application Server リリースでは、フィルタ処理されるサーブレットが別のサーブレットに転送される場合、または別のサーブレットをインクルードする場合、そのターゲット・サーブレットもデフォルトでフィルタ処理されました。Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、この動作はデフォルトではなくなりました。ターゲット・サーブレットをデフォルトでフィルタ処理しないことにより、サーブレットの仕様の方向性に従います。

この動作は、次のように構成可能です。OC4J 9.0.4 実装では、`oracle.j2ee.filter.on.dispatch` 環境フラグ (デフォルトは `false`) に従います。将来の実装では、サーブレット 2.4 仕様に規定されているように `web.xml` 構成に従います。

3.8.3 OracleAS Web Cache クラスタのアップグレード

OracleAS Web Cache クラスタがある場合、キャッシュ・クラスタ・メンバーを一度に 1 つずつアップグレードします。キャッシュは引き続き機能しますが、アップグレードしたメンバーは他のクラスタ・メンバーの構成とリリースが異なるため、別のリリースで動作するキャッシュ・クラスタ・メンバーにリクエストを転送しません。

たとえば、`Cache_A` を現行のリリースにアップグレードし、`Cache_B` および `Cache_C` をアップグレードしていない場合、`Cache_A` はキャッシュ・クラスタ・メンバー `Cache_B` および `Cache_C` にリクエストを転送しません。

この場合、Web Cache Manager の「Operations」ページに「the Operation Needed is Incompatible software version」と表示されます。

注意： キャッシュ・クラスタ・メンバーが同じリリースの OracleAS Web Cache を実行していない場合でも、ドキュメントを無効にしてそれを他のクラスタ・メンバーに伝播できますが、失効リクエストは、OracleAS Web Cache の 9.0.2 や 9.0.3 などの以前のリリースで動作しているキャッシュから発信される必要があります。

キャッシュ・クラスタ・メンバーをアップグレードしたら、クラスタのメンバーの構成を同期化するために次の手順を実行する必要があります。

1. キャッシュが起動されていない場合、アップグレードされたキャッシュごとに、OracleAS Web Cache および OracleAS Web Cache Manager を起動します。コマンドラインで次のように入力します。

```
opmnctl startproc ias-component=WebCache
```

このコマンドにより、OracleAS Web Cache のキャッシュ・サーバー・プロセスおよび管理サーバー・プロセスが開始されます。

2. ブラウザで、アップグレードされたいずれかのキャッシュの OracleAS Web Cache Manager の URL を入力し、プロンプトが表示されたら ias_admin ユーザーまたは管理者ユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。
3. ナビゲータ・フレームで、「Administration」→「Operations」を選択します。
「Operations」ページが表示されます。
4. 「Operations」ページで「Retrieve」をクリックします。
Web Cache が、キャッシュ固有の構成情報をリモート・キャッシュ・クラスタ・メンバーから取得します。その後、Web Cache Manager に「Operation Needed is Propagate Configuration」と表示されます。
5. 構成をすべてのキャッシュ・クラスタ・メンバーに伝播するために、「All caches」を選択し、「Immediate」の「Interval」を選択します。次に、「Propagate」をクリックします。
6. 「All caches」および「Interval」を選択して、キャッシュを再起動します。次に、「Restart」をクリックします。（この操作は、各キャッシュのアップグレードのたび、またはすべてのキャッシュ・クラスタ・メンバーのアップグレード後に実行できます。）

3.8.3.1 Web Cache クラスタのリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) へのアップグレード

リリース 2 (9.0.2.x) のキャッシュは、10g (9.0.4) のキャッシュからの失効メッセージを受け取れません。リリース 2 (9.0.2.x) と 10g (9.0.4) のクラスタ・メンバーの混成の OracleAS Web Cache クラスタを使用する構成では、ロード・バランサによって失効メッセージがリリース 2 (9.0.2.x) メンバーに対してのみ送信されるように構成する必要があります。

キャッシュ・クラスタのリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) へのアップグレードの際には、ロード・バランサの失効プールからクラスタ・メンバーを 1 つずつ削除してアップグレードしていきます。すべてのクラスタ・メンバーをアップグレードしたら、それらを失効プールに戻します。例として、リリース 2 (9.0.2.x) で実行される 4 つのメンバー (webche1-host、webche2-host、webche3-host および webche4-host) からなるキャッシュ・クラスタの前にロード・バランサがある構成の場合を示します。

このキャッシュ・クラスタをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. ロード・バランサの構成で、失効を担当するプールから `webche1-host` を削除します。
2. `webche1-host` をリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) にアップグレードします。
3. ロード・バランサの構成で、失効を担当するプールから `webche2-host` を削除します。
4. `webche2-host` をリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) にアップグレードします。
5. ロード・バランサの構成で、失効を担当するプールから `webche3-host` を削除します。
6. `webche3-host` をリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) にアップグレードします。
7. `webche4-host` をリリース 2 (9.0.2.x) から 10g (9.0.4) にアップグレードします。これはロード・バランサの構成で最後のキャッシュ・メンバーなので、失効プールから削除する必要がありません。
8. ロード・バランサの構成で、`webche1-host`、`webche2-host` および `webche3-host` を失効を担当するプールに戻します。

3.8.4 OracleAS Portal 中間層のアップグレードの完了

この項では、OracleAS Upgrade Assistant による処理の終了後に、Portal のアップグレードの完了に必要な手動による手順の実行方法について説明します。この項では、次の項目について説明します。

3-41 ページの [3.8.4.1 項「OracleAS Portal での Secure Sockets Layer \(SSL\) プロトコルの有効化」](#)

3-42 ページの [3.8.4.2 項「アップグレード後のデータベース・アクセス記述子 \(DAD\) の場所の確認」](#)

3-42 ページの [3.8.4.3 項「Parallel Page Engine のアップグレード」](#)

3-43 ページの [3.8.4.4 項「Portal Development Kit Services for Java \(JPDK\) Web プロバイダのアップグレード」](#)

3-48 ページの [3.8.4.5 項「mod_plsql のアップグレードの完了」](#)

3-49 ページの [3.8.4.6 項「10g \(9.0.4\) の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control によるリリース 2 \(9.0.2\) の Portal リポジトリの監視の有効化」](#)

3.8.4.1 OracleAS Portal での Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルの有効化

OracleAS Portal で SSL を有効化するには、構成ファイルのプロパティの設定、スクリプトの実行などの手動による処理が必要です。Portal アプリケーションで SSL を有効化する手順は、次のとおりです。

1. `<destination_MT_OH>%portal%conf%iasconfig.xml` ファイルを編集します。

2. SSL プロパティを次のように変更します。

```
SSLEnabled="true"
```

3. `<destination_MT_OH>%portal%conf` ディレクトリに移動します。

4. 次のコマンドを実行して、OracleAS Portal を構成します。

```
ptlconfig -dad <DAD name> -site
```

`<DAD name>` は、リリース 2 (9.0.2) の Oracle ホームが使用する Portal リポジトリを指し示すデータベース・アクセス記述子 (DAD) の名前です。通常は、「portal」です。

スクリプトは `iasconfig.xml` ファイルを使用して、OracleAS Portal 内の Oracle Application Server Web Cache、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory の設定を更新します。

3.8.4.2 アップグレード後のデータベース・アクセス記述子 (DAD) の場所の確認

リリース 2 (9.0.2) のインスタンスでは、アップグレード先の場所における DAD と同じ場所の DAD が可能です。この場合、同じインストールの 2 つの DAD が同じ場所であるのは無効であるため、OracleAS Upgrade Assistant はアップグレード先インスタンスの DAD の名前を変更します。たとえば、リリース 2 (9.0.2) に次の場所の DAD があるとします。

```
<Location/pls/portal>
```

10g (9.0.4) インストールに同じ名前があると、10g (9.0.4) の場所は次のように変更されます。

例 3-7 名前を変更された DAD

```
<Location /pls/portal_0>
```

アップグレード後、すべての DAD が目的のリソースに接続されていることを確認します。

3.8.4.3 Parallel Page Engine のアップグレード

ソース Oracle ホームの Portal Parallel Page Engine で初期化引数がカスタマイズされている場合、OracleAS Upgrade Assistant の処理の終了後、それを手動でアップグレードする必要があります。

Parallel Page Engine 初期化引数は、次のファイルで定義されています。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%portal%portal%WEB-INF%web.xml
```

1. ソース Oracle ホームの `web.xml` ファイルで、カスタマイズされているすべての引数 (ファイルに追加された引数および値を変更されたデフォルト引数) の場所を特定します。

2. カスタマイズされている引数を `<source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portal¥portal¥WEB-INF¥web.xml` から `<destination_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portal¥portal¥WEB-INF¥web.xml` にコピーします。

3.8.4.3.1 cacheDir パラメータのリセット web.xml ファイルの cacheDir パラメータによるデフォルト動作は 10g (9.0.4) の場合と異なるので、アップグレード後にこのパラメータを手動でリセットする必要があります。10g (9.0.4) では、cacheDir パラメータ値は絶対パスです。リリース 2 (9.0.2) では、パス値は `<source_MT_OH>¥Apache¥modplsql¥cache` ディレクトリに対する相対パスでした。

- cacheDir をデフォルトの場所 `<source_MT_OH>¥Apache¥modplsql¥cache` に設定していた場合、構成を変更しないかぎり 10g (9.0.4) でもこの場所がデフォルトに設定されるため、cacheDir パラメータ全体を削除できます。
- cacheDir をデフォルト以外の場所に設定していた場合、アップグレード先 Oracle ホームのそのデフォルト以外の場所の絶対パスに手動で設定する必要があります。
- cacheDir をデフォルトの場所に設定していたが相対パスだった場合、そのパラメータを削除してデフォルト (`<destination_MT_OH>¥Apache¥modplsql¥cache`) を有効にするか、その相対パスのかわりに絶対パスを指定する必要があります。

3.8.4.4 Portal Development Kit Services for Java (JPKD) Web プロバイダのアップグレード

ソース Oracle ホームに次の特性のいずれかが当てはまる場合、この項の手順が必要です。

- JPKD Web プロバイダの追加のユーザー・アプリケーションが OC4J_Portal インスタンスにデプロイされている。
- OracleAS Portal ユーザー・インタフェースを使用してプロバイダ・グループ、プロバイダおよび URL ポートレットが構築されている。
- OC4J_Portal インスタンスの Web プロバイダ・アプリケーションに対して構成変更、カスタマイズまたは拡張が行われている。

Portal Development Kit Services for Java (JPKD) Web プロバイダのアップグレード処理には、次の手順があります。

1. JPKD Web プロバイダのユーザー・アプリケーションをアップグレード先 Oracle ホームにデプロイします。

注意： この手順はユーザー・アプリケーションに対してのみ適用されます。jpdk、portalTools などのアプリケーションは、すでにアップグレード先 Oracle ホームにデプロイされています。

2. カスタマイズされている設定をソース Oracle ホームで特定します。

3. カスタマイズをアップグレード先 Oracle ホームに適用します。
4. プロバイダを使用する各 OracleAS Portal インスタンスをプロバイダの新しい URL で更新します。3-67 ページの [3.12 項の説明に従ってインスタンスを起動した後](#)、3-68 ページの [3.12.3 項「OracleAS Portal プロバイダ情報の更新」](#) の手順を実行します。
5. イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダを更新します。3-68 ページの [3.12 項の説明に従ってインスタンスを起動した後](#)、3-69 ページの [3.12.4 項「イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダの更新」](#) の手順を実行します。

この後の項で、カスタマイズされている領域に関して、各領域のアップグレードの方法およびアップグレードされた Web プロバイダの各 Portal への登録の方法を説明します。

3.8.4.4.1 ユーザー作成のプロバイダ、ポートレット、プロバイダ・グループ 追加のプロバイダ、ポートレットおよびプロバイダ・グループが、手動または Oracle AS Portal ユーザー・インタフェースによって "jpdk" または "portalTools/ providerBuilder" Web アプリケーションに追加されている場合があります。次の手順に従ってこれらのプロバイダおよびプロバイダ・グループをアップグレードします。

1. アップグレード先 Oracle ホームにはない追加のデプロイ・プロパティ・ファイルのすべてをソース Oracle ホームで探し、それらをアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。プロパティ・ファイルを見つけるために、次のディレクトリを比較します。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%  
jpdk%jpdk%WEB-INF%deployment%
```

と

```
<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%  
jpdk%jpdk%WEB-INF%deployment%
```

および

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%portalTools%  
providerBuilder%WEB-INF%deployment%
```

と

```
<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%  
portalTools%providerBuilder%WEB-INF%deployment%
```

2. 前述の手順でコピーした各デプロイ・プロパティ・ファイルを開き、定義プロパティを定義している行を探します。定義プロパティは、XML プロバイダ定義ファイルの場所（親の WEB-INF ディレクトリに対する相対パス）を指定します。このファイルをアップグレード先 Oracle ホームの対応する同じ場所にコピーします。

たとえば、次のファイルで

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%  
jpdk%jpdk%WEB-INF%deployment%mysevice.properties%
```

次のように指定されていた場合

```
definition=providers¥mydir¥provider.xml
```

次のファイルを

```
<source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥
jpd¥jpd¥WEB-INF¥providers¥mydir¥provider.xml
```

次の場所にコピーします。

```
<destination_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥
jpd¥jpd¥WEB-INF¥providers¥mydir¥provider.xml
```

3. URL ポートレットが Portal UI によって追加されている可能性があるポートレット構築ツール・プロバイダの次の provider.xml ファイルを

```
<source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥
jpd¥jpd¥WEB-INF¥PORTLETBLDGTOOLS¥provider.xml
```

次の場所にコピーします。

```
<destination_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥
jpd¥jpd¥WEB-INF¥PORTLETBLDGTOOLS¥provider.xml
```

4. <source_MT_OH>¥portal¥pdkjava¥providerGroups¥iasProviders.xml のプロバイダ・グループ・レジストリを開きます。
5. ユーザー作成のすべての providerGroups のエントリ（通常、名前に "oracle" 接頭辞がないエントリ）を <destination_MT_OH>¥portal¥pdkjava¥providerGroups¥iasProviders.xml に追加します。

たとえば、ユーザー作成のプロバイダ・グループのエントリは次のようになります。

```
<providerGroup name="my.providergroup" baseLanguage="en">
  <displayName language="en" translation="User Provider Group"/>
  <provider name="my.providers " baseLanguage="en">
    <displayName language="en" translation="User Provider"/>
    <timeout>60</timeout>
    <timeoutMessage language="en" translation="User Provider Timed Out"/>
    <loginFrequency>Once Per Session</loginFrequency>
    <httpURL>http://my.machine.com:7777/jpd/providers</httpURL>
    <serviceId>urn:myservice</serviceId>
    <httpAppType>PORTAL</httpAppType>
    <cookieDomain>my.machine.com:7777</cookieDomain>
  </provider>
</providerGroup>
```

3.8.4.4.2 デプロイ・プロパティ デプロイ・プロパティが追加またはデフォルト値から変更されている場合、それをアップグレード先 Oracle ホームに手動で適用する必要があります。プロパティの場所は、Web プロバイダ間で異なり、Web プロバイダのサービス識別子によって示されます。サービス識別子は、アプリケーション内のプロバイダを識別します。デプロイ・プロパティ・ファイルのネーミング規則は、次のとおりです。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%<application name>%<web application name>% WEB-INF%deployment%serviceidentifier.properties
```

たとえば、識別子が sample である JPDK サンプル Web プロバイダのデプロイ・プロパティは、次のファイルにあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%jpd%jpd% WEB-INF%deployment%sample.properties
```

1. ソース Oracle ホームで、カスタマイズされているすべてのプロパティ（ファイルに追加されたプロパティおよび値を変更されたデフォルト・プロパティ）の場所を特定します。
2. カスタマイズされているプロパティをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

3.8.4.4.3 JNDI 環境変数 ソース Oracle ホームの JNDI 環境変数が追加またはデフォルト値から変更されている場合、それをアップグレード先 Oracle ホームに手動で適用する必要があります。変数の場所は、Web プロバイダ間で異なります。サンプル JPDK Web プロバイダの変数は、次のファイルにあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%application-deployments% jpd%jpd%orion-web.xml
```

1. ソース Oracle ホームで、カスタマイズされているすべての変数（ファイルに追加された変数および値を変更されたデフォルト変数）の場所を特定します。
2. カスタマイズされている変数をソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

3.8.4.4.4 ファイルベースのポートレット・パーソナライズ・マネージャ ポートレットをパーソナライズするために、ファイルベースのパーソナライズ・マネージャがソース Oracle ホームで使用されている場合があります。ソースとアップグレード先の Oracle ホームで同じ Portal スキーマを使用する場合のみ、パーソナライズ・データのアップグレードが可能です。

1. パーソナライズ・データをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

パーソナライズ・データは、Web プロバイダの定義ファイル `provider.xml` と同じディレクトリにトップレベルがあるディレクトリ構造になっています。この場所のすべてのサブディレクトリをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。サンプル JPDK Web プロバイダは、次の場所にあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%applications%jpd%jpd%
WEB-INF%providers%sample
```

注意： 格納設定の `<rootDirectory>` タグを宣言することによって、パーソナライズ・データの場所を変更できます。パーソナライズ・データの場所は、`provider.xml` ファイルで指定されます。

3.8.4.4.5 データベース・ベースのポートレット・パーソナライズ・マネージャ ポートレットをパーソナライズするために、データベース・ベースのパーソナライズ・マネージャがソース Oracle ホームで使用されている場合があります。同じ Portal スキーマを使用する場合のみ、アップグレード後にパーソナライズ・データのアップグレードが可能です。パーソナライズ・データは、Portal スキーマ間でコピーできません。

データベース・ベースのパーソナライズ・マネージャは、パーソナライズ・データを含むデータベース・スキーマに接続するためにデータソースを使用します。このデータソースは、次のファイルで識別されます。

```
<source_MT_OH>%j2ee%/OC4J_Portal%config%data-sources.xml
```

1. パーソナライズ・データをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

パーソナライズ・データは、次のファイルにあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%/OC4J_Portal%config%data-sources.xml
```

3.8.4.4.6 oracle.http.configfile プロパティおよび cache.xml のアップグレード

`oracle.http.configfile` プロパティがある場合はそれをアップグレードし、次に `cache.xml` ファイル（場所は `oracle.http.configfile` プロパティで指定される）をアップグレードする必要があります。このプロパティおよびファイルをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. `oracle.http.configfile` プロパティをアップグレードします。

プロパティは、次のファイルにあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%properties%oc4j_portal.properties
```

または

```
<source_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml
```

- oc4j_portal.properties ファイルに oracle.http.configfile プロパティが含まれている場合、そのファイルをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。
- opmn.xml ファイルに oracle.http.configfile プロパティが含まれている場合、その値をソース Oracle ホームの opmn.xml ファイルからアップグレード先 Oracle ホームの opmn.xml ファイルにコピーします。

注意： 次の手順でアップグレードする cache.xml ファイルの場所は、oracle.http.configfile プロパティによって指定されます。

2. cache.xml ファイルをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

3.8.4.4.7 プロバイダ UI セキュリティ設定のアップグレード セキュリティ設定が追加またはデフォルト値から変更されている場合、それをアップグレード先 Oracle ホームに手動で適用する必要があります。プロバイダ UI セキュリティ・ファイルは、次の場所にあります。

```
<source_MT_OH>%j2ee%\OC4J_Portal%\applications%\jpdck%\jpdck%\
WEB-INF%\deployment_providerui%\provideruiaccls.xml
```

および

```
<source_MT_OH>%j2ee%\OC4J_Portal%\applications%\portalTools%\
providerBuilder%\WEB-INF%\deployment_providerui%\provideruiaccls.xml
```

provideruiaccls.xml ファイルをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. ソース Oracle ホームで、変更されているすべてのセキュリティ設定（ファイルに追加された設定および値を変更されたデフォルト・セキュリティ設定）の場所を特定します。
2. 変更されているセキュリティ設定をソース Oracle ホームのファイルからアップグレード先 Oracle ホームのファイルにコピーします。

3.8.4.5 mod_plsql のアップグレードの完了

mod_plsql の構成に関して、<source_MT_OH>%Apache%\modplsql%\conf%\plsql.conf でカスタマイズされている設定（デフォルトから変更された値のプロパティ）がある場合、OracleAS Upgrade Assistant の処理の終了後に、その設定を手動でアップグレードする必要があります。

1. <source_MT_OH>%Apache%\modplsql%\conf%\plsql.conf でカスタマイズされているすべてのプロパティ値の場所を特定します。
2. カスタマイズされている値を <destination_MT_OH>%Apache%\modplsql%\conf%\plsql.conf にコピーします。

注意： `plsql.conf` のすべての構成パラメータのデフォルト値は、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の第 8 章に示されています。

3.8.4.6 10g (9.0.4) の Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control によるリリース 2 (9.0.2) の Portal リポジトリの監視の有効化

Oracle Application Server 中間層がリリース 2 (9.0.2) の Oracle9iAS Portal リポジトリを使用する場合、Application Server Control の監視コンポーネントを使用可能にするためにスクリプトを実行し、OracleAS Portal のリリースおよび OracleAS Portal Metadata Repository データベースのリリースと起動時間にアクセスする必要があります。監視コンポーネントがこれらの情報を取得できない場合、パッケージ不明のエラー (WWC_MONITORING) が発生し、Oracle HTTP Server のログに記録されます。

監視を有効化する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus で SYS に接続します。
2. スクリプトを次のように実行します。

```
<destination_MT_OH>%portal%admin%plsql%wwc%cfgvr902.sql
<Oracle9iAS portal schema name>
```

スクリプトが成功すると、次のテキストが表示されます。

If there were no errors, run the following grant in SQL*Plus when connected to the Portal schema:

```
grant execute on WWC_MONITORING to PUBLIC
```

3. SQL*Plus で OracleAS Portal スキーマに接続します。必要な場合は、Oracle Directory Manager を使用して、Oracle9iAS Portal スキーマのランダム化されたパスワードを取得します。次のようにナビゲートします。
 - a. エントリ管理
 - b. cn=OracleContext
 - c. cn=Products
 - d. cn=IAS
 - e. cn=Infrastructure Databases
 - f. OrclReferenceName=Infrastructure Database (例: iasdb.server.domain.com)
 - g. OrclResourceName=PORTAL
 - h. 前述のエントリをクリックします。
 - i. 右側ペインで orclpasswordattribute 値を探します。これがスキーマのパスワードです。

4. 次のコマンドで権限を付与します。

```
grant execute on WWC_MONITORING to PUBLIC;
```

3.8.4.7 Portal Tools (OmniPortlet および Web クリップング) プロバイダのリストア

次の 2 つの条件を満たす場合に、この項の手順を実行します。

- Portal Development Kit (PDK) 2002 年 11 月 (9.0.2.4.0) または PDK 2003 年 7 月 (9.0.2.6.2) の Portal Tools アプリケーションがリリース 2 (9.0.2) 中間層にインストールされている場合
- Portal Tools アプリケーションを 10g (9.0.4) 中間層に移行する場合

OracleAS Portal 中間層のアップグレード処理によって新しい Portal Tools アプリケーションがデプロイされるので、古いプロバイダ設定を新しいプロバイダにリストアする必要があります。この項では、そのリストアの方法について説明します。この手順は、使用していたプロバイダがあり、アップグレード処理の前にそれを構成していた場合にのみ必要です。PDK のリリースを指定しない場合、すべてのリリースに対して手順を実行する必要があります。OracleAS Portal Tools アプリケーションに含まれるプロバイダは、次のとおりです。

- Web クリップング・プロバイダ
- OmniPortlet プロバイダ

3.8.4.7.1 Web クリップング・プロバイダの設定のリストア Web クリップング・プロバイダの設定をリストアする手順は、次のとおりです。

1. Web クリップングでプロキシを使用するように構成されていた場合: <proxyInfo> タグ情報を <source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥webClipping¥WEB-INF¥providers¥webClipping¥provider.xml からアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

<proxyInfo> タグは、<provider> タグの子であり、ファイルの <preferenceStore>...</preferenceStore> タグの後にあります。<proxyInfo> タグは次の例に示すとおりです。

```
<proxyInfo class="oracle.portal.provider.v2.ProxyInformation">
  <httpProxyHost>www-proxy.mycompany.com</httpProxyHost>
  <httpProxyPort>80</httpProxyPort>
</proxyInfo>
```

2. <repositoryInfo> タグ情報を <source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥webClipping¥WEB-INF¥providers¥webClipping¥provider.xml からアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

<repositoryInfo> タグは、<provider> タグの子であり、ファイルの
<preferenceStore>...</preferenceStore> タグの後にあります。
<repositoryInfo> タグは次の例に示すとおりです。

```
<repositoryInfo class="oracle.portal.wcs.provider.info.DatabaseInformation">
  <useRAA>false</useRAA>
  <databaseHost>mycompany.dbhost.com</databaseHost>
  <databasePort>1521</databasePort>
  <databaseSid>iasdb</databaseSid>
  <databaseUsername>webclip_user</databaseUsername>
  <databasePassword>AX3tR</databasePassword>
  <useASO>false</useASO>
</repositoryInfo>
```

3. **PDK 9.0.2.4.0 の場合のみ** : 3-67 ページの [3.12 項](#)の説明に従ってインスタンスを起動した後、3-67 ページの [3.12.1 項「Web クリッピング・プロバイダ・テスト・ページへのアクセス \(PDK 9.0.2.4.0 のみ\)」](#) の手順を実行します。

3.8.4.7.2 OmniPortlet プロバイダの設定のリストア OmniPortlet プロバイダの設定をリストアする手順は、次のとおりです。

1. **PDK 9.0.2.4.0 の場合のみ** : <preferenceStore> タグ情報内の <useHashing> タグおよび値を <source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥omniPortlet¥WEB-INF¥providers¥omniPortlet¥provider.xml からアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。ソース Oracle ホームに <useHashing> タグがない場合、アップグレード先 Oracle ホームでも省略します。

<preferenceStore> タグは、<provider> タグの子であり、ファイルの
<session>...</session> タグの後にあります。<preferenceStore> タグは次の
例に示すとおりです。

```
<preferenceStore
class="oracle.portal.provider.v2.preference.FilePreferenceStore">
  <name>omniPortletprefStore</name>
</preferenceStore>
```

2. **OmniPortlet でプロキシを使用するように構成されていた場合** : <proxyInfo> タグ情報を <source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥omniPortlet¥WEB-INF¥providers¥omniPortlet¥provider.xml からアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

<proxyInfo> タグは、<provider> タグの子であり、ファイルの
<preferenceStore>...</preferenceStore> タグの後にあります。
<proxyInfo> タグは次の例に示すとおりです。

```
<proxyInfo class="oracle.portal.provider.v2.ProxyInformation">
  <httpProxyHost>www-proxy.mycompany.com</httpProxyHost>
```

```
<httpProxyPort>80</httpProxyPort>
</proxyInfo>
```

3. `<source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥omniPortlet¥WEB-INF¥providers¥omniPortlet¥` 下のすべてのディレクトリをアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。これにより、このプロバイダから OracleAS Portal で使用しているポートレットに対するカスタマイズがリストアされます。
4. アップグレード前に OmniPortlet プロバイダの `provider.xml` ファイルにポートレット定義を手動で追加していた場合、それをアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。
5. 保護データ・リポジトリを構成します。repositoryInfo タグ情報をソース Web クリッピングの `provider.xml` ファイルからアップグレード先 Web クリッピングの `provider.xml` ファイルにコピーしたことを確認します。
6. **PDK 9.0.2.4.0 の場合のみ**：3-67 ページの [3.12 項](#)の説明に従ってインスタンスを起動した後、3-68 ページの [3.12.2 項「OmniPortlet プロバイダ・テスト・ページへのアクセス \(PDK 9.0.2.4.0 のみ\)」](#)の手順を実行します。
7. **OmniPortlet 保護データ・リポジトリが構成されている PDK 9.0.2.6.2 の場合のみ**：
`<vaultId>` タグ情報を `<source_MT_OH>¥j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥omniPortlet¥WEB-INF¥providers¥omniPortlet¥provider.xml` からアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。

`<vaultId>` タグは、`<provider>` タグの子であり、ファイルの `<provider>` タグの後にあります。`<vaultId>` タグは、`<vaultId>2</vaultId>` のようになります。

3.8.5 Oracle Application Server Discoverer Viewer のアップグレードの完了

OracleAS Upgrade Assistant は、Oracle Application Server Discoverer の大部分のアップグレード処理を実行します。例外として、Discoverer Viewer の外観をカスタマイズするために使用されるスタイル・シートおよび `tnsnames.ora` ファイルのエントリはアップグレードされません。この項では、Oracle Application Server Discoverer のアップグレードを完了するためのタスクの実行方法について説明します。

3.8.5.1 End User Layer のアップグレード

Oracle9iAS Discoverer リリース 9.0.2.52 以下からアップグレードする場合、10g (9.0.4) で Oracle Application Server Discoverer 9.0.4 を使用する前に End User Layer をアップグレードする必要があります。手順については、4-61 ページの [4.6.1 項「Oracle Application Server Discoverer End User Layer スキーマのアップグレード」](#)を参照してください。

3.8.5.2 スタイル・シートのアップグレード

リリース 2 (9.0.2) インストールでスタイル・シートを変更していて、その変更内容を 10g (9.0.4) インストールでも有効にする場合、変更内容を 10g (9.0.4) インストールに手動で再

適用する必要があります。手動でアップグレードする必要があるスタイル・シートは、次のとおりです。

<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_Forms%applications%discoverer%web%common%xml にある次のファイル：

- about.xml
- add_connection_eul.xml
- add_connection_main.xml
- add_connection_responsibility.xml
- blaf.xml
- change_password.xml
- delete_connection.xml
- discoverer.xml
- edit_connection_eul.xml
- edit_connection_main.xml
- edit_connection_responsibility.xml
- errors.xml
- functions.xml
- gui_components.xml
- list_of_connections.xml
- render_table.xml
- scripts.xml

<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_Forms%applications%discoverer%web%viewer_files%xml にある次のファイル：

- page_layouts.xml
- sorting.xml
- style.xml

3.8.5.3 tnsnames.ora ファイルのアップグレード

<source_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora ファイルは、Oracle9iAS Discoverer リリース 2 (9.0.2) で作成された Oracle Application Server Discoverer 接続によって参照されるデータベース・インスタンスを定義します。Oracle Application Server Discoverer 10g (9.0.4) にアップグレードされた接続が機能するためには、同じデータベース・インスタン

スが `<destination_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` ファイルにある必要があります。次に示す項を参照してアップグレードしてください。

関連項目： 手順については、3-61 ページの [3.8.9 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」](#) を参照してください。

3.8.6 Oracle Application Server Reports Services のアップグレードの完了

OracleAS Upgrade Assistant は、Oracle Application Server Reports Services の大部分のアップグレード処理を実行します。ただし、スクリプト・ファイル `<source_MT_OH>%bin%rw*.bat` および構成ファイル `<source_MT_OH>%reports%conf%jdbcpds.conf` は処理されません。これらのファイルをカスタマイズしている場合、そのカスタマイズをアップグレード先 Oracle ホームの対応するファイルに適用する必要があります。

注意： カスタマイズを適用するには、カスタマイズされたエントリをソースのリリース 2 (9.0.2) インスタンスからアップグレード先の 10g (9.0.4) インスタンスにコピーします。これらのファイルは異なるため、10g (9.0.4) のファイルをリリース 2 (9.0.2) のファイルで置き換えない方が安全です。

さらに、次のオプションの手動での手順も実行します。

- リリース 2 (9.0.2) のキャッシュ・ファイルおよびキャッシュ・ディレクトリを保持するには、Reports Server キャッシュ・ディレクトリをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。
- 追加の Reports Server インスタンスを Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) で監視するには、その Reports Server インスタンスを `<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` で定義します。

関連項目： インスタンスを定義する方法については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の Reports Server を Oracle Process Manager and Notification Server および Oracle Enterprise Manager で構成する方法に関する項を参照してください。

- 追加の Reports Server インスタンスを Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control で管理するには、その Reports Server インスタンスを `<destination_MT_OH>%sysman%emd%targets.xml` で定義します。

関連項目： インスタンスを定義する方法については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の Reports Server を Oracle Process Manager and Notification Server および Oracle Enterprise Manager で構成する方法に関する項を参照してください。

3.8.6.1 Oracle Application Server Reports Services のデプロイを伴うユーザー定義の OC4J インスタンスのアップグレード

OracleAS Upgrade Assistant は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Business Intelligence and Forms 構成を Oracle Application Server 10g (9.0.4) Business Intelligence and Forms 構成にアップグレードします。デプロイされたレポートが含まれる可能性のある、この構成以外の OC4J インスタンス、およびそのデプロイされたレポートの実行を有効にするためにインスタンスに加えられたカスタマイズは検出されません。

したがって、標準の Business Intelligence and Forms OC4J インスタンス以外の OC4J インスタンスを使用する場合、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) でそれらのインスタンスに対して実行したデプロイの手順を Oracle Application Server 10g (9.0.4) の同等のインスタンスに適用する必要があります。

さらに、これらの OC4J インスタンスに対して、`<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` の `java-options` タグに対する次の Java オプションを追加することによって、Oracle Application Server Reports Services でインスタンスが使用可能になります。

```
-Xbootclasspath^/p:<destination_MT_OH>%vbroker4%lib%vbjboot.jar
```

例 3-8 デフォルトの java-options タグ

```
<data id="java-options" value="-Dhttp.proxyHost=www-proxy.us.oracle.com
-Dhttp.proxyPort=80"/>
```

例 3-9 Oracle Application Server Reports Services 用に変更した java-options タグ

```
<data id="java-options" value="-Dhttp.proxyHost=www-proxy.us.oracle.com
-Dhttp.proxyPort=80"
-Xbootclasspath^/p:<destination_MT_OH>%vbroker4%lib%vbjboot.jar"/>
```

3.8.7 Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了

この項では、Oracle Application Server Wireless 中間層のリリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4) へのアップグレードについて説明します。

関連項目： ここで説明する概要、および OracleAS Wireless アプリケーションの構成と開発の詳細は、『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』を参照してください。

3.8.7.1 OracleAS Wireless 通知サービスのアップグレード・スクリプトの使用

この項では、Application Server Control の Oracle Application Server Wireless 通知エンジンによって作成された通知をアップグレードする方法について説明します。通知エンジンのアーキテクチャおよび機能はここでは説明しません。

通知をリリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4) にアップグレードするには、`migrateNotifications.bat` スクリプトを使用します。スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. `<destination_MT_OH>%wireless%bin` に移動します。
2. `ORACLE_HOME` 環境変数を 10g (9.0.4) の Oracle ホームに設定します。
3. 次のいずれかのコマンドを実行します。
 - `migrateNotifications.sh -name deprecated master alert name(s) -owner owner user name`
 - `migrateNotifications.bat -oid deprecated master alert oid -owner owner user name`

注意： `name` パラメータによって、名前別にアラートをアップグレードできます。

`oid` パラメータによって、オブジェクト ID 別に特定アラートをアップグレードできます。

デブリケートされているマスター・アラート名を指定するために、`%` ワイルドカード文字を使用できます。すべての 9.0.4.x 通知オブジェクト（マスター・アラート・サービス、マスター・サービス、リンクなど）は、指定されたユーザー名によって所有されます。

スクリプトによって次の処理が行われます。

- `old master alert name_New` という名前の新規マスター・アラート・サービスの作成（この処理には、必要に応じてメッセージ・テンプレートの有効なモバイル XML への変換も含まれます。）
- フォルダ `%master%notifications` の作成（存在しない場合）
- マスター・サービス `old master alert name_MS` の作成
- 古いマスター・アラートのメッセージ・テンプレートに基づく新規マスター・アラートと新規マスター・サービスのマッピングの作成
- フォルダ `%Users Home%username%notifications` の作成（存在しない場合）
- すべての関連 9.0.2.x AlertService オブジェクトの検出、およびそれらのリンク・オブジェクトへの変換（この処理で、トップレベル認証がフラット化されてレベル認証にリンクされる）
- 変換されたアラート・サービスのすべてのサブスクリプションの変換

次のコマンドは、名前が StockAlert で始まるすべての 9.0.2.x マスター・アラート・サービス (StockAlertNews、StockAlertWarning など) をアップグレードします。すべての新規オブジェクトは、orcladmin ユーザーによって所有されます。

例 3-10 名前にワイルドカードを使用した Oracle Application Server Wireless Notification Service のアップグレード・スクリプトのコマンド

```
migrateNotifications.bat -name StockAlert% -owner orcladmin
```

次のコマンドは、StockAlert という名前の 9.0.2.x マスター・アラート・サービスをアップグレードし、すべての新規オブジェクトを systemadmin ユーザーに割り当てます。

例 3-11 特定の名前を指定した Oracle Application Server Wireless Notification Service のアップグレード・スクリプトのコマンド

```
migrateNotifications.bat -name StockAlert -owner systemadmin
```

次のコマンドは、オブジェクト ID が 1973 である 9.0.2.x マスター・アラート・サービスをアップグレードし、すべての新規オブジェクトを systemadmin ユーザーに割り当てます。

例 3-12 特定のオブジェクト ID を指定した Oracle Application Server Wireless Notification Service のアップグレード・スクリプトのコマンド

```
migrateNotifications.bat -oid 1973 -owner systemadmin
```

3.8.7.2 Oracle Application Server Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層および 10g (9.0.4) 中間層を組み合わせた運用

同じ Infrastructure サービスを使用する Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層および Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層による環境を運用できます。ただし、この構成には次に示す制限があります。

- J2ME ダウンロードおよび XHTML/XForms ベース・アプリケーションは、複合環境では使用できません。これらの機能は、Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) に新たに組み込まれていますが、Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層からアクセスしようとするエラーが発生します。これらの機能を使用するには、すべての中間層を Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) にアップグレードする必要があります。
- 通知エンジンは、複合環境では使用できません。かわりにアラート・エンジンを使用します。
- サービス・アクセス・ポイント (サービスレベルのアドレス) は、Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層および Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層の両方から参照できるように、Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層で作成する必要があります。

- Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) では、ユーザー名の大 / 小文字の区別がサポートされます。ただし、そのためには Oracle Internet Directory を Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードする必要があります。
- 10g (9.0.4) の ASK アクセス・ポイントの変更（追加、削除または更新）は、リリース 2 (9.0.2) の Enterprise Manager が再起動されるまでリリース 2 (9.0.2) の Enterprise Manager に反映されません。ASK が変更を取得するために、リリース 2 (9.0.2) の OC4J もバウンスされる必要があります。
- あるリリースのインスタンスでドライバ・アカウント（電子メール・ドライバの電子メール・アカウントなど）を削除して、異なるリリースのインスタンスに追加した場合（たとえばリリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4)）、メッセージが失われる可能性があります。これを解決するには、アカウントの削除元のインスタンスの OC4J を再起動します。

Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) で導入された通知エンジンによって、Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) の一部であったアラート・エンジンが置き換えられます。アラート・エンジンは Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) でも使用可能ですが、将来のリリースの Oracle Application Server Wireless で使用できなくなる可能性があるため、すべての中間層を Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) にアップグレードした後は、通知エンジンに切り替えることをお勧めします。このタスクを行うのに便利なアップグレード・スクリプトがあります。詳細は、『Oracle Application Server Wireless 開発者ガイド』を参照してください。Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) のアラート API は推奨されていないので、かわりに Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) の API を使用できるようにアプリケーションをアップグレードする必要があります。

3.8.7.3 複合モード環境のサイトレベル・ドライバの構成

複合モード環境では、Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) および Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) に、受信メッセージを受け取るためのトランスポート・ドライバが構成されている場合があります。Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) および Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) の 2 つのエントリ・ポイントを、デバイスに対して同時に使用可能にしないようにする必要があります。ユーザーがリリース 2 (9.0.2) インスタンスにリクエストを発行した場合、その後 3 時間は Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) インスタンスのトランスポート・ドライバに定義されているエントリ・ポイントに別のリクエストを送信できません。このユーザーは、たとえばこれに違反した場合、後のエントリ・ポイント宛てのリクエストに対するレスポンスを受信できません。

リリース 2 (9.0.2) と 10g (9.0.4) ではドライバ構成が異なるので、Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) インスタンスを Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) にアップグレードした場合、リクエストが正常に処理されるようにトランスポート・ドライバを管理する必要があります。

10g (9.0.4) では、サイトレベル・ドライバを使用可能または使用不可にできます。デフォルトでは使用可能です。使用不可になっているドライバはルーティング・アルゴリズムによって認識されないため、メッセージ・システムで使用されません。リリース 2 (9.0.2) では、すべてのサイトレベル・ドライバがルーティング・アルゴリズムによって認識されます。

リリース 2 (9.0.2) インスタンスに 2 つの中間層がある場合、一方の中間層および Infrastructure を 10g (9.0.4) にアップグレードすると、そのアップグレードされた中間層ではサイトレベル・ドライバを使用可能または使用不可にできます。ただし、アップグレードされていない中間層は、すべてのドライバが使用可能であると認識します。そのためこのような環境では、ドライバを使用不可にするのではなく削除することをお勧めします。

リリース 2 (9.0.2) のトランスポート・メカニズムでは、メッセージをルーティングできるのは 1 つのドライバに対してのみであり、そのドライバに構成されているインスタンスがあるかどうかには関係ありません。つまり、インスタンスが構成されていないドライバにメッセージがルーティングされた場合、メッセージはどこにも配信されません。そのため、リリース 2 (9.0.2) および 10g (9.0.4) の複合環境も含め、すべてのリリース 2 (9.0.2) 環境では、インスタンスが構成されていないすべてのドライバを削除することをお勧めします。

3.8.8 Oracle Application Server Forms Services のアップグレードの完了

OracleAS Upgrade Assistant は、大部分の Oracle Application Server Forms Services 構成データをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームに移動します。ただし、アップグレード後に手動タスクが必要な場合があります。この項では、そのタスクを実行する方法について説明します。

注意： アップグレード後、default.env ファイルには、デフォルトの Oracle Application Server Forms Services 環境変数およびユーザー定義の環境変数が含まれます。Upgrade Assistant は、すべてのユーザー定義の環境変数をアップグレード先 Oracle ホームの default.env ファイルにアップグレードします。ソース Oracle ホームの default.env ファイルのデフォルト変数に対するユーザーによるすべての変更が抽出され、インストーラによってアップグレード先 Oracle ホームの default.env ファイルに設定されたデフォルトの環境変数値に追加されます。

3.8.8.1 tnsnames.ora ファイルのアップグレード

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) がインストールされてから 10g (9.0.4) にアップグレードされるまでの間に、tnsnames.ora ファイルに対してエントリの追加または変更が行われている場合があります。その場合、このファイルを手動でアップグレードして、追加または変更されているすべてのエントリが 10g (9.0.4) で使用できるようにする必要があります。

関連項目： このファイルをアップグレードする手順については、3-61 ページの [3.8.9 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」](#) を参照してください。

アップグレード後にエラーが発生した場合、tnsnames.ora ファイルが別のコンポーネントのアップグレードによって上書きされた可能性があります。不明または不正なエントリがある場合のエラー・メッセージは、次のとおりです。

ORA-12154: TNS: サービス名を解決できませんでした。

3.8.8.2 Forms の *.fmx ファイルのアップグレード

これらのファイルをソース Oracle ホーム内にデプロイしていた場合、それをアップグレード先 Oracle ホームの同じ場所に手動でコピーする必要があります。*.fmx ファイルがファイル・システム上の Oracle ホームにない場合は何もする必要はありません。

FORMS90_PATH が OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされ、アップグレード後に有効になります。

3.8.8.3 Oracle Application Server Forms Services サブレットのユーザー定義の別名のアップグレード

次の場所に OracleAS Forms Services サブレットの別名を定義した場合、

```
<source_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_FORMS%applications%forms90app%forms90web%WEB-INF%web.xml
```

次の場所にそのエントリを手動でコピーする必要があります。

```
<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_FORMS%applications%forms90app%forms90web%WEB-INF%web.xml
```

3.8.8.4 ユーザー定義 OC4J インスタンスにデプロイされた forms90app.ear のアップグレード

forms90app.ear ファイルは、デフォルトで OC4J_BI_Forms OC4J インスタンスにデプロイされます。Upgrade Assistant は、すべてのユーザー定義 OC4J インスタンスおよびそのインスタンスにデプロイされたアプリケーションをアップグレード先 Oracle ホームにアップグレードすることに注意してください。

したがって、ソース Oracle ホームでユーザー定義 OC4J インスタンスのいずれかに forms90app.ear ファイルをデプロイしている場合、Upgrade Assistant はこのデプロイをアップグレード先 Oracle ホームの対応する OC4J インスタンスにアップグレードします。

その結果、ソース Oracle ホームのリリース 2 (9.0.2) の forms90app.ear ファイルがアップグレード先 Oracle ホームにデプロイされます。そのため、正常に機能するためには 10g (9.0.4) EAR ファイルを必要とする OracleAS Forms Services 10g (9.0.4) の構成は不正になります。

これを回避するには、アップグレード先 Oracle ホームのアップグレードされた OC4J インスタンスから forms90app.ear ファイルをアンデプロイし、forms90app.ear をアップグレード先 Oracle ホームにデプロイしなおす必要があります。

Oracle Application Server Forms Services 10g (9.0.4) の forms90app.ear ファイルの場所は、<destination_MT_OH>%forms90%j2ee です。

3.8.8.5 Oracle Application Server Forms Services Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory の構成の有効化

Oracle Application Server Forms Services 用の Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory の構成は、デフォルトでは無効になります。この構成がリリース 2 (9.0.2) で有効であっても、OracleAS Upgrade Assistant は 10g (9.0.4) でそれを自動的に有効にしません。

この構成を有効にするには、次のファイルの `ssoMode` エントリ値を `true` に設定します。

```
<destination_MT_OH>%forms90%server%formsweb.cfg
```

リリース 2 (9.0.2) では、Single Sign-On を使用して Oracle9iAS Forms Services を実行する場合に、`forms90.conf` ファイルでサブレット別名を設定できませんでした。10g (9.0.4) では、`formsweb.cfg` ファイルでアプリケーションごとに Single Sign-On を構成できます。すべてのアプリケーションに対して Single Sign-On を構成するには、このファイルのデフォルト・セクションの `ssoMode` エントリ値を `true` に設定します。特定のアプリケーションに対して Single Sign-On を構成するには、このファイルの該当するアプリケーションのセクションでエントリ値を `true` に設定します。

3.8.9 tnsnames.ora ファイルのアップグレード

`<source_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` ファイルには、様々なデータベースの接続情報が含まれます。このファイルは、Oracle Application Server コンポーネント間で共有されます。

このファイルを調べて、10g (9.0.4) インストールのコンポーネントの動作に必要なが、`<destination_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` ファイルに存在しないエントリがあるかどうかを確認する必要があります。たとえば、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) インストールで、追加データベースにアクセスするためにエントリが追加されている場合や Infrastructure サービス・リポジトリの一部が変更されている場合などがあります。

新しいエントリまたは変更されたエントリがある場合のアップグレードでは、個々のエントリを追加するか、ファイル全体をコピーする必要があります。

3.8.9.1 新規エントリおよび変更されたエントリの 10g (9.0.4) の tnsnames.ora ファイルへの追加

すべての新規エントリおよび変更されたエントリを `<destination_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` ファイルにコピーします。

3.8.9.2 Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の tnsnames.ora ファイルの 10g (9.0.4) インストールへのコピー

ファイル全体をコピーしても他のコンポーネントによって追加または変更されたエントリが削除されないことを確認してから、`tnsnames.ora` ファイル全体をソースからアップグ

レード先 Oracle ホームにコピーし、10g (9.0.4) で導入された
EXTPROC_CONNECTION_DATA.US.ORACLE.COM エントリをリストアします。

ファイル全体のコピーによってアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. `<source_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` および
`<destination_MT_OH>%network%admin%tnsnames.ora` のバックアップを作成し
ます。
2. `tnsnames.ora` ファイル全体をソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホーム
にコピーします。
3. 手順 1 で作成した 10g (9.0.4) のバックアップ・ファイルの
`EXTPROC_CONNECTION_DATA.US.ORACLE.COM` エントリ（データベースの外部プロ
シージャの実行に使用）を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) ファイルにコピーします。

3.9 Oracle Application Server InterConnect のアップグレード

この項では、Oracle9iAS InterConnect のアップグレードの方法について説明します。

Oracle Application Server InterConnect は Oracle Application Server CD-ROM で配布されな
いため、インストールされていない場合があります。この項では、アップグレードの最初の
手順としてインストールについて説明します。各アダプタのインストール手順は、Oracle
Application Server ドキュメント・ライブラリの Oracle Application Server InterConnect の
マニュアルを参照してください。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のトポロジでは、Oracle Application Server InterConnect の
各コンポーネントは、Infrastructure または中間層の Oracle ホーム、あるいは別の Oracle
ホームにあります。10g (9.0.4) では、これらコンポーネントは、Infrastructure または中間
層の Oracle ホームにはありません。別の Oracle ホームにインストールする必要があります。

アップグレード処理には、次のタスクがあります。

3-62 ページの [3.9.1 項「Hub コンポーネント、アダプタおよび Development Kit のインス
トールとアップグレード」](#)

3-63 ページの [3.9.2 項「メタデータのアップグレード」](#)

3-63 ページの [3.9.3 項「Management のアップグレード」](#)

3-64 ページの [3.9.4 項「Oracle Workflow のアップグレード」](#)

3.9.1 Hub コンポーネント、アダプタおよび Development Kit のインストール とアップグレード

Oracle Application Server InterConnect の各コンポーネントのインストール手順に従って、
Hub、Adapters および Development Kit をインストールします。インストール手順で指定
する情報は、リリース 2 (9.0.2) のコンポーネントの構成を反映してください。アーキテク

チャを変更しない場合、10g (9.0.4) インストールに示されるアーキテクチャがリリース 2 (9.0.2) のアーキテクチャと同じであることを確認します。

3.9.2 メタデータのアップグレード

メタデータをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. 最新のリリース 2 (9.0.2) の Oracle Application Server InterConnect パッチ・セットをインストールします。
2. リリース 2 (9.0.2) インストールで提供される oaiexport スクリプトを実行します。次のコマンドで、リポジトリ名、ファイル名、システム・パスワードおよび接続文字列の値を指定します。

```
<source_InterConnect_OH>%oai%9.0.2%repository%oaiexport <file  
name> system%<system password> <connect string>
```

カレント・ディレクトリのファイルにメタデータがエクスポートされます。

3. 10g (9.0.4) インストールで提供される oaiimport スクリプトを実行します。次のコマンドで、リポジトリ名、ファイル名、インポート元ユーザー（インポートするメタデータを所有するユーザーのユーザー ID）、システム・パスワード、oaihub904 スキーマ・パスワードおよび接続文字列の値を指定します。

```
<destination_InterConnect_OH>%oai%9.0.4%repository%oaiimport  
<file name> <from user> system%<system password> <oaihub904  
schema password> <connect string>
```

10g (9.0.4) の Hub データベースにファイルがインポートされます。

4. Hub スキーマで次のコマンドを実行して、Hub スキーマ・データベースに表を作成します。

```
CREATE TABLE emdcomments (  
  emdid NUMBER(10) CONSTRAINT fk_emdcomments_emdid  
    REFERENCES emd(id) ON DELETE CASCADE  
  CONSTRAINT nn_emdcomments_emdid NOT NULL,  
  name VARCHAR2(4000) CONSTRAINT nn_emdcomments_name NOT NULL,  
  comments LONG);
```

3.9.3 Management のアップグレード

10g (9.0.4) の Oracle Application Server InterConnect のインストール・マニュアルの指示に従います。Oracle Application Server InterConnect Management のアーキテクチャは、リリース 2 (9.0.2) から大幅に変更されました。Oracle Application Server InterConnect コンポーネントの管理に、アップグレードされた Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control は使用できません。詳細は、『Oracle Application Server InterConnect インストール・ガイド』を参照してください。

3.9.4 Oracle Workflow のアップグレード

10g (9.0.4) インストールで、スタンドアロンの Workflow スキーマを使用する場合は、『Oracle Application Server InterConnect インストレーション・ガイド』に示すインストール手順に従って、10g (9.0.4) InterConnect Hub データベースに Workflow スキーマをインストールします。その後、次の手順に従って、Oracle Workflow メタデータを移行します。

1. Oracle Workflow を 10g (9.0.4) でインストールします。インストール前後の手順は、『Oracle Application Server InterConnect インストレーション・ガイド』を参照してください。

インストールによって、データベースの Oracle Workflow サーバーのリリースが更新されます。詳細は、『Oracle Application Server InterConnect インストレーション・ガイド』を参照してください。

2. 『Oracle Workflow 管理者ガイド』の「Oracle Workflow の設定」の説明に従って、10g (9.0.4) インストールに対して Workflow のすべての設定の手順を実行します。特に、次の点に注意してください。

- Workflow のグローバル設定を適切に設定します。
- Oracle Workflow のディレクトリ・サービスを設定します。
- Application Server Control の Workflow Manager コンポーネントを使用して、Workflow Notification Mailer を構成します。

3. カスタマイズされているファイルをソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーします。カスタマイズされている可能性のあるファイルは、次のとおりです。

- Workflow 処理の定義ファイル (<destination_MT_OH>%wf%res%lang にある .wft ファイル)
- ビジネス・イベント・システムの定義ファイル (<destination_MT_OH>%wf%res%lang にある .wfx ファイル)
- SQL スクリプト (<destination_MT_OH>%wf%sql にある .sql ファイル)
- カスタム・ヘルプ・ファイル (<destination_MT_OH>%wf%doc%lang%wfcust にある .htm ファイルまたは <destination_MT_OH>%wf%res%lang にある .hlp ファイル)

注意： 10g (9.0.4) インストールで、OracleAS Metadata Repository Workflow スキーマを使用する場合は、[4.4.9 項「Oracle Workflow スキーマのアップグレード」](#)に示すインストール手順に従って、ご使用の Workflow スキーマをアップグレードしてください。

3.10 アップグレード後のポート値と portlist.ini ファイル

中間層の Oracle Application Server 10g (9.0.4) へのアップグレード後、アップグレードされたインスタンスは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) インスタンスが使用していたのと同じポートを使用します。そのため、ポートの競合によって、アップグレード後にソースおよびアップグレード先の中間層インスタンスを同時に起動できません。

<destination_MT_OH>%install%portlist.ini ファイルは、アップグレードされたポート設定を反映せず、アップグレード前にインストーラによって割り当てられたポート値のままです。表 3-6 に、Oracle HTTP Server、Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control および Oracle Application Server Web Cache のアップグレード前後の値を示します。

表 3-6 アップグレード前後のポート値

コンポーネント	ソース Oracle ホームのポート	インストーラによって割り当てられたアップグレード先 Oracle ホームのポート値、および portlist.ini ファイルのポート値	アップグレード後のポート値
Oracle HTTP Server	ポート : 7777	ポート : 7783	ポート : 7777
	リスニング : 7778	リスニング : 7784	リスニング : 7778
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control	1810	1812	1812
Oracle Application Server Web Cache	管理 : 4000	管理 : 4003	管理 : 4000
	失効 : 4001	失効 : 4004	失効 : 4001
	統計 : 4002	統計 : 4005	統計 : 4002

3.11 Application Server クラスタのアップグレード

Appliation Server クラスタは、2 段階の処理でアップグレードします。最初に、クラスタのいずれかのインスタンスの構成を、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホーム（新たにインストールされた 10g (9.0.4) 中間層）にアップグレードします。次に、新しいアップグレード先 Oracle ホームで追加インスタンスをインストールおよびクラスタリングして、クラスタを再構成します。

Application Server クラスタをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを実行して、アップグレードするインスタンスのインスタンス名を決めます。

```
<source_MT_OH>%dcm%bin%dcmctl listinstances
```

2. 次のコマンドで、ソース・インスタンスのすべてのプロセスを停止します。

```
<source_MT_OH>%dcm%\bin%\dcmctl shutdown
```

3. 次のコマンドで、アップグレード先インスタンスのすべてのプロセスを停止します。

```
<destination_MT_OH>%dcm%\bin%\dcmctl shutdown
```

4. 3-9 ページの 3.5 項「OracleAS Upgrade Assistant の使用方法」の指示に従います。

5. 3-28 ページの 3.8 項「アップグレードの完了」を参照して、アップグレードした構成に当てはまる項の指示に従います。

6. 次のコマンドで Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を起動します。

```
<destination_MT_OH>%bin%\emctl start iasconsole
```

7. Oracle Application Server インスタンスのホームページが表示されます

8. 3-67 ページの 3.12 項「アップグレードされた中間層インスタンスの起動」の指示に従って、アップグレードされたインスタンスを起動します。

9. 次のコマンドでクラスタを作成します。

```
<destination_MT_OH>%dcm%\bin%\dcmctl createcluster <name of cluster>
```

10. 次のコマンドで、アップグレードされたインスタンスをそのクラスタに参加させます。

```
<destination_MT_OH>%dcm%\bin%\dcmctl joincluster -cl <name of cluster>
```

11. 次のコマンドで、その他の各インスタンスをそのクラスタに参加させます。

```
<destination_MT_OH>%dcm%\bin%\dcmctl joincluster -cl <name of cluster>
```

12. アップグレードされた構成でリクエストのルーティングに mod_oc4j.conf を使用する場合、次のように実行します。

- a. インスタンスのいずれかで <destination_MT_OH>%Apache%\Apache%\conf%\mod_oc4j.conf ファイルを表示し、Oc4jMount ディレクティブのインスタンス名およびクラスタ名をメモします。
- b. インスタンス名をアップグレードされたインスタンスのインスタンス名に変更します（クラスタ名も必要に応じて変更します）。
- c. 新しいクラスタの各インスタンスで、Oc4jMount ディレクティブを mod_oc4.conf ファイルにコピーします。
- d. Oc4jMount ディレクティブの URL パターンに一致するリクエストが正しいインスタンスにルーティングされることを確認します。

3.12 アップグレードされた中間層インスタンスの起動

OracleAS Upgrade Assistant の処理が終了し、該当するすべての手動アップグレード・タスクを完了したら、アップグレードされた中間層インスタンスを起動します。中間層インスタンスが **Infrastructure** を使用する場合、**Infrastructure** が実行されていることを確認します。(OracleAS Upgrade Assistant では **Infrastructure** が実行されている必要があります。すでに実行されているはずですが、実行されていない場合は 3-11 ページの [3.5.2 項「Infrastructure の起動」](#) の指示に従ってください。)

インスタンスを起動する前に、ソース Oracle ホームのすべてのサービスの起動タイプを「**手動**」に設定します。詳細およびこの設定が必要な理由については、[3.14.1 項「Windows コンポーネント・サービスの起動タイプの変更」](#) を参照してください。

中間層インスタンスを起動する手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを実行して、Application Server コンポーネントを起動します。

```
<destination_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl startall
```

Oracle Process Manager and Notification およびそれが管理するすべてのプロセス (Distributed Configuration Management、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、OracleAS Web Cache、Oracle Application Server Forms Services および Oracle Application Server Reports Services) が開始されます。

2. 次のコマンドを実行して、Application Server Control を起動します。

```
<destination_MT_OH>%bin%emctl start iasconsole
```

3.12.1 Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページへのアクセス (PDK 9.0.2.4.0 のみ)

3-50 ページの [3.8.4.7 項「Portal Tools \(OmniPortlet および Web クリップング\) プロバイダのリストア」](#) の説明に従って Web クリップング・プロバイダをリストアした場合、次の手順に従って Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページにアクセスします。

1. 次の URL にアクセスします。

```
http://<host>:<port>/portalTools/webClipping/providers/webClipping
```

<host> および <port> は、OracleAS Portal 中間層のホスト名およびポートです。

Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページが表示されます。以前 PDK 9.0.2.4.0 インストールで使用していたものと同じデータベースをリポジトリ・ターゲットに指定した場合、リポジトリのアップグレードも必要です。この場合、Web クリップング・プロバイダ・テスト・ページに「**アップグレード (9.0.2.4.0 から)**」リンクが表示され、これをクリックすることによって新しい表のインストールおよび既存のクリッピング定義の最新リリースへの移行が実行されます。

注意： このアップグレードを実行すると、Web クリッピング・リポジトリに格納されているクリッピング定義は PDK 9.0.2.4.0 で機能しなくなります。

2. 「アップグレード (9.0.2.4.0 から)」リンクをクリックします。

Web クリッピング・リポジトリをホスティングするデータベース・スキーマに表が追加され、すべての定義がアップグレードされます。

3.12.2 OmniPortlet プロバイダ・テスト・ページへのアクセス (PDK 9.0.2.4.0 のみ)

3-51 ページの 3.8.4.7.2 項「[OmniPortlet プロバイダの設定のリストア](#)」の説明に従って OmniPortlet プロバイダをリストアした場合、次の手順に従って OmniPortlet プロバイダ・テスト・ページにアクセスします。

1. 次の URL にアクセスします。

`http://<host>:<port>/portalTools/omniPortlet/providers/omniPortlet`
<host> および <port> は、OracleAS Portal 中間層のホスト名およびポートです。

OmniPortlet プロバイダ・テスト・ページが表示されます。

2. 保護データ・リポジトリのステータスの隣の「編集」リンクをクリックします。プロバイダの編集: Web クリッピング・ページの「リポジトリ設定」セクションに、Web クリッピング・リポジトリのデータベース接続情報が示されます。
3. 「OK」をクリックして設定を保存します。

OmniPortlet の provider.xml ファイルが、保護データをリポジトリに保存するための正しい <vaultId> タグで更新されます。

3.12.3 OracleAS Portal プロバイダ情報の更新

Portal インスタンスは、URL によって Web プロバイダにアクセスします。この URL を指定する処理は、プロバイダ登録といいます。アップグレード先 Oracle ホームにソース Oracle ホームと異なるホスト名またはポート番号（あるいはその両方）を使用してアクセスする場合、または Web プロバイダが異なる URL パスにデプロイされている場合、更新された Web プロバイダにアクセスするために使用される URL を更新する必要があります。Web プロバイダは複数の Portal インスタンスによって参照可能であるため、それらのすべての URL を更新する必要があります。

Web プロバイダの URL を更新する手順は、次のとおりです。

1. 管理者として OracleAS Portal にログオンします。

2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
「Portal ナビゲータ」ページが表示されます。
3. 「プロバイダ」タブをクリックします。
4. 「登録されたプロバイダ」をクリックします。
登録されたプロバイダのソートされたリストが表示されます。
5. 必要に応じて「次へ」または「前」リンクを使用して、更新するプロバイダを探します。
6. 更新するプロバイダの「登録の編集」リンクをクリックします。
「プロバイダの編集」ページが表示されます。
7. 「接続」タブをクリックします。
8. URL を更新してプロバイダの新しい場所を反映します。
9. 「OK」または「適用」をクリックして変更内容を保存します。

3.12.4 イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダの更新

イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダの定義は、リリース 2 (9.0.2) 以上で変更されています。したがって、OracleAS Portal リポジトリでプロバイダを更新する必要があります。プロバイダを参照する OracleAS Portal インスタンスごとに、次の手順を繰り返します。

Web プロバイダの URL を更新する手順は、次のとおりです。

1. 管理者として OracleAS Portal にログインします。
2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
「Portal ナビゲータ」ページが表示されます。
3. 「プロバイダ」タブをクリックします。
4. 「登録されたプロバイダ」をクリックします。
登録されたプロバイダのソートされたリストが表示されます。
5. 必要に応じて「次へ」または「前」リンクを使用して、該当のイベント / パラメータ受渡しのプロバイダを探します。
6. 該当のイベント / パラメータ受渡しのプロバイダの「更新」リンクをクリックします。

3.12.5 Oracle Call Interface のコンポーネント・エラーの解決

アップグレードに成功したが、Oracle Call Interface を使用するコンポーネントが正常に機能しない場合、tnsnames.ora ファイルがアップグレードされていないか、アップグレードが不適切であった可能性があります。3-51 ページの 3.8.9 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」の手順およびアップグレード方針を確認し、Oracle Call Interface を使用するコンポーネントに関する必要なエントリがすべてこのファイルに含まれているかどうかを調べます。

3.13 中間層のアップグレードの検証

この項では、中間層のアップグレード後にアップグレードが正常に行われたことを検証するために実行するタスクについて説明します。

3.13.1 中間層コンポーネントの動作の確認

次の手順に従って、アップグレードされた中間層コンポーネントが起動することを確認します。

1. ブラウザで、10g (9.0.4) 中間層の Oracle ホームの Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control の URL を入力してアクセスします。正確なホスト名およびポート番号を入力してください。たとえば、次に示すとおりです。

`http://midtierhost.mycompany.com:1812`

「Oracle Enterprise Manager」ページが表示されます。「スタンドアロン・インスタンス」セクションに中間層インスタンスのリンクが表示されます。

2. そのリンクをクリックします。
「システム・コンポーネント」ページが表示されます。
3. コンポーネントが実行されていることを確認します。
4. 使用しているコンポーネントの構成情報が 10g (9.0.4) の Oracle ホームに反映されていることを確認します。

3.13.2 重要な URL のチェック

次の手順に従って、Oracle HTTP Server およびアプリケーションの URL にアクセスできることを確認します。

1. 前のリリースでアクセスしていた同じホストおよびポートの Oracle HTTP Server にアクセスできることを URL を入力して確認します。正確なホスト名およびポート番号を入力してください。たとえば、次に示すとおりです。

`http://midtierhost.mycompany.com:7777`

2. 前のリリースで運用していたアプリケーションの URL にアクセスできることを確認します。さらに、そのアプリケーションが前のリリースと同じように機能することを確認します。

3.14 アップグレード後のソース Oracle ホームに関する考慮事項

アップグレード処理では、ソース Oracle ホームは変更されずに残されます。現在のインストール・タイプおよび将来の必要性に応じて、それぞれの理由でソース Oracle ホームの削除または保持を選択できます。この項では、ソース Oracle ホームの廃棄、ソース Oracle ホームを保持する理由、および再利用するためにソース Oracle ホームを元に戻す手順について説明します。

注意： 特定のコンポーネントにはアップグレード後も同じポート値が設定されるので、保持した場合のソース Oracle ホームはアップグレード先 Oracle ホームと同時に運用できません。3-65 ページの [3.10 項「アップグレード後のポート値と portlist.ini ファイル」](#) を参照してください。

3.14.1 Windows コンポーネント・サービスの起動タイプの変更

アップグレード後にソース Oracle ホームを使用しない場合、ソース Oracle ホームの各 Windows サービスの「**スタートアップの種類**」を「**手動**」に設定する必要があります。

この設定は、ソースおよびアップグレード先の Oracle ホーム間でのポート競合を回避するために、システムを再起動する前に各サービスで行う必要があります。ポート競合が発生すると、一部のサービスは起動されず、一部のコンポーネントが使用できなくなります。

スタートアップの種類を変更する手順は、次のとおりです。

1. 「**コンポーネント サービス**」ウィンドウに移動します。
2. 左側のペインの「**サービス (ローカル)**」をクリックします。
3. 右側のペインで変更するサービスを右クリックします。
メニューが開きます。
4. メニューから「**プロパティ**」を選択します。**アプリケーションのプロパティ**・ウィンドウが開きます。
5. 「**スタートアップの種類**」ドロップダウン・リストから「**手動**」を選択し、「**OK**」をクリックします。
6. 各サービスで手順 3、4 および 5 を繰り返します。

注意： Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、以前のリリースとサービスの数が異なります。リリース間でのコンポーネント・サービスの相違点については、[1.6 項「アップグレード後の Windows コンポーネント・サービスについての注意」](#)を参照してください。

3.14.2 ソース Oracle ホームの廃棄

アップグレードが成功して必要なバックアップをすべて行い、ソース Oracle ホームに戻す予定がないことを確認したら、ソース Oracle ホームからファイルを削除できます。インスタンスの削除には Oracle Universal Installer を使用します。

関連項目： インスタンスを削除する方法については、『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』を参照してください。

同じコンピュータに 10g (9.0.4) インスタンスもある場合に、リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) インスタンスを削除するにはパッチが必要です。さらに、この場合の削除は構成に関する問題に該当することもあります。

関連項目： パッチを適用する手順および詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

3.14.2.1 アプリケーション・ファイルおよびログ・ファイルの保存

アップグレード先 Oracle ホームによって参照または使用されるソース Oracle ホームのアプリケーション・ファイルまたはログ・ファイルがある場合、ソース Oracle ホームを廃棄する前にそれらを別の場所に移し、アップグレード先 Oracle ホームにおいてファイルへの参照設定を新しい場所に変更する必要があります。

3.14.3 将来の言語のロードに備えたソース Oracle ホームの保持

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Portal リポジトリの運用を続ける場合、後で他の言語を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Portal リポジトリにロードする可能性があるのであれば、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Oracle ホームを廃棄しないでください。Oracle Application Server 10g (9.0.4) の言語をロードするためのユーティリティは、リリース 2 (9.0.2) の Oracle9iAS Portal と互換性がありません。

3.14.4 ソース Oracle ホームの回復：「Portal サービスの監視」リンクのリセット

アップグレード後に Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 中間層を再利用することを決定した場合、「Portal ビルダー」ページで「サービス」ポートレットの「Portal サービスの監視」リンクをリセットする必要があります。これを行うために、ソース Oracle ホームに

monseed.sql スクリプトが提供されています。monseed.sql スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 中間層の Oracle ホームに設定します。
2. `<source_MT_OH>%portal%admin%plsql%www%` ディレクトリに移動します。
3. SQL*Plus を使用して Portal スキーマに接続します。
4. 次のコマンドを実行します。

```
@monseed.sql <EM host> <EM port> <Portal DAD> <middle tier host>  
<middle tier port> <iAS instance name>
```

- `<EM host>` は、リリース 2 (9.0.2) の Oracle Enterprise Manager のホスト名です。
- `<EM port>` は、リリース 2 (9.0.2) の Oracle Enterprise Manager のポートです。
- `<Portal DAD>` は、Portal DAD の名前です (デフォルトは portal)。
- `<middle tier host>` は、リリース 2 (9.0.2) 中間層のホスト名です。
- `<middle tier port>` は、リリース 2 (9.0.2) 中間層のポートです。
- `<iAS instance name>` は、インストール時に与えられたリリース 2 (9.0.2) 中間層のインスタンス名です。この名前は、`<source_MT_OH>%sysman%emd%targets.xml` ファイルの、Oracle9iAS Portal 中間層を実行している HTTP Server ターゲットの Composite Membership セグメントにあります。HTTP Server ターゲットを特定するには、Oracle9iAS Portal 中間層を実行している HTTP Server のホームと一致する ORACLE_HOME プロパティを持つターゲットを探します。

Metadata Repository のアップグレード

この章では、カスタマ・データベースのスキーマや OracleAS Portal リポジトリなどの Metadata Repository をアップグレードする方法について説明します。この章の主な項は、次のとおりです。

- 4-2 ページの [4.1 項「Metadata Repository のアップグレード処理について」](#)
- 4-3 ページの [4.2 項「Metadata Repository のアップグレードの準備」](#)
- 4-10 ページの [4.3 項「Metadata Repository のアップグレードの実行」](#)
- 4-12 ページの [4.4 項「Metadata Repository のアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-30 ページの [4.5 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード」](#)
- 4-61 ページの [4.6 項「カスタマ・データベースにおけるスキーマのアップグレード」](#)
- 4-62 ページの [4.7 項「UDDI アプリケーションの 10g \(9.0.4\) の機能のアクティブ化」](#)

注意： この章の説明では、<Infra_OH> はアクティブな Infrastructure の Oracle ホームを指します。これは、Metadata Repository のアップグレードが、Identity Management のアップグレードの実行前に Infrastructure インスタンスで実行された場合は、リリース 2 (9.0.2) の Oracle ホームに設定されます。Identity Management のアップグレードがすでに Infrastructure インスタンスで実行されている場合は、10g (9.0.4) Oracle ホームに設定されます。

具体的には、<Infra_OH> は、Metadata Repository を保持するデータベース・インストールを含む Oracle ホームを指します。Metadata Repository が Identity Management とは別のインストールに存在している場合、<Infra_OH> は Metadata Repository を含むインストールを指します。

4.1 Metadata Repository のアップグレード処理について

コンポーネント・スキーマは、Identity Management スキーマとともに Metadata Repository に含まれています。ただし、コンポーネント・スキーマのアップグレード処理は、Identity Management スキーマのアップグレード処理とは異なります。コンポーネント・スキーマは、[図 4-1「Metadata Repository のアップグレード」](#)に示すように、個々のスクリプトによりアップグレードされます。Identity Management スキーマは、Oracle Universal Installer によりアップグレードされます。

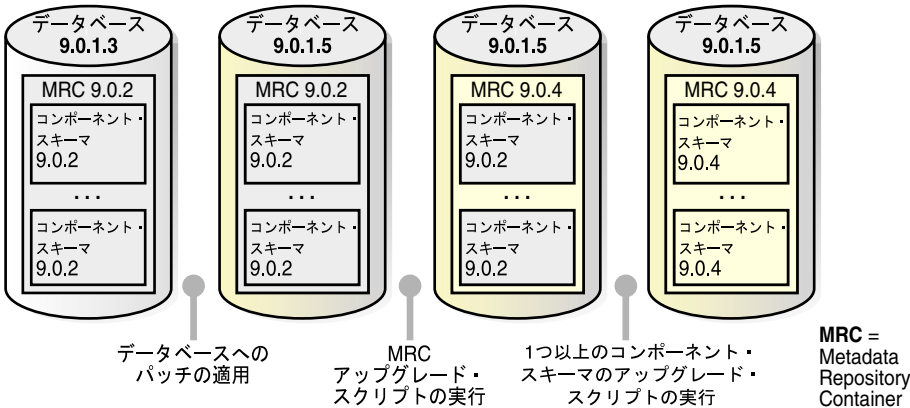
注意： Metadata Repository をアップグレードする前に、9.0.1.5 パッチをデータベースに適用する必要があります。データベースのデフォルトのバージョンは 9.0.1.3 です。

関連項目： Metadata Repository に関連した Identity Management のアップグレード処理の詳細は、5-4 ページの [5.1.2 項「Identity Management のアップグレード処理について」](#)を参照してください。

Metadata Repository のアップグレードには、次の手順があります。

1. Metadata Repository Container のアップグレード・スクリプトを実行します。
2. 1 つ以上のコンポーネント・アップグレード・スクリプトを実行します。実行するコンポーネント・アップグレード・スクリプトは、構成するコンポーネントによって決まります。使用するインストール・タイプに推奨される方法は、4-10 ページの [4.3 項「Metadata Repository のアップグレードの実行」](#)を参照してください。

図 4-1 Metadata Repository のアップグレード



4.2 Metadata Repository のアップグレードの準備

Metadata Repository のアップグレードの他のタスクを開始する前に、Infrastructure の Oracle ホームで次の手順を実行します。

1. すべてのプロセスを停止します。
2. データベースをバックアップします。
3. Infrastructure の Oracle ホームに対して RDBMS 9.0.1.5 パッチ・セットをインストールします (Identity Management のアップグレード時にインストールされていない場合)。
4. データベースに無効なオブジェクトが存在しないことを確認します。

関連項目： 手順については、5-59 ページの [5.6.1 項「utlrp.sql ユーティリティの実行」](#) および 5-60 ページの [5.6.2 項「無効なデータベース・オブジェクトのチェック」](#) を参照してください。

5. Repository Creation Assistant CD-ROM を入手します。
6. データベース・サーバーおよびリスナーを起動します。
7. DBMS_IAS_UPGRADE パッケージをインストールします。

関連項目： 手順については、4-4 ページの [4.2.2 項「DBMS_IAS_UPGRADE パッケージのロード」](#) を参照してください。

8. Metadata Repository Container をアップグレードします。

関連項目： 手順については、4-4 ページの [4.2.3 項「Metadata Repository Container のアップグレード」](#) を参照してください。

9. データベースに無効なオブジェクトが存在しないことを確認します。

関連項目： 手順については、5-59 ページの [5.6.1 項「utlrp.sql ユーティリティの実行」](#) および 5-60 ページの [5.6.2 項「無効なデータベース・オブジェクトのチェック」](#) を参照してください。

4.2.1 Metadata Repository をアップグレードする環境の設定

Metadata Repository アップグレードでは大部分の手順を実行するために、Infrastructure の Oracle ホームを指し示すように環境を設定する必要があります。つまり、ORACLE_HOME 環境変数を <Infra_OH> に設定し、ORACLE_SID 環境変数を Infrastructure データベースのインスタンス名に設定します。たとえば、次に示すとおりです。

```
set ORACLE_HOME=c:\¥oracle¥home1
```

```
set ORACLE_SID=iasdb1  
set PATH=%ORACLE_HOME%\bin;%PATH%
```

4.2.2 DBMS_IAS_UPGRADE パッケージのロード

10g (9.0.4) Infrastructure にアップグレードする前に、DBMS_IAS_UPGRADE と呼ばれる PL/SQL パッケージをロードする必要があります。このパッケージを使用すると、スキーマ・アップグレード・スクリプトをユーザー SYS として実行する際に、権限を付与できるようになります。

パッケージをロードする手順は、次のとおりです。

1. データベースおよびリスナーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が *<Infra_OH>* に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. *<repCA_CD>%repCA%\rdbms\admin* ディレクトリに移動します。
4. SQL*Plus に、ユーザー SYS として接続します。
5. 次のコマンドを実行します。

```
@dbmsiasu.sql
```

```
@prvtiasu.plb
```

次のメッセージが表示されます。

```
Package created.
```

```
Package body created.
```

PL/SQL パッケージ SYS.DBMS_IAS_UPGRADE がインストールされます。

4.2.3 Metadata Repository Container のアップグレード

Metadata Repository Container のアップグレード処理 (mrc.pl スクリプト) では、次の 2 つの機能が実行されます。

- Metadata Repository に、新しい表領域およびスキーマが作成されます (ias_meta、wcrsys_ts、ocats、ip_dt、ip_rt、ip_idx、ip_lob OLTS_SVRMGSTORE、oltssbattrstore の各表領域、および wcrsys、oca、oraoca_public、ip、wk_test、internet_appserver_registry の各スキーマ)。

注意： Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure のインストール後に、次にリストされている項目のいずれかを手動で作成した場合は、Metadata Repository Container のアップグレードを実行する前に別の場所に移動するか、削除する必要があります。

表領域:ias_meta、wcrsys_ts、ocats、ip_dt、ip_rt、ip_idx、ip_lob、OLTS_SVRMGSTORE、olts_battrstore

スキーマ:wcrsys、oca、oraoca_public、ip、wk_test、internet_appserver_registry

移動または削除を実行しない場合は、Metadata Repository Container のアップグレードに失敗します。OracleAS RepCA のユーザーにも同様の問題が発生します。この問題は、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』のすでに使用されているスキーマ名に関する項およびすでに使用されている表領域名に関する項で詳細に説明されています。

- リポジトリの Oracle Internet Directory エントリを更新して、10g (9.0.4) のセキュリティ・アーキテクチャに対応します。

Metadata Repository と Oracle Internet Directory が別々のコンピュータに存在して、別々のアクセス権を必要とする場合があるため、スクリプトはスクリプトの起動時に付与される資格証明に応じて、一方の機能のみまたは両方の機能を実行できるように設計されています。

Metadata Repository の作成スクリプトは、他のすべてのスキーマ・アップグレード・スクリプトが実行される前に実行する必要があります。これは、新しいスキーマが、mrc.pl により加えられる変更の影響を受けるためです。

アップグレードする構成に応じて、次のいずれかの手順を実行します。

- Metadata Repository データベースの DBA 資格証明を持っている場合、4-5 ページの [4.2.3.1 項「新しいスキーマを作成する mrc.pl の実行」](#) の指示に従います。
- Oracle Internet Directory の管理資格証明を持っている場合、4-7 ページの [4.2.3.2 項「Oracle Internet Directory のエントリを更新する mrc.pl の実行」](#) の指示に従います。
- Metadata Repository データベースの DBA 資格証明と、Oracle Internet Directory の管理資格証明を持っており、両方のアップグレード機能を実行する場合、4-8 ページの [4.2.3.3 項「新しいスキーマの作成と Oracle Internet Directory のエントリの更新を行う mrc.pl の実行」](#) の指示に従います。

4.2.3.1 新しいスキーマを作成する mrc.pl の実行

Metadata Repository の新しいスキーマのサポートを作成する手順は、次のとおりです。

1. データベースおよびリスナーが実行されていることを確認します。

2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. `<repCA_CD>%repCA%\mrc\upgrade` ディレクトリに移動します。
4. 新しい表領域用の新しいデータベース・ファイルを作成する書込み権限が有効になっている既存のディレクトリが存在することを確認します。(このディレクトリは、スクリプトを起動するコマンドの一部として指定します。)
5. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%\MSWin32-x86%perl mrc.pl d -dbpwd <SYS user password> -connstring <conn string> -dspace <dir>
```

- `<SYS user password>` は、dba パスワードです。
- `<conn string>` は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。
- `<dir>` は、新しい表領域を含む新しいデータベース・ファイルを作成するディレクトリです。

たとえば、次のようになります。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%\MSWin32-x86%perl mrc.pl d -dbpwd "change_on_install" -connstring "mycompany.com:1521:iasdb2" -dspace c:\oracle1\mydir\ORA_IAS_902
```

前述のパラメータをコマンドラインですべて指定する必要はありません。スクリプトにより、デフォルト値を使用できないパラメータの入力が要求されます。たとえば、パスワードをコマンドラインで入力したくない場合に、要求された時点でのみ入力することにより、パスワードがクリア・テキストで画面に表示されません。

新しいスキーマが正常に作成された場合は、次のメッセージが表示されます。

```
Creation of new schemas was successful
```

4.2.3.1.1 新しいスキーマ作成用 mrc.pl が正常に実行されたことの検証

mrc.pl が正常に実行されたか、または以前に実行されたことがあるかを確認する手順は、次のとおりです。

1. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory サーバーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. `<repCA_CD>%repCA%\mrc\upgrade` ディレクトリに移動します。

4. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl mrc.pl dv -dbpwd <SYS
user password> -ousr <oid admin user name> -opwd <oid admin
user password> -connstring <database connect string>
```

- <SYS user password> は、dba パスワードです。
- <oid admin user name> は、Oracle Internet Directory の管理ユーザー名です。
- <oid admin password> は、Oracle Internet Directory の管理ユーザーのパスワードです。
- <conn string> は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。

4.2.3.2 Oracle Internet Directory のエントリを更新する mrc.pl の実行

Oracle Internet Directory のエントリを更新する手順は、次のとおりです。

1. 4-5 ページの [4.2.3.1 項「新しいスキーマを作成する mrc.pl の実行」](#) で説明されていると
おりに、mrc.pl を実行して新しいスキーマが作成されたことを確認します。
2. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory が実行されていることを確認
します。
3. ORACLE_HOME 環境変数が <Infra_OH> に設定されており、ORACLE_SID 環境変数
が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されて
いない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の
設定」](#) の指示に従います。
4. <repCA_CD>%repCA%mrc%upgrade ディレクトリに移動します。
5. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl mrc.pl u -ousr <oid
admin user name> -opwd <oid admin password> -connstring <conn
string>
```

- <oid admin user name> は、Oracle Internet Directory の管理ユーザー名です。
- <oid admin password> は、Oracle Internet Directory の管理ユーザーのパスワードです。
- <conn string> は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。

たとえば、次のようになります。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl mrc.pl u -ousr
"cn=orcladmin" -opwd welcome1 -connstring
"mycompany.us.oracle.com:1521:iasdb2"
```

OID エントリの作成とランダム化されたパスワードの更新が正常に行われた場合、次のメッセージが表示されます。

```
"Update of new OID entries successful"
```

4.2.3.2.1 Oracle Internet Directory 更新用の mrc.pl が正常に実行されたことの検証

mrc.pl が正常に実行されたか、または以前に実行されたことがあるかを確認する手順は、次のとおりです。

1. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory サーバーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」](#) の指示に従います。
3. `<repCA_CD>%repCA%mrc%upgrade` ディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl mrc.pl uv -dbpwd<SYS  
user password> -ousr <oid admin user name> -opwd <oid admin  
user password> -connstring <database connect string>
```

- `<SYS user password>` は、dba パスワードです。
- `<oid admin user name>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザー名です。
- `<oid admin password>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザーのパスワードです。
- `<conn string>` は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。

4.2.3.3 新しいスキーマの作成と Oracle Internet Directory のエントリの更新を行う mrc.pl の実行

この方法で mrc.pl を実行すると、d および u オプションを 1 回の手順で実行できます。mrc.pl を、d オプションまたは u オプションのどちらかを使用して実行した場合には、この複合的な処理は実行できません（4-5 ページの [4.2.3.1 項](#) および 4-7 ページの [4.2.3.2 項](#) を参照）。Metadata Repository で新しいスキーマを作成し、Oracle Internet Directory のエントリを更新する手順は、次のとおりです。

1. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory サーバーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」](#) の指示に従います。

3. `<repCA_CD>%repCA%\mrc\upgrade` ディレクトリに移動します。
4. 新しい表領域用の新しいデータベース・ファイルを作成する書き込み権限が有効になっている既存のディレクトリが存在することを確認します。(このディレクトリは、スクリプトを起動するコマンドの一部として指定します。)
5. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%\MSWin32-x86%perl mrc.pl du -dbpwd <SYS
user password> -dspace <tablespace directory> -ousr <oid admin
user name> -opwd <oid admin user password> -connstring <database
connect string>
```

- `<SYS user password>` は、dba パスワードです。
- `<tablespace directory>` は、作成する新しい表領域を含むファイルを置く既存のディレクトリです。
- `<oid admin user name>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザー名です。
- `<oid admin password>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザーのパスワードです。
- `<conn string>` は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。

たとえば、次のようになります。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%\MSWin32-x86%perl mrc.pl du -dbpwd sys
-dspace c:\oracle\infra902\oradata\iasb -ousr "cn=orcladmin"
-opwd welcome1 -connstring "mycompany.us.oracle.com:1521:iasdb2"
```

4.2.3.3.1 新しいスキーマ作成用および Oracle Internet Directory 更新用の mrc.pl が正常に実行されたことの検証

mrc.pl が正常に実行されたか、または以前に実行されたことがあるかを確認する手順は、次のとおりです。

1. データベース、リスナーおよび Oracle Internet Directory サーバーが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. `<repCA_CD>%repCA%\mrc\upgrade` ディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1%bin%\MSWin32-x86%perl mrc.pl duv -dbpwd <SYS
user password> -ousr <oid admin user name> -opwd <oid admin
user password> -connstring <database connect string>
```

- `<SYS user password>` は、dba パスワードです。
- `<oid admin user name>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザー名です。
- `<oid admin password>` は、Oracle Internet Directory の管理ユーザーのパスワードです。
- `<conn string>` は、host:port:SID 形式のデータベース接続文字列です。

4.2.3.4 エラーの解決

アップグレード処理中にエラーが発生することがあります。アップグレード・スクリプトが返す一般的なエラーとその解決方法は、次のとおりです。

java.sql.SQLException: ORA-01034 Oracle は使用できません。

原因：データベースが実行されていません。

処置：データベースを起動します。

java.sql.SQLException: IO 例外 : The Network Adapter could not establish the connection.

原因：リスナーが実行されていません。

処置：リスナーを起動します。

Invalid OID password

原因：Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザーのパスワードが正しくありません。

処置：正しいパスワードを入力します。

4.3 Metadata Repository のアップグレードの実行

4-3 ページの 4.2 項「[Metadata Repository のアップグレードの準備](#)」で説明されている Metadata Repository のアップグレードの準備手順をすべて実行したら、スクリプトを実行して、Oracle Application Server 10g (9.0.4) で使用する予定のコンポーネントの Metadata Repository にあるスキーマをアップグレードできます。次の点に注意してください。

- コンポーネント・スキーマをアップグレードするたびにアップグレードをテストするという方法でアップグレードを完了させることができます。あるいは、コンポーネント・スキーマを連続的にアップグレードして、すべてのアップグレードを一度にテストするという方法も選択できます。
- 必要に応じて、Metadata Repository のすべてのコンポーネントのサブセットをアップグレードできますが、Metadata Repository はすべてのコンポーネント・スキーマがアップグレードされるまでリリース 10g (9.0.4) とはみなされません。

選択したコンポーネントのアップグレード・スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. 次の手順に従って、Metadata Repository が存在する Infrastructure を使用する中間層をすべて停止します。

- a. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を次のコマンドで停止します。

```
<destination_MT_OH>%bin%emctl stop iasconsole
```

- b. OPMN およびそれによって管理されるプロセスを次のコマンドで停止します。

```
<destination_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl stopall
```

- c. アップグレード先中間層の Oracle ホームで実行中のその他のすべてのプロセスを停止します。

2. 選択したコンポーネント・スキーマをアップグレードするには、次の関連する項の指示に従います。

- 4-12 ページの [4.4.1 項「ProcessConnect スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-14 ページの [4.4.2 項「Oracle Application Server Certificate Authority スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-15 ページの [4.4.3 項「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-23 ページの [4.4.5 項「Oracle Application Server Syndication Server のアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-24 ページの [4.4.6 項「Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-24 ページの [4.4.7 項「Web クリップング・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-30 ページの [4.5 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード」](#)

3. 次のコマンドを実行して、中間層の Application Server コンポーネントを起動します。

- a. OPMN およびそれによって管理されるプロセスを次のコマンドで起動します。

```
<destination_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl startall
```

Oracle Process Manager and Notification およびそれが管理するすべてのプロセス (Distributed Configuration Management、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、OracleAS Web Cache、Oracle Application Server Forms Services および Oracle Application Server Reports Services) が開始されます。

- b. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を次のコマンドで起動します。

```
<destination_MT_OH>%bin%emctl start iasconsole
```

4.4 Metadata Repository のアップグレード・スクリプトの実行

この項では、Metadata Repository のスキーマをアップグレードする、Repository Creation Assistant CD-ROM の各コンポーネントのアップグレード・スクリプトの実行方法について説明します。これは、Infrastructure データベースを使用する構成において、それらのコンポーネントが構成されている場合にのみ適用されます。

4-10 ページの [4.3 項「Metadata Repository のアップグレードの実行」](#) で概要が説明されている手順 2 において、これらの手順（1 つ以上）を実行します。

注意： 構成される各コンポーネントには一連の検証手順があり、コンポーネントのアップグレードが成功したかどうかを調べることができます。10g (9.0.4) にアップグレードする各コンポーネントについて、必ずすべての検証手順を実行してください。

この項では、次の項目について説明します。

4-10 ページの [4.4.1 項「ProcessConnect スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4-14 ページの [4.4.2 項「Oracle Application Server Certificate Authority スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4-15 ページの [4.4.3 項「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4-23 ページの [4.4.5 項「Oracle Application Server Syndication Server のアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4-24 ページの [4.4.6 項「Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4-27 ページの [4.4.7 項「Web クリップング・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行」](#)

4.4.1 ProcessConnect スキーマのアップグレード・スクリプトの実行

ProcessConnect スキーマをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. ディレクトリ <Infra_OH>%ip%admin を作成します。
2. <repCA_CD>%repCA%ip%admin ディレクトリに移動します。
3. ORACLE_HOME 環境変数が <Infra_OH> に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されて

いない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」の指示に従います。

4. PATH 環境変数に、<Infra_OH>%bin が含まれていることを確認します。
5. REPCA_ORACLE_HOME 環境変数を、<repCA_CD>%repCA を指し示すように設定します。これは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Repository Creation Assistant CD-ROM へのパスです。
6. 次のコマンドで、アップグレード・スクリプトを起動します。

```
upgradeInfra.bat
```

パスワードを要求するプロンプトが表示されます。

7. SYS パスワードを入力します。

スクリプトは、すべての出力内容を画面および

<Infra_OH>%ip%admin%ipupgrade.log ファイルに書き出します。処理が完了するまでに数分かかります。完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
PL/SQL procedure successfully completed.
```

正常に完了した場合は、ログ・ファイルにエラー・メッセージが出力されません。アップグレードに成功しなかった場合は、次のメッセージのうち 1 つ以上がファイルに出力されます。

ORA-00942: 表またはビューが存在しません。

原因: 接続するデータベース・ユーザーには、IP スキーマにアクセスする権限がありません。

処置: SYS ユーザー権限でスクリプトを再実行します。

ORA-24010: キュー xxx_QUEUE は存在しません

原因: キュー xxx_QUEUE がリポジトリに存在しません。

処置: このエラーは無視します。これは、xxx_QUEUE が作成される前に xxx_QUEUE が削除されたために発生します。

ORA-24002: QUEUE_TABLE xxx は存在しません。

原因: QUEUE_TABLE xxx がリポジトリに存在しません。

処置: このエラーは無視します。これは、xxx_QUEUE が作成される前に xxx_QUEUE が削除されたために発生します。

4.4.1.1 アップグレード結果の検証

アップグレード結果を検証する手順は、次のとおりです。

1. SQL*Plus に sysdba としてログインします。

2. 次のコマンドを実行します。

```
SET SERVEROUTPUT ON

execute ip.validate_components
```

次のいずれかのメッセージが表示されます。

```
SUCCESSFUL upgrade of schema: IP
```

```
FAILED upgrade of schema: IP
```

```
ORA-20000: VERIFICATION FAILED
```

列または表が存在しないことを示す他のメッセージが表示されることもあります。

4.4.2 Oracle Application Server Certificate Authority スキーマのアップグレード・スクリプトの実行

Oracle Application Server Certificate Authority スキーマをアップグレードする手順は、次のとおりです。スクリプトを起動する前に、
<destination_Infra_OH>%dbs%init<sid>.ora の open_cursors 設定の値が 300 以上であることを確認します。

1. ORACLE_HOME 環境変数が <Infra_OH> に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」](#) の指示に従います。
2. データベースおよびリスナーが実行されていることを確認します。
3. <repCA_CD>%repCA%oca%sql% ディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドで、アップグレード・スクリプトを起動します。

```
sqlplus "system/<your system password as sysdba>"
@ug_ocadocat.sql
```

<your system password as sysdba> は、システム・ユーザーのパスワードです。

4.4.2.1 アップグレード結果の検証

アップグレードが成功したかどうかを検証する手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus "system/<your system password as sysdba>"
```

<your system password as sysdba> は、システム・ユーザーのパスワードです。

2. 次のコマンドを実行します。

```
select table_name, owner from all_tables where owner='OCA';
```

アップグレードが成功すると、次の内容が表示されます。

例 4-1 Oracle Application Server Certificate Authority スキーマのアップグレード結果の検証

TABLE_NAME	OWNER
-----	-----
OCA_CONFIG	OCA
OCA_PARAMETER_CONFIG	OCA
OCA_TASKS	OCA
OCA_TASKS_EXECUTION	OCA
OCM_CERTIFICATE	OCA
OCM_CERTIFICATE_META	OCA
OCM_CERTIFICATE_REQUEST	OCA
OCM_CERTIFICATE_REQUEST_META	OCA
OCM_CERTIFICATE_SERIAL	OCA
OCM_ERROR_LOG	OCA
OCM_JAZN	OCA
11 rows selected.	

このスクリプトにより実行される処理については、A-19 ページの付録 A.2.4「[Oracle Application Server Certificate Authority のアップグレード処理](#)」で詳細に説明します。

4.4.3 Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・スクリプトの実行

この項では、Metadata Repository の Oracle Ultra Search スキーマをアップグレードする方法について説明します。

4.4.3.1 Oracle Ultra Search スキーマのアップグレードの準備

スキーマをアップグレードする前に、次の手順を実行してシステムを準備します。

関連項目： Oracle Ultra Search 管理ツールの使用方法については、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

1. 必要に応じて、4-10 ページの 4.3 項「[Metadata Repository のアップグレードの実行](#)」の手順 3 を実行して中間層を起動します。
2. Oracle Ultra Search のすべての同期スケジュールを使用不可にします。
 - a. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control にログインします。
 - b. 「スタンドアロン・インスタンス」セクションで、使用する中間層インスタンスを選択します。

インスタンスのシステム・コンポーネントが表示されます。

- c. 「システム・コンポーネント」セクションで、**OC4J_Portal** を選択し、「起動」ボタンをクリックして OC4J インスタンスを起動します。
 - d. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を使用して、Portal インスタンスから Ultra Search インスタンスにナビゲートします。または、次の URL にアクセスして Oracle Ultra Search 管理ツールにログインすることもできます。

`http://<host>:<port>/ultrasearch/admin`
 - e. 「スケジュール」タブで、すべての Oracle Ultra Search インスタンスのすべてのクローラ同期スケジュールを停止して使用不可にします。
3. WKSYS の Oracle Ultra Search メタデータおよびユーザー・インタフェース・スキーマをバックアップします。アップグレード時にリカバリ不能なエラーが発生した場合、Oracle Ultra Search を前のリリースにリストアできます。
 4. 4-10 ページの [4.3 項「Metadata Repository のアップグレードの実行」](#) の手順 1 を実行して、中間層を停止します。

4.4.3.2 Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード

スキーマのアップグレード処理では、次のスクリプトを実行します。

- `upgradeInfra.bat`: スキーマをアップグレードするスクリプト
- `usca.bat`: アップグレード後の構成スクリプト

Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」](#) の指示に従います。
2. PATH 環境変数に、`<Infra_OH>%bin` が含まれていることを確認します。
3. REPCA_ORACLE_HOME 環境変数を、`<repCA_CD>%repCA` を指し示すように設定します。これは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Repository Creation Assistant CD-ROM へのパスです。
4. `<repCA_CD>%repCA%ultrasearch%setup` ディレクトリに移動します。
5. `upgradeInfra.bat` スクリプトが実行可能であることを確認します。次のコマンドでスクリプトを起動します。

upgradeInfra.bat

または

upgradeInfra.bat -l <log file path>.log

<log file path> は、スクリプトがログ・エントリを書き込むファイルのパスと名前です。たとえば、次に示すとおりです。

```
upgradeInfra.bat -l c:¥tmp¥log¥upgradeInfra.log
```

絶対パスを指定せずに、ファイル名のみを指定すると（例: upgradeInfra.bat -l upgradeInfra.log）、ログ・ファイル upgradeInfra.log は <Infra_OH> ディレクトリに配置されます。

ファイル名を指定しない場合、ログ・ファイルは

<Infra_OH>¥ultrasearch¥setup¥upgrade.log に書き込まれます。

パスワードを要求するプロンプトが表示されます。

6. データベース SYS ユーザーのパスワードを入力し、[Return] を押します。

処理が完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
End of Upgrade - Ultra Search
```

7. 10g (9.0.4) の中間層コンピュータにログインし、ORACLE_HOME 環境変数を <destination_MT_OH> に設定します。この設定は、usca.bat スクリプトに必要です。

注意： 複数の中間層が存在する場合、この手順のみを実行して、残りの手順はいずれか 1 つの中間層で実行します。

8. <destination_MT_OH>¥ultrasearch¥setup ディレクトリに移動します。
9. usca.bat スクリプトが実行可能であることを確認します。次のコマンドでスクリプトを起動します。

```
usca.bat backend_upgrade "cn=orcladmin" <password of the OID user 'orcladmin'>
```

たとえば、次に示すとおりです。

```
usca.bat backend_upgrade "cn=orcladmin" welcome1
```

10. プロンプトに対して応答を入力します。

入力した応答が表示され、それぞれの応答内容を確認するように要求されます。

4.4.3.3 Oracle Ultra Search スキーマ・メタデータの構成

スキーマ・メタデータを Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure Oracle ホームを使用するように構成するには、Infrastructure のどの部分を最初にアップグレードするかに応じて、この項のいずれかの手順あるいは両方の手順を実行します。

- Metadata Repository を最初にアップグレードする場合は、4-18 ページの [4.4.3.3.1 項「Java Runtime Environment \(JRE\) 1.4 のインストールと、JRE1.4 を使用する Oracle Ultra Search の構成」](#) の手順のみを実行します。
- Identity Management サービスを最初にアップグレードする場合、Metadata Repository が Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure Oracle ホームを使用しているときは、4-19 ページの [4.4.3.3.2 項「スキーマ構成スクリプトの実行」](#) の手順のみを実行して、Ultra Search が Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure Oracle ホームを使用するように構成します。Metadata Repository が、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure Oracle ホームを使用している場合は、4-18 ページの [4.4.3.3.1 項「Java Runtime Environment \(JRE\) 1.4 のインストールと、JRE1.4 を使用する Oracle Ultra Search の構成」](#) の手順のみを実行します。

4.4.3.3.1 Java Runtime Environment (JRE) 1.4 のインストールと、JRE1.4 を使用する Oracle Ultra Search の構成 次の手順に従って、Java Runtime Environment (JRE) 1.4 をインストールし、JRE1.4 を使用するように Oracle Ultra Search を構成します。

1. `<repCA_CD>%repCA%\ultrasearch\jre_upgrade` ディレクトリに移動します。
2. 次のコマンドを使用して、Oracle Universal Installer を起動します。
runInstaller
「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「次へ」をクリックします。
「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。
4. 「名前」フィールドに新しい Oracle ホームの名前を入力し、「パス」フィールドにフルパスを入力します。(Infrastructure Oracle ホームの場所には、JRE1.4 をインストールできません。)
5. 「次へ」をクリックします。
「サマリー」画面が表示されます。
6. 「インストール」をクリックします。
インストールが開始されます。インストールが完了するとプログレス・バーおよびメッセージに示され、**インストールの終了**画面が表示されます。
7. 「終了」をクリックします。
8. データベースに SYSDBA としてログインします。

9. 次のコマンドを実行します。

```
alter session set current_schema = wksys;

update wksys.wk$crawler_config_default set ccd_pvalue = '<new java
execution path>' where ccd_pname = 'CC_JAVA_EXEC_PATH';

exec wk_util.populate_crawler_config;

commit;
```

- <new java execution path> は、次のようになります。

```
<JRE 1.4 directory>%jre%1.4.1%bin%java -ms16m -mx256m
-Djava.library.path=<source_Infra_OH>%lib
```

例 4-2 JRE のインストールと Oracle Ultra Search の構成コマンド

```
update wksys.wk$crawler_config_default set ccd_pvalue = 'c:%oracle%
jre_home%jre%1.4.1%bin%java -ms16m -mx256m -Djava.library.path=c:%oracle%
infra_home%lib' where ccd_pname = 'CC_JAVA_EXEC_PATH';
```

注意： この手順を完了すると、クローラ・キャッシュ・ディレクトリとクローラ・ログ・ディレクトリがデフォルト値にリセットされます。それらの値は、Oracle Ultra Search 管理ツールを使用して更新できます。

4.4.3.3.2 スキーマ構成スクリプトの実行 次の手順に従って、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure Oracle ホームを使用するように Ultra Search を構成します。

1. ORACLE_HOME 環境変数を <destination_Infra_OH> に設定します。
2. ORACLE_SID 環境変数を Oracle Application Server 10g (9.0.4) Infrastructure データベースに設定します。
3. <destination_Infra_OH>%ultrasearch%admin> ディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus "sys/<SYS user password> as sysdba"
```

5. 次のコマンドを実行します。

```
wk0config.sql <WKSYS PW> <JDBC_CONNSTR> <LAUNCH_ANYWHERE>
<NET_SERVICE_NAME>
```

- <WKSYS PW> は WKSYS スキーマのパスワードです。パスワードが不明の場合は、次の手順を実行することによりパスワードを取得できます。

- a. 次のコマンドを使用して、Oracle Directory Manager を起動します。

```
ORACLE_HOME%bin%oidadmin
```

- b. Oracle Directory Manager に orcladmin ユーザーとしてログインします。
 - c. 「システム・オブジェクト」フレームで、「エントリ管理」、
「cn=OracleContext」、「cn=Products」、「cn=IAS」、「cn=IAS Infrastructure
Databases」、Metadata Repository の「orclReferenceName」の順に展開しま
す。
 - d. スキーマ WKSYS の「OrclResourceName」エントリを選択します。
 - e. 「プロパティ」タブの「orclpasswordattribute」フィールドにパスワードが表示
されます。
- <JDBC_CONNSTR> は、JDBC 接続文字列です。データベースが Real Application
Clusters (RAC) 環境にない場合は、[ホスト名]:[ポート]:[sid] の形式を使用しま
す。たとえば、machine1:1521:iasdb となります。データベースが RAC 環境にある
場合は、システムの任意のノードへの接続が可能になるため、[ホスト名]:[ポート]
:[sid] の形式ではなく、TNS キーワード - 値の形式を使用します。たとえば、次のよ
うになります。

```
" (DESCRIPTION= (LOAD_BALANCE=yes) (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP)
(HOST=c1s02a) (PORT=3001)) (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=c1s02b)
(PORT=3001))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=sales.us.acme.com))) "
```

TNS エントリの構文の詳細については、『Oracle9i Net Services リファレンス・ガイ
ド』を参照してください。

- <LAUNCH_ANYWHERE> は、OracleAS Metadata Repository のモードです。これを
TRUE に設定すると、OracleAS Metadata Repository を RAC モードに指定できま
す。このプロシージャの場合は、FALSE に設定します。
- <NET_SERVICE_NAME> は、wk0config.sql がデータベース接続を確立するために使
用するネットワーク・サービス名です。これが "" (空文字列) に設定されている場
合は、データベース・ホストから wk0config.sql を実行する際、ネットワーク・
サービス名を指定する必要がないことを意味します。

次は、非 RAC 環境でコマンドを実行する例です。

```
wk0config.sql welcome1 machine1:1521:iasdb FALSE ""
```

次は、RAC 環境でコマンドを実行する例です。

```
wk0config.sql welcome1
" (DESCRIPTION= (LOAD_BALANCE=yes) (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP)
(HOST=c1s02a) (PORT=3001)) (ADDRESS= (PROTOCOL=TCP) (HOST=c1s02b)
(PORT=3001))) (CONNECT_DATA= (SERVICE_NAME=sales.us.acme.com))) "
FALSE ""
```

注意： この手順を完了すると、クローラ・キャッシュ・ディレクトリと
クローラ・ログ・ディレクトリがデフォルト値にリセットされます。それ
らの値は、Oracle Ultra Search 管理ツールを使用して更新できます。

4.4.3.4 アップグレード結果の検証

すべてのエラーは、ログ・ファイル `<Infra_OH>%ultrasearch%setup%log file name.log` に記録されます。エラーがない場合、Oracle Ultra Search を起動してアップグレード結果を検証できます。次の手順に従います。

1. 必要な場合は、4-10 ページの 4.3 項「[Metadata Repository のアップグレードの実行](#)」の手順 3 を実行して中間層を起動します。
2. 次の URL にアクセスして、Oracle Ultra Search 管理ソフトウェアを起動します。
`http://host:port/ultrasearch/admin/index.jsp`
3. 『Ultra Search ユーザーズ・ガイド』で説明されている 10g (9.0.4) の機能を使用します。
4. Oracle Ultra Search の次のサンプル検索アプリケーションを使用します。
`http://host:port/ultrasearch/query/search.jsp`
5. すべての Oracle Ultra Search インスタンスのクローラ同期スケジュールを使用可能にして再開します。

4.4.3.5 エラーの解決

アップグレード処理中にエラーが発生することがあります。アップグレード・スクリプトが返す一般的なエラーとその解決方法は、次のとおりです。

エラー: Please set the environment variable ORACLE_HOME

原因: ORACLE_HOME 環境変数が設定されていません。

処置: ORACLE_HOME 環境変数を設定して、スクリプトを再実行します。

エラー: Please set the environment variable ORACLE_SID

原因: ORACLE_SID 環境変数が設定されていません。

処置: ORACLE_SID 環境変数を設定して、スクリプトを再実行します。

エラー: Please set the environment variable REPCA_ORACLE_HOME

原因: REPCA_ORACLE_HOME 環境変数が設定されていません。

処置: REPCA_ORACLE_HOME 環境変数を設定して、スクリプトを再実行します。

エラー: ファイル <file name> をオープンできません。

原因: スクリプトがファイルをオープンできません。

処置: ORACLE_HOME 環境変数の設定を確認して、ファイルがその場所に存在することを確認してください。

これらのスクリプトにより実行される処理については、A-19 ページの [付録 A.2.5 「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理」](#) で詳細に説明します。

4.4.4 Oracle Ultra Search のリリース 9.0.1 または 9.2 データベースからのアップグレード

同じ Oracle ホームに、リリース 9.0.1 または 9.2 の複数のデータベース・インスタンスがあり、それらのデータベース・インスタンスの 1 つに Oracle Application Server 10g (9.0.4) Metadata Repository をインストールする場合、Repository Configuration Assistant により Oracle ホームが Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle Ultra Search ファイルで上書きされます。他のデータベース・インスタンスが引き続き Oracle Ultra Search リリース 9.0.1 または 9.2 をホスティングする場合、そのデータベース・インスタンスで実行される Oracle Ultra Search は機能しません。

この問題は、リリース 9.0.1 または 9.2 の Oracle Ultra Search を、Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードすることにより解決できます。手順は、次のとおりです。

1. データベース・コンピュータで、Repository Creation Assistant CD-ROM をマウントします。
2. `<repCA_CD>\repCA\ultrasearch\admin` ディレクトリに移動します。
3. ORACLE_SID 環境変数を、9.0.1 または 9.2 データベース・インスタンスに設定します (10g (9.0.4) の Metadata Repository ではありません)。
4. SQL*Plus を使用して、ユーザー SYSDBA としてデータベースにログインします。
5. 次のコマンドを実行します。

@wkdbmig.sql

6. 「Portal and Wireless」インストール・タイプの Oracle Application Server 10g (9.0.4) 中間層をインストールします。使用する Infrastructure を要求するプロンプトが表示されたら、(9.0.1 または 9.2 インスタンスではなく) Repository Configuration Assistant により上書きされたインスタンスを選択します。
7. アップグレードされた Oracle Ultra Search をホスティングするデータベース・インスタンスに接続するために、`data-sources.xml` および `ultrasearch.properties` ファイルを更新します。

関連項目： `data-sources.xml` および `ultrasearch.properties` ファイルの更新方法については、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の Oracle Application Server リリースでの中間層のインストールに関する項を参照してください。

注意： アップグレードされた Oracle Ultra Search では、Oracle Application Server Single Sign-On はサポートされません。Ultra Search 管理者は、データベース・ユーザーにしかたれません。

4.4.5 Oracle Application Server Syndication Server のアップグレード・スクリプトの実行

Oracle Application Server Syndication Server スキーマをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
2. Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレードが必要かどうかを次のように判断します。

- a. `<repCA_CD>%repCA%syndication%admin` ディレクトリに移動します。
- b. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus "sys as sysdba" @ossupg902chk.sql
```

スキーマのリリースが現行のものである場合、スクリプトは 9.0.2 から 9.0.4 にのみアップグレードできることを示すメッセージが表示されます。

3. 中間層の Syndication Services が停止していることを確認します。
4. 次のコマンドで、アップグレード・スクリプトを起動します。

```
cd <repCA_CD>%repCA%syndication%admin
sqlplus "sys as sysdba" @ossupg902.sql
```

4.4.5.1 アップグレード結果の検証

正常な処理の場合は、「SUCCESSFUL install/upgrade of schema: DSGATEWAY」というメッセージが画面に表示されます。そうでない場合は、「FAILED install/upgrade of schema: DSGATEWAY」というメッセージが表示されます。すべてのエラーについて、エラー・コード（たとえば、ORA-XXXX）および行番号とともにメッセージが出力されます。

これらのスクリプトにより実行される処理については、A-21 ページの[付録 A.2.7「Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理」](#)で詳細に説明します。

4.4.6 Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行

この項では、Metadata Repository の Oracle Application Server Web Services UDDI レジストリ・スキーマをアップグレードする方法について説明します。

4.4.6.1 アップグレード・シナリオ

UDDI スキーマのアップグレードには、実行可能な 2 つのシナリオがあります。

- Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2)。このリリースからのアップグレードは、wuru9020.sql スクリプトを使用して実行します。
- Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) (UDDI 9.0.2.3 パッチ番号 2440287 が適用されている場合)。このリリースからのアップグレードは、wuru9023.sql スクリプトを使用して実行します。

4.4.6.1.1 リリース 2 (9.0.2) の wuru9020.sql を使用したアップグレード このアップグレード・スクリプトにより、次のタスクが実行されます。

- UDDI スキーマのコンテンツ（表、PL/SQL パッケージなど）が破棄される。
- 10g (9.0.4) のインストール・スクリプトが起動されて、10g (9.0.4) スキーマがインストールされる。

注意： このアップグレードによりすべての既存データが破棄されます。既存データを保存するには、UDDI get_<xx> API を使用して既存のエントリを取得し、アップグレード後に uddiadmin.jar を使用してそれらのエントリをインポートします。

4.4.6.1.2 UDDI 9.0.2.3 パッチが適用されたリリース 2 (9.0.2) の wuru9023.sql を使用したアップグレード このアップグレード・スクリプトにより、次のタスクが実行されます。

- 表、列、索引の作成や削除など、アップグレードに必要な初期の構造の変更が行われます。
- 新しい行の挿入や既存の行の更新など、UDDI サーバーのプロパティおよび関連する構成表へのアップグレードがすべて実行されます。

これらのスクリプトにより実行される処理については、A-22 ページの付録 A.2.8「[Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード処理](#)」で詳細に説明します。

4.4.6.2 UDDI スキーマのアップグレード

UDDI スキーマをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. UDDI データベースがバックアップされていることを確認します。バックアップ方法はいくつかあり、1つの例を次に示します。詳細は、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle ドキュメントを参照してください。

例 4-3 エクスポート・ユーティリティを使用した UDDISYS スキーマのバックアップ

```
exp system FILE=uddisys.dmp OWNER=uddisys GRANTS=y ROWS=y
```

2. ORACLE_HOME 環境変数が <Infra_OH> に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. SRC_HOME 環境変数を、<repCA_CD> を指し示すように設定します。これは、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Repository Creation Assistant CD-ROM へのパスです。
4. 次のコマンドで、UDDI スキーマのリリースを調べます。

```
cd <repCA_CD>%repCA%uddi%admin
```

```
sqlplus "sys as sysdba" @wurup.sql
```

- リリースが 9.0.2.1 の場合、手順 6 で wuru9020.sql スクリプトを使用します。
- リリースが 9.0.2.3 の場合、手順 6 で wuru9023.sql スクリプトを使用します。

5. 中間層の UDDI が停止していることを確認します。
6. 次のコマンドで、アップグレード・スクリプトを起動します。

```
cd <repCA_CD>%repCA%uddi%admin
```

```
sqlplus "sys/<password> as sysdba"
```

```
spool <directory>%<log file name>.log
```

注意： CD-ROM は読み取り専用であるため、CD-ROM のカレント・ディレクトリではなく、ログ・ファイルのディレクトリを指定する必要があります。

```
(スキーマのリリースが 9.0.2.1 の場合) @wuru9020.sql
```

```
(スキーマのリリースが 9.0.2.3 の場合) @wuru9023.sql
```

```
quit
```

スクリプトは、すべての出力内容を <directory>%<log file name>.log ファイルに書き出します。

4.4.6.2.1 リリース 9.0.2.1 のアップグレードの追加手順 スキーマ・リリース 9.0.2.1 からアップグレードした場合、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドで、データベースのキャラクタ・セットを調べます。

```
sqlplus "sys/<password> as sysdba"

select VALUE from NLS_DATABASE_PARAMETERS where PARAMETER =
'NLS_CHARACTERSET';

quit
```

2. 次のコマンドで、分類データをロードします。

```
cd <repCA_CD>%repCA%uddi%admin

sqlldr userid=sys control=naics-97.ctl
log=<directory>%<naics-logfilename>.log bad=<bad file name>.log

sqlldr userid=sys control=unspsc-73.ctl
log=<directory>%<unspsc-logfilename>.log bad=<bad file name>.log
```

注意： CD-ROM は読取り専用であるため、CD-ROM のカレント・ディレクトリではなく、ログ・ファイルのディレクトリを指定する必要があります。

パスワードを要求するプロンプトが表示されます。

3. SYS パスワードを入力し、その後に ' as sysdba' と入力します。
4. 次のいずれかのコマンドを実行します。

キャラクタ・セットが UTF-8 の場合

```
sqlldr userid=sys control=iso3166-99.ctl
log=<iso3166-logfilename>.log bad=<bad file name>.log
```

キャラクタ・セットが UTF-8 以外の場合

```
sqlldr userid=sys control=iso3166-99-ascii.ctl
log=<iso3166-logfilename>.log bad=<bad file name>.log
```

4.4.6.3 アップグレード結果の検証

すべてのエラーは、指定したログ・ファイルに記録されます。正常に完了した場合は、ログ・ファイルにエラーが出力されません。次のメッセージがログ・ファイルに出力されます。

```
SUCCESSFUL install/upgrade of schema: UDDISYS
```

4.4.6.4 エラーの解決

ログ・ファイルには、次のエラー・メッセージが記録されることがあります。

ORA-01435: ユーザーが存在しません。

原因：Oracle UDDI がデータベースを使用していません。

処置：アップグレードのかわりに、Oracle UDDI の新規インストールを実行します。

ORA-00942: 表またはビューが存在しません。

原因：接続するデータベース・ユーザーには、UDDI スキーマにアクセスする権限がありません。

処置：SYS ユーザー権限でスクリプトを再実行します。

4.4.6.5 UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード後のタスク

アップグレード前に UDDISYS データベース・スキーマの統計を収集していた場合は、オプションでそれらを収集できます。

4.4.6.6 UDDI レジストリ・スキーマのアップグレードの検証

Oracle Application Server Web Services UDDI スキーマが正常にアップグレードされたことを検証する手順は、次のとおりです。

1. 4-10 ページの 4.3 項「[Metadata Repository のアップグレードの実行](#)」の手順 3 を実行して、中間層を起動します。
2. ブラウザで、次の URL の UDDI メイン・ページにアクセスします。
`http://<host>:<port>/uddi/`
3. ページ内のリンクをクリックして、エンドポイントおよび公開エンドポイントを検証します。

4.4.7 Web クリッピング・スキーマのアップグレード・スクリプトの実行

Web クリッピング・スキーマを実行する手順は、次のとおりです。Web クリッピングは新しいコンポーネントであるため、アップグレードでは表および必要な機能を追加します。

1. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
2. `<repCA_CD>%repCA%\wcs\admin` ディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを使用して、SQL*Plus に接続します。
`sqlplus "sys as sysdba"`

4. 次のコマンドで、現行スキーマを WCRSYS に変更します。

```
ALTER SESSION SET CURRENT_SCHEMA = WCRSYS;
```

5. 次のコマンドでスクリプトを起動します。

```
@wcpinst.sql
```

4.4.7.1 アップグレード結果の検証

SYSDBA 権限を持つ SYS として SQL*Plus に接続し、次のコマンドを実行します。

```
SELECT * from WCRSYS.WWCWP_OBFUSCATION$;
```

生成されたキーが存在すれば、スクリプトは正常に完了しました。

このスクリプトにより実行される処理については、A-23 ページの [A.2.9 項「Web クリップिंगのアップグレード処理」](#) で詳細に説明します。

4.4.8 Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード

Metadata Repository の Oracle Application Server Wireless スキーマは、最初に Oracle Application Server 中間層を「Portal and Wireless」および「Business Intelligence and Forms」でインストールしたときに自動的にアップグレードされるため、Oracle Application Server Wireless Infrastructure のアップグレード・タスクはありません。

4.4.9 Oracle Workflow スキーマのアップグレード

OracleAS Metadata Repository 用に Oracle Workflow スキーマをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを使用して、Workflow (OWF_MGR) スキーマのパスワードを確認します。

```
ldapsearch -h oidhostname -p oidport -D cn=orcladmin -w passwd -b
"orclReferenceName=globalDatabaseName,cn=IAS Infrastructure Databases,
cn=IAS,cn=Products,cn=oraclecontext" "orclresourcename=OWF_MGR"
orclpasswordattribute
```

このコマンドで次の値を使用します。

- **oidhostname**: Oracle Internet Directory が実行されているコンピュータの名前。たとえば、dbmachine.mydomain.com です。
- **oidport**: Oracle Internet Directory によってリスニングが行われているポート番号。たとえば、389 です。
- **passwd**: orcladmin のパスワード。たとえば、welcome1 です。
- **globalDatabaseName**: Oracle9iAS 9.0.2 Single Sign-On で使用される Oracle9iAS Metadata Repository のグローバル・データベース名。この値は、

%ORACLE_HOME%\config\ias.properties ファイルの
「InfrastructureDBCommonName」フィールドに格納されます。
ORACLE_HOME は、Oracle9iAS Infrastructure 9.0.2 の Oracle ホーム・ディレクトリです。

2. データベースおよびリスナーが実行されていることを確認します。
3. <repCA_CD>%repCA%\wf\install ディレクトリに移動します。
4. 次のコマンドを実行します。

```
<Infra_OH>%perl%5.6.1\bin\MSWin32-x86%perl wfwinnupg.pl -wfuser <wfuser>
-wfpassword <wfpassword> -syspassword <syspassword> -scripthome <scripthome>
-oraclehome <oraclehome> -connectdescriptor <connectdescriptor> -logdir
<logdir> -timezone <timezone>
```

次に、このコマンドの各パラメータについて説明します。

- **<wfuser>**: 有効な Workflow ユーザーの名前。デフォルト値は OWF_MGR です。
- **<wfpassword>**: Workflow ユーザー・アカウントのパスワード。値が指定されていない場合は、値を要求するプロンプトが表示されます。
- **<syspassword>**: SYS アカウントのパスワード。値が指定されていない場合は、値を要求するプロンプトが表示されます。
- **<scripthome>**: OracleAS RepCA\Utilities CD の repCA ディレクトリ (<mount point>%repCA)。
- **<oraclehome>**: Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure の ORACLE_HOME。
- **<connectdescriptor>**: Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure データベースの Oracle Net 接続記述子。このパラメータには、完全なネット記述子、または Infrastructure データベースを指し示す %ORACLE_HOME%\network\admin\tnsnames.ora ファイルからの別名のいずれかを指定できます。
- **<logdir>**: workflow.log ファイルが書き込まれるディレクトリ。
- **<timezone>**: レジストリからのタイムゾーン文字列。デフォルト値は "Pacific Daylight Time" です。

次に例を示します。

```
D:%oracle%\infraDB%perl%5.6.1\bin\MSWin32-x86%perl wfwinnupg.pl -wfuser owf_mgr
-scripthome e:%repca -oraclehome d:%oracle%\infraDB -connectdescriptor
"(DESCRIPTION=(ADDRESS_
LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=IFRADBHOST) (PORT=1521))) (CONNECT_
DATA=(SERVICE_NAME=infraDB.us.oracle.com)))" -logdir c:%temp
```

前述のパラメータをコマンドラインですべて指定する必要はありません。スクリプトにより、デフォルト値を使用できないパラメータの入力が要求されます。たとえば、パス

ワードをコマンドラインで入力したくない場合に、要求された時点でのみ入力することにより、パスワードがクリア・テキストで画面に表示されません。

4.5 OracleAS Portal リポジトリのアップグレード

この項では、OracleAS Portal リポジトリのアップグレードに必要な手順について説明します。この項では、次の項目について説明します。

- 4-30 ページの [4.5.1 項「Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード」](#)
- 4-30 ページの [4.5.2 項「バックアップの作成」](#)
- 4-31 ページの [4.5.3 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パッチのダウンロード」](#)
- 4-31 ページの [4.5.4 項「Oracle Universal Installer を使用した、OracleAS Portal アップグレード・スクリプトの中間層 Oracle ホームへのコピー」](#)
- 4-33 ページの [4.5.5 項「外部アプリケーション ID の再マッピングが必要かどうかの検討」](#)
- 4-34 ページの [4.5.6 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・スクリプトの実行」](#)
- 4-38 ページの [4.5.7 項「ログ・ファイルの調査」](#)
- 4-40 ページの [4.5.8 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレードの完了」](#)
- 4-61 ページの [4.5.9 項「アップグレードされた OracleAS Portal へのアクセス」](#)

4.5.1 Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード

Oracle Application Server Single Sign-On サーバーがすでに 9.0.2.5 または 9.0.4 のいずれかにアップグレードされている場合は、次の手順を省略してください。次の手順は、Oracle9iAS 9.0.2.x とともに OracleAS Portal 10g (9.0.4) を実行する予定で、まだ更新が実行されていない場合にのみ実行します。

1. パッチ 2995671 を用意します。パッチは JP Update CD に含まれています。
2. パッチの Readme ファイルと『Oracle9iAS Single Sign-On Migration Guide』(docs/sso_patch_902.html ファイル) の指示に従ってください。これらのドキュメントはパッチに含まれています。このパッチは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure の Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのスキーマに適用されます。

4.5.2 バックアップの作成

アップグレード処理の主な手順を実行する前後に、データベースおよび中間層をバックアップします。アップグレードする Portal をバックアップしたことを確認します。OracleAS Portal 固有のスキーマは次のとおりです (インストール方法により異なります)。

- Portal スキーマ (PORTAL など)

- デモ・スキーマ (PORTAL_DEMO など)
- Portal の Public スキーマ (PORTAL_PUBLIC など)
- Portal JSP アクセス (PORTAL_APP など)
- アプリケーション・コンポーネント (データベース・プロバイダ) は、自身のスキーマに生成されます。関係するすべてのデータベースをバックアップしたことを確認します。

バックアップには、いくつかの方法があります。データベースのバックアップおよびリカバリ手順の詳細は、経験豊富なデータベース管理者に問い合わせるか、Oracle ドキュメントを参照してください。

注意： Oracle9i データベースに付属するエクスポート・ユーティリティを使用して、コンテンツをファイルに転送できます。詳細は、『Oracle9i データベース・ユーティリティ』を参照してください。

注意： アップグレード時に Portal の「ビルダー」ページの既存の内容が完全に削除され、新しい内容に置き換えられます。Portal の「ビルダー」ページがカスタマイズされていた場合、それらのカスタマイズは失われます。アップグレード前に「ビルダー」ページに対するカスタマイズをすべて識別して記録し、アップグレード後に再適用できるようにしてください。

4.5.3 OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パッチのダウンロード

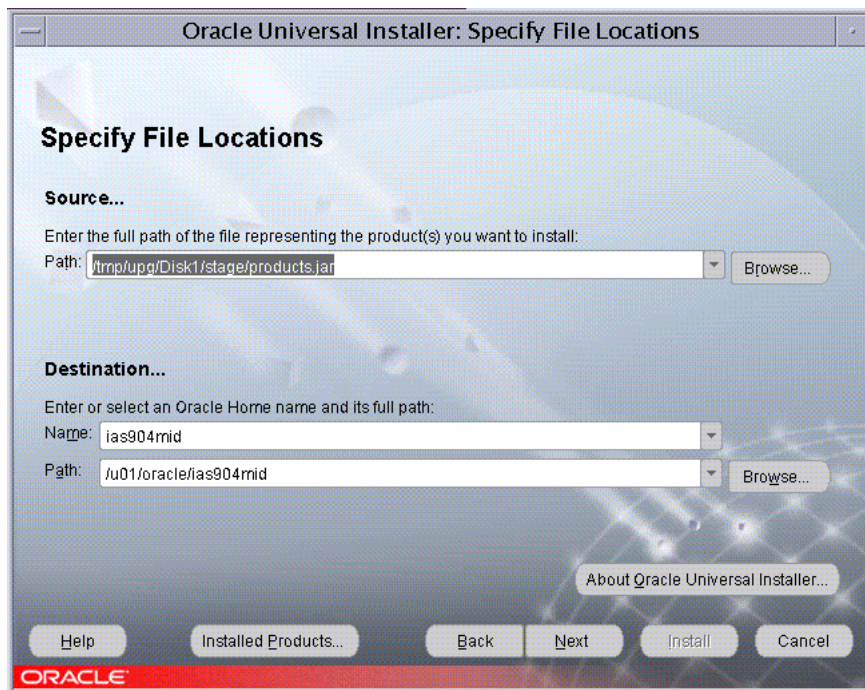
1. パッチ 2778342 を用意します。パッチは JP Update CD に含まれています。
2. ZIP ファイルをコンピュータの一時ディレクトリにダウンロードして解凍します。ファイルには、次のものが含まれています。
 - ディスク 1 - Portal の中間層の更新およびリポジトリのアップグレードを実行するスクリプトを含むディレクトリ
 - readme.html - Readme ファイル
3. 残りの手順に影響する可能性のある変更について、readme.html ファイルを調べます。

4.5.4 Oracle Universal Installer を使用した、OracleAS Portal アップグレード・スクリプトの中間層 Oracle ホームへのコピー

1. OracleAS 10g (9.0.4) 中間層がインストールされているコンピュータにログインします。

2. ORACLE_HOME 環境変数を <destination_MT_OH> に設定します。これは、[第3章「中間層のアップグレード」](#)の手順でアップグレードされた 10g (9.0.4) 中間層のホームです。
3. 次のとおり選択して、Oracle Universal Installer を実行し、Portal のアップグレード・スクリプトを中間層の Oracle ホームにコピーします。
「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer」
 以降の手順については、画面の順番に従って説明します。
4. 「ようこそ」画面の「次へ」をクリックして、「ファイル位置」画面に進みます。
5. 「ファイル位置」画面のソース・パスのフィールドで、ダウンロードに含めた products.jar ファイルを指定します。たとえば、ダウンロード・ファイルを c:\¥tmp¥upg ディレクトリに展開した場合、ファイルとして c:\¥tmp¥upg¥Disk1¥stage¥products.jar を指定します。

図 4-2 「ファイルの場所の指定」画面



6. 接続先 Oracle ホームの名前およびパスを確認します。

7. 「次へ」をクリックします。

「サマリー」画面が表示されます。

8. 「インストール」をクリックします。

ファイルを Oracle ホームにコピーする処理は、15 分から 30 分かかる場合があります。最初の数分間は画面に何も表示されませんが、すぐにプログレス・バーがアクティブになります。

インストールの終了画面が表示されます。

9. 「終了」をクリックします。

ディレクトリ `portal¥upg¥plsql` が Oracle ホームに作成されます。そこには、リポジトリのアップグレードに必要なコードが含まれます。

4.5.5 外部アプリケーション ID の再マッピングが必要かどうかの検討

外部アプリケーションを含む、リリース 9.0.2 の Oracle9iAS Single Sign-On サーバーを統合する場合、外部アプリケーションの識別子を一意にする必要があります。すべての 9.0.2 の Oracle9iAS Single Sign-On サーバーには、詳細形式の外部アプリケーション識別子を導出するために使用される一意な識別子が割り当てられています。Oracle9iAS Portal には、それらの外部アプリケーション識別子への参照が含まれています。

Oracle9iAS Portal リポジトリの、それらの外部アプリケーション識別子への参照は、Oracle9iAS Portal 9.0.2 を OracleAS Portal 10g (9.0.4) にアップグレードする際に自動的に更新されます。Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード時には、Oracle9iAS Portal のリリース固有のパッチを Oracle9iAS Portal スキーマに適用して、外部アプリケーション識別子を詳細形式に変更するように要求されます。アップグレード前にスクリプトが実行された場合、アップグレード・コードはスクリプトが実行されたことを検出し、実行を繰り返しません。

ただし、例外があります。Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのリリース 9.0.2.5 へのアップグレード後に、Oracle9iAS Portal 9.0.2 インスタンスを以前は関連付けられていなかったサーバーに関連付けると、ポータルは外部アプリケーションのポートレットを使用します。この場合は、ポータルをアップグレードする際に、識別子の再マッピングを省略する必要があります。これは、ポータルがすでにそのカスタマイズ内に詳細な外部アプリケーション識別子を格納しているためです。

注意： 外部アプリケーション・ポートレットのカスタマイズのアップグレードを確実に成功させるために、Oracle9iAS Portal スキーマの `secfappno.sql` スクリプトを実行する必要があるかどうかを慎重に検討します。外部アプリケーション ID の再マッピング・スクリプトとして間違ったスクリプトを実行した場合や必要なスクリプトが実行されなかった場合、外部アプリケーションのカスタマイズは、関連付けられた Oracle9iAS Single Sign-On サーバーで使用される外部アプリケーション ID に対応しない可能性があります。

このような状況になり、外部アプリケーションにアクセスした際にエラーが発生した場合は、ユーザーは外部アプリケーション・ポートレットの「カスタマイズ」リンクをクリックして、アプリケーションのリストを再度カスタマイズする必要があります。これにより、アプリケーション ID が、Oracle9iAS Single Sign-On サーバーで使用される ID と同期化されます。

再マッピングを省略するには、アップグレードを開始する前に、Oracle9iAS Portal スキーマのスクリプト

```
<destination_MT_OH>%portal%upg%plsql%upg%9025-9026%wwc%upfappno.sql
```

を実行します。このスクリプトを実行した後に Oracle9iAS Portal スキーマをアップグレードすると、次のテキストがアップグレード・ログ・ファイルに出力されます。

```
The External Application IDs have already been converted prior to the upgrade. The SSO ID used for this purpose was NO_CONVERSION. No conversion will be performed now.
```

関連項目： アプリケーション ID の再マッピングの詳細は、『Oracle9iAS Single Sign-On Migration Guide』（4-30 ページの [4.5.1 項「Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード」](#) で説明されている Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのパッチに添付）を参照してください。

4.5.6 OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・スクリプトの実行

Portal リポジトリのアップグレードは、`upgrade.pl` スクリプトを使用して実行します。次の手順に従って、アップグレードを実行します。

1. 入手可能な最新の OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パッチを用意して、インストールしたことを確認します。（新しいリリースが定期的にリリースされる可能性があります。）
 - a. パッチ 2778342 を用意します。パッチは JP Update CD に含まれています。
 - b. 4-31 ページの [4.5.3 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・パッチのダウンロード」](#) の手順を実行した後にパッチが更新された場合、パッチをダウンロードして、その項の手順を繰り返します。

- 2. 環境変数が、<destination_MT_OH> を参照するように設定されていることを確認します。
- 3. <destination_MT_OH> のすべての中間層サービスを停止します。
- 4. Portal ソース・コードのルート・ディレクトリに移動します。これは、portal¥upg¥plsql 下の中間層の Oracle ホームです。

このディレクトリは、インストーラを実行し、アップグレード・パッチの内容を展開したときの手順で作成されています。

注意： ファイル upgrade.pl が、中間層の Oracle ホーム下の portal¥upg¥plsql ディレクトリにない場合、4-31 ページの 4.5.4 項「Oracle Universal Installer を使用した、OracleAS Portal アップグレード・スクリプトの中間層 Oracle ホームへのコピー」の Oracle Universal Installer を実行する手順を正確に実行したことを確認してください。

- 5. エラーがなくなるまで、アップグレード・スクリプトを事前チェック・モードで実行します。

<destination_MT_OH>¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86¥perl upgrade.pl
-precheck [-l <log file>] [-t <tmp directory>] [-ssoid <sso id>]
- 6. アップグレード・スクリプトを標準モードで実行し、パラメータを指定します。

<destination_MT_OH>¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86¥perl upgrade.pl
[-l <log file>] [-t <tmp directory>] [-ssoid <sso id>]

表 4-1 upgrade.pl スクリプトのパラメータ

パラメータ	説明
-precheck	precheck を指定すると、事前チェックのみが実行され、アップグレードが停止します。このモードでは、事前チェックに失敗した場合でもアップグレードはすぐに停止されず、すべての事前チェックのエラーがアップグレード・ログに集約されます。 失敗したチェックのリストを参照するには、ログを調べます。エラーの解決方法は、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』を参照してください。すべての事前チェックに成功するまでこのモードを実行します。 このモードでは、スキーマは変更されないため、スクリプトの実行間でバックアップからリストアする必要はありません。
-l <log file>	ログ・ファイルの名前。 デフォルトは、upgrade.log です。

表 4-1 upgrade.pl スクリプトのパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-t <tmp directory>	一時ディレクトリ名。このディレクトリは空にして、書込み可能にしておく必要があります。このドキュメントでは、<upgrade tmp dir> とも呼びます。 デフォルトは、tmp です。
-ssoid <sso id>	Portal スキーマがアップグレードされる前に Portal が関連付けられていた Single Sign-On サーバーの識別子。この値は 15 文字で、Single Sign-On サーバーにパッチを適用する際に使用される識別子と一致する必要があります。 この値は、Single Sign-On サーバーの識別子を自動的に生成できない場合、または Single Sign-On サーバーには以前にパッチが適用されたが、使用していた Single Sign-On サーバーの識別子を変更する必要がある場合のいずれかの場合にのみ必要になります。この値はシステムにより自動的に生成されるため、通常は値を渡す必要はありません。 パッチの詳細は、4-30 ページの 4.5.1 項「Oracle9iAS Single Sign-On サーバーのアップグレード」を参照してください。

次の例は、現在のパスからアクセス可能な中間層の Oracle ホームに適切な Perl 実行可能ファイルが存在することを想定しています。

```
perl upgrade.pl -precheck -l precheck.log -t prechecktmp
perl upgrade.pl -l myupgrade.log -t upgtmp
perl upgrade.pl -l myupgrade.log
perl upgrade.pl -t upgtmp
perl upgrade.pl
perl upgrade.pl -l myupgrade.log -t upgtmp -ssoid B63875271239654
```

システム・セットアップ情報を要求するプロンプトが表示されます。スクリプトの最後に、確認のために入力した応答が表示されます。スクリプトの終了前に、誤った情報が入力されていることを見つけた場合は、最後の質問に No (n) と応答することによって、変更をコミットしないでスクリプトを終了できます。

スクリプトによる質問内容は、次のとおりです。質問に対するデフォルトの応答は、大カッコ内に示されています。

Have you backed up your database (y | n)? [y]:

- 7. データベースをバックアップしていない場合は No (n) と応答して、データベースをバックアップしてからスクリプトを再起動します。バックアップしている場合は、Yes (y) と応答します。

次のプロンプトが表示されます。

Enter the name of the schema you would like to upgrade [portal]:

8. Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure の標準インストールのスキーマ名 portal と異なる場合は、スキーマ名を入力します。

次のプロンプトが表示されます。

Enter the password of the schema you would like to upgrade [portal]:

9. 必要に応じて、スキーマ名に対して入力されているデフォルト値を変更します。

必要な場合は、Oracle Directory Manager を使用して、Oracle9iAS Portal スキーマのランダム化されたパスワードを取得します。次のようにナビゲートします。

- a. エントリ管理
- b. cn=OracleContext
- c. cn=Products
- d. cn=IAS
- e. cn=Infrastructure Databases
- f. OrclReferenceName=Infrastructure Database (例: iasdb.server.domain.com)
- g. OrclResourceName=PORTAL
- h. 前述のエントリをクリックします。
- i. 右側ペインで orclpasswordattribute 値を探します。これがスキーマのパスワードです。

次のプロンプトが表示されます。

Enter the password for the SYS user of your database [change_on_install]:

Enter the TNS connect string to connect to the database [orcl]:

10. TNS 接続文字列を入力します (tnsnames.ora ファイルにあります)。Portal スキーマ、スキーマのパスワードおよび接続文字列を使用してデータベースへのアクセスをテストします。

次のメッセージが表示されます。

At this point, no changes have been made to the database. Please review all the details displayed above. If you choose to stop the upgrade at this point, you will be able to start it again without restoring from a backup. If you continue and a problem occurs, you will have to retrieve your backup and start over. Is it OK to continue with the upgrade? (y|n) [y]:

11. 内容が正しいことを確認し、質問に答えます。

- アップグレードを続行するには、「y」と入力します。
- アップグレードを停止するには、「n」と入力します。必要な場合は、アップグレード・スクリプトを再び実行して、必要に応じて内容を修正できます。

重要： アップグレード中は、他の作業のためにコンピュータを使用しないでください。OracleAS Portal リポジトリのアップグレードには、数時間かかります。アップグレードの長さは、リポジトリのサイズ、コンピュータのワークロードおよび他の要因により異なります。

4.5.7 ログ・ファイルの調査

アップグレード時に発生したすべてのエラーは、upgrade.log ファイルに記録されます。このファイルを調査して、正常にアップグレードできたことを確認します。

1. ログ・ファイルの場所を特定します。ログのデフォルト名は、upgrade.log です。デフォルトの場所は、<destination_MT_OH>%portal%upg%pls%upgrade.log です。

アップグレードの実行が完了した場合、ログ内のエラーは標準出力に送信され、ログ・ファイルの終わりにある個別のセクションに追加されます。ファイルの最初の方にあるエラーを検索する場合は、ログ・ファイルの終わりにあるセクションの行番号を使用します。

2. ログをテキスト・エディタで開きます。
3. 『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』で、すべてのエラーおよび警告について調べます。
4. マニュアルに記載されたすべてのエラーおよび警告を解決します。ほとんどのエラーでは、バックアップからリポジトリをリストアして問題を解決し、アップグレードを再実行する必要があります。

注意： オラクル社は、正常ではないアップグレード後に使用されたポータルをサポートしていません。正常なアップグレードとは、エラーがまったくないか、あっても問題のないエラーのみであったアップグレードのことです。問題のないエラーは、『Oracle Application Server Portal エラー・メッセージ・ガイド』で示されています。

5. マニュアルに記載されていないエラーについては、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡してください。

6. すべてのエラーが解決されるまで、この処理を続けます。

正常なアップグレード後の、ログ・ファイルの終わりの例を次に示します (Upgrade completed successfully というメッセージがある点と、エラー・メッセージがない点に注目してください)。

```
### PHASE III STEP 18: Show Errors and Warnings
Upgrade step started at Thu Jun 26 09:05:36 PDT 2003
...
### Upgrade completed successfully
Upgrade Ended at Thu Jun 26 09:05:36 PDT 2003
```

正常にアップグレードできなかった場合のログ・ファイルの終わりの例を次に示します。

例 1: 途中で終了し、エラー / 警告のセクションがない場合

```
### ERROR: Patch Failed with status code: 1.
###
### Upgrade aborted at Tue Jul 15 15:09:33 EDT 2003.
```

例 2: 正常に終了したが、少なくとも 1 つのエラーが検出された場合 (各エラー行の前に行番号があることに注目してください)。

```
###
### PHASE III STEP 18: Show errors and warnings
###
Upgrade step started at Fri June 6 20:32:02 2003
###
### WARNING: ### Upgrade completed with the following warnings
###
###
### ERROR: ### Upgrade completed with the following errors
###      2803: エラー : 行 1 でエラーが発生しました。
###      2804:ORA-01418: 指定した索引は存在しません。
```

生成される様々なファイルの場所および内容は、次のとおりです。<upgrade_tmp_dir> は、upgrade.pl を実行する際に使用された一時ディレクトリを示します。デフォルトでは、このディレクトリは tmp という名前で、<destination_MT_OH>¥portal¥upg¥plsqli のサブディレクトリです。

表 4-2 生成されるファイル

ファイル名	ファイルの場所	内容と目的
upgrade.in	<upgrade_tmp_directory>¥ upgrade.in	アップグレード・スクリプトへの入力内容が含まれます (4-34 ページの 4.5.6 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード・スクリプトの実行」で説明されている質問への回答)。パスワードは、セキュリティ上の理由で記録されていません。 このファイルは、次回の実行時に上書きされないように別の場所にコピーできます。その場合、パスワードを含めることができ、その新しいファイルを次回以降のすべてのアップグレードで標準入力として使用できます。
<upgrade_log>	<upgrade_directory>¥ upgrade.log	エラー、警告、詳細説明などのすべてのログ情報が含まれます。エラーは、ログ・ファイルの終わりに要約されます。
upgrade.err	<upgrade_tmp_dir>¥ upgrade.err	<upgrade_log> の終わりにあるエラー・メッセージのサマリーが含まれます。
upgrade.wrn	<upgrade_tmp_dir>¥ upgrade.wrn	<upgrade_log> の終わりにある警告メッセージのサマリーが含まれます。

4.5.8 OracleAS Portal リポジトリのアップグレードの完了

この項では、OracleAS Portal のアップグレードを完了する手順や、アップグレードされた製品に導入された変更について説明します。次の項目について説明します。

- 4-41 ページの 4.5.8.1 項「すべてのパッケージのコンパイル」
- 4-41 ページの 4.5.8.2 項「Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成」
- 4-51 ページの 4.5.8.3 項「OracleAS Portal ファイル・システム・キャッシュのクリーンアップ」
- 4-52 ページの 4.5.8.4 項「アップグレードされた Portal インスタンスを使用するすべての中間層の起動」
- 4-52 ページの 4.5.8.5 項「Oracle Text (以前の InterMedia Text) 索引の再構築」
- 4-52 ページの 4.5.8.6 項「Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 のアップグレードにおけるセッション格納参照の有効化」
- 4-53 ページの 4.5.8.7 項「OracleAS Portal の使用方法の変更点について」
- 4-57 ページの 4.5.8.8 項「ポートレット・リポジトリの変更について」

4.5.8.1 すべてのパッケージのコンパイル

依存性による問題のため、OracleAS Portal リポジトリのアップグレードによってデータベース・オブジェクトが無効になる場合があります。utlrlp.sql スクリプトを実行して、データベース内のすべての無効なオブジェクトを再コンパイルできます。この手順は、5-59 ページの [5.6.1 項「utlrlp.sql ユーティリティの実行」](#) で説明されています。

4.5.8.2 Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成

アップグレードされた OracleAS Portal 10g (9.0.4) インスタンスは、次の手順に従って Oracle Internet Directory 用に再構成する必要があります。

1. ORACLE_HOME 環境変数を <destination_MT_OH>、JRE_HOME 環境変数を JRE ホームに設定します。
2. <destination_MT_OH> 下の assistants¥opca ディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを実行して、ptlasst スクリプトを実行します。

```
ptlasst.bat -mode MIDTIER [-i <install type>] -type DIPUNREG [-s
<portal schema>] [-sp <schema password>] [-c <connect string>]
[-ldap_h <OID server host>] [-ldap_p <OID server port>] [-ldap_d
<installer DN>] -ldap_w <installer password> [-ldaps]
```

注意： -mode MIDTIER および -type DIPUNREG パラメータは、関連付けられた Infrastructure の Oracle Internet Directory サーバーから、OracleAS Portal の既存のプロビジョニング・プロファイルを削除します。これにより、作成される新しいプロファイルには、OracleAS Portal 10g (9.0.4) で必要なすべてのプロビジョニング・イベントが含まれます。

- -i <install type> は、typical または custom に設定できます。
このパラメータが typical に設定されると、Oracle Internet Directory サーバーおよび構成されている OracleAS Metadata Repository の OracleAS Portal スキーマの詳細を取得するために、リポジトリ・アクセス API が使用されます。
custom に設定されると、コマンドラインに入力された内容が構成に使用されます。このパラメータのデフォルト値は、typical です。
- -s <portal schema> は、OracleAS Portal スキーマ名です。指定しない場合は、スキーマ名 "portal" が使用されます。
- -sp <schema password> は、OracleAS Portal スキーマのパスワードです。
- -c <connect string> は、OracleAS Portal データベースへの接続文字列です。形式は、HostName:PortNumber:ServiceName です。
- -ldap_h <OID server host> は、Oracle Internet Directory サーバーのホスト名です。

- `-ldap_p <OID server port>` は、Oracle Internet Directory サーバーのポート番号です。
- `-ldap_d <installer DN>` は、スクリプトを実行するユーザーの識別名です。このパラメータを指定しない場合、デフォルト値 `cn=orcladmin` が使用されます。Oracle Internet Directory サーバーのリリースが 9.0.2 の場合、必要な権限を持っているのは `cn=orcladmin` ユーザーのみです。Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory では、このユーザーはスーパー・ユーザー `cn=orcladmin` であるか、次のすべてのグループのメンバーである必要があります。


```
cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext
cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext
cn=IAS & User Mgmt Application Admins,
cn=Groups,cn=OracleContext
```
- `-ldap_w <installer password>` は、スクリプトを実行するユーザーのパスワードです。
- `-ldaps` は、Oracle Internet Directory で SSL が有効になっていることを示すフラグです。このパラメータを指定した場合、`-ldap_p` パラメータを使用して指定した Oracle Internet Directory サーバー・ポートでも SSL を有効にする必要があります。

このコマンドの例を次に示します。

```
ptlasst.bat -mode MDTIER -i custom -type DIPUNREG -s portal -sp
password1 -c dbserver.domain.com:1521:iasdb -ldap_h
oidserver.domain.com -ldap_p 3060 -ldap_d
"cn=installer,cn=users,dc=mycompany,dc=com" -ldap_w secret1
```

4. スクリプトが処理を完了した後、カレント・ディレクトリの `<portal schema>.log` ファイルを調査します。すべてのエラーは、`<portal schema>.log` ファイルに記録されます。エラーがない場合は、スクリプトが正常に完了しました。一般的なエラー・メッセージおよびその解決方法は、4-46 ページの [4.5.8.2.1 項「ptlasst スクリプトで -type DIPUNREG を使用した場合のエラーの解決」](#) で説明されています。
5. 次のコマンドによって `ptlasst` スクリプトを実行し、OracleAS Portal インスタンスを Oracle Internet Directory サーバーに再度関連付けます。

```
ptlasst.bat -mode MDTIER [-i <install type>] -type OID [-s
<portal schema>] [-sp <schema password>] [-c <connect string>]
[-ldap_h <OID server host>] [-ldap_p <OID server port>] [-ldap_d
<installer DN>] -ldap_w <installer password> [-pwd <initial
password>] [-ldaps]
```

- `-i <install type>` は、`typical` または `custom` に設定できます。
このパラメータが `typical` に設定されると、Oracle Internet Directory サーバーおよび構成されている OracleAS Metadata Repository の OracleAS Portal スキーマの詳細を取得するために、リポジトリ・アクセス API が使用されます。
`custom` に設定されると、コマンドラインに入力された内容が構成に使用されます。このパラメータのデフォルト値は、`typical` です。
- `-s <portal schema>` は、OracleAS Portal スキーマ名です。指定しない場合は、スキーマ名 "portal" が使用されます。
- `-sp <schema password>` は、OracleAS Portal スキーマのパスワードです。
- `-c <connect string>` は、OracleAS Portal データベースへの接続文字列です。形式は、`HostName:PortNumber:ServiceName` です。
- `-ldap_h <OID server host>` は、Oracle Internet Directory サーバーのホスト名です。
- `-ldap_p <OID server port>` は、Oracle Internet Directory サーバーのポート番号です。
- `-ldap_d <installer DN>` は、スクリプトを実行するユーザーの識別名です。このパラメータを指定しない場合、デフォルト値 `cn=orcladmin` が使用されます。Oracle Internet Directory サーバーのリリースが 9.0.2 の場合、必要な権限を持っているのは `cn=orcladmin` ユーザーのみです。Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory では、このユーザーはスーパー・ユーザー `cn=orcladmin` であるか、次のすべてのグループのメンバーである必要があります。

`cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext`
`cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext`
`cn=IAS & User Mgmt Application Admins,`
`cn=Groups,cn=OracleContext`
- `-ldap_w <installer password>` は、スクリプトを実行するユーザーのパスワードです。
- `-pwd <initial password>` は、Oracle Internet Directory に存在する OracleAS Portal で作成されたユーザー (PORTAL および PORTAL_ADMIN) の初期パスワードです。このパスワードは、作成されたユーザーのエントリが Oracle Internet Directory には存在しない場合に使用されます。ユーザー・エントリがすでに Oracle Internet Directory サーバーに存在する場合、既存のパスワードは変更されません。
- `-ldaps` は、Oracle Internet Directory で SSL が有効になっていることを示すフラグです。このパラメータを指定した場合、`-ldap_p` パラメータを使用して指定した Oracle Internet Directory サーバー・ポートでも SSL を有効にする必要があります。

このコマンドの例を次に示します。

```
ptlasst.bat -mode MIDTIER -i custom -type OID -s portal -sp
password1 -c dbserver.domain.com:1521:iasdb -ldap_h
oidserver.domain.com -ldap_p 3060 -ldap_d
"cn=installer,cn=users,dc=mycompany,dc=com" -ldap_w secret1 -pwd
welcome1
```

6. スクリプトが処理を完了した後、カレント・ディレクトリの `<portal schema>.log` ファイルを調査します。エラーが発生し、Oracle Internet Directory の関連付けに失敗した場合、次のエラー・メッセージがログ・ファイルに記録されます。

```
ERROR: creating lightweight users and groups in OID ... exiting
```

一般的なエラー・メッセージおよびその解決方法は、4-47 ページの [4.5.8.2.2 項「ptlasst スクリプトで -type OID を使用した場合のエラーの解決」](#) で説明されています。

OracleAS Portal が Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory サーバーと関連付けられている場合、手順 5 のコマンドにより、グループ "cn=Common Group Attributes,cn=Groups,cn=OracleContext" のメンバーとしてアプリケーション・エントリが追加されます。

7. OracleAS Portal が Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory サーバーを使用していない場合は、次の手順 a、b および c をスキップして、手順 9 に進みます。

- a. ptlasst を実行して作成されるログ・ファイルで、アプリケーション名を探します。ファイルは通常 `<portal schema>.log` という名前で、`<destination_MT_OH>%assistants%opca` ディレクトリに存在します。アプリケーション名は、ログ・ファイル内の文字列 Portal Application Name: の後にあります。
- b. 次のコマンドを実行して、アプリケーション名の Oracle Internet Directory 権限を確認します。

```
ldapsearch -h <OID host> -p <OID port> -D <Privileged user DN>
-w <Privileged user password> [-U <SSL auth mode>] -b
"cn=Groups,cn=OracleContext" -s sub
"uniquemember=orclapplicationcommonname=<application
name>,cn=Portal,cn=Products,cn=OracleContext" dn
```

- `<OID host>` は、OID サーバーのホスト名です。
- `<OID port>` は、OID サーバーのポート番号です。ポートで SSL が有効化されている場合は、`-U` パラメータを指定する必要があります。

- *<Privileged user DN>* は、スクリプトを実行するユーザーの識別名です。このユーザーは、スーパー・ユーザー `cn=orcladmin` であるか、次のすべてのグループのメンバーである必要があります。

```
cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext
cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext
cn=IAS & User Mgmt Application Admins,
cn=Groups,cn=OracleContext
```

- *<Privileged user password>* は、スクリプトを実行するユーザーのパスワードです。
- *<SSL auth mode>* は、SSL 認証モードです。このパラメータは、`-p` parameter で指定されているポートで SSL が有効化されている場合にのみ指定します。このパラメータの有効な値は、次のとおりです。1 = 認証不要、2 = サーバー認証、3 = クライアントとサーバーの認証

このコマンドの例を次に示します。

```
ldapsearch -h oidserver.domain.com -p 3060 -D
"cn=installer,cn=users,dc=mycompany,dc=com" -w secret1 -b
"cn=Groups,cn=OracleContext" -s sub
"uniquemember=orclapplicationcommonname=portal.030908.1810,cn=
Portal,cn=Products,cn=OracleContext" dn
```

- c. 返されるリストにグループ `"cn=Common Group Attributes,cn=Groups,cn=OracleContext"` があることを確認します。

8. `ptlasst` を実行して作成されるログ・ファイルを調査します。ファイルは通常 `<portal schema>.log` という名前で、`<destination_MT_OH>%assistants%opca` ディレクトリに存在します。プロビジョニング・プロファイルが正常に作成されたことを確認し、次のメッセージと同様なメッセージを探します。

```
orclODIPProfileName=C815C7285F9E241CE0340800208A8B00_
C817B7D771034368E0340800208A8B00, cn=Provisioning Profiles,
cn=Changelog Subscriber, cn=Oracle Internet Directory
```

```
.
.
.
```

The Provisioning Profile for the Application has been created.

Profile Name:

```
c815c7285f9e241ce0340800208a8b00_c817b7d771034368e0340800208a8b00
```

プロファイルが正常に成功されなかった場合、次のメッセージと同様なメッセージが生成されます。

ERROR: アプリケーションのプロビジョニング・プロファイルを作成できませんでした。

このエラーは、プロビジョニング・プロファイルがすでに Oracle Internet Directory サーバーに存在する場合に発生する可能性があります。

9. 次の手順を実行して、プロビジョニング・プロファイルがすでに存在するかどうかを確認します。
 - a. PORTAL の PORTAL_ADMINISTRATORS または DBA グループのメンバーであるユーザー・アカウントで、OracleAS Portal にログインします。
 - b. 「管理」タブをクリックします。
 - c. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」リンクをクリックします。
 - d. 「SSO/OID」タブをクリックします。
 - e. ページ下部に「ディレクトリ同期」セクションが表示され、「ディレクトリ同期の有効化」チェックボックスが選択されていることを確認します。チェックボックスが選択されている場合、それ以上の操作は必要ありません。
 - f. チェックボックスが選択されていない場合、Oracle Internet Directory サーバーのエラーを診断します。

4.5.8.2.1 ptlasst スクリプトで -type DIPUNREG を使用した場合のエラーの解決 スクリプトの実行後、ログ・ファイルに次のエラー・メッセージが記録されていることがあります。

エラー: OID に接続できませんでした。ldap_host および ldap_port パラメータを確認してください。

原因: OID サーバーのホストまたはポートが正しくないか、使用不可です。

処置: -ldap_h および -ldap_p パラメータに正しい値を指定したことを確認します。さらに、OID サーバーが実行されていて、中間層環境からアクセス可能であることを確認してください。

エラー: ディレクトリ資格証明が無効です。ldap_user_dn および ldap_user_password パラメータを確認してください。

原因: ユーザー DN またはパスワードが正しくありません。

処置: ユーザーが OID サーバーに存在していて、-ldap_d および -ldap_w パラメータの値が正しいことを確認します。

エラー: プロビジョニング・プロファイルを削除できませんでした。...[LDAP: エラー・コード 50: 不十分なアクセス権限]

原因: 指定したユーザーには必要な権限がありません。

処置: Oracle Internet Directory リリース 9.0.2 または Oracle Internet Directory リリース 9.2 の場合: -ldap_d パラメータに cn=orcladmin が指定されていることを確認します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory サーバーの場合: -ldap_d パラメータに cn=orcladmin が指定されていること、またはユーザーが OID サーバー内の次のすべてのグループのメンバーであることを確認します。

cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=IAS & User Mgmt Application Admins, cn=Groups,cn=OracleContext

エラー: プロビジョニング・プロファイルを削除できませんでした。...[LDAP: エラー・コード 32: 該当するオブジェクトがありません。]

原因: プロビジョニング・プロファイルが OID サーバーに存在しません。

処置: このエラーに問題はありませぬ。操作は必要ありません。

エラー: Unable to get GUID of entry.

原因: Portal スキーマに格納されているアプリケーション・エントリの識別名が NULL です。識別名がないと、OID サーバーのアプリケーション・エントリを特定できません。

処置: 4-41 ページの [4.5.8.2 項「Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成」](#) の手順 5 のとおりに、ptlasst スクリプトを実行して、OracleAS Portal インスタンスの Oracle Internet Directory への再関連付けを行います。この手順により、Portal スキーマのアプリケーション・エントリの識別名が移入され、プロビジョニング・プロファイルの作成が試みられます。

4.5.8.2.2 ptlasst スクリプトで -type OID を使用した場合のエラーの解決 スクリプトの実行後、ログ・ファイルに次のエラー・メッセージが記録されていることがあります。

エラー: Error in bind... LDAP エラー: 1024: 不明なエラーが発生しました

原因: Oracle Internet Directory サーバーのホストまたはポートが正しくないか、使用不可です。

処置: -ldap_h および -ldap_p パラメータに正しい値を指定したことを確認します。さらに、Oracle Internet Directory サーバーが実行されていて、中間層環境からアクセス可能であることを確認してください。

エラー : Error in bind... LDAP エラー : 49: 資格証明が無効です。

原因 : ユーザー DN またはパスワードが正しくありません。

処置 : ユーザーが Oracle Internet Directory サーバーに存在しており、-ldap_d および -ldap_w パラメータの値が正しいことを確認します。

エラー : Error in bind... LDAP エラー : 53: ディレクトリ・サービス・エージェントが実行不可の状態です。

原因 : ユーザーが、Oracle Internet Directory サーバーにバインドできません。このエラーの発生には、多くの原因があります。1 つの原因は、ユーザーのアカウントがグローバルにロックされていることです。

処置 : ユーザー・アカウントをロック解除して、スクリプトを再実行します。問題が解決されない場合、Oracle Internet Directory サーバーで問題を診断します。

エラー : Error in create_application_entry... LDAP エラー : 50: アクセス権限が不十分です。 : エラー : creating application entry

原因 : 指定したユーザーには必要な権限がありません。

処置 : -ldap_d パラメータに cn=orcladmin を指定したことを確認するか、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory サーバーを使用している場合、ユーザーが OID サーバーの次のすべてのグループのメンバーであることを確認します。

cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=IAS & User Mgmt Application Admins, cn=Groups,cn=OracleContext

エラー : Error in create_user... LDAP エラー : 53: ディレクトリ・サービス・エージェントが実行不可の状態です。 : creating entry <username> user

原因 : Oracle Internet Directory サーバーで制約違反があった可能性があります。これは、属性値の 1 つが Oracle Internet Directory で定義されている検証規則に準拠していない場合に発生する可能性があります。

処置 : すべてのパラメータに正しい値が指定されていることを確認します。-pwd パラメータにより渡されるパスワード値は、Oracle Internet Directory サーバーで定義されているパスワード・ポリシーに準拠している必要があります。

エラー : アプリケーションのプロビジョニング・プロファイルを作成できませんでした。

原因 : 通常、このエラーはプロビジョニング・プロファイルがすでに Oracle Internet Directory サーバーに存在することを示しています。

処置 : 4-41 ページの [4.5.8.2 項「Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成」](#)の手順 3 で説明されているように、ptlasst -mode MIDTIER -type DIPUNREG を使用して既存のプロビジョニング・プロファイルを削除し、次に 4-49 ページの [4.5.8.2.3 項「オプション : Oracle Internet Directory における OracleAS Portal プロビジョニング・プロファイルの作成」](#)で説明されている ptlasst -mode MIDTIER -type DIPREG を実行します。

4.5.8.2.3 オプション : Oracle Internet Directory における OracleAS Portal プロビジョニング・プロファイルの作成 447 ページの 4.5.8.2.2 項「ptlasst スクリプトで -type OID を使用した場合のエラーの解決」で説明されているエラーが発生した場合、この手順を実行して、アップグレードされた OracleAS Portal 10g (9.0.4) インスタンスのプロビジョニング・プロファイルを作成する必要があります。

1. ORACLE_HOME 環境変数を <destination_MT_OH> に設定します。
2. <destination_MT_OH> 下の assistants¥opca ディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを実行して、ptlasst スクリプトを実行します。

```
ptlasst.bat -mode MIDTIER [-i <install type>] -type DIPREG [-s
<portal schema>] [-sp <schema password>] [-c <connect string>]
[-ldap_h <OID server host>] [-ldap_p <OID server port>] [-ldap_d
<installer DN>] -ldap_w <installer password> [-ldaps]
```

注意： -mode MIDTIER -type and DIPREG パラメータは、関連付けられた Infrastructure の Oracle Internet Directory サーバーに、OracleAS Portal のプロビジョニング・プロファイルを作成します。

- -i <install type> は、typical または custom に設定できます。
このパラメータが typical に設定されると、Oracle Internet Directory サーバーおよび構成されている OracleAS Metadata Repository の OracleAS Portal スキーマの詳細を取得するために、リポジトリ・アクセス API が使用されます。
custom に設定されると、コマンドラインに入力された内容が構成に使用されます。このパラメータのデフォルト値は、typical です。
- -s <portal schema> は、OracleAS Portal スキーマ名です。指定しない場合は、スキーマ名 "portal" が使用されます。
- -sp <schema password> は、OracleAS Portal スキーマのパスワードです。
- -c <connect string> は、OracleAS Portal データベースへの接続文字列です。形式は、HostName:PortNumber:ServiceName です。
- -ldap_h <OID server host> は、Oracle Internet Directory サーバーのホスト名です。
- -ldap_p <OID server port> は、Oracle Internet Directory サーバーのポート番号です。
- -ldap_d <installer DN> は、スクリプトを実行するユーザーの識別名です。このパラメータを指定しない場合、デフォルト値 cn=orcladmin が使用されます。Oracle Internet Directory サーバーのリリースが 9.0.2 の場合、必要な権限を持っているのは cn=orcladmin ユーザーのみです。Oracle Application Server 10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory では、このユーザーはスーパー・ユーザー

cn=orcladmin であるか、次のすべてのグループのメンバーである必要があります。

cn=Trusted Applications Admins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=iASAdmins, cn=Groups,cn=OracleContext

cn=IAS & User Mgmt Application Admins,
cn=Groups,cn=OracleContext

- -ldap_w <installer password> は、スクリプトを実行するユーザーのパスワードです。
- -ldaps は、Oracle Internet Directory で SSL が有効になっていることを示すフラグです。このパラメータを指定した場合、-ldap_p パラメータを使用して指定した Oracle Internet Directory サーバー・ポートでも SSL を有効にする必要があります。

このコマンドの例を次に示します。

```
ptlasst.bat -mode MIDTIER -i custom -type DIPREG -s portal -sp
password1 -c dbserver.domain.com:1521:iasdb -ldap_h
oidserver.domain.com -ldap_p 3060 -ldap_d
"cn=installer,cn=users,dc=mycompany,dc=com" -ldap_w secret1
```

4. スクリプトが処理を完了した後、カレント・ディレクトリの <portal schema>.log ファイルを調査します。すべてのエラーは、<portal schema>.log ファイルに記録されます。プロビジョニング・プロファイルが正常に作成されたことを確認し、次のメッセージと同様なメッセージを探します。

```
orclODIPProfileName=C815C7285F9E241CE0340800208A8B00_
C817B7D771034368E0340800208A8B00, cn=Provisioning Profiles,
cn=Changelog Subscriber, cn=Oracle Internet Directory
```

.
 .
 .

The Provisioning Profile for the Application has been created.

```
Profile Name: c815c7285f9e241ce0340800208a8b00_
c817b7d771034368e0340800208a8b00
```

プロファイルが正常に成功されなかった場合、次のメッセージと同様なメッセージが生成されます。

ERROR: アプリケーションのプロビジョニング・プロファイルを作成できませんでした。

このエラーは、プロビジョニング・プロファイルがすでに Oracle Internet Directory サーバーに存在する場合に発生する可能性があります。

5. 次の手順を実行して、プロビジョニング・プロファイルがすでに存在するかどうかを確認します。
 - a. PORTAL の PORTAL_ADMINISTRATORS または DBA グループのメンバーであるユーザー・アカウントで、OracleAS Portal にログインします。
 - b. 「管理」タブをクリックします。
 - c. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」リンクをクリックします。
 - d. 「SSO/OID」タブをクリックします。
 - e. ページ下部に「ディレクトリ同期」セクションが表示され、「ディレクトリ同期の有効化」チェックボックスが選択されていることを確認します。チェックボックスが選択されている場合、4-41 ページの 4.5.8.2 項「[Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成](#)」で説明されているように、`-type MIDTIER` および `-mode DIPUNREG` を使用して `ptlasst` を実行します。その後、この項で説明されているように `-type MIDTIER` および `-mode DIPREG` を使用して、`ptlasst` を再度実行します。
 - f. チェックボックスが選択されていない場合、Oracle Internet Directory サーバーのエラーを診断します。

4.5.8.3 OracleAS Portal ファイル・システム・キャッシュのクリーンアップ

次の手順を実行して、OracleAS Portal ファイル・システム・キャッシュをクリーンアップします。

1. `<destination_MT_OH>%Apache%modplsql%cache` ディレクトリ下のすべてのファイルおよびディレクトリを再帰的に削除します。キャッシュ・ディレクトリ自体は削除しないでください。
2. OracleAS Portal リポジトリにアクセスする複数の中間層が存在する場合は、すべての中間層に対して前述の手順を繰り返します。

注意： `Apache%modplsql%cache` ディレクトリのデフォルトの場所は、`Apache%modplsql%conf%cache.conf` ファイルの `PlsqlCacheDirectory` エントリの構成設定で確認できます。この場所がデフォルトから変更されている場合は、ディレクトリ下のすべてのファイルをクリーンアップしてください。

4.5.8.4 アップグレードされた Portal インスタンスを使用するすべての中間層の起動

スクリプトが正常に実行された後、次の手順を実行して、アップグレードされた Portal インスタンスを使用する各中間層を起動します。

1. OPMN およびそれによって管理されるプロセスを次のコマンドで起動します。

```
<destination_MT_OH>%opmn%bin%opmnctl startall
```

Oracle Process Manager and Notification およびそれが管理するすべてのプロセス (Distributed Configuration Management、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、OracleAS Web Cache、Oracle Application Server Forms Services および Oracle Application Server Reports Services) が開始されます。

2. Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control を次のコマンドで起動します。

```
<destination_MT_OH>%bin%emctl start iasconsole
```

4.5.8.5 Oracle Text (以前の InterMedia Text) 索引の再構築

アップグレード・スクリプトにより Oracle Text 索引が削除され、OracleAS Portal 10g (9.0.4) 用の索引が再作成されないため、この手順の実行が必要になります。アップグレードされたインスタンスで Oracle Text の機能を使用する場合は、用意されているスクリプトを使用して索引を再作成する必要があります。Portal スキーマから SQL*Plus を使用して、<destination_MT_OH>%portal%upg%plsql%wws%ctxcrind.sql スクリプトを実行します。このスクリプトは、必要な場合は再実行できます。

この処理は、Portal のビルドにおける Text 索引の作成と同じです。詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

注意： この処理は、リポジトリのサイズやコンピュータの処理速度によって数時間かかる場合があります。

4.5.8.6 Oracle9iAS Portal 9.0.2.6 のアップグレードにおけるセッション格納参照の有効化

Oracle9iAS Portal のリリース 9.0.2.6 から、ページ・ポートレットのサブページ・アイテム非表示のパッチが適用されたリリース (バグ 2904052) にアップグレードする場合、アップグレード後にパラメータを TRUE に設定してスクリプトを再実行し、パッチをリストアする必要があります。

1. SQL*Plus で、OracleAS Portal スキーマにスキーマ所有者として接続します。
2. スクリプトを次のように実行します。

```
<destination_MT_OH>%portal%upg%plsql%wws%ptlinvsw.sql TRUE
```


4.5.8.7 OracleAS Portal の使用方法の変更点について

この項では、OracleAS Portal 10g (9.0.4) と Oracle9iAS Portal 9.0.2 の相違点と、アップグレード後に発生する可能性のある問題について説明します。

4.5.8.7.1 「ビルダー」ページの再作成 アップグレード時に Portal の「ビルダー」ページの既存の内容が完全に削除され、新しい内容に置き換えられます。Portal の「ビルダー」ページがカスタマイズされていた場合、それらのカスタマイズは失われます。アップグレード前に「ビルダー」ページに対するカスタマイズをすべて識別して記録し、アップグレード後に再適用できるようにしてください。

4.5.8.7.2 カテゴリ・テンプレートおよびパースペクティブ・テンプレート Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、各カテゴリおよびパースペクティブに、2つのタブがあるページがありました。各タブには自動問合せポートレットがあり、1つのタブにはそのカテゴリまたはパースペクティブに属するアイテムが表示され、他のタブにはそのカテゴリまたはパースペクティブに属するページが表示されていました。また、Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、ユーザーがカテゴリ・ページやパースペクティブ・ページまたはそれらのページ上のポートレットをカスタマイズする場合があります。

OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、それらのページはページ・グループに属するカテゴリ・テンプレートまたはパースペクティブ・テンプレートに基づきます。そのため、次のようになります。

- カテゴリまたはパースペクティブのどちらかを含む各ページ・グループには、アップグレード時にカテゴリ・テンプレートおよびパースペクティブ・テンプレートの両方が移入されます。
- アップグレード後にそのページ・グループで作成されるすべてのカテゴリには、カテゴリ・テンプレートに基づくカテゴリ・ページが用意されます。同様に、アップグレード後に作成されるパースペクティブには、パースペクティブ・テンプレートに基づくページが用意されます。
- Oracle9iAS Portal 9.0.2 ページ・グループにカテゴリおよびパースペクティブのいずれも存在しない場合は、アップグレード時にページ・グループに対してテンプレートは作成されません。その後、新しいカテゴリがページ・グループに追加された場合は、カテゴリ・テンプレートが作成されて、カテゴリ・ページはそのテンプレートに基づきます。
- アップグレード後に実行可能な、次の処理を行うスクリプトが提供されています。
 - Oracle9iAS Portal 9.0.2 のカテゴリ・ページおよびパースペクティブ・ページを削除する。
 - Oracle9iAS Portal 9.0.2 の各カテゴリのテンプレートに基づく新しいカテゴリ・ページおよびパースペクティブ・ページを作成する。

- 次のスクリプトは、
`<destination_MT_OH>%portal%upg%plsql%upg%902-9025%wws` にあります。
`pstdefin.sql`
`pstpgshw.sql`
`pstundef.sql`
`pstpgcre.sql`
`pstprcpg.sql`
- 1. Oracle9iAS Portal 9.0.2 から OracleAS Portal 10g (9.0.4) にアップグレードした後、既存のカテゴリ・ページおよびパースペクティブ・ページを削除して、アップグレード時に作成されたカテゴリ・テンプレートおよびパースペクティブ・テンプレートに基づくページを再作成できます。この修正は、OracleAS Portal 10g (9.0.4) にアップグレードされた Oracle9iAS Portal 9.0.2 インスタンスに適用できます。前述のすべてのファイルを一時ディレクトリにコピーして、そのディレクトリを現在の作業ディレクトリとします。
- 2. SQL*Plus を使用して、Portal に Portal スキーマ・ユーザーとして接続します。たとえば、次に示すとおりです。`sqlplus portal/portal@iasdb`
- 3. ページ・グループの情報、および再作成するページの情報（カテゴリ・ページのみ、パースペクティブ・ページのみ、または両方を再作成）を使用して、`pstdefin.sql` ファイルを構成します。すべての設定の説明が `pstdefin.sql` ファイルにあります。
- 4. 必要の場合は、`pstpgshw.sql` スクリプトを使用して Portal から情報を取得し、`pstdefin.sql` ファイルを構成します。
- 5. `pstpgcre.sql` スクリプトを実行して、変更内容を適用します。たとえば、次に示すとおりです。

```
SQL> @pstpgcre.sql
```

4.5.8.7.3 Portal コンテンツの検索時に使用される新しい日付書式 OracleAS Portal 10g

(9.0.4) では、Portal コンテンツの検索時に使用される日付書式は、DD-MON-YYYY または他の言語での同様な日付書式となります。使用している言語の適切な日付書式は、日付を入力する検索フォームにヒント・テキストとして表示されます。DD-MON-YY などの別の書式を使用していた「保存された検索」ポートレットをアップグレードする場合、アップグレードされたポートレットには検索結果が返されません。保存された検索を正しい日付書式で再作成する必要があります。

4.5.8.7.4 WebDAV クライアントの表示項目 次の表示項目および特性が、OracleAS Portal 10g (9.0.4) で変更されました。

- Portal アイテムに関連付けられている主要なファイルのみが表示されます（つまりイメージ・ファイルは表示されません）。
- ファイルの現在のリリースのみが表示されます。

- ファイルおよびフォルダの名前では大文字と小文字が区別され、実際の名前が表示されます（Oracle9iAS Portal 9.0.2 のような内部名、または表示名ではありません）。
- SHARED、CORPORATE、およびユーザーが作成したページ・グループのみが表示されます。
- OracleAS Portal 10g (9.0.4) ではバージョンングが公開されますが、アップグレードされたチェックアウト・アイテムはロック対象として表示されません（つまり WebDAV クライアントからチェックアウトされたアイテム）。

4.5.8.7.5 サブページの表示項目 Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、「サブページ表示」アイテムをページに追加することにより、サブページへのリンクがページに表示されました。OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、「サブページ表示」アイテムが「サブページ・リンク」リージョンに置き換えられました。

9.0.2 のページの独自リージョンに「サブページ表示」アイテムが含まれている場合、そのアイテムはアップグレード後に「サブページ・リンク」リージョンに置き換えられます。ただし、「サブページ表示」アイテムが他のアイテムを含むリージョンに表示されている場合、他のアイテムはそのリージョン内でアップグレードされますが、「サブページ表示」アイテムは「サブページ・リンク」リージョンにアップグレードされずに削除されます。「サブページ表示」アイテムがアップグレードされなかったことを示す警告メッセージが、アップグレード・ログに記録されます。この場合、ページ設計者が手動で「サブページ・リンク」リージョンをアップグレードされたページに追加する必要があります。

9.0.2 の「サブページ表示」アイテムでは、サブページ・リンクがリストされるソート順序を指定できました。9.0.2 のページに 1 つの「サブページ表示」アイテムが存在する場合、対応する「サブページ・リンク」リージョンはアップグレード後に同じ順序を使用します。ただし、9.0.2 ページに複数の「サブページ表示」アイテムが含まれ、それらのアイテムが別々のソート順序を使用していた場合、使用するソート順序を決定する方法がありません。そのため、アップグレードされた「サブページ・リンク」リージョンのリンクは、アルファベット順にソートされます。

4.5.8.7.6 個人用ページへのリンク 個人用ページの主なリストの場所が移動され、現在は「共有オブジェクト」ページ・グループのルート・ページとなっています。Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、このリストは「共有オブジェクト」ページ・グループのサブページでした。

その結果、前にこのサブページを指し示していた「ページ・リンク」アイテムは、アップグレード後は機能しなくなります。修正するには、アイテムが新しい場所を指し示すように編集する必要があります。

同様に、「個人用ページ」ページを含むオブジェクトのリストも、新しい場所を指し示すようにすべて編集する必要があります。

4.5.8.7.7 パブリック・ユーザーへの View 権限の付与 Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、（推奨はされていませんでしたが）パブリック・ユーザーに View 権限を付与して、ログオンしていないユーザーがページを参照できました。OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、ユーザー・イ

インタフェースを使用してこれを行うことができなくなりました。かわりに、パブリック・ユーザーにページを表示チェックボックスを選択する必要があります。アップグレード後、この権限は、パブリック・ユーザーに **View** 権限を割り当てるためのアクセス制御リストを定義したページにより削除されます。かわりにパブリック・ユーザーにページを表示チェックボックスを選択します。

4.5.8.7.8 SAMPLEPAGEGROUP ページ名「企業ページ」ページ・グループの内部名は、SAMPLEPAGEGROUP から CORPORATEPAGES に変更され、その内容をより正確に反映するようになりました。このページ・グループへのリンクの URL で内部名が使用されている場合、名前の変更が反映されるようにリンクを変更する必要があります。

4.5.8.7.9 トランスポート・セット アップグレード時にすべてのエクスポート・オブジェクトおよびインポート・オブジェクト（表、パッケージなど）が削除されて、再作成されます。エクスポート表およびインポート表に格納されたすべてのデータが削除されます。その結果、すべてのトランスポート・セットがアップグレード時に削除されます。

これにより、ユーザーがアップグレード後に誤って以前のリリースからトランスポート・セットをインポートしてしまうのを防止できます（エクスポートおよびインポートは製品の複数リリース間で機能しません）。

OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、新しいマニフェスト画面がエクスポート画面およびインポート画面に追加されました。マニフェスト画面には、トランスポート・セットのオブジェクトのリストが表示され、トランスポート・セットに存在する様々なオブジェクトのインポート・モードを細かく制御できます。さらに、オブジェクトの関連付けも表示されます。

関連項目： トランスポート・セットの詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照してください。

4.5.8.7.10 プロバイダ・ナビゲータ Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、すべてのプロバイダがプロバイダ・ナビゲータの 1 つのリストに存在しました。多くのプロバイダがある場合、このリスト内で場所を特定することは非常に困難でした。OracleAS Portal 10g (9.0.4) ではプロバイダ・ナビゲータは、「ローカルで構築されたプロバイダ」、「登録されたプロバイダ」および「プロバイダ・グループ」の 3 つのリージョンに分割されています。プロバイダを見つけるには、まず適切な領域にドリルダウンします。

4.5.8.7.11 ポートレット・リポジトリのプレビュー・リンク 次のような理由から、ポートレット・リポジトリでは一部のポートレットのプレビュー・リンクが表示されなくなりました。

- Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、ポートレットがプレビュー・モードをサポートしない場合でも、ポートレット・リポジトリではそのポートレットの隣にプレビュー・リンクが表示されていました。プレビュー・リンクをクリックすると、プレビューを使用できないことを示すメッセージが画面に表示されました。OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、ポートレットがプレビュー・モードをサポートしない場合は、ポートレット・リポジトリではそのポートレットの隣にプレビュー・リンクが表示されません。

- Oracle9iAS Portal 9.0.2 では、一部のポートレットでプレビュー・モードがサポートされていましたが、OracleAS Portal 10g (9.0.4) ではそれらのポートレットでプレビュー・モードがサポートされません。この場合、ポートレット・リポジトリではポートレットの隣にプレビュー・リンクが表示されなくなります。

プレビュー・リンクのかわりに、ポートレット・タイトルにアンダースコア文字が表示されることがあります。これらは、ハイパーテキスト・リンクとよく似ています。これらのアンダースコア文字が表示されないようにするには、ページまたはリージョンに適用されるスタイルを編集し、「表示名」および「イメージ・リンク」スタイル要素の「フォント飾り」を「<なし>」に変更する必要があります。

4.5.8.7.12 ヘルプ・システムの URL ヘルプ・システムの URL が、次のように新しくなりました。

`http://host:port/portalHelp/en/`

以前のヘルプの URL を指し示す URL アイテムがある場合、この新しい URL を指し示すように URL アイテムを更新する必要があります。

4.5.8.7.13 デフォルトで有効なパラメータおよびイベント OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、この機能がデフォルトで有効になっています。そのため、アップグレード後に、すべてのページ・グループでパラメータおよびイベントが有効になります。この機能を無効にするには、ページ・グループの「プロパティ」リンクをクリックし、次に「構成」タブをクリックします。「パラメータおよびイベント」セクションで、「編集」リンクをクリックし、「パラメータおよびイベントを有効にする」を選択解除します。

4.5.8.7.14 アップグレード済モバイル・ページ表示のエラー 以前はコンポーネントと呼ばれていたフォーム、レポート、グラフなどの、ポートレット・ビルダーのモバイル対応ポートレットがモバイル・ページに追加される際に、次のエラーが表示されることがあります。

エラー：XML パーサーでエラーが発生したため、ポートレット ID9,41924 の変換に失敗しました。次のメッセージが返されました： (1)

この問題を解決するには、「Portal ナビゲータ」からポートレットにナビゲートし、ポートレットを編集します。「オプションの表示」タブに移動します。「モバイル表示オプション」の下画面下部で、少なくとも 1 つの列が「表示する列」リストで選択されていることを確認します。「OK」をクリックして、ポートレットの属性を更新します。これで、ポートレットがモバイル・ページで正常に動作します。

4.5.8.8 ポートレット・リポジトリの変更について

OracleAS Portal 10g (9.0.4) では、生成されたポートレット・リポジトリ・ページのいくつかのタイトルが、以前のリリースのものと異なっています。

- 「管理」は、「管理ポートレット」に変更されました。
- 「Portal ツール」は、「ポートレット・ビルダー」に変更されました。

- 共有インスタンスは、「共有ポートレット」に変更されました。
- 「コンテンツ」は、「Portal コンテンツ・ツール」に変更されました。
- Oracle9iAS Portal コミュニティは、「Portal コミュニティ・ニュース」に変更されました。
- ユーザー・コンテンツは、「公開する Portal コンテンツ」に変更されました。
- 「新規」は、「Portlet ステージング領域」に変更されました。

図 4-3 Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のポートレット・リポジトリ

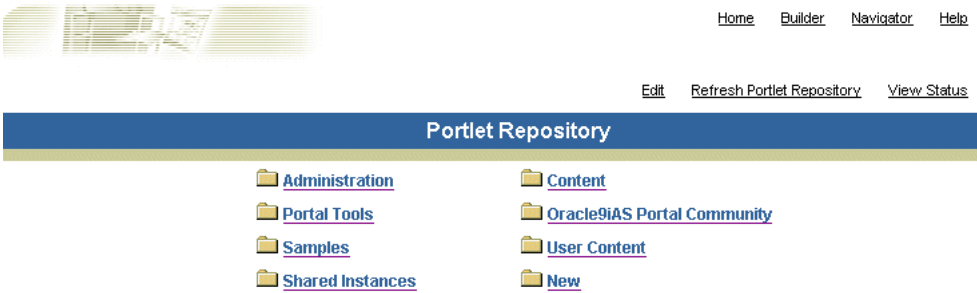
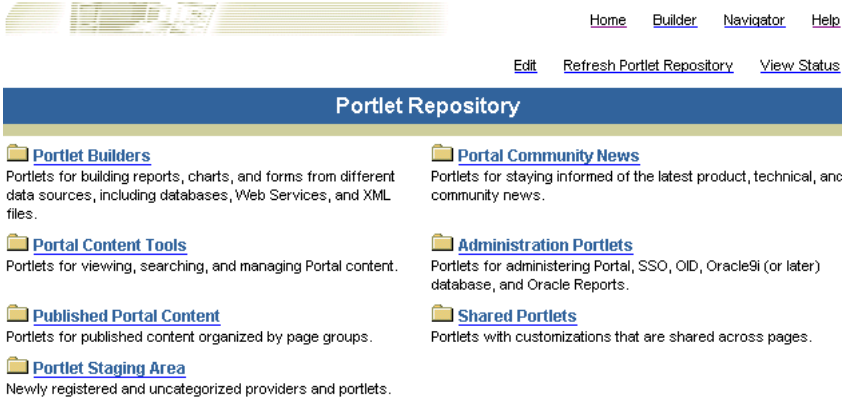


図 4-4 Oracle Application Server 10g (9.0.4) のポートレット・リポジトリ



ただし、ページの名前は Oracle9iAS Portal 9.0.2 からアップグレードする際に自動的に変更されません。たとえば、ポートレット・リポジトリに共有インスタンスというページがある場合でも、アップグレード時に「共有ポートレット」という名前には変更されません。新しいタイトルを使用するには、ポートレット・リポジトリ・ページの表示名を変更する必要があります。

関連項目： 表示名の変更については、『Oracle Application Server Portal ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

特定の状況では、アップグレード時にページが作成される場合もあります。Oracle9iAS Portal に「新規」ページがない場合は、「Portlet ステージング領域」が作成されます。Oracle9iAS Portal にユーザー・コンテンツ・ページがない場合は、「公開する Portal コンテンツ」が作成されます。

アップグレード後、新しいページ・グループを作成した場合、新しいページ・グループを表すプロバイダ・ページが「公開する Portal コンテンツ」ページの下に作成され、すべてのユーザーから参照可能になります。

プロバイダを直接作成または登録した場合、プロバイダ・ページが「Portlet ステージング領域」ページに作成され、Portal 管理者、およびプロバイダを作成または登録したユーザーから参照可能になります。

4.5.8.8.1 ポートレット・リポジトリの OracleAS Portal 10g (9.0.4) 形式への移行

デフォルトでは、ポートレット・リポジトリは Oracle9iAS Portal 9.0.2 から OracleAS Portal 10g (9.0.4) にインプレース・アップグレードされます。ポートレット・リポジトリ内の既存のページ、テンプレート、アイテムなどがアップグレードされ、新しいポートレットがリポジトリに追加されます。リリース 2 (9.0.2) の設定が維持されるため、10g (9.0.4) のページはリリース 2 (9.0.2) と非常によく似ています。

注意： リリース 2 (9.0.2) でポートレット・リポジトリをプロバイダ名でグループ化されるようにレンダリングした場合、アップグレード後にリポジトリ内のフォルダはカテゴリでグループ化されます。これは、10g (9.0.4) ではプロバイダ名ごとにグループ化オプションは推奨されていないためです。同様の編成を作成するには、プロバイダ名を表すカテゴリにポートレット名を割り当てます。

リポジトリの外観を OracleAS Portal 10g (9.0.4) インストールの外観にするには、スクリプトを使用して、アップグレードされたポートレット・リポジトリを再作成します。スクリプトは、アップグレードされた既存のポートレット・リポジトリを削除して、再作成します。スクリプトは、ポートレット・リポジトリ内のカスタマイズ、設定、スタイル、バナーなどを保持しない場合にのみ使用してください。

リポジトリを再作成する手順は、次のとおりです。

1. スクリプトによってリポジトリが上書きされて元に戻すことができなくなるため、データベースのバックアップを実行します。
2. `<destination_MT_OH>%portal%upg%plsql%upg%309-903%wws%` に移動します。
3. 次のコマンドを実行して、`prrrplc.pl` スクリプトを実行します。

```
<destination_MT_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl prrrplc.pl -t
<portal tns name> [-s <portal schema>] [-w <portal schema
password>]
```

`<portal tns name>` は、OracleAS Portal リポジトリが存在するデータベースの TNS 接続文字列です。

`<portal schema>` は、修正する Portal スキーマの名前です。

`<portal schema password>` は、スキーマのパスワードです。

たとえば、次に示すとおりです。

```
<destination_MT_OH>%perl%5.6.1%bin%MSWin32-x86%perl prrrplc.pl -t
iasdb1 -s myportal -w wh7HeT23
```

4.5.8.9 OmniPortlet プロバイダおよび Web クリップング・プロバイダの更新

OmniPortlet プロバイダおよび Web クリップング・プロバイダは、OracleAS Portal 10g (9.0.4) で新しくなりました。そのため、中間層を起動した後、それらのプロバイダをリポジトリ内で更新する必要があります。それらのプロバイダを参照する OracleAS Portal インスタンスごとに、次の手順を繰り返します。

1. 管理者として OracleAS Portal にログインします。
2. 「ナビゲータ」リンクをクリックします。
「Portal ナビゲータ」ページが表示されます。
3. 「プロバイダ」タブをクリックします。
4. 「ローカルで構築されたプロバイダ」をクリックします。
ローカルで構築されたプロバイダのソートされたリストが表示されます。
5. 必要に応じて「次へ」または「前」リンクを使用して、OmniPortlet プロバイダを探します。
6. OmniPortlet プロバイダの「更新」リンクをクリックします。
7. 必要に応じて「次へ」または「前」リンクを使用して、Web クリップング・プロバイダを探します。
8. Web クリップング・プロバイダの「更新」リンクをクリックします。

4.5.9 アップグレードされた OracleAS Portal へのアクセス

エラーが発生しなかった場合、アップグレードされた Portal にアクセスできます。ブラウザを開いて次の URL にアクセスします。

`http://<host>:<port>/pls/<dad>`

表 4-3 アクセス URL のパラメータ

パラメータ	説明
<code><host></code>	OracleAS 10g (9.0.4) HTTP サーバーが実行されているコンピュータ。
<code><port></code>	OracleAS 10g (9.0.4) HTTP サーバーのリスニング・ポート。
<code><dad></code>	アップグレードされた Portal の Portal DAD 名。これは、アップグレード前に使用していた DAD 名と同じです。

4.6 カスタマ・データベースにおけるスキーマのアップグレード

通常、スキーマは Metadata Repository に含まれますが、一部のコンポーネント（たとえば Oracle Application Server Discoverer や OracleAS Portal など）のスキーマは Infrastructure データベース以外に存在する場合があります。この項では、それらのコンポーネントのスキーマを、カスタマ・データベースでアップグレードする方法について説明します。

4.6.1 Oracle Application Server Discoverer End User Layer スキーマのアップグレード

Oracle Application Server Discoverer のリリース 9.0.2.52 以下を使用している場合、10g (9.0.4) で Oracle Application Server Discoverer 9.0.4 を使用するには、まず End User Layer をアップグレードする必要があります。

Oracle Application Server Discoverer End User Layer スキーマをアップグレードするには、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) に同梱されている Oracle Discoverer Administrator を使用します。

関連項目： Oracle Developer Suite ドキュメント・ライブラリの『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。

4.6.2 OracleAS Portal スキーマのアップグレード

カスタマ・データベースの Portal スキーマのアップグレード手順は、アップグレード前のリリースが 9.0.2 以上であれば、Infrastructure におけるスキーマのアップグレード手順と同じです。手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Portal リポジトリ・データベースが、アップグレード処理でサポートされているリリースであることを確認します。
サポートされている 9.0 リリースは、9.0.1.5 以上です。
サポートされている 9.2 リリースは、9.2.0.4 以上です。
2. 4-30 ページの **4.5 項「OracleAS Portal リポジトリのアップグレード」** の指示に従います。

注意： Infrastructure Oracle ホームまたは Infrastructure データベースを指す手順では、OracleAS Portal スキーマが存在するインスタンスの Oracle ホームおよびデータベースを使用してください。

OracleAS Portal 10g (9.0.4) へのアップグレードに関する一般的な情報および他のリリースからのアップグレード手順は、次の URL で説明しています。

<http://portalcenter.oracle.com/upgrades>

ページに表示されるアップグレード対象リストから 9.0.4 を選択します。

4.7 UDDI アプリケーションの 10g (9.0.4) の機能のアクティブ化

Oracle Application Server のアップグレードは、リリース 2 (9.0.2) Infrastructure とのコンポーネント動作をサポートするように設計されていたため、Oracle Application Server Web Services の UDDI サブコンポーネントには各リリースの Infrastructure に対する動作モードがあります。

リポジトリのデータベース・スキーマがアップグレードされなかった場合、アップグレード後の UDDI サブコンポーネントは、9.0.2.3 互換性モードで実行されます。

10g (9.0.4) モードで実行する手順は、次のとおりです。

1. メタデータ・リポジトリのデータベース・スキーマをアップグレードします。
2. UDDI アプリケーションを再起動します。

Identity Management サービスの アップグレード

この章では、Identity Management サービスのアップグレードの方法について説明します。
この章のタスクを実行する前に、4-3 ページの [4.2 項「Metadata Repository のアップグレードの準備」](#) の手順を実行する必要があります。

この章の項は、次のとおりです。

5-2 ページの [5.1 項「Identity Management のアップグレード」](#)

5-38 ページの [5.2 項「Oracle Internet Directory マルチマスター・レプリケーションのアップグレードの実行」](#)

5-43 ページの [5.3 項「Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x の 10g \(9.0.4\) へのアップグレード」](#)

5-46 ページの [5.4 項「Infrastructure のアップグレード後のタスク」](#)

5-58 ページの [5.5 項「リリース 2 \(9.0.2\) の Oracle ホームの廃棄」](#)

5.1 Identity Management のアップグレード

Identity Management は、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory から構成されます。この項では、Identity Management の可能な構成、および Oracle Universal Installer を使用して Identity Management をアップグレードする方法について説明します。項目は、次のとおりです。

5-2 ページの [5.1.1 項「Identity Management 構成の概要」](#)

5-4 ページの [5.1.2 項「Identity Management のアップグレード処理について」](#)

5-7 ページの [5.1.3 項「Identity Management のアップグレードでの Oracle Universal Installer の使用」](#)

5.1.1 Identity Management 構成の概要

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) では、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory を動作させるためにはデータベース層が必要でした。Metadata Repository には、これらのコンポーネントに必要なスキーマが含まれます。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Identity Management は非分散構成が可能であり、この場合、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory が同じ Metadata Repository を共有します。[図 5-1](#) にこの構成を示します。または、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Identity Management は分散構成も可能であり、この場合、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory がそれぞれ別の Metadata Repository を使用します。[図 5-2](#) にこの構成を示します。

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、分散構成はリリース 2 (9.0.2) の場合と異なり、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory が単一の Metadata Repository を共有し、Oracle Application Server Single Sign-On が別のコンピュータから Metadata Repository にアクセスします。[図 5-3](#) にこの構成を示します。

注意： [図 5-1](#) に示すように、10g (9.0.4) リリースの非分散構成は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の非分散構成と似ています。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の 1 つの中間層で Delegated Administration Services (DAS) および Directory Integration and Provisioning (DIP) を動作させていた場合に、10g (9.0.4) で DAS または DIP を設定するには、別の Oracle ホームに DAS のみまたは DIP のみのインストールを実行する必要があります。『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の第 6 章「OracleAS Infrastructure 10g のインストール」の Identity Management コンポーネントのみのインストールに関する項を参照してください。

図 5-1 リリース 2 (9.0.2) および 10g (9.0.4) の非分散 Identity Management

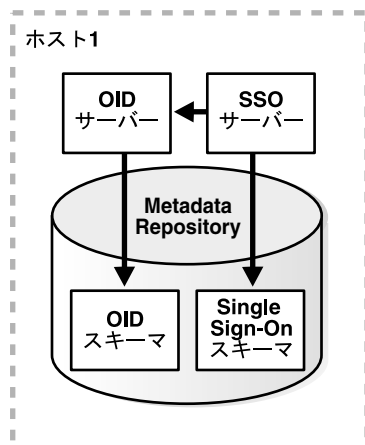


図 5-2 リリース 2 (9.0.2) の分散 Identity Management

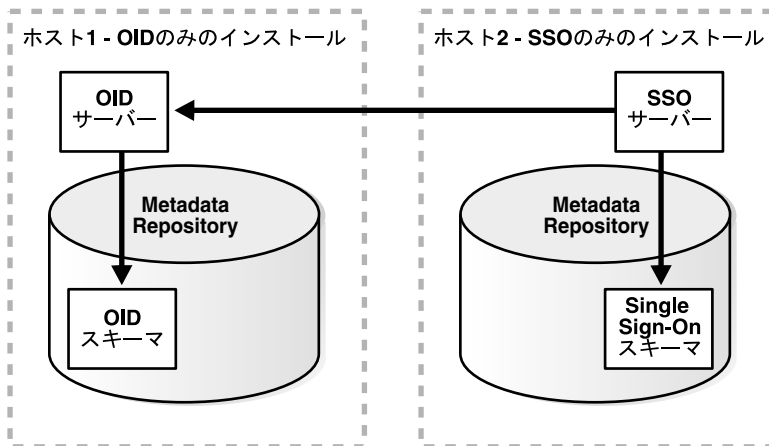
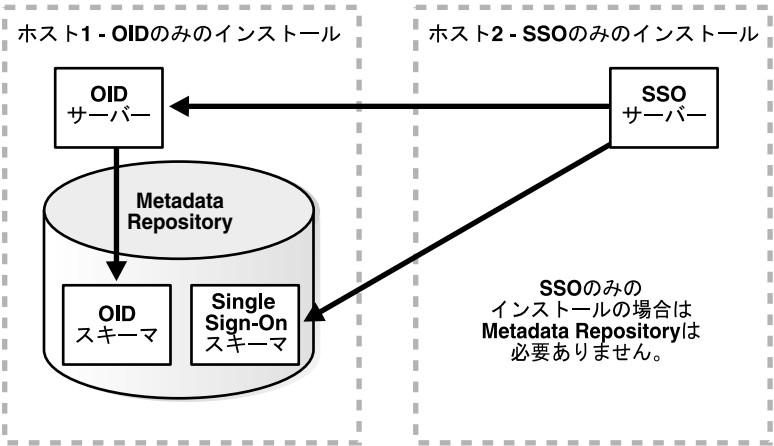


図 5-3 10g (9.0.4) の分散 Identity Management

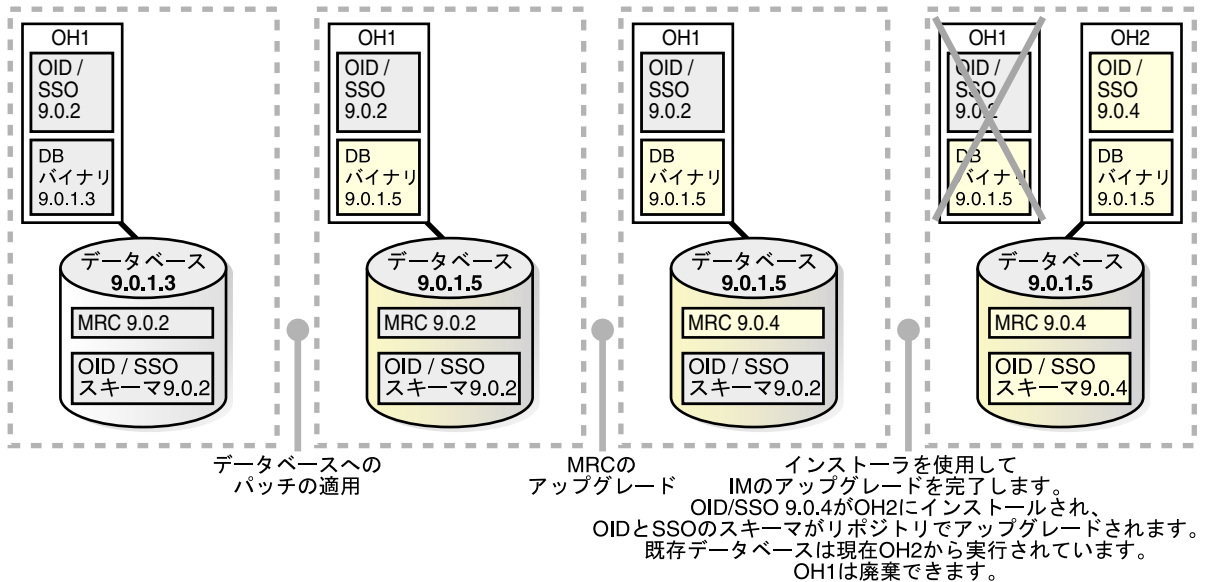


5.1.2 Identity Management のアップグレード処理について

Identity Management スキーマは、他のコンポーネント・スキーマ（OracleAS Portal、Oracle Ultra Search などのスキーマ）とともに Metadata Repository に含まれます。ただし、Identity Management スキーマ（図 5-4 の OID/SSO）のアップグレード処理は、コンポーネント・スキーマ（図 5-4 の MRC）のアップグレード処理と異なります。図 5-4 「Identity Management のアップグレード」に示すように、Identity Management スキーマは Oracle Universal Installer によってアップグレードされます。コンポーネント・スキーマは個々のスクリプトによってアップグレードされます。

関連項目： Identity Management に関連した Metadata Repository のアップグレードについては、4-2 ページの 4.1 項「Metadata Repository のアップグレード処理について」を参照してください。

図 5-4 Identity Management のアップグレード



5.1.2.1 Identity Management をアップグレードする前の準備手順

Identity Management のアップグレード処理を開始する前に、次の準備手順を実行します。

- データベースに 9.0.1.5 パッチを適用します。
- Oracle Internet Directory スーパーユーザーのパスワードが 9.0.4 `ias_admin` ユーザーに定義されている制限と同様の制限に準拠していることを確認します。詳細は、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「`ias_admin` ユーザーとそのパスワードの制限」を参照してください。

この制限は、アップグレード中に Oracle Internet Directory データベース・スキーマのパスワードが Oracle Internet Directory スーパーユーザーのパスワードと同じ値に設定されるため発生します。

- Oracle Internet Directory 環境をアップグレードする場合は、デフォルトのサブスクリバに `orcladmin` ユーザーが存在することを確認します。この確認は、次の LDAP 問合せを実行して行うことができます。

デフォルトのサブスクライバ DN の取得

```
OH$bin$ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID  
superuser> -w <OID superuser password> -b  
"cn=common,cn=products,cn=oraclecontext" -s base "objectclass=*"  
orcldefaultsubscriber
```

ユーザー・ニックネームおよびユーザー検索の基本属性の取得

```
OH$bin$ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID  
superuser> -w <OID superuser password> -b "cn=common,  
cn=products, cn=oraclecontext, <default subscriber DN>" -s base  
"objectclass=*" orclcommonnicknameattribute  
orclcommonusersearchbase
```

orcladmin ユーザーの検索

```
OH$bin$ldapsearch -h <oid host> -p <non-ssl port> -D <OID  
superuser> -w <OID superuser password> -b "<user search base  
DN>" -s sub "<user nickname attribute>=orcladmin"
```

orcladmin ユーザーが存在しない場合は、orcladmin ユーザーの作成方法について、Oracle Internet Directory リリース・ノートのバグ 3456425 を参照してください。

5.1.2.2 Identity Management のアップグレード処理

Identity Management のアップグレードには、次の手順があります。

1. Metadata Repository Container のアップグレード・スクリプトを実行します。詳細は、[4.2.3 項「Metadata Repository Container のアップグレード」](#)を参照してください。

注意： Metadata Repository Container のアップグレード・スクリプトは、アップグレードする Identity Management サービスが使用している Metadata Repository をアップグレードします。このスクリプトの実行後は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 中間層の新規インストールはこの Metadata Repository を使用しません。ただし、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 中間層の既存のインストールは機能し続けます。

2. Oracle Universal Installer を起動します。これにより、Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On が新規 Oracle ホームにインストールされ、Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On の Metadata Repository 内のスキーマがアップグレードされます。

注意： Identity Management の個々のコンポーネント（Oracle Internet Directory、Oracle Application Server Single Sign-On など）のアップグレードは、サポートされていません。これらのコンポーネントのアップグレードは、Identity Management のアップグレードの一環としてのみ実行できます。

3. アップグレードした構成に適用するアップグレード後の手順を、5-46 ページの [5.4 項「Infrastructure のアップグレード後のタスク」](#) の説明に従ってすべて実行します。

注意： Identity Management の Oracle Application Server 10g (9.0.4) へのアップグレード後、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure の Oracle ホーム（[図 5-4](#) の OH1）に残っているデータベース・ファイル（*.dbf）を手動で削除しないでください。Identity Management のアップグレード処理では、*.dbf ファイルおよび REDO ログ・ファイルをアップグレード先 Oracle ホームにコピーおよび再配置しません。ソース Oracle ホームにあった *.dbf ファイルは、再配置しないかぎり、アップグレード後も同じ場所に残ります。データベース・ファイルのアップグレード先 Oracle ホームへの再配置については、5-58 ページの [5.5 項「リリース 2 \(9.0.2\) の Oracle ホームの廃棄」](#) を参照してください。

5.1.3 Identity Management のアップグレードでの Oracle Universal Installer の使用

Identity Management のアップグレードは、Oracle Universal Installer によって実行されます。Oracle Universal Installer は、Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On データベース・スキーマをアップグレードする Configuration Assistant を起動します。このアップグレードは、SYS 資格証明を持つユーザーのみが実行できます。

Identity Management のアップグレードを開始する前に、次のことを確認してください。

- 4-3 ページの [4.2 項「Metadata Repository のアップグレードの準備」](#) の手順が実行されていること。
- データベース・サーバーが実行されていること。
- データベース・リスナーが実行されていること。
- Oracle Internet Directory サーバーが実行されていること。これを確認するには、次のコマンドを実行します（それぞれ "bind successful" が返されます）。

```
<source_Infra_OH>%bin%ldapbind -p <Non-SSL port>
<source_Infra_OH>%bin%ldapbind -p <SSL port> -U 1
```

5.1.3.1 非分散 Identity Management 構成のアップグレード

非分散 Identity Management 構成（図 5-1「リリース 2 (9.0.2) および 10g (9.0.4) の非分散 Identity Management」を参照）をアップグレードする手順は、次のとおりです。Oracle Universal Installer によって、アップグレード時に特定のコンポーネントを停止および起動するように要求されます。

1. Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のインストールを実行した同じオペレーティング・システム・ユーザーとして、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) がインストールされているコンピュータにログインします。
2. CD-ROM をマウントします。

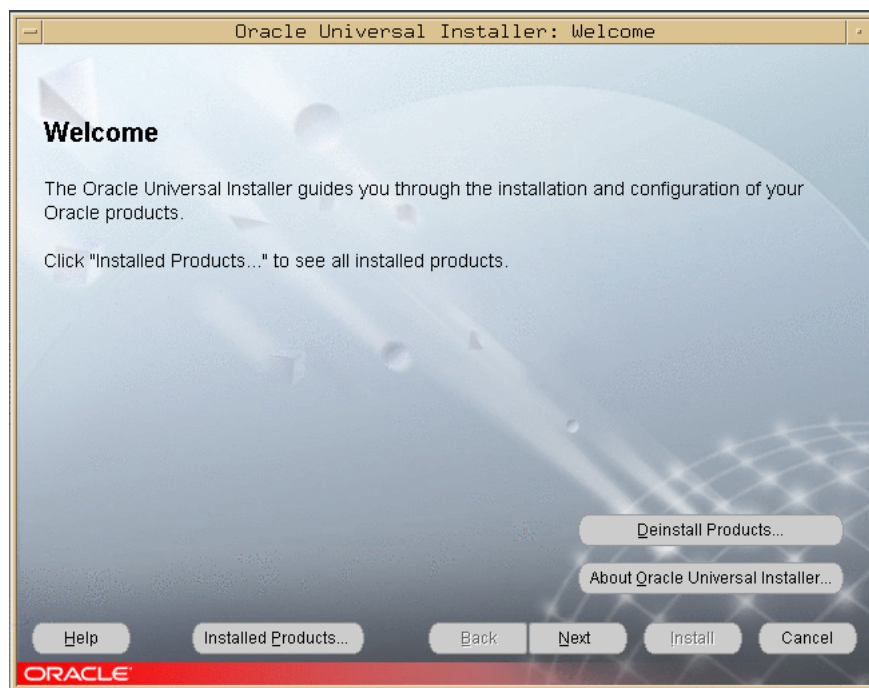
関連項目： 手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

3. Installer を起動します。

関連項目： 手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

図 5-5 に示す「ようこそ」画面が表示されます。

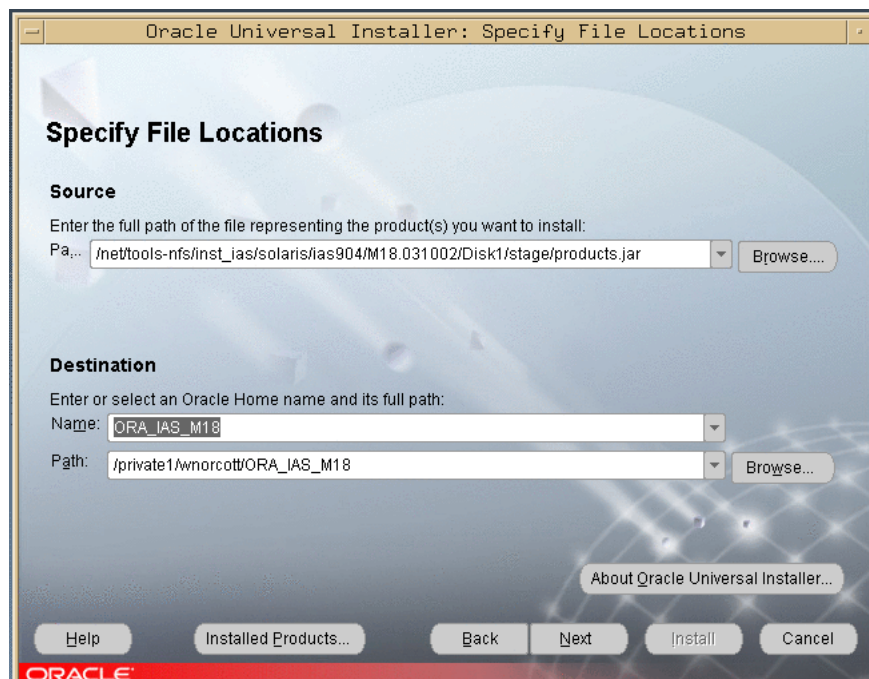
図 5-5 「ようこそ」画面



4. 「次へ」をクリックします。

図 5-6 に示す「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。

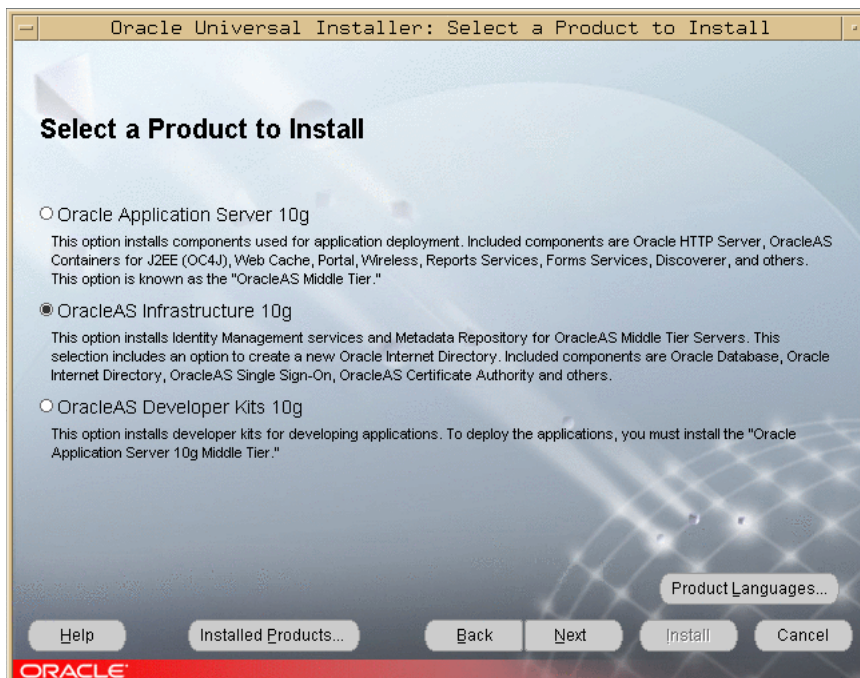
図 5-6 「ファイルの場所の指定」画面



5. 10g (9.0.4) アップグレードの新しい Oracle ホーム名およびパスを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-7 に示す「インストールする製品の選択」画面が表示されます。

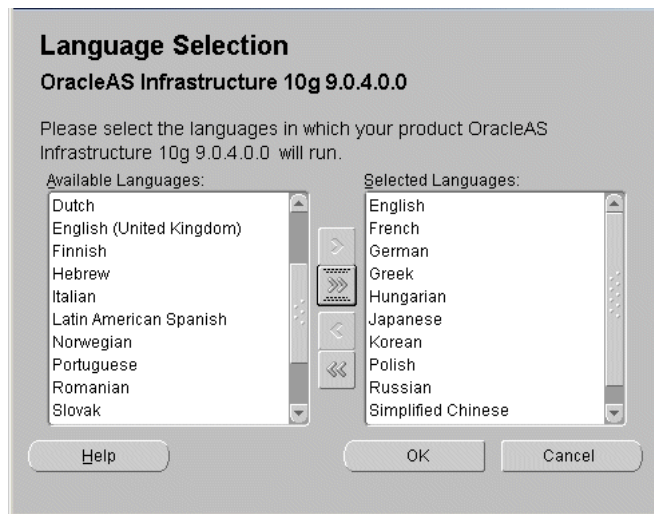
図 5-7 「インストールする製品の選択」画面



6. 「OracleAS Infrastructure 10g」を選択します。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure で複数の言語を使用している場合、「製品の言語」をクリックします。英語のみを Oracle Application Server 10g (9.0.4) にインストールする場合、「次へ」をクリックして手順 8 に進みます。

図 5-8 に示す「言語の選択」画面が表示されます。

図 5-8 「言語の選択」画面



7. インストールする言語を選択して、「OK」をクリックします。

注意： Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) に複数の言語がインストールされている場合、それらの言語を選択します。インストールされている言語が明らかでない場合に英語以外の言語をインストールするには、二重矢印 (>>) をクリックしてすべての言語を選択します。

「インストールする製品の選択」画面が再び表示されます。

8. 「次へ」をクリックします。

図 5-9 に示す「インストール・タイプの選択」画面が表示されます。

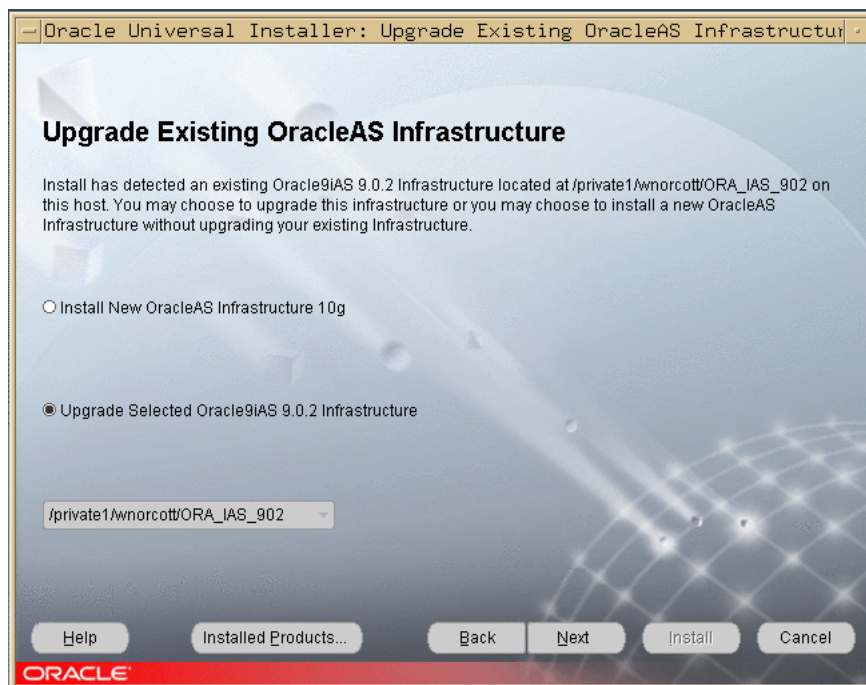
図 5-9 「インストール・タイプの選択」画面



9. 「Identity Management」 および 「OracleAS Metadata Repository」 を選択して、「次へ」をクリックします。

図 5-10 に示す「既存の OracleAS Infrastructure のアップグレード」画面が表示されます。

図 5-10 「既存の OracleAS Infrastructure のアップグレード」画面

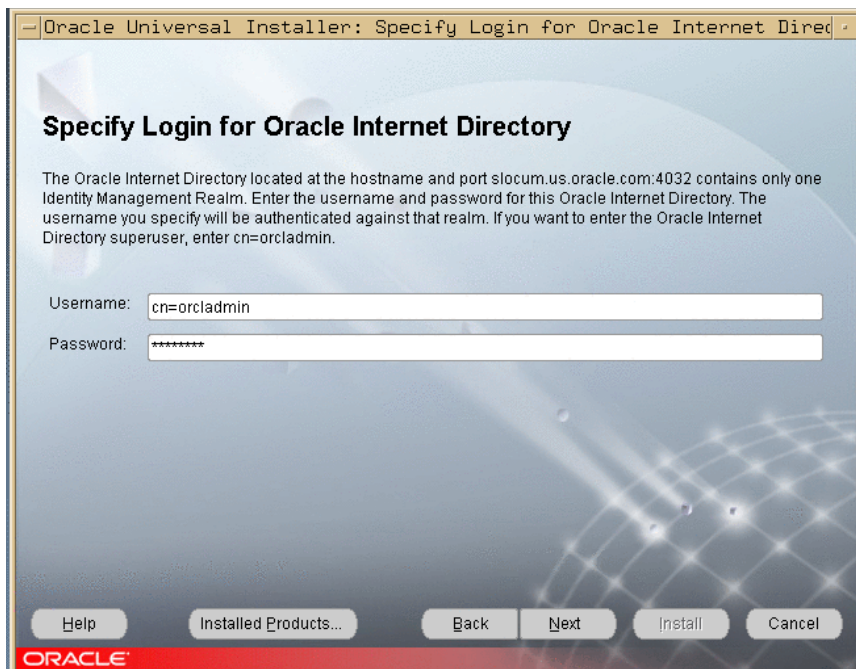


10. 「選択した Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure のアップグレード」を選択します。

11. アップグレードする Infrastructure をドロップダウン・リストから選択し、「次へ」をクリックします。コンピュータの Infrastructure が 1 つのみの場合、ドロップダウン・リストはアクティブになりません。

図 5-11 に示す「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面が表示されます。

図 5-11 「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面



12. 「ユーザー名」フィールドに OID スーパー・ユーザーの DN を入力します。スーパー・ユーザーの DN の cn=orcladmi は、このフィールドのデフォルトです。OID スーパー・ユーザーの DN が cn=orcladmin ではない場合、この値を変更します。

13. 「パスワード」フィールドにパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-26 に示す「Infrastructure データベース接続情報の指定」画面が表示されます。

図 5-12 「Infrastructure データベース接続情報の指定」画面

Oracle Universal Installer: Specify Infrastructure Database Connection Information

Specify Infrastructure Database Connection Information

Specify the Database Administrator Username and Password for the Oracle9IAS Infrastructure Database to be upgraded.

Database Administrator Username:

Password:

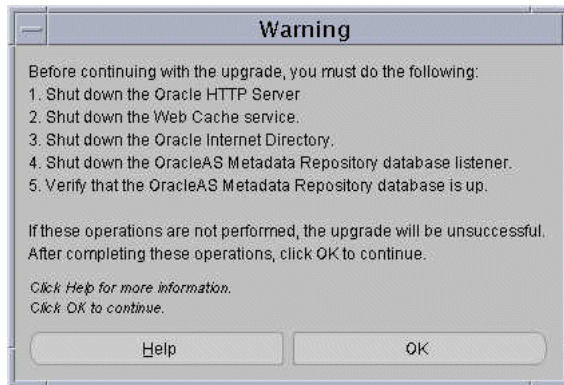
Help Installed Products... Back Next Install Cancel

ORACLE

14. 「ユーザー名」フィールドに `sys` と入力して、「パスワード」フィールドに `sys` ユーザーのパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-13 に示す警告ダイアログが表示され、Oracle ホームのプロセスを停止するように要求されます。

図 5-13 警告ダイアログ



15. 次のコマンドを使用して、Oracle Internet Directory を停止します。
 - a. `oidctl connect=<conStr> server=oidldapd inst=<InstNum> stop`
`<conStr>` は、`host:port:SID` 形式のデータベース接続文字列です。
`<InstNum>` は、Oracle Internet Directory サーバーのインスタンス番号です。
Oracle Internet Directory サーバーで 1 つのみのインスタンスが実行されている場合、値は 1 になります。
 - b. `sleep 30`
(`oidmon` で `oidldapd` を停止するには、30 秒待機する必要があります。)
 - c. `oidctl connect=<conStr> stop`
 - d. `sleep 20`
(`oidmon` を停止するには、20 秒待機する必要があります。)
16. Metadata Repository データベース・リスナーを停止します。
17. Oracle ホームのすべてのプロセスを停止します。

18. Metadata Repository データベースが実行されていることを確認し、「OK」をクリックします。

図 5-14 に示す「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面が表示されます。

図 5-14 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面

Oracle Universal Installer: Specify Instance Name and ias_admin Password

Specify Instance Name and ias_admin Password

All OracleAS instances installed on a host must have unique names. The hostname and domain name of the host are appended to the instance name.

Each OracleAS instance has its own password, regardless of which user performed the installation. Passwords are not shared across instances, even if the instances were installed by the same user.

By default, the password must have a minimum of 5 alphanumeric characters, and at least one of the characters must be a number.

Administrator Username: ias_admin

Instance Name:

ias_admin Password:

Confirm Password:

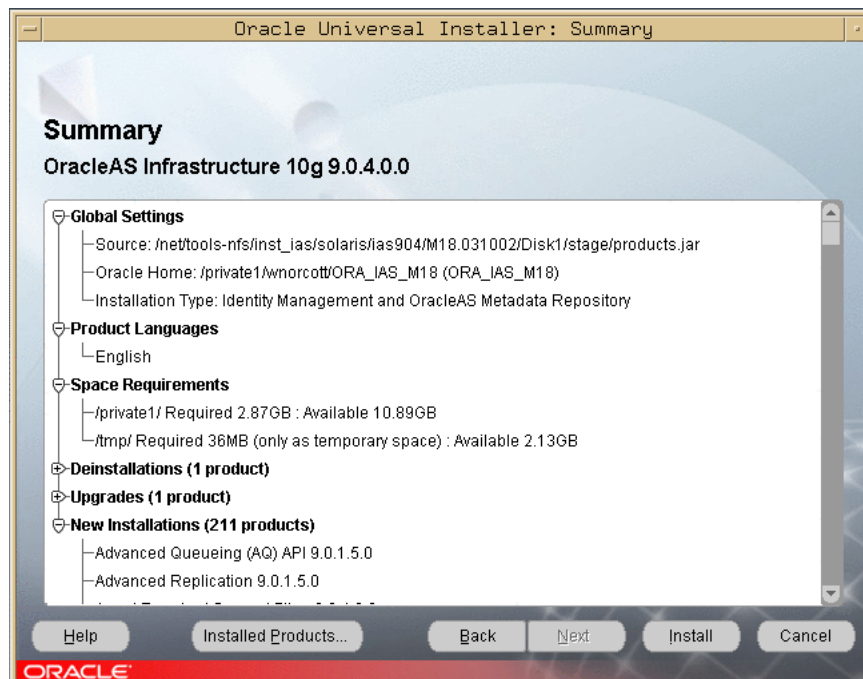
Help Installed Products... Back Next Install Cancel

ORACLE

19. 「インスタンス名」、「ias_admin パスワード」 および 「パスワードの確認」 の各フィールドを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-15 に示す「サマリー」画面が表示されます。

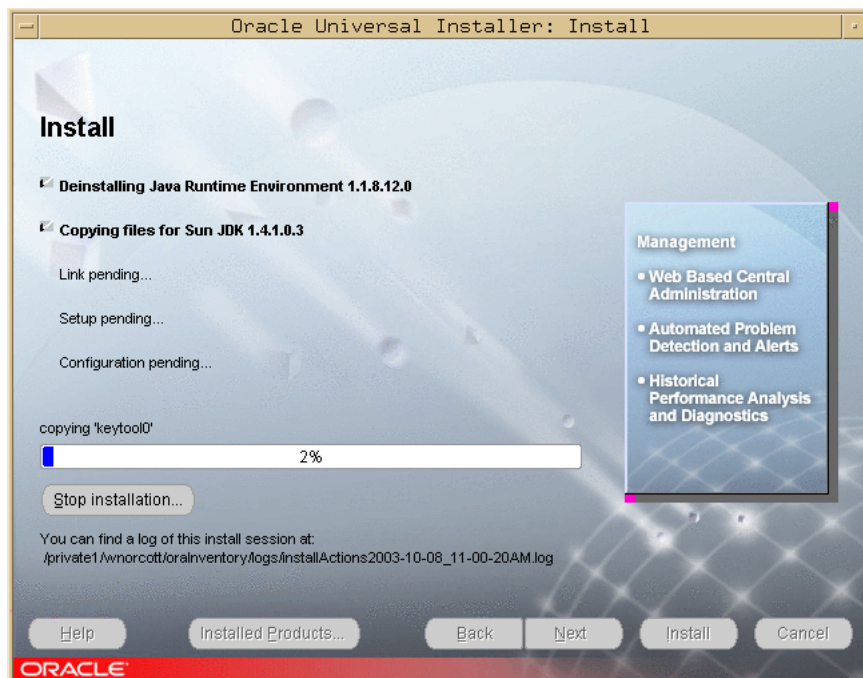
図 5-15 「サマリー」画面



20. 「インストール」をクリックします。

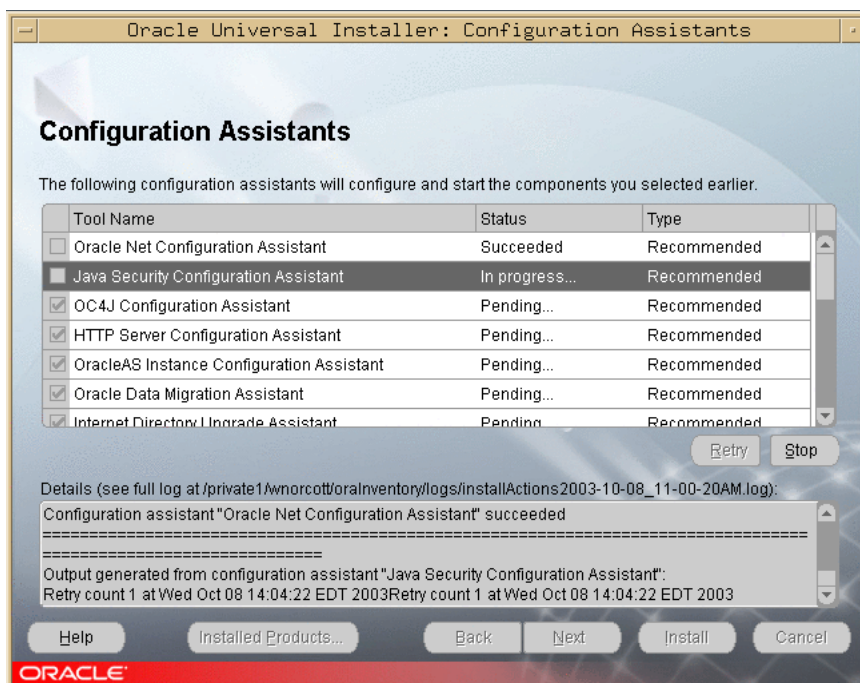
図 5-16 に示す「インストール」画面が表示され、アップグレードが開始されます。処理時間はそれぞれ異なりますが、次のアクションを求められるまで数分かかります。

図 5-16 「インストール」画面



21. 図 5-17 に示す「Configuration Assistants」画面が表示されます。構成処理には時間がかかります。

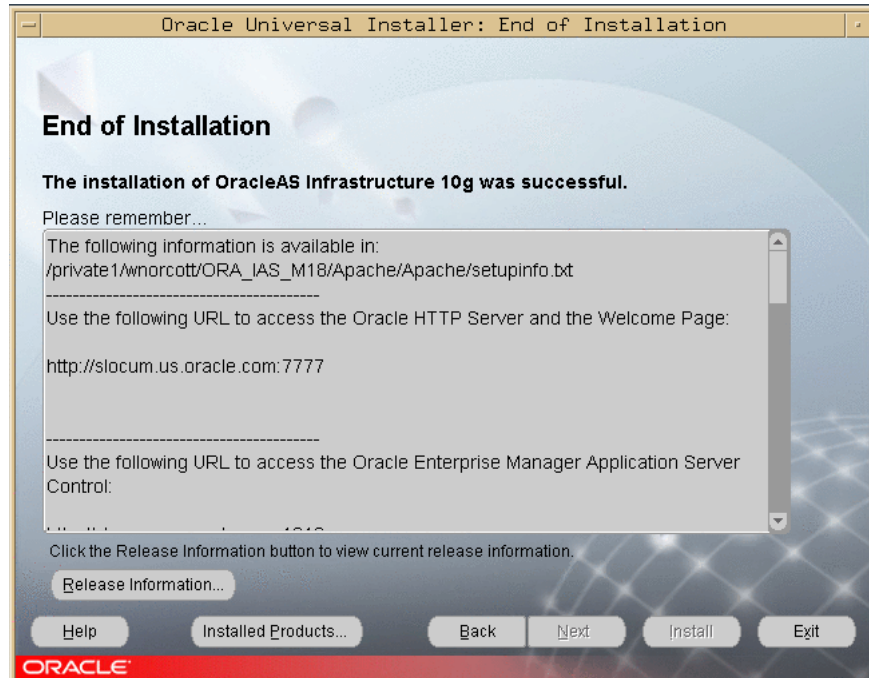
図 5-17 「Configuration Assistant」画面



22. 「次へ」をクリックします。

数分後、図 5-18 に示すインストールの終了画面が表示されます。

図 5-18 インストールの終了画面



23. Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On が機能してアクセス可能であることを確認します。

5.1.3.2 分散 Identity Management 構成のアップグレード

分散 Identity Management 構成 (図 5-2 「リリース 2 (9.0.2) の分散 Identity Management」を参照) をアップグレードする手順は、次のとおりです。このアップグレードには、Oracle Internet Directory と OracleAS Single Sign-On に別々の手順が必要です。

5.1.3.2.1 Oracle Internet Directory のアップグレードの実行 5-7 ページの 5.1.3 項「Identity Management のアップグレードでの Oracle Universal Installer の使用」および 5-8 ページの 5.1.3.1 項「非分散 Identity Management 構成のアップグレード」の手順を実行します。

アップグレード後、Oracle Internet Directory サーバーは新しい Oracle ホームで実行されます。

注意： Oracle Internet Directory のアップグレード後も、Oracle Application Server Single Sign-On のリリース 2 (9.0.2) のインストールは機能します。ただし、通常、部分的にアップグレードされた Identity Management サービスで実行されるようにインストール、アップグレードまたは再構成された中間層の動作はサポートされません。

5.1.3.2.2 Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの実行 Oracle Application Server Single Sign-On サーバーをアップグレードするには、次の手順を実行します。アップグレードを開始する前に、次のことを確認してください。

- Oracle Internet Directory のアップグレードが完了していること。
 - Oracle Application Server Single Sign-On データベースに対する資格証明があること。
 - Oracle Internet Directory データベースに対する資格証明があること。
 - Oracle Internet Directory データベースが実行されていること。
 - Oracle Application Server Single Sign-On データベースが実行されていること。
 - Oracle Application Server Single Sign-On データベースのリスナーが実行されていること。
1. Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Oracle Application Server Single Sign-On がインストールされているコンピュータにログインします。
 2. CD-ROM をマウントします。

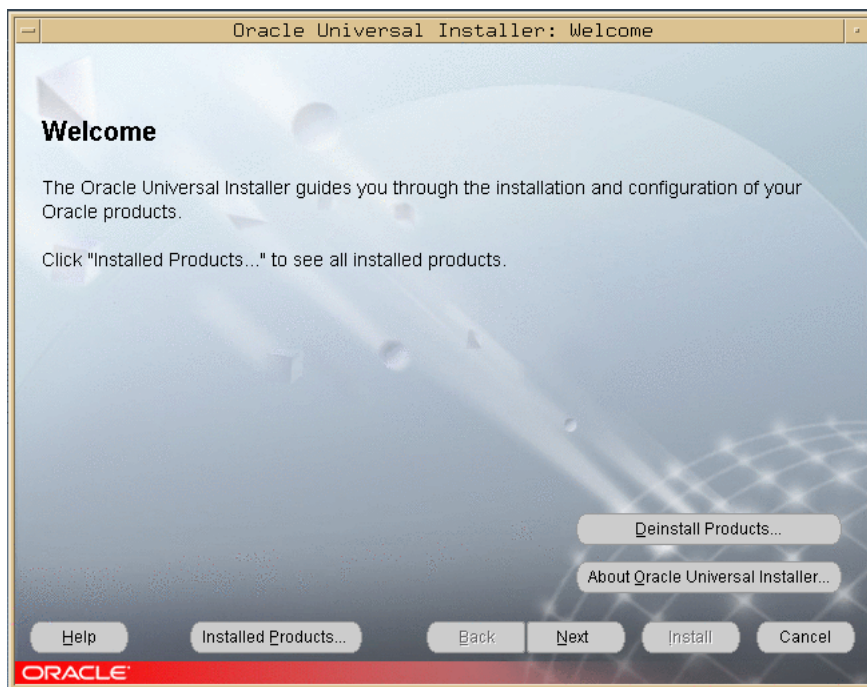
関連項目： 手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

3. Installer を起動します。

関連項目： 手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』を参照してください。

図 5-19 に示す「ようこそ」画面が表示されます。

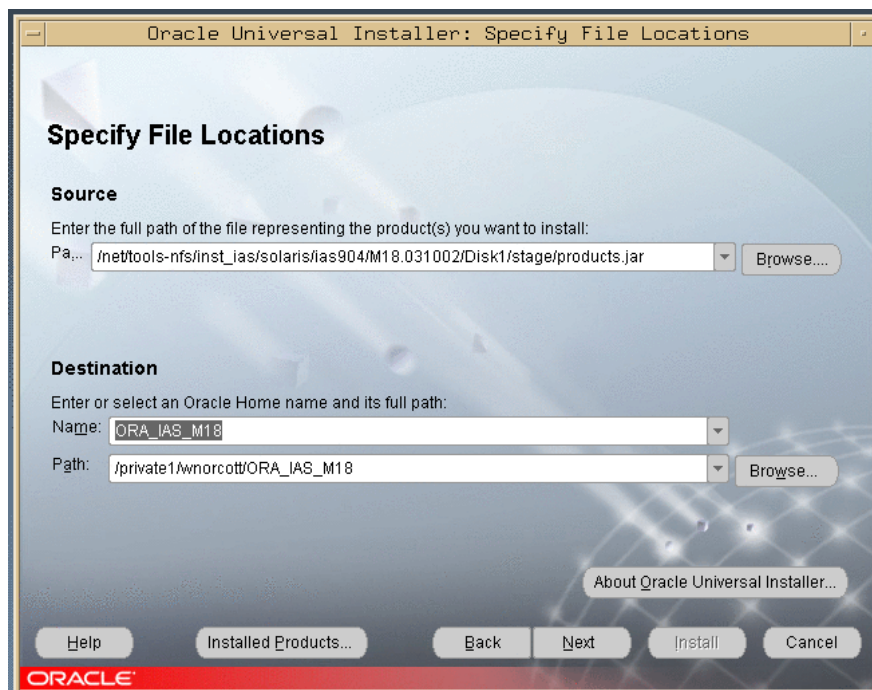
図 5-19 「ようこそ」画面



4. 「次へ」をクリックします。

図 5-20 に示す「ファイルの場所の指定」画面が表示されます。

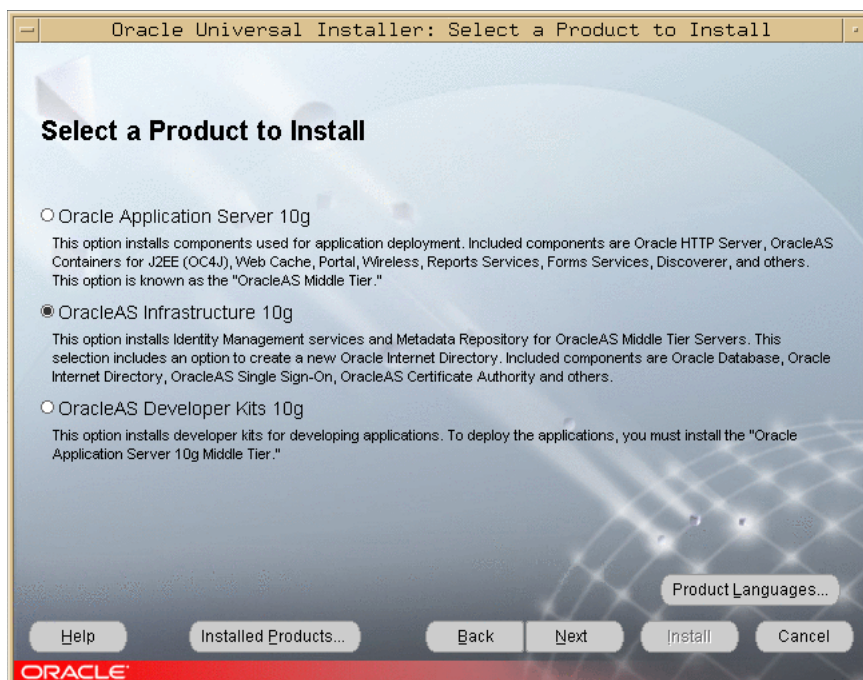
図 5-20 「ファイルの場所の指定」画面



5. 10g (9.0.4) アップグレードの新しいホーム名およびパスを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-21 に示す「インストールする製品の選択」画面が表示されます。

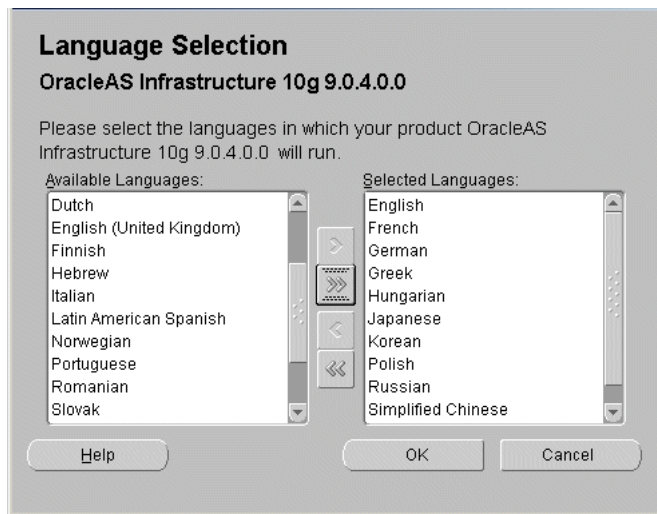
図 5-21 「インストールする製品の選択」画面



6. 「OracleAS Infrastructure 10g」を選択します。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure で複数の言語を使用している場合、「製品の言語」をクリックします。英語のみを Oracle Application Server 10g (9.0.4) にインストールする場合、「次へ」をクリックして手順 8 に進みます。

図 5-22 に示す「言語の選択」画面が表示されます。

図 5-22 「言語の選択」画面



7. インストールする言語を選択して、「OK」をクリックします。

注意： Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) に複数の言語がインストールされている場合、それらの言語を選択します。インストールされている言語が明らかでない場合に英語以外の言語をインストールするには、二重矢印 (>>) をクリックしてすべての言語を選択します。

「インストールする製品の選択」画面が再び表示されます。

8. 「次へ」をクリックします。

図 5-23 に示す「インストール・タイプの選択」画面が表示されます。

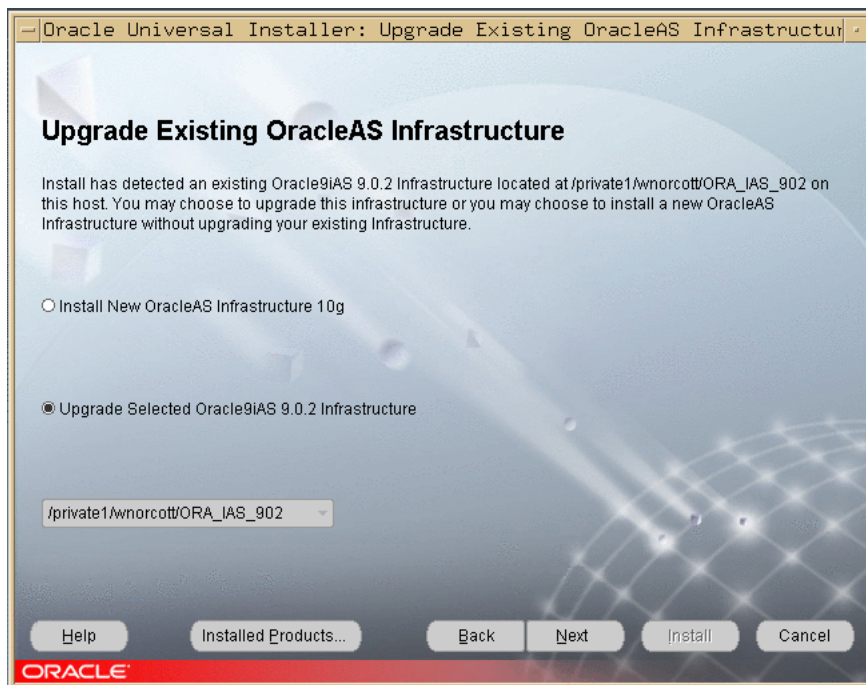
図 5-23 「インストール・タイプの選択」画面



9. 「Identity Management」および「OracleAS Metadata Repository」を選択して、「次へ」をクリックします。

図 5-24 に示す「既存の OracleAS Infrastructure のアップグレード」画面が表示されます。

図 5-24 「既存の OracleAS Infrastructure のアップグレード」画面

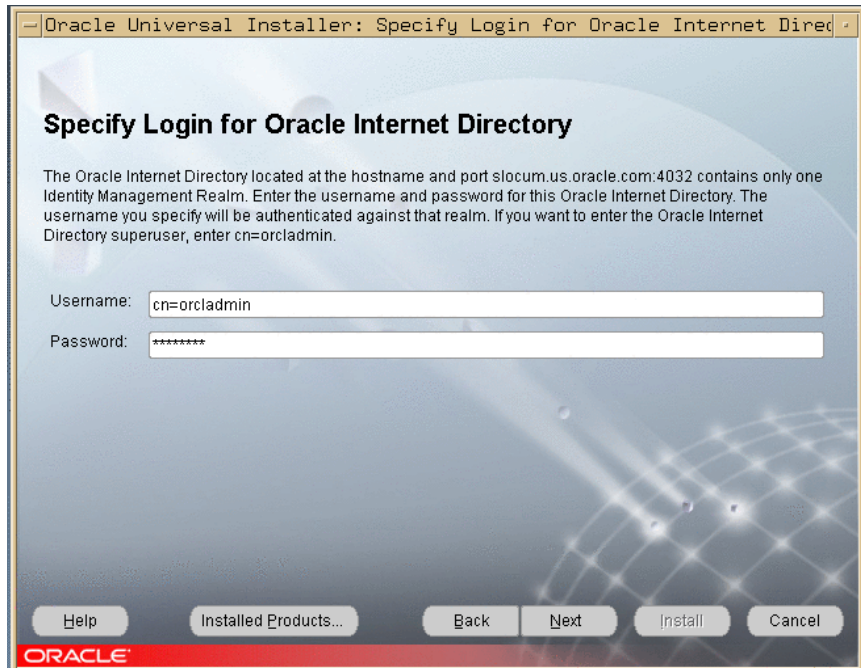


10. Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Oracle Application Server Single Sign-On の Oracle ホームのデータベース・リスナーが実行されていることを確認します。
11. 「選択した Oracle9iAS 9.0.2 Infrastructure のアップグレード」を選択します。

12. アップグレードする Infrastructure をドロップダウン・リストから選択し、「次へ」をクリックします。(Infrastructure が 1 つのみの場合、ドロップダウン・リストはアクティブになりません。)

図 5-25 に示す「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面が表示されます。

図 5-25 「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面

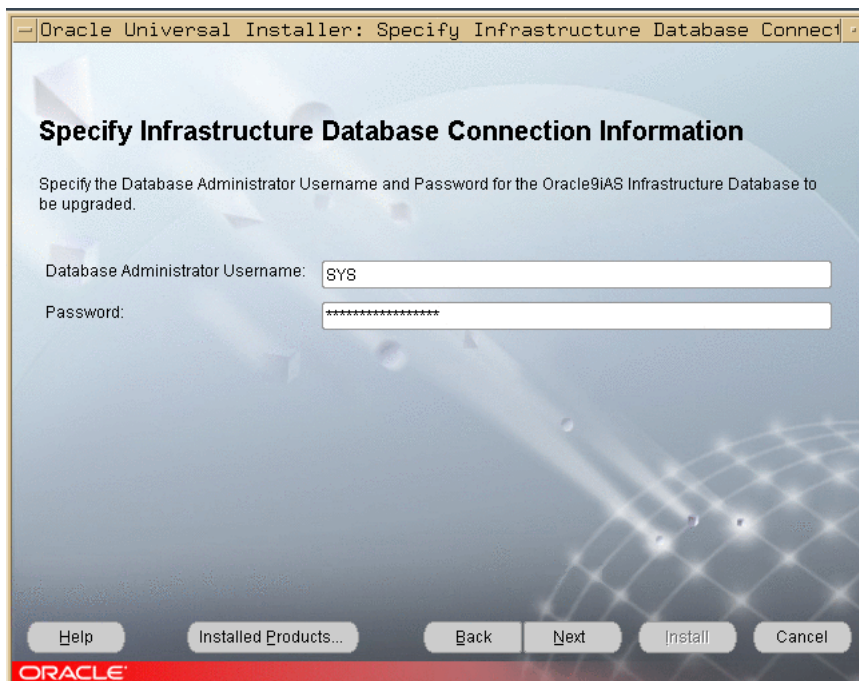


13. 「ユーザー名」フィールドに Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーの DN を入力します。スーパー・ユーザーの DN の cn=orcladmin は、このフィールドのデフォルトです。DN が cn=orcladmin ではない場合、この値を変更します。

14. 「パスワード」フィールドにパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-26 に示す「Infrastructure データベース接続情報の指定」画面が表示されます。

図 5-26 「Infrastructure データベース接続情報の指定」画面



15. 「ユーザー名」フィールドに Oracle Application Server Single Sign-On SYS ユーザー名を入力して、「パスワード」フィールドに SYS ユーザーのパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。Oracle Application Server Single Sign-On データベースに接続します。

図 5-27 に示す「OID データベース・ログインの指定」画面が表示されます。

図 5-27 「OID データベース・ログインの指定」画面



16. 「データベース管理者のユーザー名」フィールドに Oracle Internet Directory データベース SYS ユーザー名を入力して、「パスワード」フィールドにパスワードを入力し、「次へ」をクリックします。

警告ダイアログが表示され、Oracle ホームのプロセスを停止するように要求されます。

17. Oracle HTTP Server を停止して、「OK」をクリックします。

図 5-28 に示す「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面が表示されます。

図 5-28 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面

Oracle Universal Installer: Specify Instance Name and ias_admin Password

Specify Instance Name and ias_admin Password

All OracleAS instances installed on a host must have unique names. The hostname and domain name of the host are appended to the instance name.

Each OracleAS instance has its own password, regardless of which user performed the installation. Passwords are not shared across instances, even if the instances were installed by the same user.

By default, the password must have a minimum of 5 alphanumeric characters, and at least one of the characters must be a number.

Administrator Username: ias_admin

Instance Name:

ias_admin Password:

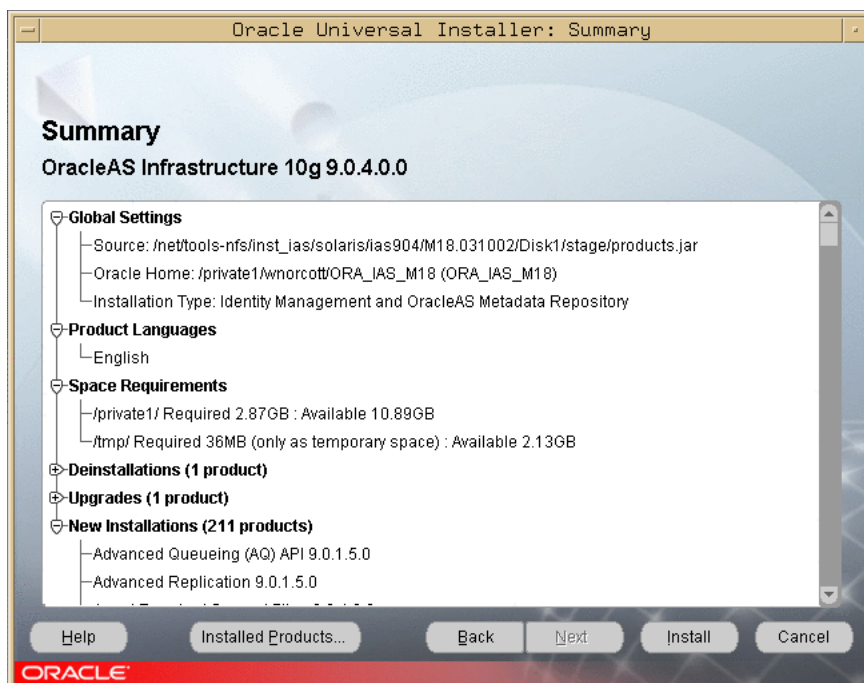
Confirm Password:

ORACLE

18. 「インスタンス名」、「ias_admin パスワード」 および 「パスワードの確認」 の各フィールドを入力し、「次へ」をクリックします。

図 5-29 に示す「サマリー」画面が表示されます。

図 5-29 「サマリー」画面



19. 「インストール」をクリックします。

図 5-30 に示す「インストール」画面が表示され、アップグレードが開始されます。処理時間はそれぞれ異なりますが、次のアクションを求められるまで数分かかります。

図 5-30 「インストール」画面

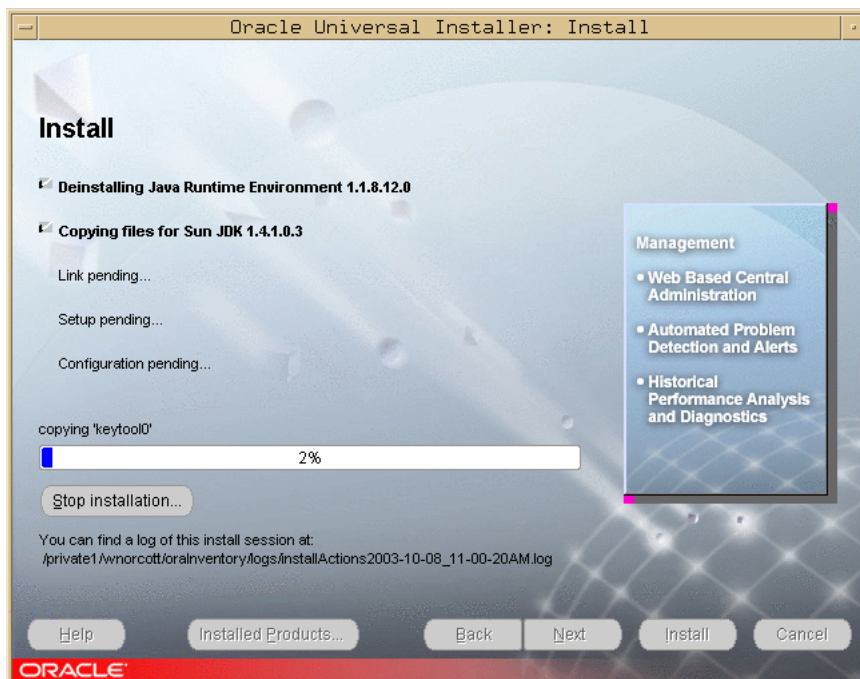
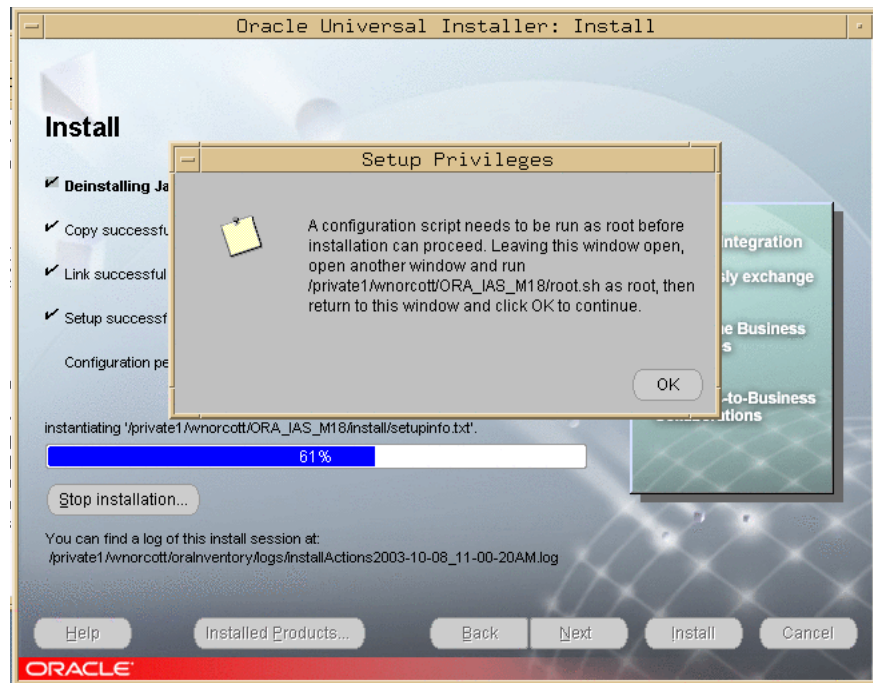


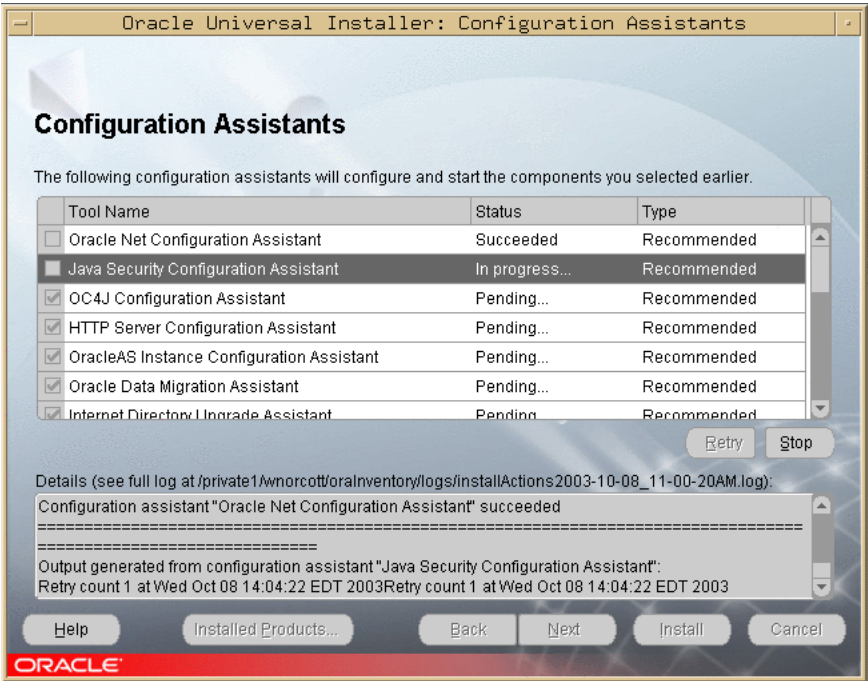
図 5-31 に示す「セットアップ権限」ダイアログが表示されます。

図 5-31 「インストール」画面と「セットアップ権限」ダイアログ



20. ウィンドウを開いてスクリプトを実行し、ダイアログの「OK」をクリックします。
- スクリプトを実行するコンピュータの処理速度およびワークロードによって、スクリプトの完了まで1時間ほどかかる場合があります。スクリプトが完了すると、図 5-32 に示す「Configuration Assistant」画面が表示されます。構成処理には時間がかかります。

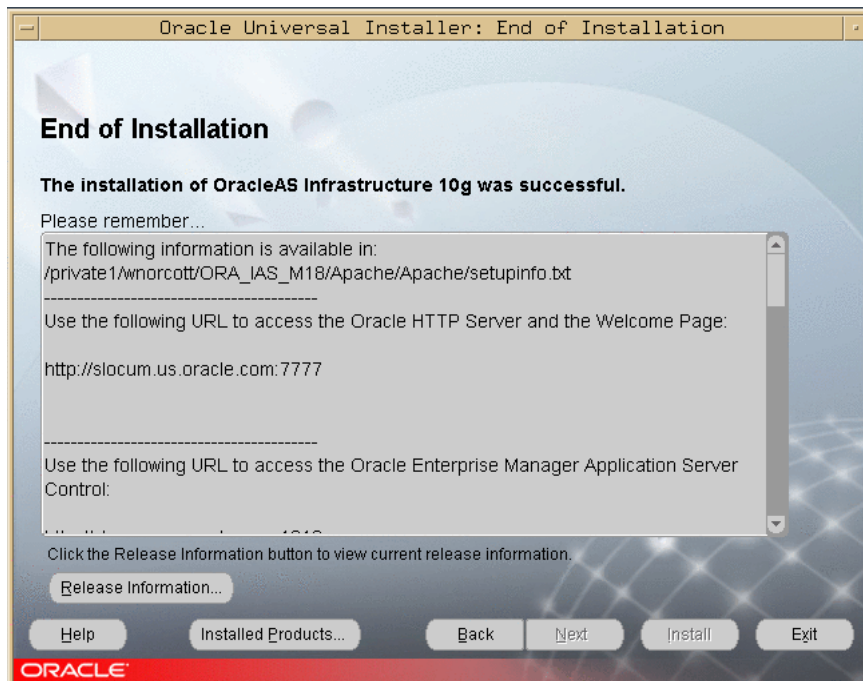
図 5-32 「Configuration Assistant」画面



21. 「次へ」をクリックします。

図 5-33 に示すインストールの終了画面が表示されます。

図 5-33 インストールの終了画面



注意： Delegated Administration Services を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Oracle Internet Directory または OracleAS Single Sign-On の Oracle ホームで実行していた場合に、Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory または OracleAS Single Sign-On の Oracle ホームで構成するには、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用できます。手順については『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用した Oracle Delegated Administration Services の構成」を参照してください。

22. Oracle Application Server Single Sign-On が機能してアクセス可能であることを確認します。

5.2 Oracle Internet Directory マルチマスター・レプリケーションのアップグレードの実行

この項では、レプリケートされた環境での Oracle Internet Directory のアップグレード方法について説明します。一度に 1 台のコンピュータのアップグレード、またはすべてのコンピュータのアップグレードが可能です。次の各項でそれぞれの方法について説明します。

5-38 ページの [5.2.1 項「1 つのレプリカでの Oracle Internet Directory のアップグレード」](#)

5-41 ページの [5.2.2 項「複数のレプリカでの Oracle Internet Directory の同時アップグレード」](#)

アップグレード時には競合を回避するために、レプリケートされた環境はシングル・マスター（1 つのレプリカのみが読取り / 書込み可能で、他のすべてのレプリカは読取り専用）にすることをお勧めします。

5.2.1 1 つのレプリカでの Oracle Internet Directory のアップグレード

一度に 1 台のコンピュータをアップグレードする場合は、アップグレード時の追加、変更または検索に Oracle Internet Directory を使用できます。

一度に 1 つのレプリカをアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. マスター定義サイト（MDS）を指定してアップグレードします。

関連項目： 手順については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 25 章「ディレクトリ・レプリケーションの管理」を参照してください。

2. アップグレードするレプリカのレプリケーション・サーバー、LDAP サーバーおよび oidmon を停止します。
3. 次のコマンドを実行して、レプリケートされた環境の他のレプリカの Advanced Symmetric Replication（ASR）ジョブをすべて削除します。

```
<source Infra_OH>%ldap%admin%delasrjobs.sql
```

MDS に変更を転送する他のマスター・サイトのすべての ASR ジョブが削除されます。これにより、MDS がレプリケートされた環境から切り離され、他のレプリカが動作を続けて変更をレプリケートする間にも変更が転送されません。

4. アップグレードするレプリカのデータベースおよびリスナーを停止します。
5. Oracle Universal Installer を起動します。
データベースおよび Oracle Internet Directory がアップグレードされます。
6. データベースおよびリスナーを起動します。

7. 他のレプリカへの接続をテストします。Net8 Migration Assistant によって listener.ora および tnsnames.ora が変更されている場合があります、その場合は接続が切断されます。接続が切断された場合、それらのファイルで変更されたエントリを探し、<source_Infra_OH>%network%admin% のファイルから次の該当するファイルにエントリをリストアします。

```
<destination_Infra_OH>%network%admin%listener.ora
<destination_Infra_OH>%network%admin%sqlnet.ora
```

tnsnames.ora ファイルの変更の手順および注意については、3-53 ページの [3.8.5.3 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」](#) を参照してください。

8. アップグレード後に、次のコマンドを実行して各レプリカのジョブを作成します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -asrrectify
```

手順 3 で削除されたジョブが再作成されます。このジョブによって、他のレプリカにある既存の変更および新しい変更がアップグレードされたレプリカへ転送され始めます。

9. アップグレード後の手順を実行します。

関連項目： 手順については、5-46 ページの [5.4.1 項「Oracle Internet Directory のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

10. Infrastructure を Oracle Application Server 10g (9.0.4) へアップグレードした後、次に示すように <destination_Infra_OH>%opmn%conf%opmn.xml ファイルに ORACLE_SID 環境変数を含めます。

```
<?xml version = '1.0' encoding = 'UTF-8'?>
  <opmn xmlns="http://www.acme.com/ias-instance">
    ...
    </ias-component>
    <ias-component id="OID" status="enabled">
      <process-type id="OID" module-id="OID">
        <environment>
          <variable id="ORACLE_SID"
value="value_of_oracle_sid"/>
        </environment>
        <stop timeout="1800"/>
        <process-set id="OID" numprocs="1">
          <dependencies>
            ...
          </dependencies>
        </process-set>
      </process-type>
    </ias-component>
  </opmn>
```

11. ORACLE_SID 環境変数が Oracle Internet Directory レプリカ・データベースに設定されていることを確認します。
12. アップグレードされるレプリカの LDAP サーバーおよび oidmon を起動します。

13. 次のコマンドを実行して、アップグレードされたレプリカのレプリケーション DN のパスワードを変更します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -presetpwd -v -bind
<host>:<port>
```

14. レプリケーション・サーバーを起動します。
15. 手順 2～11 を繰り返して、他のマスター・サイト・レプリカをそれぞれアップグレードします。
16. 次の手順を実行して、データベース・レプリケーション表をアップグレードします。

- a. すべてのレプリカでレプリケーション・サーバーを停止します。
- b. MDS レプリカで次のコマンドを実行して、レプリケートされた環境を停止します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -suspendasr
```

- c. MDS レプリカで REPADMIN (データベース・レプリケーション管理者) として接続し、次のコマンドを実行します。

```
execute DBMS_REPCAT.ALTER_MASTER_REPOBJECT (sname=> 'ODS',
oname=> 'ASR_CHG_LOG', type=> 'TABLE', ddl_text=> 'alter table
ods.asr_chg_log modify target_dn varchar2 (1024)')
```

- d. "レコードが選択されませんでした。" メッセージが表示されるまで、次の SQL コマンドを繰り返し実行します。

```
SELECT * from dba_repcatlog WHERE request =
'ALTER_MASTER_REPOBJECT';
```

- e. 次のコマンドを実行して、ASR_CHG_LOG 表に対してレプリケーション・サポートを生成します。

```
execute DBMS_REPCAT.GENERATE_REPLICATION_SUPPORT (sname=>
'ODS', oname=> 'ASR_CHG_LOG', type=> 'TABLE');
```

- f. "レコードが選択されませんでした。" メッセージが表示されるまで、次の SQL コマンドを繰り返し実行します。

```
SELECT * from dba_repcatlog WHERE request =
'ALTER_MASTER_REPOBJECT';
```

- g. 次のコマンドを実行して、データベース・レプリケーションを再開します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -resumeasr
```

- h. すべてのレプリカでレプリケーション・サーバーを起動します。

注意： 10g (9.0.4) レプリカでの変更は、前のリリースのコンシューマ・レプリカにはレプリケートされない場合があります。レプリケートされなかった変更は、変更レプリケーション用の管理者操作キューに入れられ、コンシューマ・レプリカがアップグレードされると正常に適用されます。

5.2.2 複数のレプリカでの Oracle Internet Directory の同時アップグレード

複数のレプリカを同時にアップグレードすると、ネットワーク全体を一時的な段階を経ないでアップグレードできます。この手順は、一度に1つのレプリカをアップグレードする場合より簡単ですが、ディレクトリ・サービスの停止時間が発生します。

複数のレプリカを同時にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. ディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) のすべてのレプリカで、レプリケーション・サーバー、LDAP サーバーおよび oidmon を停止します。
2. DRG のすべてのレプリカでデータベースおよびリスナーを停止します。
3. Oracle Universal Installer を起動します。
データベースおよび Oracle Internet Directory がアップグレードされます。
4. すべてのレプリカでデータベースおよびリスナーを起動します。
5. 他のレプリカへの接続をテストします。Net8 Migration Assistant によって listener.ora および tnsnames.ora が変更されている場合があります、その場合は接続が切断されます。接続が切断された場合、それらのファイルで変更されたエントリを探し、<source_Infra_OH>%network%admin% のファイルから次の該当するファイルにエントリをリストアします。

```
<destination_Infra_OH>%network%admin%listener.ora
```

```
<destination_Infra_OH>%network%admin%sqlnet.ora
```

tnsnames.ora ファイルの変更の手順および注意については、3-53 ページの [3.8.5.3 項「tnsnames.ora ファイルのアップグレード」](#) を参照してください。

6. アップグレード後の手順を実行します。

関連項目： 手順については、5-46 ページの [5.4.1 項「Oracle Internet Directory のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

7. 次の手順を実行して、データベース・レプリケーション表をアップグレードします。
 - a. すべてのレプリカでレプリケーション・サーバーを停止します。
 - b. MDS レプリカで次のコマンドを実行して、レプリケートされた環境を停止します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -suspendasr
```

- c. MDS レプリカで REPCADMIN (データベース・レプリケーション管理者) として接続し、次のコマンドを実行します。

```
execute DBMS_REPCAT.ALTER_MASTER_REPOBJECT (sname=> 'ODS',
oname=> 'ASR_CHG_LOG', type=> 'TABLE', ddl_text=> 'alter table
ods.asr_chg_log modify target_dn varchar2 (1024)')
```

- d. "レコードが選択されませんでした。" メッセージが表示されるまで、次の SQL コマンドを繰り返し実行します。

```
SELECT * from dba_repcatlog WHERE request =
'ALTER_MASTER_REPOBJECT';
```

- e. 次のコマンドを実行して、ASR_CHG_LOG 表に対してレプリケーション・サポートを生成します。

```
execute DBMS_REPCAT.GENERATE_REPLICATION_SUPPORT (sname=>
'ODS', oname=> 'ASR_CHG_LOG', type=> 'TABLE');
```

- f. "レコードが選択されませんでした。" メッセージが表示されるまで、次の SQL コマンドを繰り返し実行します。

```
SELECT * from dba_repcatlog WHERE request =
'ALTER_MASTER_REPOBJECT';
```

- g. 次のコマンドを実行して、データベース・レプリケーションを再開します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -resumeasr
```

- h. 次のコマンドを実行して、レプリケートされた環境が正しく設定されていることを確認します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -asrverify [-v -conn
@<repadmin>/<password>@<connect string for the mds replica>]
```

- i. Infrastructure の Oracle Application Server 10g (9.0.4) へのアップグレード後、次に示すように <destination_Infra_OH>%opmn%conf%opmn.xml ファイルに ORACLE_SID 環境変数を含めます。

```
<?xml version = '1.0' encoding = 'UTF-8'?>
  <opmn xmlns="http://www.acme.com/ias-instance">
    ...
    </ias-component>
    <ias-component id="OID" status="enabled">
      <process-type id="OID" module-id="OID">
        <environment>
          <variable id="ORACLE_SID" value="value_of_oracle_sid"/>
        </environment>
        <stop timeout="1800"/>
        <process-set id="OID" numprocs="1">
          <dependencies>
            ...
          </opmn>
```

- j. 各レプリカで次のコマンドを実行して、レプリケーション DN のパスワードを変更します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -presetpwd -v -bind  
<host>:<port>
```
- k. ORACLE_SID 環境変数が Oracle Internet Directory レプリカ・データベースに設定されていることを確認します。
- l. すべてのレプリカでレプリケーション・サーバー、LDAP サーバーおよび oidmon を起動します。

5.3 Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x の 10g (9.0.4) へのアップグレード

Oracle9i リリース 2 データベースに同梱の Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x は、Oracle Internet Directory のスタンドアロン・リリースでした。その Oracle Internet Directory データベース・リポジトリに含まれていたのは、Oracle Internet Directory スキーマのみです。

10g (9.0.4) リリースは、Oracle 9.2 データベース・リポジトリとともにデプロイされたリリース 9.2.0.x の Oracle Internet Directory のアップグレードをサポートします。このアップグレードを実行する手順は、次のとおりです。

1. Oracle ホームのすべてのプロセスを停止します。
2. データベースをバックアップします。
3. Oracle Internet Directory データベースが「Oracle9i Management and Integration」インストール・タイプで作成されている場合、「Management and Integration」インストール・タイプで作成されたデータベース上の同じ Oracle ホームに、「Oracle9i Database 9.2.0.1.0 Software Only」インストール・タイプをインストールする必要があります。「Software Only」インストール・タイプには、Oracle 9.2 データベースをメタデータ・リポジトリとして使用するために必要なオプションがあります。
4. Repository Creation Assistant を使用して、Oracle 9.2 データベースをメタデータ・リポジトリに変換します。『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の第 10 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール」を参照してください。

注意： Repository Creation Assistant の「Oracle Internet Directory への登録」画面で、「後で登録」を選択します。

メタデータ・リポジトリでは、Oracle Internet Directory を除くすべての OracleAS コンポーネントのスキーマが 10g (9.0.4) リリースになります。Oracle Internet Directory スキーマはリリース 9.2 のままです。

5. 次の SQL 文を SYS として実行して、Oracle Internet Directory の表領域 olts_svrmgstore および olts_battrstore を 9.2.0.4 の Oracle Internet Directory データベース・リポジトリに作成します。
 - a.

```
create tablespace olts_svrmgstore datafile 'svrmg1_oid.dbf'
size 1M reuse autoextend on MAXSIZE UNLIMITED EXTENT
MANAGEMENT LOCAL;
```
 - b.

```
create tablespace olts_battrstore datafile 'battr1_oid.dbf'
size 500K reuse autoextend on EXTENT MANAGEMENT LOCAL
AUTOALLOCATE;
```
6. 10g (9.0.4) の「Identity Management」インストールを別の Oracle ホームまたは別のコンピュータで実行します。（「Oracle Internet Directory」を選択して、Oracle9.2 データベースをメタデータ・リポジトリ・データベースとして指定します。）

関連項目： 手順については、『Oracle Application Server 10g インストール・ガイド』の第 6 章にある「Oracle Internet Directory のみのインストール」を参照してください。

インストール中に Oracle Internet Directory Configuration Assistant が起動されます。これにより、Oracle Internet Directory スキーマの「バージョン・チェック」が実行されます。リリースが 9.2.0.x の場合、Oracle Internet Directory は 10g (9.0.4) にアップグレードされます。新規インストール実行の場合は、それに応じて他の構成ツールが機能します。

インストール後、次の条件が有効になります。

- 10g (9.0.4) インストール処理で決められているとおり、Oracle Internet Directory サーバーが非 SSL ポートおよび SSL ポートで実行されます。使用される Oracle Internet Directory ポートは、`<destination_Infra_OH>%config%ias.properties` の `OIDport` および `OIDsslport` プロパティで識別されます。
- Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーおよび Oracle Internet Directory データベース・スキーマ (ODS) パスワードが、Identity Management インストール時に指定される `ias_admin` パスワードと同じ値に設定されます。

注意： リリース 9.2.0.4 メタデータ・リポジトリは、元のリリース 9.2.0.4 Oracle Internet Directory データベースの Oracle ホームにあります。そのため、リリース 9.0.4 Oracle Internet Directory の Oracle ホームからは、接続識別子を使用してのみ接続できます。たとえば、次のようになります。

```
sqlplus ods/<ods password>@oiddb
```

ただし、oiddb は接続識別子です。

7. 次の手順に従って、10g (9.0.4) の DAS および中間層インストールが、アップグレードされた Oracle Internet Directory と動作するために必要となる適切なアクセス制御ポリシーを設定します。

- a. 次を示すエントリを含む ldif ファイル (upgrade92.ldif) を作成します。太字で示した orclaci 属性の各値は、改行せずに 1 行で記述する必要があります。1 行でない場合、エラーが発生します。

```
#--- BEGIN LDIF file contents---
dn: cn=Attribute Configuration, cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to entry by group="cn=OracleDASConfiguration,
cn=Groups,cn=OracleContext" (add,delete,browse) by * (noadd,nodelete)
orclaci: access to attr=(*) by group="cn=OracleDASConfiguration, cn=Groups,
cn=OracleContext" (read,write,search,compare) by * (nowrite,nocompare)

dn: cn=Attribute Configuration, cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext,%rldmDN%
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to entry by group="cn=OracleDASConfiguration,
cn=Groups,cn=OracleContext,%rldmDN%" (add,delete,browse) by *
(noadd,nodelete)
orclaci: access to attr=(*) by group="cn=OracleDASConfiguration, cn=Groups,
cn=OracleContext,%rldmDN%" (read,write,search,compare) by *
(nowrite,nocompare)

#---END LDIF file contents-----
```

- b. upgrade92.ldif 内のすべての %rldmDN% をデフォルトのレルム DN に置き換えます。デフォルトのレルム DN は、次の ldapsearch コマンドで確認できます。

```
ldapsearch -h <oid host> -p <oid port> -D <OID superuser DN>
-w <OID superuser password> -b
"cn=common,cn=products,cn=oraclecontext" -s base
"objectclass=*" orcldefaultsubscriber
```

- c. 次の ldapmodify コマンドを実行します。

```
<destination_Infra_OH>%bin%ldapmodify -p <oid port> -h <oid
host> -D <OID superuser name> -w <OID superuser password> -v
-f upgrade92.ldif
```

8. 5-46 ページの 5.4.1 項「Oracle Internet Directory のアップグレードの完了」のタスクを実行します。

5.4 Infrastructure のアップグレード後のタスク

この項では、Infrastructure の 10g (9.0.4) へのアップグレードを完了するためのアップグレード後の手順について説明します。この章の項は、次のとおりです。

- 5-46 ページの [5.4.1 項「Oracle Internet Directory のアップグレードの完了」](#)
- 5-50 ページの [5.4.2 項「Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの完了」](#)
- 5-54 ページの [5.4.3 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了」](#)

5.4.1 Oracle Internet Directory のアップグレードの完了

Oracle Internet Directory のアップグレードを完了するには、必要に応じて関連するすべての OracleAS Portal 10g (9.0.4) インスタンスを再構成します。さらに、Delegated Administration Services (DAS) の URL キャッシュを更新します。パフォーマンス拡張スクリプトの実行も可能であり、場合によっては新しい Delegated Administration Services (DAS) または Directory Integration and Provisioning (DIP) サービスもインストールできます。

5.4.1.1 Identity Management コンポーネントの構成

アップグレード後、Identity Management コンポーネントを構成する必要があります。スクリプトを使用してコンポーネントを構成する手順については、次の項を参照してください。

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「imconfig.bat スクリプトを使用した 10g (9.0.4) Identity Management の構成」

手動でコンポーネントを構成する手順については、次の項を参照してください。

『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』の「手動による 10g (9.0.4) の Identity Management の構成」

5.4.1.2 グループのコンテナに対するアクセス・ポリシーの変更

Oracle Internet Directory のアップグレード処理では、Public グループのコンテナに対するアクセス制御リスト (ACL) は変更できません。このコンテナに対するデフォルトの ACL ポリシーは、デプロイ環境のセキュリティ要件に応じて変更されている場合があります。そのため、アップグレード後、既存のポリシーを新しい 10g (9.0.4) のデフォルトのポリシーと組み合わせ、Public グループのコンテナに対して適用する必要があります。

必要な ACL ポリシーについては、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 17 章にある「共通ユーザー属性を読み取るためのデフォルトの権限」を参照してください。このポリシーによって、グループ cn=Common Group Attributes, cn=groups, Oracle_Context_DN のメンバーに、Private および Public グループ (orclIsVisible が設定されていないか、TRUE または FALSE に設定されているグループ) に対する参照権限、検索権限および読取り権限が付与されます。

5.4.1.3 レプリケーションの Wallet のパスワードの再設定

9.0.x のノードを 10g (9.0.4) にアップグレードした後、このノードのレプリケーションを設定しようとすると、レプリケーション・サーバーが起動せず、レプリケーションの設定自体が失敗する場合があります。そのため、レプリケーションを設定する前に、次のコマンドを使用して、アップグレードした 10g (9.0.4) のノードに対するレプリケーションの Wallet のパスワードを再設定します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%admin%remtool -presetpwd -v -bind
<host>:<port>
```

この手順によって、必要な場合は、アップグレードしたノードをレプリケーションに構成できます。

5.4.1.4 OracleAS Portal に必要なアップグレード後の手順

次のアップグレード後の手順は、Identity Management に対して OracleAS Portal を構成する場合に実行する必要があります。

5.4.1.4.1 Portal 9.0.2.2.14 および 9.0.2.3 の場合のパッチの適用 Portal のリリースによっては、次に説明するように Metadata Repository に対してパッチを適用する必要があります。

- **Portal リリース 9.0.2.2.14 (Oracle9iAS 9.0.2.0.1 の 9.0.2 製品)** を運用している場合：パッチ 3238095 を適用します。これにより、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Identity Management 構成におけるユーザーおよびグループの登録に関する問題が修正され、相互運用性の問題が解決されます。
- **Portal リリース 9.0.2.3 (Oracle9iAS 9.0.2.3)** を運用している場合：パッチ 2802414 を適用します。これにより相互運用性の問題が解決されます。

パッチを適用する手順は、次のとおりです。

1. 運用している Portal のリリースに指定されたパッチを用意します。パッチは JP Update CD に含まれています。
2. パッチの README ファイルの指示に従います。

5.4.1.4.2 Oracle Internet Directory サーバー用の OracleAS Portal インスタンスの再構成 アップグレードされた Oracle Internet Directory サーバーを使用する OracleAS Portal 10g (9.0.4) インスタンスがある場合、4-41 ページの [4.5.8.2 項「Oracle Internet Directory 用の OracleAS Portal の再構成」](#) の説明に従って Oracle Internet Directory サーバー用に再構成する必要があります。この手順は、Oracle Internet Directory の OracleAS Portal エントリが適切に更新され、Oracle Application Server 10g (9.0.4) が必要とする正しいプロビジョニング・イベントが Portal に送信されるために必要です。

注意： アップグレードされた Oracle Internet Directory サーバーを使用する OracleAS Portal 10g (9.0.4) インスタンスが複数ある場合、各インスタンスに対してこの手順を繰り返す必要があります。

5.4.1.4.3 Delegated Administration Services (DAS) の URL キャッシュの更新 Delegated Administration Services の URL は、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Oracle Internet Directory サーバーと Oracle Application Server 10g (9.0.4) Oracle Internet Directory サーバーで異なります。Oracle Internet Directory サーバーをアップグレードすると、URL が正しい値に更新されます。ただし、OracleAS Portal が維持するその URL のキャッシュはアップグレードされないため、10g (9.0.4) の URL の設定との一貫がありません。

キャッシュを更新する手順は、リリースによって異なります。キャッシュを更新するには、次の項のいずれかの手順に従います。

リリース 9.0.2.6 以上の DAS の URL キャッシュの更新

URL キャッシュを更新する手順は、次のとおりです。

1. Portal 管理者として Portal にログインします。
2. 「管理」タブをクリックします。
3. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」リンクをクリックします。
4. 「SSO/OID」タブをクリックします。
5. 「OID パラメータのキャッシュ」セクションに表示される値をメモします。
6. 「OID パラメータ用キャッシュの更新」の隣のチェックボックスをクリックします。
7. 「適用」をクリックします。
8. 「OID パラメータのキャッシュ」セクションに表示される値が変更されたことを確認します。
9. 「OK」をクリックします。

リリース 9.0.2.6 より前の DAS の URL キャッシュの更新

URL キャッシュを更新する手順は、次のとおりです。

1. 個別パッチ 3225970 を適用します。このパッチは JP Update CD に含まれています。
2. 次の手順を実行して Web Cache を消去します。
 - a. Portal 管理者として Portal にログインします。
 - b. 「管理」タブをクリックします。
 - c. 「サービス」ポートレットの「グローバル設定」リンクをクリックします。
 - d. 「キャッシュ」タブをクリックします。

- e. 「Web Cache 全体を消去」の隣のチェックボックスをクリックします。
 - f. 「OK」をクリックします。
3. 次の手順を実行して中間層のキャッシュを消去します。
- a. `<destination_MT_OH>%Apache%modplsql%cache` に移動します。
 - b. このディレクトリ下のすべてのファイルの再帰削除を実行します。

5.4.1.5 推奨されるパフォーマンス拡張タスク

10g (9.0.4) では、Oracle Internet Directory においてオラクル社推奨のパフォーマンス拡張が可能になり、アップグレード後に実装できます。これを実装するには、次に示すように 2 つのスクリプト (`oidpu904.sql` および `catalog.sh`) を実行する必要があります。10g (9.0.4) の Oracle ホームで、次の手順に従います。

1. ORACLE_HOME 環境変数が `<destination_Infra_OH>` に設定されていること、および ORACLE_SID 環境変数が Infrastructure データベース SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの [4.2.1 項「Metadata Repository をアップグレードする環境の設定」](#) の指示に従います。
2. 次のコマンドを実行します。

```
sqlplus ods/<ods password> @<net service name for OID database>
    @<destination_Infra_OH>%ldap%admin%oidpu904.sql
```

たとえば、次のようになります。

```
sqlplus ods/welcome1@iasdb @<destination_Infra_OH>%ldap%admin
%oidpu904.sql
```

3. `catalog.sh` スクリプトを実行して、`orclnormdn` 属性の索引を再作成します。このスクリプトによって、`orclnormdn` 属性のカatalogが削除されて再作成されます。
- a. OID サーバーの動作を読取り専用モードにします。これは Oracle Directory Manager で行います。

関連項目： サーバー動作を読取り専用モードにする方法については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のシステム操作属性に関する表 C-34 のサーバー・モードの項を参照してください。

- b. 次のコマンドを実行して、`orclnormdn` 属性の索引を再作成します。

```
<destination_Infra_OH>%ldap%bin%catalog.sh -connect <net
service name for OID database> -delete -attr orclnormdn

<destination_Infra_OH>%ldap%bin%catalog.sh -connect <net
service name for OID database> -add -attr orclnormdn
```

4. OID サーバーの動作を読取り / 書込みモードにリセットします。これは Oracle Directory Manager で行います。

関連項目： サーバー動作を読取り / 書込みモードにする方法については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』のシステム操作属性に関する表 C-34 のサーバー・モードの項を参照してください。

注意： アップグレードする Oracle Internet Directory を使用する古いリリース (9.0.2 または 9.2) の DIP が別の Oracle ホーム (別のコンピュータ) で動作している場合、その DIP を継続して使用するには、DIP サーバーを再登録する必要があります。DIP サーバーを再登録する方法については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

5.4.2 Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードの完了

Oracle Application Server Single Sign-On のアップグレードを完了するには、アップグレードした構成に応じて、次のタスクの実行が必要な場合があります。

5.4.2.1 Oracle Application Server Single Sign-On 中間層の再構成

Single Sign-On サーバーのリリース 2 (9.0.2) 中間層にカスタム構成があった場合 (Oracle HTTP Server の SSL の構成、Oracle Application Server Single Sign-On サーバーのデータベース・アクセス記述子のカスタム構成など)、アップグレードされた 10g (9.0.4) 中間層を同じように再構成する必要があります。

関連項目： 中間層の構成手順については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 9 章を参照してください。

5.4.2.2 サード・パーティ認証の構成

リリース 2 (9.0.2) 中間層がユーザー証明書または第三者機関の認証メカニズムを使用して認証するように構成されていた場合、10g (9.0.4) の OracleAS Single Sign-On サーバーを同じように再構成する必要があります。

関連項目： 中間層の構成手順については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 13 章を参照してください。

5.4.2.3 カスタマイズされたページのアップグレードされたサーバーへのインストール

リリース 2 (9.0.2) の Single Sign-On サーバーでログイン、パスワードおよびサインオフのページをカスタマイズしていた場合、そのページを 10g (9.0.4) の仕様に従って更新する必要があります。

関連項目： 中間層の構成手順については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 12 章を参照してください。

5.4.2.4 外部アプリケーション ID の変換

注意： 9.0.2.5 以上の OracleAS Single Sign-On リリースからアップグレードした場合、このタスクを実行する必要はありません。

複数の OracleAS Single Sign-On サーバー・インスタンス間で外部アプリケーション・データをエクスポートおよびインポートする際の ID 競合を回避するために、外部アプリケーション ID は一意である必要があります。リリース 2 (9.0.2) では、外部アプリケーション ID はシーケンシャル値であり、インスタンス間で一意ではありません。リリース 2 (9.0.2) から直接 10g (9.0.4) にアップグレードする場合、既存の短い外部アプリケーション ID を OracleAS Single Sign-On スキーマの詳細形式に変換する必要があります。ID を変換する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS Single Sign-On スキーマ・ディレクトリから次のコマンドで orasso スクリプトを実行します。

```
sqlplus orasso/<password>
spool extappid.log
@?/sso/admin/plsql/sso/ssoupeid.sql
spool off
```

アップグレードした OracleAS Single Sign-On サーバーを使用する 9.0.2.6 より前の OracleAS Portal リリースの場合、次の表に従って各インスタンスにパッチを適用する必要があります。このパッチは JP Update CD に含まれています。

注意： SSO_IDENTIFIER 値が OracleAS Portal スキーマで自動的に生成されない場合、または OracleAS Single Sign-On サーバーがランダムに選択した値を SSO_IDENTIFIER 値に使用していた場合、パッチを適用するために SSO_IDENTIFIER 値が必要になることがあります。

表 5-1 詳細形式のアプリケーション ID に変換するための OracleAS Portal パッチ

OracleAS Portal のリリース	パッチ番号
3.0.9.8.4	2769007
3.0.9.8.5	2665597
9.0.2、9.0.2.3	2665607

5.4.2.5 OracleAS Single Sign-On レプリケーションの設定

Oracle Internet Directory レプリケーションを使用して OracleAS Single Sign-On レプリケーションも使用する場合、アップグレードされた 10g (9.0.4) 表を 9.0.4 OID とともにレプリケーション・グループに追加します。レプリケーションに OracleAS Single Sign-On 表を追加する手順は、次のとおりです。

1. ディレクトリ・レプリケーション・グループのすべてのレプリカで Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーを停止します。
2. マスター・ディレクトリ・レプリカの `%ORACLE_HOME%\ldap\admin` で、次のコマンドを実行します。

```
sqlplus repadmin/<password>@<mds connect id> @oidrsslou.sql
```

3. ディレクトリ・レプリケーション・グループのすべてのレプリカで Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーを起動します。

関連項目： 手順については、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の第 25 章「ディレクトリ・レプリケーションの管理」を参照してください。

5.4.2.6 カスタマイズされた中間層の OracleAS Single Sign-On サーバーのアップグレード

リリース 2 (9.0.2) の OracleAS Single Sign-On サーバーがデフォルトの中間層インストール以外の中間層を使用していた場合、中間層がアップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーを指し示すように構成する必要があります。たとえば、リリース 2 (9.0.2) の OracleAS Single Sign-On サーバー中間層でリバース・プロキシを構成していた場合、10g (9.0.4) の OracleAS Single Sign-On サーバー中間層でも構成します。

5.4.2.7 Wireless Voice 認証のトラブルシューティング

Wireless Voice 認証を 10g (9.0.4) の OracleAS Single Sign-On サーバーで使用する場合に機能しないときは、OracleAS Single Sign-On サーバー・エントリが Oracle Internet Directory でベリファイア・サービス・グループのメンバーであること

(`cn=verifierServices,cn=Groups,cn=OracleContext`) を確認します。このメンバーであることが、Wireless Voice 認証の要件です。メンバーであることを確認する手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを実行します。

```
ldapsearch -h <host> -p <port> -D "cn=orcladmin" -w <password> -b  
"cn=verifierServices, cn=Groups, cn=OracleContext"  
"objectclass=*
```

例 5-1 に示すように、エントリで `uniquemember` として表示されれば、OracleAS Single Sign-On サーバーはベリファイア・サービス・グループのメンバーです。

例 5-1 OracleAS Single Sign-On サーバーの uniquemember の表示

```

cn=verifierServices, cn=Groups,cn=OracleContext
.
.
.
uniquemember=orclApplication
CommonName=ORASSO_SSOSERVER,cn=SSO,cn=Products,cn=OracleContext
.
.
.

```

5.4.2.8 言語の OracleAS Single Sign-On サーバーへのインストール

OracleAS Single Sign-On のアップグレード時に言語を選択しなかった場合、またはアップグレード後に追加の言語をインストールする場合、次の手順に従って必要な言語をインストールできます。

1. 次のコマンドを実行して、Repository Creation Assistant CD-ROM の Oracle ホームから必要な言語ファイルを OracleAS Single Sign-On サーバーの Oracle ホームにコピーします。

```

copy <repCA_CD>%portal%admin%plsql%nlres%ctl%<lang>%*.*
<destination_Infra_OH>%sso%nlres%ctl%<lang>%

```

<lang> は言語コードです。たとえば、日本語の言語コードは ja です。

2. 言語をサーバーにロードします。

関連項目： 言語のロード手順については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第 2 章のグローバリゼーション・サポートの構成に関する項を参照してください。

5.4.2.9 アップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーへの OracleAS Portal の再登録

分散 Identity Management (図 5-2 および図 5-3 を参照) の Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) から Oracle Application Server 10g (9.0.4) へのアップグレードの実行後、OracleAS Single Sign-On スキーマは Oracle Internet Directory データベースに再配置されます。OracleAS Portal は、OracleAS Single Sign-On サーバーのパスワード格納スキーマ ORASSO_PS へのデータベース・リンク参照を保持します。このリンク参照を更新する必要があります。これを行うには、該当する OracleAS Portal をアップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーに再登録します。

関連項目： 再登録の手順については、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の付録 B を参照してください。

5.4.2.10 アップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーへの mod_osso の再登録

分散 Identity Management (図 5-2 および図 5-3 を参照) の Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) から Oracle Application Server 10g (9.0.4) へのアップグレードの実行後、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) 中間層が、アップグレードされた OracleAS Single Sign-On サーバーと動作するためには、mod_osso の再登録が必要な場合があります。mod_osso の Oracle HTTP Server ホストおよびポート情報に変更された場合に再登録が必要です。mod_osso の再登録の前に、`<source_MT_OH>%config%ias.properties` ファイルの `ColocatedDBCommonName` 属性の値を、Oracle Internet Directory と共有する新しい OracleAS Single Sign-On サーバー・データベースのグローバル・データベース名 (`iasdb.host.mydomain` など) に設定する必要があります。

5.4.2.11 Oracle9iAS Discoverer リリース 2 (9.0.2) とともに使用するアップグレードされた Identity Management 構成

Oracle9iAS Discoverer リリース 2 (9.0.2) が使用していた Identity Management 構成をアップグレードした場合に、Oracle9iAS Discoverer リリース 2 (9.0.2) をアップグレードされた Identity Management とともに引き続き動作させるには、`<source_MT_OH>%config%ias.properties` ファイルの `ColocatedDBCommonName` 属性の値を変更する必要があります。値は、アップグレードされた Oracle Internet Directory によって使用されるデータベースのグローバル・データベース名 (`iasdb.oid_host_name.domain` など) に変更します。

5.4.3 Oracle Application Server Wireless のアップグレードの完了

この項では、Oracle Application Server Wireless のアップグレードを完了するために実行する必要があるタスクについて説明します。

5.4.3.1 Oracle Internet Directory の Wireless ユーザー・アカウントのアップグレード

Oracle Application Server Wireless リリース 2 (9.0.2) では、Wireless Voice 認証のユーザー・アカウント番号および PIN が Wireless リポジトリに格納されていました。

Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) では、Oracle Internet Directory の `orcluserV2` オブジェクト・クラスのオブジェクト定義に新しい属性が追加され、アカウント番号および PIN が格納されます。リリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4) への Oracle Application Server Wireless のアップグレードの一部として、ユーザー・アカウント番号および PIN を Wireless リポジトリから Oracle Internet Directory に移す必要があります。

このアップグレードの手順は、Oracle Application Server Infrastructure およびすべての中間層を 10g (9.0.4) にアップグレードした後でのみ実行が可能です。アップグレードしない場合、Oracle Application Server Wireless サーバーは、音声デバイスの認証を Oracle Application Server Single Sign-On を使用せずにローカルのままで行います。

アカウント番号および PIN をアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. 次のコマンドを実行します。

```
<destination_MT_OH>%wireless%bin%migrate902VoiceAttrToOID.bat
<destination_MT_OH> <ldapmodify location> <userdn> <password>
<ldif file location> <log file>
```

- <ldapmodify location> は、ldapmodify ユーティリティの場所です（通常は <destination_MT_OH>%bin%）。
- <user dn> は、Oracle Internet Directory 管理者ユーザーの DN です。
- <password> は、Oracle Internet Directory 管理者ユーザーのパスワードです。
- <ldif file location> は、LDIF (Lightweight Directory Interchange Format) ファイルの絶対パスです。このファイルには、ユーザー・アカウント番号および PIN が含まれ、ldapmodify ユーティリティによって Oracle Internet Directory にアップロードされます。ユーザーのアップグレード手順が正常に完了したら、この一時ファイルは削除できます。
- <log file> は、ログ・ファイルの絶対パスです。

例：

```
migrate902VoiceAttrToOID.bat c:%oracle%\ias904%
c:%oracle%\ias904%\bin%ldapmodify "cn=orcladmin" welcome1
c:%oracle%\ias904%\users.ldif c:%oracle%\ias904%\users.log
```

5.4.3.2 Oracle Internet Directory での orclWirelessAccountNumber 属性に対する一意性制約の追加

10g (9.0.4) では、Oracle Internet Directory は、ユーザー属性に対する一意性制約を自動的に設定しません。orclUserV2 オブジェクト・クラスの orclWirelessAccountNumber 属性に対して一意性制約が設定されていない場合、Wireless Voice 認証は正しく機能しません。

中間層および Infrastructure のアップグレードの完了後、次の手順を実行して一意性制約を設定します。

1. <destination_MT_OH>%wireless%bin%にあるスクリプト addAccountNumberUniqueConstraint.bat を実行します。このスクリプトには、1 つの引数（Oracle ホームのフルパス）を指定します。たとえば、次に示すとおりです。

```
addAccountNumberUniqueConstraint.bat <destination_MT_OH>
```

2. Oracle Internet Directory サーバーを再起動します。

5.4.3.3 Infrastructure リポジトリでの Oracle Application Server Wireless のアップグレード・トリガーの無効化

Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure に対してインストールすると、複数のトリガーが自動的にインストールされ、これによって Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) および Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層が正常に機能できるようになります。Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) のすべての中間層および Infrastructure 層が Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) にアップグレードされたら、次のスクリプトを実行してアップグレード関連のトリガーを無効にする必要があります。

```
disable902-904_trg.bat
```

このスクリプトは、<destination_MT_OH>%wireless%bin ディレクトリにあります。スクリプトを実行する前に、ORACLE_HOME 環境変数を設定する必要があります。

5.4.3.4 Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) のすべての機能のアクティブ化

Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) を Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) Infrastructure に対してインストールすると、複数の機能がデフォルトで無効になり、同じ Infrastructure に対してインストールされる既存の Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層とそれらの機能の互換性がなくなります。Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) のすべての中間層が Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) にアップグレードされたら、それらの機能を手動で有効にできます。これらの機能を有効にすると、Oracle9iAS Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層は正常に機能しなくなります。

Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) の機能を有効にするには、Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) のいずれかの中間層から次のコマンドでスクリプトを実行します。このスクリプトは、<destination_MT_OH>%wireless%bin ディレクトリにあります。

```
upload.bat ..%repository%xml%activate-9040.xml -l <wireless user name>/<password>
```

- <wireless user name> は、Oracle Application Server Wireless ユーザーの名前です。
- <password> は、Oracle Internet 管理者のパスワードです。

たとえば、次に示すとおりです。

```
upload.bat ..%repository%xml%activate-9040.xml -l
orcladmin/welcome1
```

5.4.3.5 OracleAS Wireless に対するパスワード変更権限の割当て

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、OracleAS Wireless アプリケーション・エンティティは、デフォルトではユーザー・パスワードを変更できる権限を持っていません。そのため、ユーザーはインストール直後に OracleAS Wireless サーバーに対するパスワードを変更できません。ただし、UserSecurityAdmins 権限を OracleAS Wireless アプリケーション・エンティティに割り当てることによって、パスワードを変更する機能を有効にできます。

これを行うには、<destination MT_OH>wireless¥bin にあるスクリプト assignUserSecurityAdminsPrivilege.bat を実行します。

構文は次のとおりです。

```
assignUserSecurityAdminsPrivilege.bat <oid super user dn> <user password>
```

- <oid super user dn> は、Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーの識別名です。このユーザーには、UserSecurityAdmins 権限をアプリケーション・エンティティに付与する権限があります。
- <user password> は、Oracle Internet Directory スーパー・ユーザーのパスワードです。

たとえば、次に示すとおりです。

```
assignUserSecurityAdminsPrivilege.bat "cn=orcladmin" welcome1
```

5.4.3.6 HTTP アダプタを使用する Wireless サービスの場合の URL 問合せパラメータの指定

HTTP アダプタを使用して Wireless サービスを構築する場合、指定する必要があるサービス・パラメータの 1 つにバックエンド・アプリケーションに対する URL があります。場合によって、問合せパラメータをバックエンド・アプリケーションに送信することがあります。OracleAS Wireless からこれを行うには、例 5-2 および例 5-3 に示すように 2 つの方法があります。例 5-2 のパラメータ名は fn、値は Joe です。

例 5-2 問合せパラメータを使用する URL

```
http://localhost:7777/myapp/home.jsp?fn=Joe
```

問合せパラメータは、サービスの最初のページに対するリクエストにおいてのみ送信されます。最初のページから他のページへのリンクがある場合でも、そのページに対するリクエストにはパラメータが追加されません。

例 5-3 追加サービス・パラメータを使用する URL

```
http://localhost:7777/myapp/home.jsp
```

URL を変更するかわりに、パラメータ名が `fn` および値 `Joe` である追加サービス・パラメータを追加します。パラメータは最初のページだけでなくすべてのページに送信されます。さらに、そのパラメータはすべての HTTP リダイレクト・リクエストでも送信されます。ただし、この方法では追加 URL パラメータが OracleAS Single Sign-On サーバーにも送信されるので、その場合にはサーバーからエラーが返されます。

エラーが発生するのは、バックエンド・アプリケーションが `mod_osso` によって保護されている場合です。この場合、アプリケーションに対するリクエストは捕捉され、ユーザー認証のために Oracle SSO サーバーにリダイレクトされます。OracleAS Single Sign-On サーバーには、送信されてくる問合せパラメータを制限するルールがあります。そのため、`mod_osso` によって保護されているバックエンド・アプリケーションの場合、Wireless サービスを変更し、例 5-2 のように問合せパラメータを URL に追加する必要があります。

5.5 リリース 2 (9.0.2) の Oracle ホームの廃棄

Identity Management のアップグレード完了後、データベース・ファイルをソース Oracle ホーム以外の場所に再配置することを検討してください。データベース・ファイルは、Identity Management のアップグレードを完了した後もソース Oracle ホームに残っています。ソース Oracle ホームを削除した場合でも、データベース・ファイルを再配置する手順を実行しないかぎりデータベース・ファイルは元の場所に残されたままになります。ソース Oracle ホームのディレクトリ・ツリー全体を削除するなどして、誤ってデータベース・ファイルを削除してしまうことを防止するために、ファイルの再配置をお勧めします。また、データベース・ファイルをソース Oracle ホーム以外に移すことによってパフォーマンスが向上する場合もあります。

データベース・ファイルを再配置してソース Oracle ホームのソフトウェアを削除した後は、ソース Oracle ホームのディレクトリ・ツリー全体を削除しても問題ありません。

この手順はデータベース管理者が実行します。詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

5.5.1 Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) およびソース Oracle ホームの削除

リリース 2 (9.0.2) のファイルを再配置した場合、古い Oracle ホームを削除できます。これを行うには、インストールに使用したのと同じリリースまたはそれ以上のリリースの Oracle Universal Installer を使用して、ソース Oracle ホームのリリース 2 (9.0.2) Infrastructure のインスタンスを削除し、次に `<source_infra_oh>` からすべてのファイルを削除します。

同じコンピュータに OracleAS 10g (9.0.4) インスタンスもある場合に、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) インスタンスを削除するにはパッチが必要です。このようなインスタンスを削除する前に、削除にともなう構成に影響する可能性がある問題も確認してください。

関連項目： 同じコンピュータに 10g (9.0.4) インスタンスもある場合のリリース 2 (9.0.2) または (9.0.3) インスタンスの削除については、『Oracle Application Server 10g インストレーション・ガイド』を参照してください。

5.5.2 データファイル、制御ファイルおよびログ・ファイルの再配置

データファイル、制御ファイルおよびログ・ファイルを再配置する手順は、次のとおりです。

1. 再配置するファイルのためのディレクトリを、ソース **Infrastructure** のホームとは別の場所に作成します。
2. すべてのデータファイルを手順 1 で作成したディレクトリにコピーします。

関連項目： 手順については、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「データ・ファイルの名前変更および再配置」の項を参照してください。

3. すべてのログ・ファイルを手順 1 で作成したディレクトリにコピーします。

関連項目： 手順については、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「データ・ファイルの名前変更および再配置」の項を参照してください。

4. すべての制御ファイルを手順 1 で作成したディレクトリに再配置します。

関連項目： 手順については、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「制御ファイルの追加コピーの作成、名前変更および再配置」の項を参照してください。

5.6 Identity Management のアップグレードの検証

この項では、Identity Management のアップグレード後にアップグレードが正常に行われたことを確認するために実行する手順について説明します。

5.6.1 utlrp.sql ユーティリティの実行

インストール後の手順として、utlrp.sql ユーティリティを実行する必要があります。この PL/SQL プロシージャは、アップグレードによって無効になった可能性のあるすべての PL/SQL パッケージを 10g (9.0.4) に再コンパイルします。このユーティリティを実行する手順は、次のとおりです。

1. アップグレードされた Metadata Repository データベースが実行されていることを確認します。
2. ORACLE_HOME 環境変数が `<Infra_OH>` に設定されており、ORACLE_SID 環境変数が **Infrastructure** データベースの SID に設定されていることを確認します。設定されていない場合、4-3 ページの 4.2.1 項「[Metadata Repository をアップグレードする環境の設定](#)」の指示に従います。
3. シングル・ユーザー・モードで SYSDBA 権限を持つ SYS としてアップグレード先 Infrastructure Oracle ホームのデータベースに接続します。

4. SQL*Plus プロンプトで次のコマンドを実行します。

```
@?/rdbms/admin/utlrlp.sql
```

5.6.2 無効なデータベース・オブジェクトのチェック

Oracle Application Server が必要とするデータベース・オブジェクトで無効になっているものがないことを確認する手順は、次のとおりです。

1. SYSDBA としてアップグレード先 Infrastructure Oracle ホームのデータベースに接続します。
2. 次のコマンドを実行します。

```
SELECT owner, object_type, object_name
FROM all_objects
WHERE status='INVALID';
```

問合せに対して、Oracle Application Server コンポーネント・スキーマ (PORTAL、WIRELESS など) を持つデータベース・オブジェクトが 'owner' 列に返されないことを確認します。

5.6.3 Oracle Application Server Single Sign-On の接続性のテスト

Identity Management のアップグレード完了後、ユーザー ORCLADMIN として Oracle Application Server Single Sign-On にログインします。ログインが正常に行われた場合は、Identity Management のアップグレード後に Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory が機能していることを意味します。

1. ブラウザで、アップグレード先 Infrastructure Oracle ホームの Oracle Enterprise Manager の URL を入力してアクセスします。正確なホスト名およびポート番号を入力してください。たとえば、次に示すとおりです。

```
http://infrahost.mycompany.com:1812
```

「Oracle Enterprise Manager」ページが表示され、「スタンドアロン・インスタンス」セクションに Oracle Application Server 10g (9.0.4) Identity Management インスタンスが示されます。

2. Identity Management インスタンスのリンクをクリックします。
「システム・コンポーネント」ページが表示されます。
3. Oracle HTTP Server、Oracle Internet Directory および Oracle Application Server Single Sign-On のコンポーネントのステータスが「稼働中」であることを確認します。

4. ブラウザで、ORASSO ページの URL を入力してアクセスします。アップグレードされた Oracle HTTP Server の正確なホスト名およびポート番号を入力してください。たとえば、次に示すとおりです。

`http://infrahost.mycompany.com:7777/pls/orasso/ORASSO.home`

ORASSO ページが表示されます。

5. ページの右上にある「ログイン」リンクをクリックします。
「ユーザー名」および「パスワード」フィールドのあるページが表示されます。
6. 「ユーザー名」フィールドに ORCLADMIN と入力して、ORCLADMIN に対して選択したパスワードを「パスワード」フィールドに入力します。
7. 「ログイン」をクリックします。

表示される Oracle Application Server Single Sign-On Server の「管理」ページで、アップグレードされた Identity Management コンポーネント（Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory）の基本動作を確認します。

コンポーネントのアップグレード処理 リファレンス

この付録では、中間層の各コンポーネントおよび Infrastructure インストールのアップグレード処理について詳細に説明します。OracleAS Upgrade Assistant では、中間層のアップグレード処理のみを実行します。Infrastructure のアップグレード処理は、アップグレードが必要なコンポーネントの個々のスクリプトによって実行します。この付録の主な項は、次のとおりです。

A-2 ページの [A.1 項「中間層のアップグレード処理」](#)

A-17 ページの [A.2 項「Infrastructure のアップグレード処理」](#)

A.1 中間層のアップグレード処理

この項では、各コンポーネントをアップグレードする際の OracleAS Upgrade Assistant の処理動作について説明します。説明する動作の順番は、必ずしも実際に実行される順番ではありません。順番が既知の場合、あるいは重要となる場合は、処理の順序が数字付きの手順として示されます。インストール・タイプ（つまり含まれるコンポーネント）によっては、実行されない処理があります。

注意： リリース 2 (9.0.2) のインストール・タイプが「Unified Messaging」（現在は使用できないインストール・タイプ）の場合、OracleAS Upgrade Assistant は「Business Intelligence and Forms」アップグレードとして処理し、すべてのコンポーネントのアップグレードが実行されます。

Oracle9iAS Clickstream Intelligence は、10g (9.0.4) に含まれていないため、このコンポーネントのアップグレード処理はありません。

1. A-3 ページの [A.1.1 項「Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\) のアップグレード処理」](#)
2. A-4 ページの [A.1.2 項「インスタンス構成データのアップグレード処理」](#)
3. A-4 ページの [A.1.3 項「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\) のアップグレード処理」](#)
4. A-5 ページの [A.1.4 項「Oracle HTTP Server のアップグレード処理」](#)
5. A-8 ページの [A.1.5 項「Oracle Application Server Web Cache のアップグレード処理」](#)
6. A-9 ページの [A.1.6 項「mod_plsql のアップグレード処理」](#)
7. A-10 ページの [A.1.7 項「Oracle Enterprise Manager のアップグレード処理」](#)
8. A-10 ページの [A.1.8 項「Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリのアップグレード処理」](#)
9. A-11 ページの [A.1.9 項「Oracle Ultra Search のアップグレード処理」](#)
10. A-11 ページの [A.1.10 項「OracleAS Portal 中間層のアップグレード処理」](#)
11. A-12 ページの [A.1.11 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理」](#)
12. A-15 ページの [A.1.12 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレード処理」](#)
13. A-15 ページの [A.1.13 項「Oracle Application Server Discoverer のアップグレード処理」](#)
14. A-16 ページの [A.1.14 項「Oracle Application Server Reports Services のアップグレード処理」](#)

A.1.1 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) のアップグレード処理

Oracle Process Manager and Notification Server をアップグレードする際に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. `<source_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` ファイルが 10g (9.0.4) 形式に変換されます。
2. 変換された `<source_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` ファイルが、`<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` ファイルとマージされます。`gid="dcm-daemon"` を含むノードを除き、すべてのカスタム・ノードが `<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml` に挿入されます。

A.1.1.1 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN) のアップグレード・アイテム

OPMN のアップグレード処理では、次のファイルが変更またはコピーされます。

- `<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml`
- `opmn.xml` で定義されたカスタム・プロセス・バイナリ
- Oracle Wallet

注意： OPMN のポート値は、通知サーバーのポート（ローカル、リモート、リクエスト）および OC4J のポート（`ajp`、`rmi`、`jms`）である点に注意してください。

OPMN のアップグレード処理では、`opmn.xml` の Oracle Application Server Containers for J2EE インスタンスに対して行った変更内容はいずれもアップグレードされません。そのようなインスタンスには、インストーラによって作成されたインスタンス（ホーム、OC4J_WIRELESS、OC4J_DEMOS、OC4J_PORTAL、OC4J_BI_FORMS）、ユーザーによって作成されたインスタンスなどがあります。OC4J のアップグレード処理では、ホーム・インスタンスおよびすべてのユーザー定義インスタンスがソース Oracle ホームにデプロイされたアプリケーションとともにアップグレードされます。インストーラが作成した他の OC4J インスタンスでは、`opmn.xml` の Oracle Application Server 10g (9.0.4) の設定が採用されます。Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) の設定を保持する場合は、手動で作成する必要があります。

3-32 ページの [3.8.2.3 項「インストーラによって作成された OC4J インスタンスのアップグレード」](#) を参照してください。

A.1.2 インスタンス構成データのアップグレード処理

インスタンス構成データをアップグレードする際に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. `<source_MT_OH>%config%iaschema.xml` ファイルが、ソース Oracle ホームからロードされます。
2. `<source_MT_OH>%config%iaschema.xml` ファイルが、`<destination_MT_OH>%config%iaschema.xml` ファイルと比較されます。
3. ソース Oracle ホームファイルで見つかった差分が、アップグレード先 Oracle ホームファイルに書き込まれます。

A.1.2.1 インスタンス構成のアップグレード・アイテム

次のファイルは、インスタンス構成データのアップグレード処理で変更されます。

- `<destination_MT_OH>%config%iaschema.xml`

A.1.3 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレード処理

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアップグレード処理には、次の手順があります。

1. OracleAS Upgrade Assistant により、ソース Oracle ホームに接続する別のプロセスが作成されます。
2. そのプロセスは、Distributed Configuration Management リリースを使用して、アップグレード対象のインスタンスを調べます。
3. Distributed Configuration Management により、ソース Oracle ホームにあるアプリケーションをデプロイするインスタンスのリストが作成されます。ここでは、`<source_MT_OH>%j2ee%deploy.ini*` ファイルで定義された、OC4J_Portal などの Oracle 固有の OC4J インスタンスは無視されます。それらのインスタンスは、OC4J アップグレードの候補となります。
4. Distributed Configuration Management により、リストされたアプリケーションの EAR ファイルのリストが作成されます。
5. OracleAS Upgrade Assistant により、アップグレードするファイルのバックアップが作成され、接尾辞 `preUpgrade` が付加されます。必要に応じて、一意のファイル名を作成するために整数が付加されます。たとえば、`<ファイル名>.preUpgrade.1` となります。
6. OracleAS Upgrade Assistant により、`principals.xml`、`data-sources.xml`、`jazn-data.xml` および `jazn.xml` がアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。

7. oc4j.properties ファイルで定義されたプロパティが、SMI API を使用して opmn.xml ファイルに追加されます。
8. OracleAS Upgrade Assistant により EAR ファイルが再作成され、アップグレード先 Oracle ホームに再デプロイされます。この手順で、OracleAS Upgrade Assistant は、アプリケーションの application-deployments ディレクトリにある orion 固有のファイルをすべて検索します。さらに、principals.xml や jazn-data.xml などの、アプリケーション固有の構成ファイルも検索します。
9. Distributed Configuration Management により、mod_oc4j.conf が、デプロイされた各アプリケーションに関連するマウント・ポイントで更新されます。

A.1.3.1 OC4J のアップグレード・アイテム

OC4J のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>¥j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥principals.xml`
- `<destination_MT_OH>¥j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥data-sources.xml`
- `<destination_MT_OH>¥Apache¥Apache¥conf¥mod_oc4j.conf`
- `<source_MT_OH> OC4J インスタンスで検出されたアプリケーションの EAR ファイル`
- `<destination_MT_OH>¥j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥jazn-data.xml`
- `<destination_MT_OH>¥j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥jazn.xml`
- `<destination_MT_OH>¥opmn¥conf¥opmn.xml` (`<source_MT_OH>` 内の oc4j.properties ファイルのプロパティがこのファイルに追加されます)

注意： Oracle Application Server Containers for J2EE のアップグレードを完了するには、手動による手順が必要な場合があります。3-30 ページの [3.8.2 項「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\) のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

A.1.4 Oracle HTTP Server のアップグレード処理

Oracle HTTP Server (OHS) をアップグレードする際に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

- httpd.conf ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。このとき、`<source_MT_OH>` のパスが `<destination_MT_OH>` に置き換えられ、10g (9.0.4) のファイルの変更内容およびリリース 2 (9.0.2) 以降に行わ

れたカスタマイズの内容が、アップグレード先 Oracle ホームの対応するファイルに適用されます。

- `<source_MT_OH>` の `mod_oc4j.conf` ファイルで `Oc4jMount` ディレクティブが検索され、文字列 `ajp13://`、`cluster://` または `instance://` を含む `Oc4jMount` ディレクティブが `<destination_MT_OH>` の `mod_oc4j.conf` ファイルにコピーされます。
- `mod_osso.conf` ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。このとき、ソース Oracle ホームのパスがアップグレード先 Oracle ホームのパスに置き換えられます。`OsoConfigFile` ディレクティブが参照している `osso.conf` ファイルがコピーされ、10g (9.0.4) の不明瞭化されたファイルに変換されます。
- `moddav.conf` ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。このとき、ソース Oracle ホームのパスがアップグレード先 Oracle ホームのパスに置き換えられます。
- `httpd.conf` ファイルで `Include` ディレクティブを再帰的に検索して、ユーザー定義の構成ファイルを検出します。それらのファイルがソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。ソース Oracle ホームでファイルが見つかった場合、OracleAS Upgrade Assistant によりソース Oracle ホームのパスがアップグレード先 Oracle ホームのパスに置き換えられます。ファイルがソース Oracle ホーム以外の場所で見つかった場合、OracleAS Upgrade Assistant により元のファイルのコピーが `.preUpgrade` 拡張子を付けてアップグレード先 Oracle ホームに保存され、ソース Oracle ホームのファイルがその新しいファイルに置き換えられます。
- `LoadModule` ディレクティブを再帰的に検索して、関連するモジュールの動的ライブラリを検出します。それらのライブラリがソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
- `SSLWallet` ディレクティブを再帰的に検索して、Oracle Wallet を検出します。それらの Wallet がソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
- すべての構成ファイルで、`ScriptAlias` または `ScriptAliasMatch` ディレクティブ、および `Options` ディレクティブ (Directory または File コンテナで定義) の `ExecCGI` オプションで指定されたディレクトリおよびファイルを検索して、CGI および `fastcgi` スクリプトを検出します。ディレクトリおよびファイルがソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
- `DocumentRoot` ディレクティブで指定された (デフォルト以外の) 場所に存在する静的ドキュメントのディレクトリが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。`DocumentRoot` ディレクティブがデフォルトの場合、静的ドキュメントはアップグレードされません。

注意： 通常 Web サイトでは第 1 のリスナーとして Web Cache が設定されています。その場合、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートは、アップグレード後に Web Cache の同じポート値と同期化する必要があります。設定は、3-30 ページの表 3-5 「Oracle HTTP Server と Oracle Application Server Web Cache の Port 設定」で説明されています。

oracle_apache.conf および mod_plsql.conf ファイルは、OracleAS Upgrade Assistant によりアップグレードされません。

Alias または mod_rewrite ディレクティブが参照する静的なファイルは、アップグレードされません。Oracle ホームにある、それらのファイルはすべて手動でアップグレードする必要があります。

A.1.4.1 OHS のアップグレード・アイテム

OHS のアップグレード処理では、次のファイルが変更またはコピーされます。

- <destination_MT_OH>%Apache%Apache%conf%httpd.conf
- <destination_MT_OH>%Apache%Apache%conf%mod_oc4j.conf
- <destination_MT_OH>%Apache%Apache%conf%mod_osso.conf
- <destination_MT_OH>%Apache%Apache%oradav%conf%moddav.conf
- <destination_MT_OH>%Apache%Apache%conf%osso%osso.conf
- Include ディレクティブで指定されているユーザー定義の構成ファイル (httpd.conf で始まるすべての構成ファイルを再帰的に検索して検出されたファイル)
- すべての構成ファイルの LoadModule ディレクティブで指定されている .dll ファイル (モジュールの動的ライブラリ)
- すべての構成ファイルの SSLWallet ディレクティブで指定されている Oracle Wallet
- すべての構成ファイルの ScriptAlias、ScriptAliasMatch または Options (ExecCGI) ディレクティブで指定されている CGI および fastcgi プログラム
- 静的ドキュメントおよびディレクトリ

注意： Oracle HTTP Server のアップグレードを完了するには、手動による手順が必要な場合があります。3-29 ページの 3.8.1 項「Oracle HTTP Server のアップグレードの完了」を参照してください。

A.1.5 Oracle Application Server Web Cache のアップグレード処理

Oracle Application Server Web Cache のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. ソース Oracle ホームで、webcache.xml および internal.xml が検出されます。
2. 構成データが、`<source_MT_OH>¥webcache¥ webcache.xml` から `<destination_MT_OH>¥webcache¥webcache.xml` に移動されます。
3. エラー・ページおよび Wallet ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。

注意： Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) で、イベント・ログのディレクトリの場所をカスタマイズした (webcache.xml ファイルの ACCESSLOG LOGDIR プロパティで指定) 場合、このカスタマイズ内容はアップグレードされない点に注意してください。

A.1.5.1 Oracle Application Server Web Cache のアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Web Cache のアップグレード処理には、次のファイルが含まれます。

- `<destination_MT_OH>¥webcache¥webcache.xml`
- `<destination_MT_OH>¥webcache¥docs¥*` (ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされるエラー・ページ・ファイル)
- Wallet ファイル (`<source_MT_OH>¥webcache¥wallets` から `<destination_MT_OH>¥webcache¥wallets` にコピーされるファイル。次の説明を参照。)

A.1.5.1.1 Wallet ファイルのアップグレード OracleAS Upgrade Assistant により、Wallet がソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされることにより、Wallet がアップグレードされます。ソース Oracle ホーム以外の場所にある Wallet は、コピーする必要がありません。

Oracle Application Server Web Cache では複数のリスニング・ポートを設定でき、各ポートに異なる Wallet を設定できます。オリジナル・サーバーに接続する際は、他の Wallet (次の例の (OSWALLET)) を使用できます。

例 A-1 アップグレード後の Oracle Application Server Web Cache の Wallet の構成

```
<LISTEN IPADDR="ANY" PORT="4445" PORTTYPE="NORM" SSLENABLED="SSLV3_V2H">
  <WALLET><destination_MT_OH>¥webcache¥wallets¥subdir1</WALLET>
</LISTEN>
<LISTEN IPADDR="ANY" PORT="4447" PORTTYPE="NORM" SSLENABLED="SSLV3_V2H">
  <WALLET>¥some¥other¥path¥wallets¥default</WALLET>
```



```

</LISTEN>
.....
.....
<OSWALLET><destination_MT_OH>%webcache%\wallets%\default</OSWALLET>

```

この例では、Oracle Application Server Web Cache は3つの Wallet を使用しています。最初および3番目の Wallet は、ソース Oracle ホームにあります。最初の Wallet は、`<destination_MT_OH>%webcache%\wallets%\subdir1` にコピーされます。3番目の Wallet は、`<destination_MT_OH>%webcache%\wallets%\default` にコピーされます。2番目の Wallet は、Oracle ホームに存在していないためコピーされません。アップグレード後、webcache.xml の Wallet は元のディレクトリを指し示します。

注意： 通常 Web サイトでは第1のリスナーとして Web Cache が設定されています。その場合、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートは、アップグレード後に Web Cache の同じポート値と同期化する必要があります。3-29 ページの [3.8.1 項「Oracle HTTP Server のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

A.1.6 mod_plsql のアップグレード処理

mod_plsql をアップグレードする際に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. ソース Oracle ホームで dads.conf および cache.conf が検出されます。
2. 各ソース・アイテムが解析されて、結果がメモリーに保持されます。
3. 解析結果がアップグレード先 Oracle ホームに適用されます。
4. 必要に応じて cache.conf ファイルの PlsqlCacheDirectory プロパティのデフォルト値 (`<destination_MT_OH>%Apache%\modplsql%\cache\`) が使用されます。
5. oradav.conf ファイルがソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。

A.1.6.1 mod_plsql のアップグレード・アイテム

mod_plsql のアップグレード処理には、次のファイルが含まれます。

- `<destination_MT_OH>%Apache%\modplsql%\conf\dads.conf`
- `<destination_MT_OH>%Apache%\modplsql%\conf\cache.conf`
- `<destination_MT_OH>%Apache%\oradav%\conf\oradav.conf`

A.1.7 Oracle Enterprise Manager のアップグレード処理

Oracle Enterprise Manager のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. `<source_MT_OH>sysman¥emd¥targets.xml` ファイルで、ファイル内のターゲットに関連するポート・エントリが調査されます。
2. `<destination_MT_OH>sysman¥emd¥targets.xml` ファイルの対応するポート・エントリが置き換えられます。

A.1.7.1 Oracle Enterprise Manager のアップグレード・アイテム

Oracle Enterprise Manager のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>¥sysman¥emd¥targets.xml`

A.1.8 Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリのアップグレード処理

「Portal and Wireless」インストール・タイプのインストールでは、Oracle Universal Installer および OracleAS Upgrade Assistant により次の手順が実行されます。

1. OracleAS Upgrade Assistant により、後で使用するために
`<source_MT_OH>¥ds¥uddi¥config¥uddiserver.config` ファイルが抽出されます。
2. OracleAS Upgrade Assistant により、
`<source_MT_OH>¥ds¥uddi¥config¥uddiserver.config` ファイルのプロパティが抽出され、`<destination_MT_OH>¥uddi¥config¥uddiserver.config` ファイルに適用されます。

A.1.8.1 Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリのアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Web Services レジストリのアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>¥uddi¥config¥uddiserver.config`

注意： Oracle Application Server Web Services のアップグレード前に、リポジトリ・データベース・スキーマがアップグレードされなかった場合、Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリは 9.0.2.3 互換性モードで実行されます。

新しい構成を有効にするには、アップグレード後に UDDI アプリケーションを再起動する必要があります。

10g (9.0.4) の uddiserver.config ファイルのパスは、Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) のパスとは異なります。

Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) では、次のパスが使用されていました。

```
<Oracle home>%ds%uddi%config%uddiserver.config
```

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、次のパスになります。

```
<Oracle home>%uddi%config%uddiserver.config
```

A.1.9 Oracle Ultra Search のアップグレード処理

Oracle Ultra Search のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. ソース Oracle ホームで、data-sources.xml ファイルが検出されます。
2. data-sources.xml ファイルが、<source_MT_OH> から <destination_MT_OH> にコピーされます。

A.1.9.1 Oracle Ultra Search のアップグレード・アイテム

Oracle Ultra Search のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- <destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_Portal%config%data-sources.xml

A.1.10 OracleAS Portal 中間層のアップグレード処理

OracleAS Portal 中間層をアップグレードする際に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. ソース Oracle ホームの Web Cache リスナー、管理用ポートおよび失効化ポートを取得します。
2. それらのポートがアップグレード先 Oracle ホームに適用されます。
3. ソース Oracle ホームから Oracle Enterprise Manager ターゲット・データを取得します。
4. それらの詳細が、アップグレード先 Oracle ホームに適用されます。

A.1.10.1 OracleAS Portal のアップグレード・アイテム

OracleAS Portal のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>%portal%conf%iasconfig.xml`
- `<destination_MT_OH>%sysman%emd%targets.xml`

注意： Portal のアップグレードを完了するには、手動による手順が必要です。3-41 ページの [3.8.4 項「OracleAS Portal 中間層のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

A.1.11 Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理

Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理で実行される手順は、次のとおりです。

1. Oracle Application Server Wireless Configuration Assistant により、最初の Oracle Application Server Wireless 中間層をインストールする際に、Oracle Application Server Metadata Repository の Oracle Application Server Wireless スキーマがアップグレードされます。(A-14 ページの [A.1.11.2 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム \(リスト A\)」](#) を参照してください。)
2. OracleAS Upgrade Assistant により、リスナー・フックやカスタマイズされたフォルダ・レンダラなどのランタイム・カスタマイズ・クラスが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。(A-14 ページの [A.1.11.2 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム \(リスト A\)」](#) を参照してください。)
3. OracleAS Upgrade Assistant により、Oracle Application Server Wireless スタンドアロン・プロセスのプロセス構成情報が Oracle Application Server Wireless リリース 2 (9.0.2) 中間層から Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層にコピーされ、それによって 10g (9.0.4) 中間層が構成されます。(A-14 ページの [A.1.11.3 項「Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム \(リスト B\)」](#) を参照してください。)

Oracle Application Server Wireless の Java プロセスの構成情報が、Metadata Repository の Oracle Application Server Wireless スキーマに格納されます。リリース 2 (9.0.2) から 10g (9.0.4) へのアップグレード中、OracleAS Upgrade Assistant が Oracle Application Server Wireless スキーマに追加エントリを作成することにより、プロセス構成情報がリリース 2 (9.0.2) 中間層から 10g (9.0.4) 中間層にコピーされます。それらのプロセスは 10g (9.0.4) の Oracle Process Manager and Notification により管理されるため、Oracle Application Server Wireless 中間層の Oracle Process Manager and Notification 構成もアップグレードされます。

注意： Oracle Application Server Wireless の Java プロセスのアップグレードについて、次の点に注意してください。

リリース 2 (9.0.2) では、プロセス情報はノードごとに固有です。10g (9.0.4) では、Oracle ホーム固有になります。そのため、1つのノードに複数のリリース 2 (9.0.2) 中間層がある場合はアップグレード処理によって、すべてのリリース 2 (9.0.2) の情報がアップグレードされる 10g (9.0.4) のインスタンスにコピーされます。

Web サイト内のインスタンス名は、一意にする必要があります。アップグレード時には、コピーされるプロセスの名前に数字を付加することによって一意になります。

リリース 2 (9.0.2) のプロセスに加えて、アップグレードされた 10g (9.0.4) には 10g (9.0.4) で導入された新しいプロセス・タイプが含まれます。

プロセス・タイプ「アラート・エンジン」は、「通知エンジン」という名前に変更されました。「インダストリアル・デバイス・ポータル」(リリース 2 (9.0.2)) および「PIM 通知ディスパッチャ」(Oracle Collaboration Suite バージョン 1) の各プロセスは古いタイプであるため、アップグレードされません。

A.1.11.1 Oracle Application Server Wireless 中間層および Wireless スキーマのアップグレード

複数の Oracle Application Server Wireless 中間層および Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード処理の手順は、次のとおりです。

1. ファーム内の Oracle Application Server Wireless 中間層がすべて停止されます。これには、Oracle Application Server Wireless を実行するように構成されているすべての Oracle Collaboration Suite 中間層が含まれます。
2. 最初の Oracle Application Server Wireless 中間層が、アップグレード対象として選択されます。
3. 最初の 10g (9.0.4) Oracle Application Server Wireless 中間層が、手順 2 で示した Oracle Application Server Wireless 中間層と同じコンピュータにインストールされます。インストール時に、Oracle Application Server リポジトリ内の Oracle Application Server Wireless スキーマがアップグレードされます。
4. OracleAS Upgrade Assistant が起動されます。

この時点で、リリース 2 (9.0.2) Oracle Application Server Wireless 中間層をすべて再起動して、停止時間を減らすことができます。

A.1.11.2 Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム (リスト A)

Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理の第 1 フェーズでは、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>%wireless%server%classes%.class`
- `<destination_MT_OH>%wireless%server%classes%.properties`

A.1.11.3 Oracle Application Server Wireless のアップグレード・アイテム (リスト B)

Oracle Application Server Wireless のアップグレード処理の第 2 フェーズでは、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>%opmn%conf%opmn.xml`

A.1.12 Oracle Application Server Forms Services のアップグレード処理

Oracle Application Server Forms Services のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

1. 次の Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト A、リスト B および リスト C) で説明されているファイルが検出されます。
2. A-14 ページの [A.1.12.1 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム \(リスト A\)」](#) で説明されているファイルのバックアップが、接尾辞 `preUpgrade` を付けて作成され、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームに変更されずにコピーされます。
3. A-15 ページの [A.1.12.2 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム \(リスト B\)」](#) で説明されているファイルが、接尾辞 `902` を付けて作成され、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
4. A-15 ページの [A.1.12.3 項「Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム \(リスト C\)」](#) で説明されているファイルのバックアップが、接尾辞 `preUpgrade` を付けて作成されます。そして、ソース Oracle ホームにあるそれらのファイルからカスタマイズ内容が抽出され、アップグレード先 Oracle ホームにあるファイルにマージされます。

アップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

A.1.12.1 Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト A)

- `<destination_MT_OH>%forms90%fttrace.cfg`

- `<destination_MT_OH>%forms90%java%oracle%forms%registry%Registry.dat`
- `formsweb.cfg` が使用する、ユーザー定義の Oracle Application Server Forms Services の `*.htm` ファイル

A.1.12.2 Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト B)

- `<destination_MT_OH>%forms90%search_replace.properties`
- `<destination_MT_OH>%forms90%converter.properties`

A.1.12.3 Oracle Application Server Forms Services のアップグレード・アイテム (リスト C)

- `<destination_MT_OH>%forms90%server%formsweb.cfg`
- `<destination_MT_OH>%forms90%server%default.env`
- `<destination_MT_OH>%forms90%server%forms90.conf`
- `<destination_MT_OH>%j2ee%properties%oc4j_bi_forms.properties`
(Oracle Application Server Forms Services のデプロイ・エントリ)
- `formsweb.cfg` および `default.env` と同じ、ユーザー定義の Oracle Application Server Forms Services 構成ファイル

A.1.13 Oracle Application Server Discoverer のアップグレード処理

Oracle Application Server Discoverer のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

- リリース 2 (9.0.2) インスタンスの `Pref.txt` および `.reg_key.dc` ファイルに加えられた変更内容が、10g (9.0.4) インスタンスの同じファイルにマージされます。
- リリース 2 (9.0.2) インスタンスの `*.xml` ファイルに加えられた変更内容が、10g (9.0.4) インスタンスの同じファイルにマージされます。
- 各構成ファイルのバックアップ・コピーが作成され、次の形式で名前が付けられます。
<ファイル名>_upgrade_backup.<ファイル接尾辞>

A.1.13.1 Oracle Application Server Discoverer のアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Discoverer のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>%util%Pref.txt`

- `<destination_MT_OH>%discoverer%.reg_key.dc`
- `<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_Forms%applications%discoverer%web%WEB-INF%configuration.xml`
- `<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_Forms%applications%discoverer%web%common%xml%ui_config.xml`
- `<destination_MT_OH>%j2ee%OC4J_BI_Forms%applications%discoverer%web%plus_files%xml%plus_config.xml`

注意： *.xml（スタイル・シート）ファイルは、OracleAS Upgrade Assistant によりアップグレードされません。リリース 2（9.0.2）インストールでそれらのいずれかをカスタマイズし、それらのカスタマイズを 10g（9.0.4）インストールで使用する場合、カスタマイズを手動で再適用する必要があります。スタイル・シート・ファイルは、3-52 ページの [3.8.5 項「Oracle Application Server Discoverer Viewer のアップグレードの完了」](#) にリストされています。

A.1.14 Oracle Application Server Reports Services のアップグレード処理

Oracle Application Server Reports Services のアップグレード時に OracleAS Upgrade Assistant が実行する手順は、次のとおりです。

- `jdbcpds.conf` を除くすべての構成ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
- すべてのリソース・ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。
- `<source_MT_OH>%bin%reports.bat` がアップグレード先 Oracle ホームにコピーされ、`NLS_LANG` 環境変数が、スクリプトに含まれていない場合は追加されます。
- Reports Server の永続ファイルが、ソース Oracle ホームからアップグレード先 Oracle ホームにコピーされます。

A.1.14.1 Oracle Application Server Reports Services のアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Reports Services のアップグレード処理では、次のファイルが変更されます。

- `<destination_MT_OH>%reports%conf%*.conf`（`jdbcpds.conf` を除く）
- `<destination_MT_OH>%reports%conf%*.xml`
- `<destination_MT_OH>%reports%plugins%resource%*.*`
- `<destination_MT_OH>%reports%conf%cgicmd.dat`

- `<destination_MT_OH>%reports%server%.dat`
- `<destination_MT_OH>%bin%reports.bat`
- `<destination_MT_OH>%reports%conf%rwervlet.properties`

注意： デフォルト環境変数に非デフォルト値を使用した場合、アップグレード後にそれらを手動で再設定する必要があります。3-54 ページの [3.8.6 項「Oracle Application Server Reports Services のアップグレードの完了」](#) を参照してください。

A.2 Infrastructure のアップグレード処理

この項では、Infrastructure のアップグレード処理について説明します。Infrastructure のコンポーネントと機能については、[第 4 章「Metadata Repository のアップグレード」](#) および [第 5 章「Identity Management サービスのアップグレード」](#) で説明されています。

この項では、次の項目について説明します。

A-18 ページの [A.2.2 項「Metadata Repository Container スキーマのアップグレード処理」](#)

A-19 ページの [A.2.3 項「ProcessConnect のアップグレード処理」](#)

A-19 ページの [A.2.4 項「Oracle Application Server Certificate Authority のアップグレード処理」](#)

A-19 ページの [A.2.5 項「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理」](#)

A-20 ページの [A.2.6 項「OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理」](#)

A-21 ページの [A.2.7 項「Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理」](#)

A-22 ページの [A.2.8 項「Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード処理」](#)

A-23 ページの [A.2.9 項「Web クリップングのアップグレード処理」](#)

A-23 ページの [A.2.10 項「Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード処理」](#)

A.2.1 Identity Management のアップグレード処理

Identity Management のコンポーネントである Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory は、Oracle Universal Installer によりアップグレードされます。アップグレード可能な構成は 2 つあります。1 つは「分散」で、Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory が別々のコンピュータに存在し、それぞれに独自のメタデータ・リポジトリが含まれる場合です。もう 1 つは「非分散」で、

Oracle Application Server Single Sign-On および Oracle Internet Directory が 1 つのコンピュータ上のメタデータを共有する場合です。

アップグレード処理は、それぞれのシナリオで Oracle Universal Installer によって対話的に実行されます。Oracle Universal Installer はアップグレードする構成を検出し、必要な情報を表示して適切な構成ツールを起動します。

ソースおよびアップグレード先の構成は、次の図で示されています。

- 5-3 ページの図 5-1 「リリース 2 (9.0.2) および 10g (9.0.4) の非分散 Identity Management」
- 5-3 ページの図 5-2 「リリース 2 (9.0.2) の分散 Identity Management」
- 5-4 ページの図 5-3 「10g (9.0.4) の分散 Identity Management」

A.2.2 Metadata Repository Container スキーマのアップグレード処理

Metadata Repository Container スキーマのアップグレードでは、Metadata Repository の新しいスキーマに対するサポートが追加され、Oracle Internet Directory エントリが更新されます。スクリプトは、実行される際の資格証明に応じて 1 つまたは両方の機能を実行します。

関連項目： 4-5 ページの 4.2.3.1 項「新しいスキーマを作成する mrc.pl の実行」および 4-7 ページの 4.2.3.2 項「Oracle Internet Directory のエントリを更新する mrc.pl の実行」を参照してください。

Metadata Repository Container スキーマの作成およびアップグレード処理 (mrc.pl スクリプト) で実行される手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数が設定されているかどうかを確認されます。設定されていない場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
2. Oracle ホームが、リリース 2 (9.0.2) Infrastructure であるかどうかを確認されます。そうでない場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
3. Metadata Repository データベースに接続します。接続できない場合、プロセスは終了します。
4. データベース・リリースが 9.0.1.5 であるかどうかを確認されます。そうでない場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
5. スキーマ wcrsys、oca、oraoca_public、ip、wk_test および internet_appserver_registry (ユーザー名および対応する表領域と同じパスワードが設定される)、および表領域 ias_meta、wcrsys_ts、ocats、ip_dt、ip_rt、ip_idx、ip_lob、OLTS_SVRMGSTORE、oltsbattrstore が作成されます。表領域またはユーザーの作成に失敗した場合、プロセスはエラーを報告して続行します。
6. すべてのスキーマが正常に作成された場合、"Creation of new schemas successful" というメッセージが標準出力に書き込まれます。

Metadata Repository Container の Oracle Internet Directory エントリのアップグレード処理 (mrc.pl スクリプト) で実行される手順は、次のとおりです。

1. ORACLE_HOME 環境変数が設定されているかどうかを確認されます。設定されていない場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
2. Oracle ホームが、リリース 2 (9.0.2) Infrastructure であるかどうかを確認されます。そうでない場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
3. oca/oca、oraoca_public および wcrsys/wcrsys という組合せのユーザー名およびパスワードを使用して、Metadata Repository データベースに接続します (これらは、Oracle Internet Directory エントリを更新する前に mrc.pl スキーマ作成処理により作成されています)。それらのすべてのユーザーに接続できなかった場合、プロセスはエラーを報告して終了します。
4. ユーザーのパスワードがランダム化されます。
5. ランダム化されたパスワードを使用して、Oracle Internet Directory および新しいスキーマのエントリに必要なセキュリティ・エントリがすべて作成されます。
6. Metadata Repository ユーザーのパスワードが変更されます。
7. OID エントリの作成とランダム化されたパスワードの更新が正常に行われた場合、"Update of new OID entries successful" というメッセージが標準出力に書き込まれます。

A.2.3 ProcessConnect のアップグレード処理

ProcessConnect のアップグレード処理では、ProcessConnect スキーマが作成されます。

A.2.4 Oracle Application Server Certificate Authority のアップグレード処理

Oracle Application Server Certificate Authority スキーマのアップグレード処理で実行される手順は、次のとおりです。

- OCA および ORAOCA_PUBLIC データベース・ユーザーの作成
- 表およびビュー

A.2.5 Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理

Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理で実行される手順は、次のとおりです。

- Oracle Ultra Search 10g (9.0.4) のバイナリが、Infrastructure のデータベース・ディレクトリにコピーされます。
- リポジトリ・データベースに SYS として接続します。
- WKSYS スキーマの存在確認が実行されます。スキーマに格納されているリリース番号が取得されます。リリース番号が 9.0.2 (またはそのパッチのリリース番号) ではない場合、エラーが発生してプロセスは停止します。

- SQL*Plus スクリプト `wkdbmig.sql` が実行され、スキーマおよび `WKSYS` のデータがアップグレードされます。
- `loadjava` コマンドが実行されて、Java ストアド・パッケージが `WKSYS` スキーマにロードされます。
- SQL*Plus スクリプトが実行されて、デモ・スキーマが作成され、デモ・スキーマに基づく Ultra Search インスタンスが作成されます。
- コンポーネント・レジストリのリリース番号が更新されます。
- Oracle Internet Directory に格納されている Oracle Ultra Search スキーマ情報が構成されます。

A.2.5.1 Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード・アイテム

Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理では、次のものが変更されます。

- WKSYS スキーマ

A.2.6 OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理

OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理 (`upgrade.pl` スクリプト) で実行される手順は、次のとおりです。

1. Oracle9iAS Portal 9.0.2 の表のサブセットが、ダンプ・ファイルにエクスポートされます。
2. 必要に応じて、Oracle9iAS パッチが既存のスキーマに適用されます。
3. アップグレードが開始される前に、すべての無効なオブジェクトが表示されます（この段階ですべての Oracle9iAS Portal パッケージが有効になっている必要があります）。
4. Oracle9iAS Portal スキーマの DBMS ジョブが使用不可になります。これらのジョブは、アップグレードの最後に再び使用可能になります。
5. Oracle9iAS Portal スキーマのすべての表で収集された統計が削除されます。Oracle9iAS Portal でサポートされる統計は、アップグレードの最後の方で収集されます。
6. 必要に応じて、OWA パッケージがインストールされます。

注意： この手順は、OWA パッケージの現行リリースが、最新のリリースではない場合のみ実行されます。この手順により、OWA パッケージに依存するインスタンスのすべてのパッケージが無効化されます。特に、そのインスタンスのすべての Oracle9iAS Portal スキーマにある、ほとんどの Oracle9iAS Portal パッケージが無効化されます。このため、場合によってはアップグレード後に、関係する他のスキーマのパッケージを再コンパイルする必要があります。アップグレード・スクリプトでは、アップグレードされる Portal スキーマのパッケージのみが再コンパイルされます。

7. すべての既存の Java オブジェクトが、Portal スキーマから削除されます。

注意： Oracle9iAS Portal に属していない Portal スキーマの Java オブジェクトが存在する場合、アップグレード後にそれらを手動で再インストールする必要があります。

8. すべての言語のすべての製品メッセージが削除されます。
9. 以前にインストールしたすべての言語の、最新の製品メッセージがすべてロードされます。

注意： アップグレード前に製品メッセージが変更された場合、変更内容を手動で再適用する必要があります。

10. スキーマが変更され、すべての OracleAS Portal パッケージがコンパイルされます。
11. アップグレード時に作成された一時表がエクスポートされます。
12. 無効な非 Oracle9iAS Portal オブジェクトが再コンパイルされます。この手順以降で、無効な非 Oracle9iAS Portal オブジェクトが残っている場合は、警告が発行されます。
13. 致命的コンパイル・エラーがない場合、OracleAS Portal のリリースが更新されます。
14. アップグレード・ログ・ファイルでエラーおよび警告が検索され、見つかった内容が表示されます。エラーがない場合は、成功メッセージが表示されます。

A.2.6.1 OracleAS Portal スキーマのアップグレード・アイテム

OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理では、次のスキーマが変更されます。

- PORTAL (Portal スキーマ)
- PORTAL_DEMO (Portal デモ・スキーマ)
- PORTAL_PUBLIC (Portal の Public スキーマ)
- PORTAL_APP (Portal JSP Access)

A.2.7 Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理

Oracle Application Server Syndication Server のアップグレード・スクリプト `ossupg902.sql` により、次の手順が実行されます。

- データベースに SYSDBA として接続します。

- アップグレード前の検証（適切な DSGATEWAY リリースであるかどうかなど）が実行され、アップグレードが続行可能かどうか判断されます。いずれかの確認に失敗した場合、アップグレードは停止します。
- 表、PL/SQL パッケージなど、DSGATEWAY スキーマのすべてのスキーマ・コンテンツが破棄されます。
- 10g (9.0.4) インストール・スクリプトが起動されて、10g (9.0.4) データベース・スキーマがインストールされます。

A.2.7.1 Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理では、次のスキーマが変更されます。

- DSGATEWAY

A.2.8 Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード処理

Oracle Application Server Web Services スキーマのアップグレード・スクリプト `wuru9023.sql`（UDDI 9.0.2.3 パッチが適用された Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) で使用）により、次の手順が実行されます。

- リポジトリ・データベースに接続します。
- アップグレード前の検証（適切な UDDI リリースであるかどうかなど）が実行され、アップグレードが続行可能かどうか判断されます。いずれかの確認に失敗した場合、アップグレードは停止します。
- 表、列、索引の作成や削除など、初期の構造の変更が行われます。
- UDDI サーバーのプロパティおよび構成のアップグレードが実行されます。このとき、構成表に新しい行が挿入されて、既存の行が更新されます。

Oracle Application Server Web Services スキーマのアップグレード・スクリプト `wuru9023.sql`（Oracle Application Server リリース 2 (9.0.2) で使用）により、次の手順が実行されます。

- アップグレード前の検証（適切な UDDI リリースであるかどうかなど）が実行され、アップグレードが続行可能かどうか判断されます。いずれかの確認に失敗した場合、アップグレードは停止します。
- 表、PL/SQL パッケージなど、UDDI データベース・スキーマのすべてのスキーマ・コンテンツが破棄されます。
- 9.0.4 のインストール・スクリプトが起動されて、10g (9.0.4) データベース・スキーマがインストールされます。

A.2.8.1 Oracle Application Server Web Services スキーマのアップグレード・アイテム

Oracle Application Server Web Services スキーマのアップグレード処理では、次のものが変更されます。

- UDDISYS スキーマ

注意： UDDI スキーマのアップグレードの前に、UDDI の中間層のアップグレードを行う必要があります。

A.2.9 Web クリッピングのアップグレード処理

Web クリッピングは新しいコンポーネントであるため、中間層または Infrastructure における他のアップグレード処理に依存しません。アップグレード処理により、新しい表および制約の作成、ファンクションおよびプロシージャを使用したパッケージの定義、ランダム化されたデータによる表の生成が行われます。

A.2.9.1 Web クリッピング・スキーマのアップグレード・アイテム

Web クリッピング・スキーマのアップグレード処理では、WCRSYS スキーマが作成されます。

A.2.10 Oracle Application Server Wireless スキーマのアップグレード処理

Oracle9iAS Metadata Repository の Oracle Application Server Wireless スキーマは、最初の Oracle Application Server Wireless 10g (9.0.4) 中間層のインストール時に自動的にアップグレードされます。Oracle9iAS Infrastructure で、アップグレード手順をさらに実行する必要はありません。詳細は、A-13 ページの [A.1.11.1 項「Oracle Application Server Wireless 中間層および Wireless スキーマのアップグレード」](#) を参照してください。

ファイル・リファレンス

この付録では、アップグレード時にソース Oracle ホームからターゲットの Oracle ホームに移される、設定および構成データを含むファイルの一覧を示し、その説明を行います。

「アップグレード・タイプ」列は、ファイルのアップグレード方法を示しています。場合によっては、OracleAS Upgrade Assistant によりファイルが処理され、ファイルに加えられたカスタマイズのすべてではありませんが、大部分が 10g (9.0.4) の Oracle Application Server インスタンスにコピーされます。(ポート番号、マウント・ポイント、アップグレード後に調整が必要な他の構成設定などの例外が、このガイドで示されています。それらについては、アップグレード後にファイルを変更する必要がある場合があります。)

「手動」アップグレード・タイプのファイルは、OracleAS Upgrade Assistant により処理されません。ソース・インスタンスのこれらのファイルに対して行われたカスタマイズは、アップグレード先のインスタンスの同じファイルに手動で移動させる必要があります。

表の後に、各ファイルの説明が記載されています。

表 B-1 「アップグレード・データを含むファイル (ファイル順)」

表 B-2 「アップグレード・データを含むファイル (パス順)」

アップグレードおよび作成されたスキーマは、表 B-3 「Infrastructure のアップグレード (スキーマ) 処理」にリストされています。

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
.	reports¥plugins¥resource	OracleAS Upgrade Assistant
.	webcache¥wallets	OracleAS Upgrade Assistant
*.class	wireless¥server¥classes	OracleAS Upgrade Assistant
*.conf (jdbcpds.conf を除く)	reports¥conf	OracleAS Upgrade Assistant
*.dat	reports¥server	OracleAS Upgrade Assistant
*.htm	forms90¥server	OracleAS Upgrade Assistant
*.properties	wireless¥server¥classes	OracleAS Upgrade Assistant
*.xml	reports¥conf	OracleAS Upgrade Assistant
.reg_key.dc	discoverer902¥bin¥.reg_key.dc (discoverer¥.reg_key.dc にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant
application-client.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥application-client.xml	手動
application.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥application.xml j2ee¥home¥applications¥<OC4J アプリケーションの名前 >¥META-INF¥application.xml	手動
cache.conf	Apache¥modplsql¥conf¥cache.conf	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
cgimd.dat	reports¥conf¥cgimd.dat	OracleAS Upgrade Assistant
configuration.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥WEB-INF¥configuration.xml	OracleAS Upgrade Assistant
converter.properties	forms90¥converter.properties	OracleAS Upgrade Assistant
dads.conf	Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf（ORASSO DAD アップグレード）	手動
dads.conf	Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf	OracleAS Upgrade Assistant
data-sources.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥config¥data-sources.xml および j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥data-sources.xml	OracleAS Upgrade Assistant
default-web-site.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥default-web-site.xml	手動
default.env （またはユーザー定義の環境ファイル）	forms90¥server¥default.env	OracleAS Upgrade Assistant
dms.conf	Apache¥Apache¥conf¥dms.conf	手動
ソース・インスタンスの server.xml ファイルで定義されているアプリケーションの EAR ファイル	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥applications¥*.ear	OracleAS Upgrade Assistant
forms90.conf	forms90¥server¥forms90.conf	OracleAS Upgrade Assistant
formsweb.cfg （またはユーザー定義のサーブレット構成ファイル）	forms90¥server¥formsweb.cfg	OracleAS Upgrade Assistant
ftrace.cfg	forms90¥trace¥ftrace.cfg	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
global-web-application.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥global-web-application.xml	手動
http-web-site.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥http-web-site.xml	手動
httpd.conf	Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf	OracleAS Upgrade Assistant
ias.properties	config¥ias.properties	手動
iasschema.xml	config¥iasschema.xml	OracleAS Upgrade Assistant
index.html	Apache¥Apache¥htdocs¥index.html	手動
internal.xml	webcache¥internal.xml	手動
jazn-data.xml	j2ee¥home¥config¥jazn-data.xml および j2ee¥home¥application-deployments¥ <アプリケーションの名前 >¥jazn-data.xml	OracleAS Upgrade Assistant
jazn-data.xml	sysman¥j2ee¥config¥jazn-data.xml	手動
jazn.xml	j2ee¥home¥config¥jazn.xml	OracleAS Upgrade Assistant
jdbcpds.conf	reports¥conf¥jdbcpds.conf	手動
jms.xml	j2ee¥home¥config¥jms.xml	手動
mod_oc4j.conf	Apache¥Apache¥conf¥mod_oc4j.conf	OracleAS Upgrade Assistant
mod_osso.conf	Apache¥Apache¥conf¥mod_osso.conf	OracleAS Upgrade Assistant
moddav.conf	Apache¥Apache¥oradav¥conf¥moddav.conf	OracleAS Upgrade Assistant
oc4j.properties	j2ee¥oc4j.properties	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
oc4j_bi_forms.properties	j2ee¥properties¥oc4j_bi_forms.properties	OracleAS Upgrade Assistant
opmn.xml	opmn¥conf¥opmn.xml	OracleAS Upgrade Assistant
oracle_apache.conf	Apache¥Apache¥conf¥oracle_apache.conf	手動
oradav.conf	Apache¥oradav¥conf¥oradav.conf	OracleAS Upgrade Assistant
orion-application.xml	j2ee¥home¥application-deployments¥ <アプリケーションの名前>¥orion-application.xml	手動
orion-web.xml	j2ee¥home¥application-deployments¥ <アプリケーションの名前>¥orion-web.xml	手動
plsql.conf	Apache¥Apache¥conf¥osso¥osso.conf	OracleAS Upgrade Assistant
plsql.conf	Apache¥modplsqli¥conf¥plsqli.conf	手動
plus_config.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥ plus_files¥xsl¥plus_config.xml	OracleAS Upgrade Assistant
Pref.txt	discoverer902¥util¥Pref.txt (discoverer¥util¥Pref.txt にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant
principals.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥ config¥principals.xml	OracleAS Upgrade Assistant
provideruiacis.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥jpdki¥jpdki¥ WEB-INF¥deployment_providerui¥provideruiacis.xml およ び j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥providerBuilder¥WEB- INF¥deployment_providerui¥provideruiacis.xml	手動
proxyinfo.xml	reports¥conf¥proxyinfo.xml	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
Registry.dat	forms90¥¥java¥¥oracle¥¥forms¥¥registry¥¥Registry.dat	OracleAS Upgrade Assistant
reports.bat	bin¥¥reports.bat	OracleAS Upgrade Assistant
rmi.xml	j2ee¥¥home¥¥config¥¥rmi.xml	手動
rwcgi.bat	bin¥¥rwcgi.bat	手動
rwclient.bat	bin¥¥rwclient.bat	手動
rwconverter.bat	bin¥¥rwconverter.bat	手動
rwengine.bat	bin¥¥rwengine.bat	手動
rwgenkey.bat	bin¥¥rwgenkey.bat	手動
rwproxy.bat	bin¥¥rwproxy.bat	手動
rwrvq.bat	bin¥¥rwrgv.bat	手動
rwrnrun.bat	bin¥¥rwrnrun.bat	手動
rwserver.bat	bin¥¥rwserver.bat	手動
rwervlet.properties	reports¥¥conf¥¥rwervlet.properties	OracleAS Upgrade Assistant
search_replace.properties	forms90¥¥search_replace.properties	OracleAS Upgrade Assistant
server.xml	j2ee¥¥home¥¥config¥¥server.xml	手動
targets.xml	sysman¥¥emd¥¥targets.xml	OracleAS Upgrade Assistant
textpds.conf	reports¥¥conf¥¥textpds.conf	OracleAS Upgrade Assistant
tnsnames.ora	network¥¥admin¥¥tnsnames.ora	手動
uddiserver.config	ds¥¥uddi¥¥config¥¥uddiserver.config (uddi¥¥config¥¥uddiserver.config にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-1 アップグレード・データを含むファイル（ファイル順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
ui_config.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥common¥xsl	OracleAS Upgrade Assistant
web.xml	j2ee¥home¥default-web-app¥WEB-INF¥web.xml	手動
web.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portal¥portal¥WEB-INF¥web.xml	手動
webcache.xml	webcache¥webcache.xml	OracleAS Upgrade Assistant
xmlpds.conf	reports¥conf¥xmlpds.conf	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
dms.conf	Apache¥Apache¥conf¥dms.conf	手動
httpd.conf	Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf	OracleAS Upgrade Assistant
mod_oc4j.conf	Apache¥Apache¥conf¥mod_oc4j.conf	OracleAS Upgrade Assistant
mod_osso.conf	Apache¥Apache¥conf¥mod_osso.conf	OracleAS Upgrade Assistant
oracle_apache.conf	Apache¥Apache¥conf¥oracle_apache.conf	手動
plssql.conf	Apache¥Apache¥conf¥osso¥osso.conf	OracleAS Upgrade Assistant
index.html	Apache¥Apache¥htdocs¥index.html	手動
moddav.conf	Apache¥Apache¥oradav¥conf¥moddav.conf	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
cache.conf	Apache¥modplsql¥conf¥cache.conf	OracleAS Upgrade Assistant
dads.conf	Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf	OracleAS Upgrade Assistant
dads.conf	Apache¥modplsql¥conf¥dads.conf (ORASSO DAD アップグレード)	手動
plsql.conf	Apache¥modplsql¥conf¥plsql.conf	手動
oradav.conf	Apache¥oradav¥conf¥oradav.conf	OracleAS Upgrade Assistant
reports.bat	bin¥reports.bat	OracleAS Upgrade Assistant
rwcgi.bat	bin¥rwcgi.bat	手動
rwclient.bat	bin¥rwclient.bat	手動
rwconverter.bat	bin¥rwconverter.bat	手動
rwengine.bat	bin¥rwengine.bat	手動
rwgenkey.bat	bin¥rwgenkey.bat	手動
rwproxy.bat	bin¥rwproxy.bat	手動
rwrqv.bat	bin¥rwrqv.bat	手動
rwrn.bat	bin¥rwrn.bat	手動
rwserver.bat	bin¥rwserver.bat	手動
ias.properties	config¥ias.properties	手動
iasschema.xml	config¥iasschema.xml	OracleAS Upgrade Assistant
.reg_key.dc	discoverer902¥bin¥.reg_key.dc (discoverer¥.reg_key.dc にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant
Pref.txt	discoverer902¥util¥Pref.txt (discoverer¥util¥Pref.txt にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
uddiserver.config	ds¥uddi¥config¥uddiserver.config (uddi¥config¥uddiserver.config にアップグレード)	OracleAS Upgrade Assistant
converter.properties	forms90¥converter.properties	OracleAS Upgrade Assistant
Registry.dat	forms90¥java¥oracle¥forms¥registry¥Registry.dat	OracleAS Upgrade Assistant
search_replace.properties	forms90¥search_replace.properties	OracleAS Upgrade Assistant
*.htm	forms90¥server	OracleAS Upgrade Assistant
default.env （またはユーザー定義の環境ファイル）	forms90¥server¥default.env	OracleAS Upgrade Assistant
forms90.conf	forms90¥server¥forms90.conf	OracleAS Upgrade Assistant
formsweb.cfg （またはユーザー定義のサーブレット構成ファイル）	forms90¥server¥formsweb.cfg	OracleAS Upgrade Assistant
ftrace.cfg	forms90¥trace¥ftrace.cfg	OracleAS Upgrade Assistant
ソース・インスタンスの server.xml ファイルで定義されているアプリケーションの EAR ファイル	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥applications¥*.ear	OracleAS Upgrade Assistant
application-client.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥application-client.xml	手動
default-web-site.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥default-web-site.xml	手動
global-web-application.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥global-web-application.xml	手動

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
http-web-site.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥http-web-site.xml	手動
principals.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前>¥config¥principals.xml	OracleAS Upgrade Assistant
orion-application.xml	j2ee¥home¥application-deployments¥<アプリケーションの名前>¥orion-application.xml	手動
orion-web.xml	j2ee¥home¥application-deployments¥<アプリケーションの名前>¥orion-web.xml	手動
rmi.xml	j2ee¥home¥config¥rmi.xml	手動
jazn-data.xml	j2ee¥home¥config¥jazn-data.xml および j2ee¥home¥application-deployments¥<アプリケーションの名前>¥jazn-data.xml	OracleAS Upgrade Assistant
jazn.xml	j2ee¥home¥config¥jazn.xml	OracleAS Upgrade Assistant
jms.xml	j2ee¥home¥config¥jms.xml	手動
server.xml	j2ee¥home¥config¥server.xml	手動
web.xml	j2ee¥home¥default-web-app¥WEB-INF¥web.xml	手動
oc4j.properties	j2ee¥oc4j.properties	OracleAS Upgrade Assistant
ui_config.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥common¥xsl	OracleAS Upgrade Assistant
plus_config.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥plus_files¥xsl¥plus_config.xml	OracleAS Upgrade Assistant
configuration.xml	j2ee¥OC4J_BI_Forms¥applications¥discoverer¥web¥WEB-INF¥configuration.xml	OracleAS Upgrade Assistant
provideruiaccls.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥jpd¥jpd¥WEB-INF¥deployment_providerui¥provideruiaccls.xml および j2ee¥OC4J_Portal¥applications¥portalTools¥providerBuilder¥WEB-INF¥deployment_providerui¥provideruiaccls.xml	手動

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
web.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥ applications¥portal¥portal¥WEB-INF¥web.xml	手動
data-sources.xml	j2ee¥OC4J_Portal¥config¥data-sources.xml および j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥ data-sources.xml	OracleAS Upgrade Assistant
oc4j_bi_forms.properties	j2ee¥properties¥oc4j_bi_forms.properties	OracleAS Upgrade Assistant
application.xml	j2ee¥<OC4J インスタンスの名前 >¥config¥ application.xml j2ee¥home¥applications¥<OC4J アプリケーションの名前 > ¥META-INF¥application.xml	手動
tnsnames.ora	network¥admin¥tnsnames.ora	手動
opmn.xml	opmn¥conf¥opmn.xml	OracleAS Upgrade Assistant
*.conf（jdbcpds.conf を除く）	reports¥conf	OracleAS Upgrade Assistant
*.xml	reports¥conf	OracleAS Upgrade Assistant
cgimd.dat	reports¥conf¥cgimd.dat	OracleAS Upgrade Assistant
jdbcpds.conf	reports¥conf¥jdbcpds.conf	手動
proxyinfo.xml	reports¥conf¥proxyinfo.xml	OracleAS Upgrade Assistant
rwervlet.properties	reports¥conf¥rwervlet.properties	OracleAS Upgrade Assistant
textpds.conf	reports¥conf¥textpds.conf	OracleAS Upgrade Assistant

表 B-2 アップグレード・データを含むファイル（パス順）（続き）

ファイル	Oracle ホーム内のパス	アップグレード・タイプ
xmlpds.conf	reports¥conf¥xmlpds.conf	OracleAS Upgrade Assistant
**	reports¥plugins¥resource	OracleAS Upgrade Assistant
*.dat	reports¥server	OracleAS Upgrade Assistant
targets.xml	sysman¥emd¥targets.xml	OracleAS Upgrade Assistant
jazn-data.xml	sysman¥j2ee¥config¥jazn-data.xml	手動
internal.xml	webcache¥internal.xml	手動
**	webcache¥wallets	OracleAS Upgrade Assistant
webcache.xml	webcache¥webcache.xml	OracleAS Upgrade Assistant
*.class	wireless¥server¥classes	OracleAS Upgrade Assistant
*.properties	wireless¥server¥classes	OracleAS Upgrade Assistant

reports¥plugins¥resource ディレクトリの内容。Oracle Application Server Reports Services の構成ファイルです。

webcache¥wallets ディレクトリの内容。Oracle Application Server Web Cache の Wallet ファイルです。

***.class**
Oracle Application Server Wireless アプリケーションのクラス・ファイルです。

***.conf**

Oracle Application Server Reports Services のユーザー定義ファイルです。

***.dat**

Oracle Application Server Reports Services のユーザー定義ファイルです。

***.htm**

Forms アプレット・クライアントをデプロイするユーザー定義ファイルです。

***.properties**

Oracle Application Server Wireless アプリケーションのプロパティ・ファイルです。

***.xml**

Oracle Application Server Reports Services のユーザー定義ファイルです。

.reg_key.dc

Oracle Application Server Discoverer のデフォルト・ユーザー設定およびシステム設定を格納する内部レジストリです。Pref.txt に格納された設定がこのレジストリに適用されます。

application-client.xml

すべての J2EE サーバー間で使用される構成情報を含みます。

application.xml

エンタープライズ・アプリケーション・アーカイブのデプロイメント・ディスクリプタです。

cache.conf

mod_plsql キャッシュ・システムの特徴を指定します。使用されるキャッシュには、次の 2 つのタイプがあります。

PLSQL キャッシュ：頻繁には変更されず、動的に生成されるコンテンツをキャッシュします。OracleAS Portal など、OWA_CACHE パッケージを使用するアプリケーションでは、この機能を使用してパフォーマンスを向上させ、データベース・リクエストに関連するオーバーヘッドを削減します。

セッション Cookie キャッシュ：特定のセッションで Oracle Application Server Single Sign-On サーバーが生成する Cookie 値をキャッシュします。その結果、ユーザーの資格証明を取得するためのデータベースへのラウンドトリップが回避され、パフォーマンスが向上します。Oracle Application Server Single Sign-On を使用するアプリケーションは、この機能を活用できます。

cgimd.dat

Oracle Application Server Forms Services の構成ファイルです。

configuration.xml

Oracle Application Server Discoverer Viewer サブレットおよび Portlet Provider サブレットの構成情報を含みます。

converter.properties

ログ・ファイル名、Reports サブレット・ディレクトリ、Reports Server ホストなどのオプションを定義する Forms 構成ファイルです。

dads.conf

データベース・アクセス記述子 (DAD) のエントリを含む mod_plsql 構成ファイルです。

data-sources.xml

OC4J アプリケーションが使用するデータベースのデータソース構成情報を含みます。

dms.conf

Dynamic Monitoring Service の構成ファイルです。

default-web-site.xml

Oracle Application Server のデフォルト OC4J Web サイトの構成を含みます。

default.env

Oracle Application Server Forms Services ランタイム・プロセスが使用する環境変数を含みます。default.env のかわりに、ユーザー定義の環境ファイルを使用することもできます。

forms90.conf

Oracle HTTP Server の Oracle Application Server Forms Services の構成設定を含みます。

formsweb.cfg

Oracle Application Server Forms Services サブレットのデフォルト構成ファイルです。サブレットが使用するパラメータ値を定義します。formsweb.cfg のかわりに、ユーザー定義のサブレット構成ファイルを使用することもできます。

fttrace.cfg

Oracle Application Server Forms Services で Forms のトレース機能とともに使用するイベント・グループを指定します。

global-web-application.xml

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のメイン・デプロイメント・ファイルです。Web アプリケーションのグローバル構成ファイルで、他のデプロイメントが継承した設定を含みます。

http-web-site.xml

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のデフォルト Web サイト構成ファイルです。

httpd.conf

Oracle HTTP Server のメイン構成ファイルです。

ias.properties

Oracle Application Server インスタンスの設定を含みます。コンポーネント構成セクションには、コンポーネントとそれらの起動成功の値がリストされます。インストール・データ・セクションには、リリース、インストール・タイプ、インストールに含まれるコンポーネント、インスタンス名および Infrastructure ホストとポート情報がリストされます。Infrastructure データベース・セクションには、データベース名がリストされます。

ias.schema.xml

各 Oracle Application Server コンポーネントのスキーマ構成エントリを含みます。エントリには、コンポーネント名、スキーマ名およびデータベース接続情報が含まれます。

index.html

Oracle Application Server のデフォルト・ホームページです。ドキュメント、デモンストレーションおよび新機能のサマリーへのリンクが提供されます。

internal.xml

Oracle Application Server Web Cache の内部構成設定を含みます。

internal_admin.xml

Oracle Application Server Web Cache の内部構成設定を含みます。

jazn-data.xml

Java Authentication and Authorization Service (JAAS) の構成ファイルです。ユーザー、ロール、ポリシーおよびログイン・モジュールに関する JAAS データを含みます。XML プロバイダ・タイプが指定された場合のみ使用されます。

jazn.xml

Java Authentication and Authorization Service (JAAS) の構成ファイルです。LDAP/OID または XML のプロバイダ・タイプが指定された場合に使用されます。

jdbcpds.conf

JDBC ドライバの Oracle Application Server Reports Services 構成ファイルです。インストールで提供されるドライバの事前構成済みファイルです。ただし、他のドライバを使用する場合は、エントリを追加できます。

jms.xml

ホスト名（または IP アドレス）、JMS サーバーをバインドするポート、JNDI ツリーでバインドされるキュー、トピック、ログ設定などの Java Messaging Service サブシステムの構成を含みます。

moddav.conf

Web ドキュメントの分散オーサリングおよびバージョンングを可能にする mod_oradav モジュールを構成し、ロードします。

mod_oc4j.conf

Oracle HTTP Server から OC4J インスタンスへのリクエストをルーティングするマウント・ポイントを含みます。

mod_osso.conf

Oracle Application Server Single Sign-On の構成ファイルです。

oc4j_bi_forms.properties

「Business Intelligence and Forms」インストール・タイプの Oracle Application Server Containers for J2EE デプロイメント・ファイルです。

oc4j.properties

OC4J インスタンスのアプリケーション固有のプロパティを含みます。

opmn.xml

Oracle Process Manager and Notification Service (OPMN) の構成ファイルです。OPMN が起動して管理する Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) および Oracle HTTP Server (OHS) のプロセスを識別します。

oracle_apache.conf

Oracle HTTP Server のカスタム構成設定を含みます。

oradav.conf

Portal アクセスの OraDAV 構成パラメータを含みます。httpd.conf ファイルに、oradav.conf ファイルの Include ディレクティブが含まれています。

orion-application.xml

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) のアプリケーション・デプロイメント・ファイルです。デプロイ時に生成され、コンテナ管理の永続性 (CMP) を持つ Bean の表、CMP を持つ Bean のデフォルト・データソース、セキュリティ・ロール・マッピング、ユーザー・マネージャ、Java Naming and Directory Interface (JNDI) ネームスペース・アクセスを自動的に作成および削除するかどうかを指定します。

orion-web.xml

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の Web アプリケーション・デプロイメント・ファイルです。デプロイ時に生成され、バッファリング、キャラクタ・セット、ドキュメント・ルート、ロケール、セッション・トラッキング、Java Naming and Directory Interface (JNDI) マッピングなどの設定を含みます。

osso.conf

Oracle Application Server Single Sign-On サーバーの構成ファイルです。

plsqli.conf

Oracle HTTP Server モジュールの mod_plsqli の構成ファイルです。

plus_config.xml

アプレットと RMI サーバー間の通信のトランスポートなど、Oracle Application Server Discoverer Plus クライアントのユーザー・インタフェース・カスタマイズ情報を含みます。

Pref.txt

Oracle Application Server Discoverer のデフォルト・ユーザー設定およびシステム設定を含みます。

principals.xml

ユーザー、グループの権限および証明書のセットを含みます。

provideruiacis.xml

Portal Development Kit Services for Java (JPDK) Web プロバイダのセキュリティ設定を含みます。

proxyinfo.xml

プロキシ・サーバーが使用されている場合、プロキシ・サーバーについての情報を含む Oracle Application Server Reports Services ファイルです。このファイルは、Oracle Application Server Reports Services メイン構成ファイルの destination 要素で指定されます。

Registry.dat

Oracle Application Server Forms Services のフォント・マッピングおよびアイコン・イメージ・パスのカスタマイズを含みます。

reports.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rmi.xml

Remote Method Invocation (RMI) を許可する構成を含みます。RMI により、他のサーバーはそのサーバーにアクセスして RMI リクエストを送信できます。

rwcgi.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwclient.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwconverter.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwengine.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwgenkey.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwproxy.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwrvq.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwrun.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwserver.bat

Oracle Application Server Reports Services のスクリプトです。

rwsvrlet.properties

Oracle Application Server Reports Services のプロパティを含みます。

search_replace.properties

検索、置換文字列、および Oracle Application Server Forms Services Migration Assistant の組込みクラスを含みます。

server.xml

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) インスタンスの構成を含みます。

targets.xml

Oracle Application Server Single Sign-On や OracleAS Portal など、Oracle Enterprise Manager Web Site からアクセスされるリソースの表現を含みます。

textpds.conf

テキスト・プラグابل・データ・ソースの構成情報を含む Oracle Application Server Reports Services ファイルです。レポートのデータソースとして使用されるテキスト・ファイルの形式（デリミタ、列、データ型）を構成するために使用されます。

tnsnames.ora

Oracle データベース、Application Server コンポーネントの場所を示すエントリを含みます。他の Oracle 製品は、このファイルのエントリを使用してデータベースに接続します。

uddiserver.config

Web Services のレジストリ構成を含みます。

ui_config.xml

Oracle Application Server Discoverer Viewer のユーザー・インタフェースのカスタマイズ情報を含みます。

web.xml

Web アプリケーションの J2EE デプロイメント・ディスクリプタです。

webcache.xml

Web Cache の構成ファイルです。

xmlpds.conf

XML プラグابل・データ・ソースの構成情報を含む Oracle Application Server Reports Services ファイルです。

表 B-3 Infrastructure のアップグレード（スキーマ）処理

アップグレード処理	アップグレード・アイテム
A.2.2 項「Metadata Repository Container スキーマのアップグレード処理」	<ul style="list-style-type: none"> ■ OCA（作成） ■ ORAOCA_PUBLIC（作成） ■ WCRSYS（作成） ■ IP（作成） ■ WK_TEST（作成） ■ INTERNET_APPSERVER_REGISTRY
A.2.6 項「OracleAS Portal スキーマのアップグレード処理」	<ul style="list-style-type: none"> ■ PORTAL（OracleAS Portal スキーマ） ■ PORTAL_DEMO（OracleAS Portal デモ・スキーマ） ■ PORTAL_PUBLIC（OracleAS Portal Public スキーマ） ■ PORTAL_APP（Portal JSP Access）
A.2.5 項「Oracle Ultra Search スキーマのアップグレード処理」	<ul style="list-style-type: none"> ■ WKSYS スキーマ
A.2.8 項「Oracle Application Server Web Services の UDDI レジストリ・スキーマのアップグレード処理」	<ul style="list-style-type: none"> ■ UDDISYS スキーマ
A.2.7 項「Oracle Application Server Syndication Server スキーマのアップグレード処理」	<ul style="list-style-type: none"> ■ DSGATEWAY スキーマ

索引

記号

"!=" 演算子, 3-34
*.dbf ファイル, 5-7

数字

9.0.1.5 データベース・パッチ、Metadata Repository のアップグレード, 4-2
9.0.2.3 互換性モード、UDDI レジストリ, A-11

A

Adapters、OracleAS InterConnect, 3-63
Alias ディレクティブ、Oracle HTTP Server のアップグレード, 3-29
Application Server クラスタ、アップグレード, 3-65
application.xml ファイル, 3-31, 3-32

C

cacheDir パラメータ, 3-43
cache.xml ファイル, 3-47
CGI プログラム、アップグレード, A-7
check_page_scope, 3-37
ColocatedDBCommonName 属性, 5-54
Compatibility Test Suite、OC4J, 3-32
ctxcrind.sql, 4-52

D

data-sources.xml ファイル, 3-26, 4-22
DBMS_IAS_UPGRADE パッケージ, 4-3
default.env ファイル, 3-59

Delegated Administration Services
10g (9.0.4) での構成, 5-37
URL キャッシュの更新, 5-48
Development Kits、OracleAS InterConnect, 3-63
dms.conf ファイル, 3-30
DocumentRoot ディレクティブ、Oracle HTTP Server のアップグレード, 3-30
DTD 検証、プロキシ設定, 3-27
Dynamic Monitoring Service、アップグレード, 3-30

E

EAR ファイル検証エラー, 3-23
EJB 仕様, 3-26
End User Layer, 3-52, 4-61
Enterprise JavaBeans、アプリケーションのアップグレード, 3-35
error_log、Oracle HTTP Server, 3-29
EXTPROC_CONNECTION_DATA.US.ORACLE.COM エントリ, 3-62

F

forgive_dup_dir_attr, 3-37
forms90app.ear ファイル, 3-60
formsweb.cfg ファイル, 3-61
fttrace.cfg ファイル, 3-23

H

httpd.conf ファイル, 3-29
Hub、OracleAS InterConnect, 3-63

I

ias.properties ファイル, 5-54
iasschema.xml ファイル, 3-23
iasua.log ファイル, 3-22
Identity Management
 構成, 5-2
 スキーマのアップグレード処理, 5-4
 定義済, 1-4
 分散構成と非分散構成, 5-2
Infrastructure
 Oracle ホームのバックアップ、必要な時間, 2-11
 アップグレード後のタスク、必要な時間, 2-12
 構成要素, 1-2
 定義済, 1-1, 1-4

J

J2EE
 1.3 仕様、OC4J, 3-32
 準拠、OC4J デプロイ, 3-26
 準拠エラー, 3-23
Java Runtime Environment (JRE) 1.4、Oracle Ultra
 Search, 4-18
java-options タグ、OracleAS Reports Services, 3-55
Java オプション、アップグレード, 3-32
Java プロセス、OracleAS Wireless, A-13
jazncore.jar ファイル, 3-31
jazn.jar ファイル, 3-31
jdbcpds.conf ファイル, 3-54
JDK 1.3.1 と JDK 1.4、コンパイラ、OC4J, 3-38
JDK 1.4 の互換性, 3-37
jms.xml ファイル, 3-32
JServ、アップグレード, 1-8

L

ldif、「Lightweight Directory Interchange Format ファ
 イル」も参照
Lightweight Directory Interchange Format ファイル、
 内容, 5-55
listener.ora ファイル, 5-39, 5-41
Listen ディレクティブ、Oracle HTTP Server のアップ
 グレード, 3-30

M

Management、OracleAS InterConnect, 3-63
Metadata Repository
 9.2 データベースの使用, 5-43
 Container のアップグレード・スクリプト、実行時
 間, 2-11
 Container のアップグレード処理, 4-4
 アップグレード処理, 4-2
 定義済, 1-4
Metadata Repository Container の表領域のアップグ
 レード, 4-5
mod_oc4j.conf ファイル, 3-29, 3-66
mod_osso
 OracleAS Single Sign-On サーバーの再登録, 5-54
 問合せパラメータと (OracleAS Wireless), 5-58
 パートナ・エントリ、Single Sign-On Server, 3-29
mod_osso.conf ファイル, 3-29
mod_plsql、アップグレード、完了, 3-48
mod_rewrite ディレクティブ、Oracle HTTP Server の
 アップグレード, 3-29
moddav.conf ファイル, 3-29

N

Net8 Migration Assistant、ネットワーク接続, 5-39,
 5-41

O

OC4J
 JServ, 1-8
 アプリケーション、スタンドアロンのアップグレー
 ド, 1-7
 アプリケーション、スタンドアロンの起動, 3-33
 オプション、アップグレード, 3-32
oc4j_bi_forms.properties ファイル, 3-24
oc4j_portal.properties ファイル, 3-47
oc4j-option 要素, 3-32
OmniPortlet
 プロキシ構成, 3-51
 プロバイダ, 3-50
 プロバイダ、テスト・ページへのアクセス, 3-68
open_cursor, 4-14
opmn.xml ファイル, 3-32, 3-47, 3-54, 3-55, 5-39
ORA-00942 エラー, 4-13
ORA-01034 エラー, 4-10

ORA-12154 エラー, 3-59
ORA-24002 エラー, 4-13
ORA-24010 エラー, 4-13
Oracle Call Interface、コンポーネントの障害, 3-70
Oracle Collaboration Suite、Unified Messaging のアップグレード, 1-7
Oracle Directory Manager、Oracle9iAS Portal スキーマのパスワード, 4-37
Oracle Enterprise Manager Application Server Control、OracleAS InterConnect, 3-63
Oracle HTTP Server、アップグレード後の起動の失敗, 3-29
Oracle Internet Directory
 OracleAS Forms Services, 3-61
 サーバーの読み取り専用モード, 5-49
 リリース 9.2.0.x、アップグレード, 5-43
Oracle JDBC
 OC4J のアップグレード, 3-31
 アップグレードの考慮事項, 3-34
Oracle JMS
 OC4J のアップグレード, 3-31
 アップグレードの考慮事項, 3-33
Oracle JSP ページ、OC4J のアップグレード, 3-31
Oracle Text, 4-52
Oracle Universal Installer
 Identity Management のアップグレード時間, 2-12
ORACLE_DCM_JVM_ARGS 環境変数, 3-27
Oracle9iAS Clickstream Intelligence, 2-8
Oracle9iAS Discoverer
 リリース 1 (1.0.2.2) からのアップグレード, 1-8
Oracle9iAS Discoverer End User Layer, 3-52, 4-61
Oracle9iAS Portal
 アップグレードする中間層ファイル, A-11
 スキーマ・パスワード, 4-37
 リポジトリ、言語ロード, 3-72
Oracle9iAS Upgrade Assistant
 起動, 3-11
 コマンドライン・バージョン, 3-19
 実行に必要な時間, 2-11
 説明, 1-3
 ログ・ファイル, 3-22
Oracle9iAS Wireless 中間層、アップグレードの準備, 3-5
Oracle9iAS のアップグレード、リリース 1 (1.0.2.2) から, 1-8
Oracle9iAS リリース 2 (9.0.2) / (9.0.3) のインスタンス、削除, 5-58

OracleAS 10g (9.0.4) の機能、アクティブ化 (OracleAS Wireless), 5-56
OracleAS InterConnect と Oracle Enterprise Manager Application Server Control, 3-63
OracleAS Portal
 cacheDir パラメータ, 3-43
 OracleAS Single Sign-On サーバーの登録, 5-53
 SSL の有効化, 3-41
 プロバイダ、URL の更新, 3-68
OracleAS Portal スキーマ, 4-30
OracleAS Single Sign-On サーバー
 mod_osso の登録, 5-54
 OracleAS Portal の登録, 5-53
OracleAS Upgrade Assistant
 アップグレードされるコンポーネント, 1-6
 ログイン・レベル, 3-9
OracleAS Upgrade Assistant によってアップグレードされるコンポーネント, 1-6
OracleAS Web Cache
 クラスタ、アップグレード, 3-39
OracleAS Wireless
 中間層、リリース 2 (9.0.2) と 10g (9.0.4), 3-57
 通知, 3-55
 通知エンジンとアラート・エンジン, 3-57
OracleAS Wireless ユーザー・アカウント、アップグレード, 5-54

P

plsql.conf ファイル, 3-48
PL/SQL パッケージ、無効の場合の再コンパイル, 5-59
Portal Tools アプリケーション, 3-50
Portal の「ビルダー」ページのカスタマイズ、再適用, 4-53
portlist.ini ファイル, 3-65
Port ディレクティブ、Oracle HTTP Server のアップグレード, 3-30
provideruiacsl.xml ファイル, 3-48
provider.xml ファイル, 3-47

R

registry.dat ファイル, 3-23
Reports Server
 インスタンス、監視, 3-54
 キャッシュ・ディレクトリ、アップグレード, 3-54

Repository Creation Assistant CD-ROM, 4-3

S

SAMPLEPAGEGROUP、アップグレード, 4-56
Single Sign-On、OracleAS Forms Services, 3-61
sqlnet.ora ファイル, 5-39, 5-41
SQL スクリプト、Oracle Workflow, 3-64
SSO_IDENTIFIER 値, 5-51
ssoMode、OracleAS Forms Services, 3-61
SYS 資格証明、Identity Management のアップグレード, 5-7

T

targets.xml ファイル, 3-54, 3-73
tnsnames.ora ファイル, 3-61, 3-70, 4-37, 5-39, 5-41
複数コンポーネントのアップグレード, 3-62

U

uddiserver.config ファイル, 3-25
UDDISYS スキーマ, 4-26
UDDI スキーマのアップグレード・シナリオ, 4-24
ultrasearch.properties ファイル, 4-22
Unified Messaging のアップグレード・パス, 1-7
upgrade92.ldif ファイル, 5-45
utlrlp.sql ユーティリティ, 5-59

V

validateEarFile ユーティリティ, 3-23, 3-27
VirtualHost ディレクティブ、Oracle HTTP Server の
アップグレード, 3-30

W

Wallet、アップグレード処理, A-3, A-8
WCRSYS スキーマ, 4-28
Web Cache、最初のリスナー、アップグレード, 3-30
WebDAV クライアントの表示項目、アップグレード,
4-55
Web クリッピング、プロキシ構成, 3-50
Web クリッピング・プロバイダ, 3-50
Web クリッピング・プロバイダ、テスト・ページへの
アクセス, 3-67

Web プロバイダ・セキュリティ設定、アップグレード,
3-48

Wireless Voice 認証 PIN、アップグレード, 5-54

WKSYS スキーマ・パスワード, 4-19

Workflow 処理の定義ファイル, 3-64

WWC_MONITORING パッケージ不明エラー, 3-49

X

XML Parser, 3-35

あ

アクセス制御ポリシー、10g (9.0.4) DAS, 5-45

アップグレード

エラー、解決, 3-23

処理の概要, 2-6

必要な時間, 2-10

アップグレード後の手順、必要な時間, 2-11

アプリケーション

Enterprise JavaBeans 機能とアップグレード, 3-35

OC4J 構成ファイルの編集, 3-26

Oracle9iAS Ultra Search デモンストレーション,
4-21

Oracle9iAS Upgrade Assistant でアップグレードさ
れない, 1-7

下位互換性, 3-32

デプロイ数とアップグレード時間に対する影響,
2-11

アプリケーション ID

外部, 5-51

再マッピング, 4-34

詳細形式, 5-51

アラート、OracleAS Wireless、アップグレード, 3-56

い

イベント / パラメータ受渡しのサンプル・プロバイダ、
更新, 3-69

インスタンス、OC4J、インストーラによって作成,
3-32

インスタンス、クラスタでのリリース, 2-2

インスタンス構成データ・ファイル, A-4

インストール・タイプ、アップグレードの要件, 1-7

インストール・タイプ、ソースとアップグレード先,
3-21

インストール・タイプの拡張, 1-8
インストール前の要件, 3-3

え

エラー

ORA-00942, 4-13
ORA-01034, 4-10
ORA-12154, 3-59
ORA-24002, 4-13
ORA-24010, 4-13

エラー、アップグレード時、解決, 3-22

お

オペレーティング・システム、互換性, 2-3

か

外部アプリケーション ID, 5-51

外部アプリケーション、Oracle*9i*AS Single Sign-On,
4-33

カスタム・データベース、スキーマのアップグレード,
4-61

カテゴリ・テンプレートおよびパースペクティブ・テ
ンプレート、アップグレード, 4-53

管理者操作キュー、レプリケーションの変更, 5-41

き

起動タイプ、サービス, 3-67

キャラクタ・セット, 4-26

キュー、アップグレード, 3-32

く

クラスタ

OracleAS Web Cache、アップグレード, 3-39
インスタンスの互換性, 2-2

け

言語

OracleAS Single Sign-On のアップグレード後のイ
ンストール, 5-53

選択画面, 5-11

ロード、Oracle*9i*AS Portal, 3-72

こ

互換性

Oracle*9i*AS のリリースとインストール・タイプ,
2-2

アップグレード構成要素間, 2-2

オペレーティング・システム, 2-3

クラスタ, 2-2

中間層と Infrastructure, 2-3

複数の中間層と Infrastructure, 2-3

個人用ページ、アップグレード, 4-55

コネクション・ファクトリ、アップグレード, 3-32

コンテキスト・ルート, 3-27

コンテナ管理の永続性、アップグレード, 3-35

さ

サービス、起動タイプ, 3-67

サービス、スタートアップの種類, 3-71

サービスレベルのアドレス、OracleAS Wireless, 3-57
サブレット

JServ, 1-8

OracleAS Forms Services の別名, 3-60

アップグレードの考慮事項, 3-38

サイトレベル・ドライバ、OracleAS Wireless、使用可
能または使用不可, 3-58

削除、Oracle*9i*AS リリース 2 (9.0.2) / (9.0.3) のイン
スタンス, 5-58

サブページの表示項目、アップグレード, 4-55

し

識別名

Oracle Internet Directory, 4-42, 4-43, 4-50

Oracle Internet Directory のスーパー・ユーザー,
5-14, 5-29

システム停止時間、アップグレード時, 2-12

手動で編集されたファイル、アップグレード, 3-26

詳細形式のアプリケーション ID, 5-51

す

スキーマ

Metadata Repository Container のアップグレードに
よるアップグレード, 4-5

アップグレード・スクリプト、実行時間, 2-12

スタートアップの種類、サービス, 3-71

スタイル・シート、Oracle9iAS Discoverer, 3-53
スタンドアロン OC4J インスタンス、アップグレード、
1-7

せ

静的ドキュメント、Oracle HTTP Server のアップグ
レード, 3-30
セキュリティ設定、Web プロバイダ、アップグレー
ド, 3-48
接続、切断, 5-39, 5-41
遷移、構成間, 2-4

そ

相互運用性、Portal のリリース, 5-47
ソース Oracle ホーム, 3-1
リカバリまたは廃棄, 3-71

ち

中間層
アップグレード後のポート, 3-65
アップグレード処理, 1-3
アップグレードの順序, 1-2
アップグレードの順序、Metadata Repository, 1-2
インストールに必要な時間, 2-11
インストール要件, 3-3
異なるリリースの運用、OracleAS Wireless, 3-57
定義済, 1-1
部分的にアップグレードされた Identity
Management, 5-22
調査失敗, 3-22

つ

通知、OracleAS Wireless、アップグレード, 3-55
通知エンジンとアラート・エンジン、OracleAS
Wireless, 3-57

て

停止時間、アップグレード, 2-12
データベース
アップグレードの準備, 2-11
オブジェクト、無効、確認, 5-60
ファイル、アップグレード後の再配置, 5-58

データベース・ファイル (*.dbf), 5-7

と

問合せパラメータ、OracleAS Wireless アプリケーショ
ン, 5-57
統計、UDDISYS スキーマ, 4-27
トランスポート
セット、アップグレード, 4-56
ドライバ、OracleAS Wireless、管理, 3-58

は

パスワード、変更権限、OracleAS Wireless, 5-57
バックアップ、内容, 2-14
バッチ、OracleAS Portal リポジトリのアップグレー
ド, 4-34
パブリック・ユーザー、権限の表示とアップグレード,
4-56
パラメータおよびイベント、アップグレード, 4-57

ひ

非互換の構成, 2-3
ビジネス・イベント・システムの定義ファイル、
Oracle Workflow, 3-64
日付書式、Portal コンテンツの検索, 4-54
非分散
Identity Management、説明, 5-2
環境、アップグレード, 1-3

ふ

ファイル
*.dbf, 5-7
*.xsl, 3-53
application.xml, 3-31, 3-32
cache.xml, 3-47
data-sources.xml, 4-22
default.env, 3-59
dms.conf, 3-30
forms90app.ear, 3-60
formswb.cfg, 3-61
ftrace.cfg, 3-23
httpd.conf, 3-29
ias.properties, 5-54
iasschema.xml, 3-23

iasua.log, 3-22
jazncore.jar, 3-31
jazn.jar, 3-31
jdbcpds.conf, 3-54
jms.xml, 3-32
listener.ora, 5-39, 5-41
mod_oc4j.conf, 3-29, 3-66
mod_osso.conf, 3-29
moddav.conf, 3-29
oc4j_bi_forms.properties, 3-24
oc4j_portal.properties, 3-47
opmn.xml, 3-32, 3-47, 3-54, 3-55, 5-39
plssql.conf, 3-48
portlist.ini, 3-65
provideruiacfs.xml, 3-48
provider.xml, 3-47
registry.dat, 3-23
sqlnet.ora, 5-39, 5-41
targets.xml, 3-54, 3-73
tnsnames.ora, 3-61, 3-70, 4-37, 5-39, 5-41
uddiserver.config, 3-25
ultrasearch.properties, 4-22
upgrade92.ldif, 5-45
Workflow のアップグレード, 3-64
アップグレードにより影響, B-1
編集, 3-26
不明、パッケージ、WWC_MONITORING, 3-49
プラットフォームからの独立性, 2-3
Oracle9iAS のリリース, 2-2
プロキシ設定、DTD 検証, 3-27
プロバイダ・ナビゲータ、アップグレード, 4-56
プロビジョニング・プロファイル、削除, 4-41
分散
Application Server 構成、分散, 2-2
Identity Management、説明, 5-2
分散構成
アップグレード, 1-2
分類データ、ロード, 4-26

へ

ヘルプ・システムの URL、OracleAS Portal、アップグレード, 4-57
ヘルプ・ファイル、Oracle Workflow, 3-64
編集、手動によるファイル、アップグレード, 3-26

ほ

ポート
Web Cache と Oracle HTTP Server, 3-30
ポート競合
アプリケーション・サーバー・インスタンス, 3-65
回避, 1-3
ポート競合、サービスの種類, 3-71
ポートレット
リポジトリ、OracleAS 10g (9.0.4) 形式, 4-59
リポジトリ・ページ、タイトルの変更, 4-57
ポートレット・パーソナライズ・マネージャ、アップグレード, 3-46
ポートレット・リポジトリ、アップグレード, 4-56

ま

マルチプラットフォーム構成, 2-3

む

無効なデータベース・オブジェクト、確認, 5-60

も

モバイル・ページ、アップグレード, 4-57

ゆ

有効な構成, 2-4
ユーザーとグループ、リリース 2 (9.0.2) での Portal 登録, 5-47

よ

予測時間、アップグレード, 2-10

ら

ライブラリ・パス
JAZN アプリケーションのアップグレード, 3-31
アップグレード, 3-32

り

リバース・プロキシ
Oracle HTTP Server の Port ディレクティブ, 3-30

Single Sign-On, 5-52

リリース、プラットフォームからの独立性, 2-2

リリース 1 (1.0.2.2) のアップグレード, 1-8

れ

レプリカ、同時アップグレード, 5-41

レプリケートされた Oracle Internet Directory、アップ
グレード, 5-38

ろ

ロード・バランサ

Oracle HTTP Server の Port ディレクティブ, 3-30

アップグレード時のシステムの可用性, 2-13

ロギング、OracleAS Upgrade Assistant, 3-9

ログ, 4-38

ログ・ファイル、Oracle9iAS Upgrade Assistant, 3-22